椰子樹

１００号記念号

コロニア歌人の宮中歌会始入選歌

題「窓」　小松　修水

帰るなき日本こほしくよる窓の　アバカテ青葉夕かげりして

一九五九年入選

題「紙」　光田八千代

親しめる異国の子らに囲まれて　むかしながらの紙の鶴折る

一九六四年佳作

題「鳥」　山本　博

切株にのぼりて夕餉呼ぶ子等の　頭上を鳥の啼き渡りゆく

一九六五年入選

題「声」　信太千恵子

野火の音ま近に迫り牧のなか　声をからして吾が馬を呼ぶ

一九六六年入選

題「声」　堀田　栄

声かけてコーヒー採集の人過ぎぬ朝五時を告ぐる鐘の鳴るとき

一九六六年佳作

題「魚」　久米　光春

移り来し異国の街に声あげて　朝霧のなか魚あきなう

一九六七年佳作

椰子樹百號記念別冊特集號

目　次

発刊の辞……徳尾　渓舟
コロニア短歌の推移に触れて……井本　惇　7
「椰子樹」三〇年の歩み……武本　由夫　20
作品集……
椰子樹記念号に寄せて……
安部　栄子　品山　充　弘中千賀子　60
陣内しのぶ　森重　扶美　行方正治郎　92
西田　季子　大場　時夫　小笠原富枝
瀬崎　濤声　高橋よしみ
四十の日のうた（詩）……大浦　文雄　110
物故歌人作品集……徳尾　渓舟　111
椰子樹が発行されるまで……水本すみ子　116
戦前の女流歌人たち……開沼　貴代　124
戦後女流歌人の足跡……徳尾　渓舟　134
短歌の論争……149
全伯短歌大会の歩み……吉本　青夢　158
椰子樹概史……川原比露思　166
坂根賞と椰子樹賞……酒井　繁一　201
ブラジルの女歌に就て……梅崎　嘉明　208
日本歌誌への入選作品……清谷　益次　144
新聞歌壇の辿った跡……217
コロニア歌集抄……247
地方歌壇の動静……256
裏話あれこれ……中江　克己　272

椰子樹会員住所録……（略）
あとがき……米沢　幹夫　２７６
表　紙……富岡　清治
題　字……坂根　嵯峨

この丘の裾引くところ朝なさな霧は沈めり湖の如くに
岩　波　菊　治

高山の夜は冷え渡りアルゴー座澄み定まりぬ頭上に低く
椎　木　文　也

半円の赤き陽背負ひ丘の上になほ鋤振れりちひさき人は
坂　根　嵯　峨

汐風の眼にさえざえと吹きぬくる広き食堂に一人飯食す
阿　部　青　杜

――椰子樹創刊号より――

発刊の辞

徳尾　渓舟

日本人と和歌或いは短歌との関係は、その建国の神話時代から始まって居り、ある時は栄え、又衰える時もあり、栄故盛衰を繰り返しつつも、日本人の身についた「詩」として二千年の間、日本人の凡ゆる階級層に依って歌われ、愛唱され、その表現形式又は用語等々に幾多の移り変わりはあり乍らも、五七五七七の句詞を基ばんとする三十一文字（みそひともじ）の詩は平和な日常生活の中で、或いは明日の身も知れぬ戦場に於いて、常に愛称され続けて来て居るのである。

そして今後も同じ様な変遷を辿り乍らも、短歌は日本のある限り存在し、日本と共にその消長を共にして行く事であろう。

此処ブラジルに於ても、短歌の歴史は日本人の入国と共に始まって居る筈である。笠戸丸で日本人が始めてブラジルに入国し、その一つまみの日本人達により伯国移民史が開始されて以来、文字通り雨に風に、言語、習慣不案内な外国人ばかりの中で、前人未踏の大森林を開拓し、或いは病魔と闘かい、夫を、妻を、親を子を失ない、悲嘆失望のどん底にあえぎ、飢え、不安に苦しむ時も彼等はそれはそれなりの表現をもつ短歌を作り、或いは唱い、せめてもの慰めとし、又明日への闘志をふるい立たせて来たのである。移民短歌はまた限り無い母国日本への郷愁ともつながり、いよいよ根強いものとなり、あのはげしい世界大戦中の日本人及び、日本語に対する大弾圧の中でも消え去ること無く、コロニアの何処かで、日本人の居るところ、細々ながらも命脈を保ち、今日見る様な盛況を迎えて来たのである。本「椰子樹」誌もそうした短歌愛好者達の止むに止まれぬ希望から、短歌研究の広場として一九三八年同人誌として誕生し、戦前戦後の幾多の苦難を経な

がらも、常に絶えることの無かった短歌愛好者達の熱情と犠牲的協力に依り、良くその危機を切り抜け、卅年余を存続も、今回遂にその百号を発行するに至った事は、コロニア文化史上特筆すべき事であり、又日本人と短歌が如何に緊密を関係をもつかを立証するものである。

殊に何かと不自由な外国で、しかも会員の大部分が日本語も寺小屋式な不充分な勉強しか出来なかった準二世や、純二世が大部分である事情を考慮する時、短歌誌「椰子樹」百号発行は驚異的事実とも云える事で、微力乍らもその発行に協力し、三分の一世紀近い期間その成長を見て来、さきに五十号発行の辞を書き、更にまた此処に百号記念号発刊の言を述べる栄を得た私としても真に感慨無量であると共に、会員諸氏と心から本号発行に祝賀の意を表するものである。丁度本年は、祖国日本では明治百年に当たり、当伯国では笠戸丸以来の日本移民渡伯六十周年記念で、両国で種々記念祝賀祭典が取り行われて居り、その年に際し、本椰子樹が百号記念号を出す事は非常に意味深い事と思うのである。

古来短歌の盛んな時は国運もまた上がって居るのである。日本はあの悲惨な敗戦の廃墟の中から廿年足らずで不死鳥の羽ばたく如くよみ返り、今や世界でも羨ましがられる文化国として、その今後を期待され、短歌もまた明治以来の復興を受けついでその発展を続けて居り、此処コロニアもまた第二次大戦中の惨めな境遇から脱出し、その発展も驚異的なものがあり、且つ伯国人との友好関係も益々深まり、それと共にコロニア短歌も日本移民史以来の盛況を呈して居り、洵に慶賀にたえない次第である。

殊に百号を以って椰子樹の運営一切を将来のコロニア短歌を背負って立つ若いより情熱的を歌人達に委任される事になり、その繁栄は期して待つ可く、今後益々コロニア歌壇の発展と会員諸氏の御健康を祈りつつ「椰子樹」誌百号発行の祝辞とする次第である。

コロニア短歌の推移に触れて

五十一号から百号まで

井本　惇

最近の十年間におけるコロニア短歌の推移や変遷について触れるのが私に与えられたテーマである。

なるだけ主観や批判をぬきにして、十年この方の、コロニア短歌の推移変遷のあとをたどって見たいと思う。

扨て、現在から逆算して十年と言えば大体において昨年第十回目を以って打ちきられた、椰子樹賞作品の募集が始められた頃になる。一九五七・八年と言う事になるのであろう。

いま、資料として当時の椰子樹などを引ぱり出して見ているのであるが、そして感じるのであるが、椰子樹を中心にして考えるかぎり」においては、戦後二十年あまりの期間、あるいは戦前を通じても、比較的にふるわなかった時代ではなかったかと思う。

それは、椰子樹の中心的な存在であった、岩波菊治没後五年、ないしは六年と言うことと時間的に関係があったのかも知れない。

当時日本では、綜合歌誌などで、いわゆる前衛的な抽象短歌などが盛んに発表されていたものであるが、そうした母国歌壇の影響など不思議なくらい見られず、温和な写実的な作品がそのほとんどであった。

しかし回顧的に見れば椰子樹賞の募集などもあって、コロニア歌壇における一つの曲り角であった、と言うことが出来ると思う。

そして、椰子樹賞の作品が、その後の十年間におけるコロニア歌壇の稜線をなしたと言うことが一応言えると思う。無論その高度と言うことになると問題はあろう。しかし、そこには明らかに時代的を志向は感じられるのではあるまいか。

結局、椰子樹賞の作品にふれることがその間におけるコロニア短歌の変遷について語る、と言う結果にもなると思う。

もっとも、椰子樹賞作品も問題になるのは、第四回目の弘中千賀子作品（作品的価値と言うよりも作品傾向として）あたりからであるが、ここでそうした動向の前駆的をものとして一応挙げておかなければならないと思うのは、ハチドリの発刊についてである。

ハチドリの発刊は、一九五五年の末で五六、五七、五八の約三カ年にわたってであった。

今私が触れている最近の十年間は、そうした時点から始まっている訳である。実は私も、ハチドリ関係者のひとりである。

関係者としてそのハチドリを云々するのは幾分気の引けることであるが、私自身ハチドリの発行については別に積極的でも何でもなかった。言わばたのまれ仲人のような形で参加した迄のことで、その中心は新納潤魚や志村良一であった。

当時私はある意図のもとに短歌より絶縁すべく努力していたので、作歌もしていなかったし、発表もしていなかった。ご承知の通り、ハチドリは、毎号八頁のパンフレット程度のものではあったが、確実に毎月発行し、十四五名のものが二百首近い作品の発表を行なっている。

作品は一種の混淆状態ではあったが、今迄のコロニア短歌に見られなかったようをものも若干ふくまれていた。特に新納潤魚などは、短歌研究新人賞五十首詠に、はるばるブラジルから応募し、当時第二回目ベストテン入選の直後で、意慾的な作品行動と共に批評の面においても文学的な目に与えられた行動が画期的であった。

腹朱き食用蛙掴み来る蓬髪の児を訴えむ空があるのみ

新　納　潤　魚

斃れたる牛の生皮たちまちに朱凧の如く樹に架りたり

同

鍬を地におきて比類のなき色の空睨まえぬ熱し尿は

同

続いてハチドリの作品を少し挙げれば、

みどりの珠ひそかに撫づる意識下の吾の心のさらされむ部屋

弘中千賀子

幾十基真白き墓の建ちそめて新しき村落に墓地も新し

志村　良一

地をすりて垂穂のゆるる振幅にすがるは吾と真赤な入日

近　昇

日本人相より住めるシャカラの低地いゆきて咲く菊に逢う

小松　修水

労働に堪えて来たふたりの棒の様な手握り合うこともなく日々過す

小笠原　正好

雨止めば不規則に水たまりいて光るはちびしアスフワルトの土

南条　由喜夫

こうした作品を挙げていったらきりがない。

次に、ハチドリのめざしたこととして挙げておかねばならないと思うのは、日本歌壇との直接な交流である。殆ど毎月日本歌壇の著名な歌人の感想や批評を、その僅かなスペースのどこかに掲

載している。

いまここにその氏名を挙げて行けば、森岡貞香、生方たつゑ、岡井隆、近藤芳美、香川進、葛原妙子、三国玲子、松田さえこ、甲山幸雄、原幸雄、前田透、など何れも当時の新鋭ばかりである。無論なかには儀礼的なものも交じっていた。

しかし、近藤芳美や岡井隆の感想、生方たつゑ、前田透などの連続的な批評は現在読みかえして見ても充分首肯せしめるだけのものを持っている。

時として、コロニア歌壇の常識との間には開きがあり、必ずしも全般的なものではあり得なかったが、直接、生身の作品にふれている、と言う点にその重要さがあったと思う。ハチドリは、ブラジル新歌人集団などとうたったものの、考えて見れば烏合の衆であったと私には思える。しかしそれは、それなりに果たした役割は記憶されてよいと思う。

椰子樹賞は、該当者なしを何回か迎えた。坂根賞をカーバする意味で始められた新人賞で、一九五八年にその第一回を発表し、一九六七年度の南条由喜夫の第十回を以って打ちきられた訳であるが、受賞者は女性六名、男性三名、の数字が示すように女性側が圧倒的である。と言う意味において甚だ特徴的である。そして様々な意味において、コロニア歌壇に刺戟を与えてきたと言うことも衆知の通りである。

しかし、椰子樹賞作品が幾分変化らしいものを見せはじめたのは、先にもちょっと触れているように第四回目の弘中千賀子あたりからで、第一回の小笠原富枝、第二回目の梅崎嘉明、第三回目の小竹清子あたり迄は、今迄のコロニアの短歌作品と、これと言った差は見出し難い。具体的な感動を具体的にのべると言った写実的作品の展開である。

舗道一面盛り上り流るる雨水は排水溝に逆巻きて落つ

小笠原　富枝

汚れたる作業衣たくましき若者の君は旋盤切粉を落す
梅崎　嘉明

陸よりの風吹き来れば入海のここの岬へななめに寄る波
小竹　清子

それぞれ、第一回、第二回、第三回椰子樹賞受賞作品の第一首目の作品をあげた訳であるが、いずれの作者のも分り易く、作品の評価と言う点をのぞいては批評上の混乱をもたらす事はあり得ない。

因みに当時の椰子樹の作品欄では、第四回受賞の弘中千賀子、第五回準受賞の森重扶美などが、やや主和な抒情性を示している。

なきがらの冷たさながく記憶する双手の爪にエナメルをぬる
弘中千賀子

失楽の夜の心は秘めながら吾が見つめいる薄明の窓
森重　扶美

受賞作品に比べて甚だ興味ふかい。

屈托なき笑いの声も合せつつ障礙の深き心と思う
ジャカランダの細き胞子が開きゆく帰結のあらぬ思いの日々に
隠密に吾が裡に病むものありて覚むるに舗道を洗う夜の雨

弘中千賀子の第四回目椰子樹賞受賞作品である。手法として、今迄の作品と別に大きな差異がある訳ではない。しかし作者の目が自己の内部に向っている、と言う点にこの一連の作品の特徴がある。又この作者の特質がうかがえる。

それからもう一つ注意したいのは、障礙、帰結、隠密、と言ったような用語使用である。他にも、花期、愛執、陰湿、衝迫、非情、擬態と言ったような漢語の使用である。

こうした用語を作品の各所に巧みに象限することによって、一種の清新なものをもたらし、あるいはもたらそうとしている。こうした漢語使用が弘中作品あたりをきっかけとして、コロニアの女流を主として一部の歌人の中に、一種流行的様相を呈して来たものである。

もっとも、これは弘中千賀子の独創と言うべきものではなく、日本の歌壇においても、現実の直写を平板とする人達によって盛んに試みられているもので、生方たつゑ、斉藤史、などを先蹤として、特に戦後の女流のなかにこうした傾向がいちじるしい。

雨滴の雲より落ちてしみる重さ肩濡れてゆく暗澹として
斉　藤　　史

疑義持たぬ人の集り合う座を立てりわが孤独さも黴のたぐいか
生方　たつゑ

こうした傾向の受けいれられ方はある時期以後のコロニアにおいてきわめて特徴的である。

仮話一つならんとしたるたまゆらに暗示の如く蝶翳りゆく
西田　季子

潜在の思惟まざまざと顕ちし夢まつわりて甘くコーヒー匂う
水本　すみ子

拒絶とは思えぬわれの言葉にて破綻なければ老獪と言わむ

小竹　清子

酷熱の原野に未来の色褪せて越え来し海の距離を嘆かう
久米　光春

衰えしものはみにくし支柱せし老木幾年充足の末
吹本　菊子

確定をなし得ぬままにある数字円転しはじめ来る眼裏
大場　時夫

具象なき明日を恃みて唐きびの乳とばしつつ粒こそぎおり
石塚　やす

無残なる事故死も未知故かるくきき記帳つづける非常の如く
開沼　貴代

奔放に思想しがたき黄の肌の膠化なしつつエトランゼ老う
高橋　よしみ

倖せの如くまたたく灯見えその距離埋めて暗き断絶
川原比露思

こうした漢語使用が一種の新しさ、としてうけいれられたことは容易に理解できる。そのことが別な歌境の開拓をともなった事も一面の事実であろう。

しかし又、アララギの五味保義が、昭和二十六年四月号、アララギの歌壇座標の中で―それは、実体を捉える一歩二歩乃至、十数歩の手前で、この用語癖に逃避してしまう―とのべている事とあわせて考えてみる必要もあろう。

第六回目の、陣内しのぶも又別を意味で波紋を投じて来た。この陣内の作品を弘中あたりと同系列のものとして批評圏内においている人もあるようであるが、作品が内面的で主観性をもっていると言う点では似ているとしても作品の肌合いにはかなりの相違があると私は思う。感覚的に言って最も女性的、と言うよりは生理に近いもので、そうした意味において陣内は、コロニアにおけるもっとも女歌的な作者かも知れない。

淡き過去秘めて小さきわが乳首少女の如くときに痛めり

充たされぬ希いが文字となりてゆく四十の感傷不潔と言えず

帰り来て足の火照りを冷しおり夕べ現の女体愛しく

燐の如眼は燃ゆれ愛恋はすでに恃まず伏す闇の中

彼女は最も女性的なものをひっさらけて椰子樹賞にいどんだと言える。私は最近の彼女の作品を読みながら、陣内作品はやはりそうしたものが主軸になっていると思う。

とどまりてあれば危うき芋の葉の露に触れたき指先熱く

十指にも余る子を持つ夢醒めてどれもやさしき身近かきこけし

畏れ持つ希い一つは汚さねば夢にかつぎて白し喪の服

（コロニア文学五号）

こうした傾向の作品が、新しさ、又強さとしてコロニア歌壇にアッピールされてゆく。

他にコロニア歌壇において類似傾向の作者をあげるとすれば、

高橋よしみあたりかも知れない。

夕茜燃え盛る窓のブラインド深く閉ざして未来なき思慕

喪の如き娶り日近き惟悴にいまだ消えざる愛を確かむ

実りなき一途の心憂悶をくらく育てて眼窩深めり

自から血気汗ばみ乾草の体臭放つ若者の背

これは、椰子樹賞受賞作品の一部であるが、他にも「奔放な不惑の生きのみずみずとかがやく眸に会いてたじろぐ」などと言った作品も他に発表している。

第七回受賞の水本すみ子は、どちらかと言えば、弘中千賀子あたりの系譜につながる作家であろう。

たどきなき想いにたてばウインドの宝石驕慢な光りをはなつ

こうした心の営為をのぞかせるような作品が、次第にコロニア歌壇の潮流のようになってゆくのも一つの時代的な特色であろう。

驟雨すぎ落日はやき木々の中潜みつつかすかなるわれの反照

水本すみ子

たぐいなき飢渇のようにくっきりと干潟を彫りて朝の陽が射す

同

椰子樹近刊の号よりぬいて見た。

コロニア歌壇に前衛的な抽象作品が姿を見せたのは一体いつ頃のことであったろうか。

そうした方面での作品として武本由夫の幾首かの歌を記憶する。その中の一首として、

審くもの誰にかあらむ黄に誇る菊が背悖の涙流すに

は、解らない作品として作者に説明を求めるものも出たように思う。しかし、作者の武本由夫は、読んで感じてもらう以外に仕方がない、と言ったような意味のことを言って敢て具体的な説明はしなかったようである。

作者の武本自身、説明しようとして説明できなかったのかも知れない。それはちょうど、アブストラットの画の作者が具体的に何が描いてあるのかときかれても説明できないのと同じ理由と考えてもよい。只、問題は、こうした傾向の作品としての発表が僅か数首で終った、と言うことではあるまいか。何十首、と作り続けられれば、作品自体が一つの帰納性を持って来ると思う。

続いて私は第九回椰子樹賞の佐藤博三の作品について考察をめぐらさねばならない。

鏡面の蒼の世界に棲むわれと一角獣との逢いかも知れず

こうした作品を含むこの一連は異質であるか否かは別として、甚だ異様であることはまちがいない。この異装に目をみはり、讃辞を送ることも出来れば、又そこに説得力の不足を見出すことも可能であろう。

その後の彼の作品行動を見てみると、明らかに短歌の抽象化によろうとしているのが看取できる。前衛短歌がその表現技法として取ったのは西欧近代詩の比喩暗喩の移入で、そのことは彼の場合も同様である。そして、心層心理の表現、想像力の回復をはかろうとしているのも容易に理解できる。

コロニア歌壇と言う地域の中において新しいゼネレーションとしての彼への期待も私には痛い程理解できる。しかし、彼が自ら選びとった表現の世界が、いかに容易ならざるものであるかは風

子自身よく知るところであろう。
日本における前衛短歌は、一般的に言って退潮期にあると言う。その理由は何かと言えば、その難解性が説得力を構築し得なかったと言うことを、前衛短歌の評価基準を持ち得なかったと言うことであろう。難解さ、が単なるかくれみのであってはならないのだ。
続いて、私は南条由喜夫のリアリズム作品について触れることになる。彼の作品が写実的であると言うことと、作品の佳さとは何の関係もない。
的確に表現し叙景することによって、逆に心の裏側を見せようとする。これは短歌と言う表現形式が持っている一つの抽象性にほかならないのだ。

パイネーラ花鮮やけき日も僅か花は降る如花の上に散る

ゆるやかに登りの続くパラナ路に見ゆる茜のながき輝き

こうした作品はわかり易い。わかり易いだけに評価は逆にきびしいのだ。ごまかしが利かないのもこうした傾向の作品の特徴であろう。
ぼつぼつこの小文の締めくくりをしなければならないとして、最後に触れておかねばならない作者と作品がある。
他でもない、小笠原富枝である。彼女は第一回椰子樹賞受賞後しばらくは何の変てつもない作品を発表し続けていた。しかし、ある時期からひたすら自己の感性を追いつめるようにして作品発表を行っている。
たとえば、椰子樹七十一号の

扁平なる形となれば寒々したちゆく原形は自らにして

ここらから彼女の作品は次第に自らの内部に沈潜していったのではあるまいか。一見無関係のような言葉が不思議な連係を持ち、作品を裏から支えている作者の主観によって独自のリアリーテイをかもしている。

表現が幾分晦渋を帯びて来た事は争われないが、それはどうしようもない心象の中に追い求めて来た具体性そのものであろう。

入りたれば歩むほかなく踏みゆくを後ろに草のたち直る音

吾が声に追われゆく犬隔たれば全貌となりて見ゆる尾の張り

一握りとなる小鳥なれひびき来る体温に心眩しみ居たり

コロニア歌壇においても新しさを求め、メタフジックを追う作品も尠なくない。そうした中にあって僅かに常識と通俗を切りはなし得た作品を求めるとすれば、小笠原富枝の作品を思いうかべる外ないのである。

しかし、ここで書き加えておかねばならないと思うのは、こうした作品や作歌傾向について、解らない、面白くない、と言った、あるいはついて行けない、と言った享受の仕方をしている層も決して尠なくないと言うことである。

こうした批判について、どのような説明の仕方をすれば理解してもらえるか、と考える訳であるが、結局作者の内的なリアリーティと表現におけるその結晶性を認めてもらう以外に方法はないのかも知れない。そこには又、鑑賞そのものにおける次元的な差異があるのかも知れない。それは、表現と言うものが当然甘受しむければならをい面でもあろう。

以上、椰子樹賞作品を中心にして触れることによって最近の十年間における、コロニア短歌の推移変遷のあとづけをしようとし

て来た。
しかし、それは、最近のコロニア短歌の総てがそうした傾向であったと言うことではない。そこに、もっとも激しい推移変遷を見てとった迄のことである。
現在コロニアにおいて発表される短歌の大多数は、やはり、自然主義的写実的な作品によってしめられており、そうした人びとの中には、勝れたよい仕事をしているものも尠なくない。
たとえば、パラナの大場時夫、山室新太郎など、パラナ歌会の人達も非具象作品によっている人はないようだ。
コロニアにおけるモダニズムの如く言われていた新納潤魚なども、実は徹底したレアリズムの信奉者で、たとえば、心理的心象的な作品などを、非生活的な感覚上における、あそび、として斥けようとさえしている。
ここで、一言書きそえておきたいのは、コロニア歌壇には、本当の意味における非具象作品、非現実的な短歌が果して存在するのかどうか、と言うことである。僅かに、佐藤博三や、木村正和あたりが（作品的価値と言うこととは別にして）難解な作品を作っているだけで、他は弘中千賀子や陣内しのぶ、川原此露思にしたところで、作歌理念としては写実短歌以外のものではないと思う。すべて、レアリズムの評価基準をもってことが足りるのだ。只、僅かに小笠原富枝だけが、象徴的に、幾分屈折率のちがった作品を見せている。
戦後二十余年を経て、コロニアの歌壇も一応盛んである、と言えると思う。椰子樹五十号記念特集号が吉本青夢の手によって世に送り出されたのは、今から丁度十年以前一九五八年の六月であった。その特集号の中で清谷益次は、悲観的な見方をすれば、今から十年後に椰子樹と言う短歌雑誌が果して存在するかどうか判らない、とさえ言えると思う。と言っている。
これは何も清谷の胸だけを去来した感慨ではなく、ひとしなみ

に吾々の心の中のどこかにひそんでいた思いであろう。しかし、満十年を経た現在、現実には百号記念特集号を世に送り出そうとしている。これには色々な理由もあり、考えられもするが、いまはそのことに付いて触れているいとまはない。

只一言いえると思うのは、一般的にいって、戦前と戦後、特に最近では歌を作るものの質が幾分変化しているのではあるまいか。これが、コロニアと言わず短歌の世界での大きな推移変遷であろう。

「椰子樹」三〇年の歩み
第一号から第一〇〇号まで

武本由夫

一、まえ書き

「よくも、ここまで来たものだと、遠い創刊当時を追想して、ちょっと涙の出る思いがする。」

これは、椰子樹五〇号記念特集号載、「故旧忘れまじ（吉本青夢）」の、冒頭のことばである。いまのわたしも、やはり、同じ思いである。だが、感傷は紙背の彼方へ押しやり、これから、椰子樹三〇年の歩みについてペンを運ぶことにする。

吉本青夢が、五〇号記念号に書いた椰子樹の沿革は、だいたい統計を主としたものであった。此のたびも、統計的な記述は、吉本が担当執筆する筈なので、わたしは、経過と内容という面につ

いて書くことにしたい。

最初に、第一〇〇号までを鳥瞰的に眺めてみよう。次に創刊までの経緯を述べ、それから、全体を次のように区分して、書き進めたいと思う。

（1）第一期、（上）と（下）、創刊から復刊まで
一九三八年～一九四六年
（2）第二期、戦後の復興時代
一九四七年～一九五二年
（3）第三期、低迷の時代
一九五三年～一九五八年
（4）第四期、（上）と（下）、飛躍の時代
一九五九年～一九六八年

できるだけ記述の簡明を心掛けるが、少しは、まとまったものにしたいと思うので、紙数の超過をおおめに見て項きたい。また、短時日の間にまとめるので、充分に資料を揃え、検討の暇もない。従って、不備や誤記は、まぬがれないかも知れない。それらは、後日の訂正に俟つとして、しばらくの寛恕を願いたい。

二、第一〇〇号まで

一九三八年一〇月、椰子樹第一号が発行されてから、本年（一九六八年）第一〇〇号が発行されるまでに、満三〇年が経過した。年間三回から、多い年には六回まで発行したが、平均すると、年間三回弱となっている。それは、大戦の影響による五カ年の休刊が最大の原因であろう。

この休刊は、椰子樹の死命を制するかとも思われた。ところが、戦時にも、「林泉」という小歌誌が存続し、それに拠る人々が、復刊の原動力をなしたのであった。だが、一方に、邦字紙の復活と、その歌壇が活況を呈したことも、復刊に拍車をかけたことを見逃せない。

椰子樹は、三〇年にわたり継続発行されたのであるから、まずは無事に歩んできたと言えよう。しかし、危機感の漂ったことは、無きにしもあらず、ではなかったかと思う。

椰子樹は、綜合短歌誌としてのたてまえから「流派巧拙の如何を問わず」をスローガンとして掲げ、愛好者のすべてに門戸を開いた。だが、創刊の主軸をなした人々が、写実を唱導する岩波菊治の一統であった為、他派、他傾向の参加は、少なかったように思われる。

また、主要作者の傾向も、三〇年の間には、母国短歌界の、あるいは、此の国の風土習慣などの影響をうけたであろう。写実を足場としながらも、少しずつ変化を見せたこともうかがうことができる。

椰子樹、出詠者の交替にも、かなり激しいものがある。利害を他所にした文学愛好の集けであるとはいえ、やはり、人間の集団であるから、目に見えない摩擦は、避けられなかったであろう。感情の齟齬、主張の相違などから、脱退者も出たであろう。また、作歌意欲喪失による退会者もあったに違いない。

しかしながら、椰子樹が、三〇年にわたって、常に三〇〇人内外の会員を擁し、継続し得たことは、会員の尽きるなきコロニア短歌への愛情と運営に当たった人々の並々ならぬ努力によると言うことができる。

三、椰子樹が創刊されるまで

コロニアの短歌運動が目立ちはじめたのは、一九二六、七年頃からではなかったか。その頃、日伯、時報、聖報などの邦字紙が、文芸欄を設けて、作歌を奨励しはじめた。

一九三一年、ノロエステ線の第一アリアンサ移住地で、俳句の木村圭石と、短歌の岩波菊治を中心とする、歌俳誌「おかぼ」が

創刊され、コロニア文芸専門誌の濫觴をなした。その後、小田切剣、阿部青杜など、力倆ある短歌人が移住し、ぼつぼつ新聞文芸欄で活躍しはじめた。

一九三五年、徳尾渓舟が時報歌壇を、須貝さだめが聖報歌壇を担当した。そして、一九二九年頃既に設けられていた日伯の、岩波菊治担当の歌壇と共に、盛んになっていった。

一九三六年、歌の総領事といわれた坂根準三が、サンパウロに駐剳した。彼は、坂根嵯峨、花瀬群涛、桜井薫、水島十三子の四ペンネームを駆使し、それぞれ趣きを異にした短歌を発表して、各新聞歌壇を賑わした。坂根と前後して、リオの正金銀行支店長として駐在した椎本文也は、母国知名の短歌人で、折々新聞紙上に、手練の程を示していた。

同年、武本由夫、住吉光雄、木村茅里などが、第一アリアンサよりサンパウロ市に移転してきた。そして、徳庵渓舟、富吉好人、池田重二、須貝さだめらと、短歌会を誕生させた。武本の勤務する暁星学園教室で、一九三七年一月第一回を催したのが、戦前サンパウロ短歌会のはじまりである。

一九三七年、マリリアで、荒木八雲、開沼貴代などと共に「燎原」を創刊した阿部青杜が、サンパウロ市に移ってきた。それと前後して、岩波菊治が、第一アリアンサから、カンピーナス市効外に移転した。二人が同時に、サンパウロ短歌会に参加したので、中央短歌界は、にわかに活気を帯びてきた。

やはり、同年、パラグワスーで「白日」が渡部南仙子らによって創刊された。

また、バウルーで、小田切剣が、「山茶」を発行したのも、この頃ではなかったかと思う。

このように、中央ばかりでなく、他方でも作歌熟が高まり、次第に綜合短歌誌発行の気運が醸成されてきた。また、同年、古野菊生を中心とする文学誌「地平線」が創刊され、在サンパウロ短

歌人はこぞって参加した。これなども、短歌専門誌の出現をうながしたものの一つと言えるであろう。

綜合短歌誌の創刊を決定的なものにしたのは、坂根嵯峨と椎木文也であった。

一九三八年の中頃出府した坂根は、一夕椎木を訪問した。談たまたまコロニア短歌界の情状に及んで、短歌専門誌発行を計画した。成案を得てサンパウロに帰着した坂根は、阿部、徳尾を招き、創刊相談会開催を要請した。その後、在サンパウロ市主要作歌者らは、総領事公邸に集合して、一、二度相談会を開き、発行計画案を煮つめていった。

こうして、同年九月一四日、日本クラブに、在サンパウロ短歌愛好者二〇数名が参集し、発行決定懇談会を催した。

◆歌誌命名は坂根嵯峨に一任（後「椰子樹」と決定）、◆選者は坂根嵯峨、椎木文也、岩波菊治、阿部青杜（後、坂根、椎木は辞退）、◆編集は武本由夫、◆会計は富吉好人、◆発行準備は阿部、徳尾、武本、池田、富吉、住吉、◆発行所はサン・ジョアキン街二一六番、◆印刷所は日伯印刷部、◆発行回数は隔月（後、年間四回）、◆会員を同人と誌友とにわける、◆在伯知名作歌者三〇数名を同人に推薦、◆同人費月額三ミルレース以上（旧クルゼイロ）誌友費月額一ミルレース、◆坂根、椎木は発行の度に、それぞれ一〇〇ミルレースを補助する。◆一〇月末第一号を発行すること。

以上のように決定して、懇談会は閉会となった。そして、同年一〇月末、「椰子樹」創刊第一号が発行されたのであった。

四、第一期　創刊から復刊まで

（一九三八年～一九四六年）

（上）戦前の椰子樹

一九三八年一〇月発行の第一号から、一九四一年一〇月発行の

第一一号までを第一期の（上）とする。いよいよ綜合短歌誌の発行というので、中央作歌者たちの意気ごみはものすごく、異状なまでの張り切りようであった。

経　過

九月の創刊懇談会で、第一号発行を一〇月末としたので、準備に大童であった。新聞に記事広告を出して作品募集をした。ところが、集まった作品を選者の手許まで回す暇がない。阿部を中心に在サンパウロ市同人共選の形で掲載作品を決定した。そして、当時武本勤務の文教普及会事務室に、武本、徳尾が集まり、一気編集して、印刷所へ原稿を回した。

それから、一夕、阿部、武本が、半田知雄画伯を訪問して、その場で表紙絵を措いて頂いた。これが、第一四号まで、表紙を飾った椰子の樹の絵である。題字は、嵯峨揮毫のもので、第八〇号まで、ある時は、扉にも用いられて、長く嵯峨の思い出を止めた。第二号以後は、投稿者任意の選者（岩波、阿部）に送稿し、その選を経て、作品は掲載された。また編集も、武本の単独編集となった。

一九四〇年に入り、坂根嵯峨は、コロンビア公使に栄転、椰子樹は、四月発行の第七号を「送別特集号」として、名残りを惜しんだ。そこへ、阿部青杜の帰国が急に決定し、一挙に二人の主要人物を失うことになった。

この頃は、既に欧州戦乱は酣であり、日米関係も嶮悪を告げていた。ブラジルの対日感情も良好とはいえず、在伯日本人の活動も窮屈なものになっていた。

第八号から、アルゼンチンの有力作者石井衣子の参加があったが、選者も岩波一人となった。総領事嵯峨を失ったことは、人気にも、資金にも大きく響いてきた。脱会者も出、会費も減少して、経営は困難になって、会計富吉は、やりくりに苦しむようになっ

た。

その富吉も、一九四一年一月第九号発行の後、会計を徳尾に托して、マリリア方面に移転した。印刷事情も悪くなり、第九号は、聖報社に事情を訴えて、やっと発行を見たのであった。この頃が、創刊以来のドン底で、会計を肩替りした徳尾の苦心は非常なものとなった。四月と六月に、二回中央同人会議を開き挽回策を協議した。

七月発行の第一〇号には、「椰子樹の経営に就いて」という文章を載せ、会員に窮状を訴え、奮起をうながしている。

また、この号から、瀬崎涛声を、椰子樹詠草（一）欄に推し、陣営の強化を計っている。会費も、年額同人費三〇ミルレース、誌友費二〇ミルレースとして督促に努めている。

会費も、中央の熱意に応えて、続々会費を寄せ、発行が継続された。しかし、同年一二月八日、遂に日米開戦となり、椰子樹も休刊のやむなきに至った。

日本は緒戦に勝利を得て、一九四二年を迎えた。その一月二八日、ブラジルが日本に対し国交断絶を宣した為、在伯日本人の活動は大きく制限された。七月に入り、在外公館その他公的な立場にある者は、外交団交換船でブラジルから退去した。椎木文也も、その時帰国し、椰子樹は、産みの親を失って、大陸の孤児となったのであった。

内　容

創刊第一号は、総領事嵯峨のお声がかりであり、待望の短歌専門誌の発足というので、百花繚乱の趣きを呈した。明星系、アララギ系、一路系、創作系、詩歌系と、いろいろな系統、傾向の作品が掲載された。しかし、号を追うにつれ、嵯峨、青杜の離伯なども原因したが、写実系統以外は、おおむね姿を消していった。

作品の掲載方法は、最初の頃、中央同人選者の阿部が出詠者の

力量を量って、発表欄を分けた。後には、欄の分け方も決まって、選者級を、椰子樹詠草（一）欄、それに次ぐものを詠草（二）、中堅を岫雲集欄、初心は「冬影」「春光」というような季節関係の名称を与えた欄とした。

第一期（上）で頭角を現わした者に、次のような人々があった。選者級を除いて、（順不同）山本孤愁、武本由夫、徳尾渓舟、中山稠子、葛西妙子、清谷益次、今本義美、坪内広代、中江克己、小日切剣、行方正治郎、荒木八雲などである。

投稿作品以外に、第一号から第五号まで、新聞歌壇抄、日本歌壇抄がある。第二号から競詠欄など設けられている。講話、第六号から四回「万葉集講話（阿部青杜）」、歌論は第一〇号から二回。「短歌の文学的地位（酒井繁一）」。人物論は第三号から七回「歌友を語る（池田重二）」

随筆では第三号「酒（T・陽荘）」研究では第二号「つつ止めに就いて（椎木文也）、」などが主なものである。

「つつ止めに就いて」は、当時の歌壇で注目を浴びた。これは、一九三八年末、創刊号合評会を聖報歌壇関係者が行なって、それを新聞に発表した。その中に、菊治作「蒲沼に棲みつく亀が折々に赤淡水を掻き乱しつつ」の「つつ」は、中途半端で止っていない、という評言があった。それに対して、椎木文也が、「つつ」の文法的解釈と用例を挙げ、その評言の誤りであることを指摘した文章である。

作品傾向は、創刊当初こそ、さまざまであったが、嵯峨、青杜去り、衣子、文也行き、残った菊治、涛声は、その出身結社は異っていたが、傾向に甚しい相違は無かった。二人とも、写実を根底とした作歌傾向であった為、自然と写実系統が主流をなした。作品はおおむね近代写実派、文語脈文語、韻文発想のものである。只、不二山南歩が、時々現代口語短歌を発表して異彩を放っている。また、明星派を名乗った故北島文子が、第七号に一度作品を

寄せているのも珍らしいものであろう。

次に椰子樹詠草（一）（二）作品を各人一首掲げておく

◆この丘の裾引くところ朝なさな霧は沈めり湖の如くに

菊　治

◆高山の夜は冷え渡りアルゴー座澄み定まりぬ頭上に低く

文　也

◆天地いま息づまるごとき力もて夜の潮を少時堰き止む

群　涛

（註、群涛は、嵯峨の別雅号）

◆青芝に落ち散れる花紅の色のふかきをあはれとぞ見つ

青　杜

◆亜麻稔る一望の畑烈日のもとに働く人ら黙せり

衣　子

◆仰ぎ見るみどりの尾根をはひ下る尾越の雲の寒けくもあるか

涛　声

◆年々に開き拡げし畑広し半は荒れて草の繁み立つ

正次郎

◆うつろなる心抱きで詣で来し墓原あかき朝焼の霊

剣

◆我が立てる巌に砕くる潮のむたしぶきとなりて天にきらへり

由　夫

◆保ち来し我が秘め事を洩らせしは酔ひて感傷的となりし心か

渓　舟

◆挿木してほどなく病みし吾なれやあえかにバラの花さきてけり

八　雲

◆華麗なる絵を貼りておもふ陰惨なるわが病室にはおよそ相応しからぬを

孤　愁

◆夏草の茂みがくりに蛍ぐさはつはつ咲けり見るに愛憐しき

妙　子

◆鉱山に住みうら慰めむ術をなみみごもる妻の心昂ぶる

克　巳

◆サラクーラ声のはるけく鳴くものか朝明の月はなほ冴えにつつ

水　声

（註、水声は、益次の雅号）

◆吾が歩み人の歩みの大方も見ゆがに思ふ四十路に入りて

広　代

◆人知れずつめたきみ手をかき抱き我ふところに温めまゐらす

稠　子

◆裏沢のさ霧がくれに鳴き居たる雉鳩去りて朝たけにけり

義　美

（下）「林泉」の時代

「林泉」の時代というのは、一九四一年一〇月発行の第一一号より一九四七年四月発行の第一二号（復刊第一号）までの期間である。この戦時五年五カ月間を第一期の（下）として、その大略を述べてみる。

「林泉」というのは、モジ短歌会の後身短歌会名であり、その歌会記録を収めた小歌誌名でもある。この名称は、当時、モジ在武本居の庭前に池があり、その地がモジ歌会発足第一回開催地であったことによる。

経　過

一九四一年末、遂に太平洋戦争が勃発し、在伯日本人の日常行動に厳しい制限が加えられるようになった。この不自由から逃れる為、サンパウロ市居住の日本人で、郊外に疎開する者も少なく

なかった。

一九四二年、古野菊生、武本由夫が、モジ・ダス・クルーゼス市附近に疎開した。古野、武本は、当時、モジ市とその附近に在住する短歌愛好者、則近正義、小島正徳、田辺重之らと討って、短歌会を結成した。そして同年七月、第一回モジ短歌会を、田辺重之居（後の武本居）で催した。そして、会場は会員回り持ち毎月あるいは隔月に短歌会を開いた。

一九四三年、サンパウロ市、スザノ市方面の歌友と連絡がつき、徳尾渓舟、清谷益次、八巻培夫、上村登志行らが、最初参加し、以後、各方面からの参加者が多くなった。

一九四四年、岩波菊治が、カンピーナス市郊外からスザノ市郊外に移転した。

そして直ちにモジ短歌会に参加した。こうして、モジ一地区だけの短歌会ではなくなった。そこで、短歌会記録をまとめた小冊子の名称を「林泉」とし、第一五回短歌会より「林泉短歌会」と改称した。

そして、以後、モジ、・スザノ、サンパウロ各地交替で短歌会を開くようになった。

一九四五年、岩波菊治が、モジ市附近に土地を購入して移り、また坪内広代もモジ市奨学舎々監となって移転してきた。

そして、その翌四六年には、瀬崎涛声もまたモジ地方に農園を造成して入植した。

このように、当時のモジは、さながらに短歌のメッカといった観を呈した。

この年の八月、日本の敗北をもって、大戦は終結した。コロニアには、さまざまな流言蜚語が行なわれ、一九四六年から、暗黒時代に踏み入ったのであった。

しかも、そうした騒然たる世相を横目に、林泉短歌会は継続された。一九四六年一二月第二七回を、モジ市カステロン・ホテル

で催した。これを最終回として、一九四七年一月開催の、戦後復興第一回サンパウロ短歌会に、バトンを渡したのであった。

モジ短歌会発足以来、四年と六カ月間に催した二七回の歌会中、第一九回までの記録と会員自選作品を収めたのが「林泉」三巻である。第二〇回以後の歌会記録は、復刊椰子樹、第一二号、第一三号に載せてある。

内　容

「林泉」第一集は、一九四四年一月、第二集は、一九四五年一月、第三集は一九四六年一月、都合三回発行されている。いずれも謄写印刷、菊判、本文四四ページ、編集武本由夫、会計則近正義、原紙切り武本、製本は会員の共同作業によったものである。

「林泉」三巻に自選作品を載せた者は、モジ一四名、サンパウロ四名、アリアンサ二名、モンテ・アルト一名、北パ二名、スザノ二名、プルデンテ一名である。モジ及び林泉短歌会に参加した者は、一層多数である。文章も、古野、則近、武本、徳尾、岩波などが執筆しいる。

また、第三集に載った「前号作品批評（徳尾渓舟）」中で、第二集載、清谷作品「天地にひとりの我を頼り来るこれのをみなぞいたわらずやも」の結局「ずやも」を誤用とした。これが端緒をなして、論争を捲きおこし、復刊椰子樹誌上に延々と続き、引いては、論争時代現出の切っかけともなった。

この「林泉」の時代に頭角を現わしたのは（順不洞）則近正義、八巻培夫、小島正徳、上村登志行などであった。

第三集の巻末に、「時至れば…広く全伯歌人を糾合し、椰子樹を復興するとして…」と、武本が書いている。その頃復刊が、しばしば話題になっていたに相違ない。事実、この翌年一九四七年四月復刊に漕ぎつけ、第一二号の発行を見たのである。

五、第二期　戦後の復興時代
（一九四七年～一九五二年）

終戦と同時に、祖国の運命に関する勝敗論は、コロニアを二分し、さては、百鬼夜行の観さえ呈した。だが、一方では行動の束縛を解凍れ、次第に活気を取りもどしていった。終戦約一ヵ年後、日語新聞が相次いで再刊あるいは創刊された。

この日語刊行物の復活が、椰子樹復刊具体化をも速めたと言えよう。

第二期というのは、戦争終結二年目の一九四七年四月発行第一二号より一九五二年八月発行第三一号まで（二〇巻）と

そして、菊治の死まで、六年間を指す。

この第二期は、椰子樹が迎えた第一回目の興隆期で、特に、一九五〇年頃は、黄金時代の現出と言い得ようか。

経　過

一九四七年一月、サンパウロ市仲真美登利居で、再開第一回サンパウロ（林泉第二八回）短歌会が催された。その席上で、椰子樹復刊が協儀され、具体案が決定した。選者岩波菊治、編集武本由夫、会計徳尾渓舟、休刊時の陣容そのままで、再出発し、第一二号を四月発行とした。発行資金は皆無に等しいので、取り敢えず、謄写印刷、本文は武本の鉄筆作業で、表紙のみ南米時事に活版印刷依頼、この形で第一四号まで、三巻を発行した。

復刊当初は、会費年額、同人一〇〇ミル、誌友五〇ミルであったが、一九四八年から、同人一二〇ミル、誌友六〇ミルに値上げした。

一九四八年二月発行第一五号から、南米時事で活版印刷となり、会員も増加して、発行は軌道に乗ってきた。そこで、武本は、新進の則近正義と編集を交替した。第一七号かち則近編集となり、

中央同人は、この号から、、岩波と並んで、瀬崎を選者に推した。
戦時の抑圧から解放されたコロニアで詩歌が盛んになったのは当然である。新聞歌壇が栄えると共に、各地方に短歌会が結成され、地方歌誌などの発行を見た。
こうした地方短歌界の殷盛は、中央を刺戟して、短歌大会開催を企画させるに至った。その具体案は、一九四八年の中頃、武本、徳尾を中心に、中央では、既に作成されていた。
一九四九年は、創刊一〇年目に当たるので、菊治満五〇才の祝賀をも兼ね、大会の実現を期した。徳尾、清谷らの奔走により、パウリスタ新聞社主催、椰子樹社後援で催すことになった。
こうして、一九四九年二月一〇日、第一回全伯短歌大会が、新トキワ食堂で開催された。以後、大会は年々盛大して、一九六八年第二〇回を迎えた。

同年九月、全伯的な短歌ブームに乗って、長島可山（後の南条由喜夫）、別府二郎らを中心とするプ・プルデンテ短歌会は、奥ソロ短歌大会を催した。中央から、徳尾、武本、池田、仲真らが出席したが、これを地方大会の皮切りとして、翌五〇年には、ロンドリーナ市で、北パラナ第一回短歌大会を、大場時夫、大倉正友、晶山充（後の山室新太郎）真木研一（後の本庄賢一）らが中心となって開催した。以後、これらの地方では、何回か大会が催され、その都度、中央からも同人が参加してきた。前記の者の外、岩波、瀬崎、吉本、葛西、西田、開沼、米沢、井本、中江、川原、梅崎、酒井、小笠原、弘中、その他が出席している。
椰子樹は益々上昇線をたどり、四九年と五〇年には、年間四回を発行した。五〇年二月発行第二二号に、嵯峨を記念する意味で「坂根賞」設定を発表した。同年八月開催の第二回全伯大会の席上で、第一回坂根賞は、吉本青夢に授与された。
以後、五一年第二回井本惇、五二年第三回川原比露思、五三年第

四回河村哉太郎に授与された。五四年以後は、該当者なく、後年コンクールによる「椰子樹賞」に切りかえられた。

第二三号から「入門欄」を設置し、初心者に対する作歌指導に当り、断続的ながら長く継続された。最初、第二三号～第五一号、担当、行方正治郎、次は、第六三号～第七四号、担当、武本由夫、三次は第八三号～第九二号、担当、米沢幹夫となっている。

一九五〇年一二月発行第二五号は、第二回短歌大会特集号で、八四ページという空前の豪華版である。ここが、椰子樹の登りつめてきた一山項であった。だが物価攻勢もきびしく、一九五一年には、同人費二〇〇ミル、誌友費一〇〇ミルとなっている。それでも、前年度少々派手に過ぎたきらいもあったが、同年からは紙面も縮少し、発行回数も、五一年、五二年は、共に三回に止めている。

なお、一九五一年には、汎ノロエステ短歌連盟主催の第一回全伯短歌コンクールが開催され、中心となった秋永三郎、光南極、脇坂一らは、大いに活躍した。

以後、同連盟主催で毎年行なわれ、後、モジ短歌会に主催をゆずり、何回か続行されて後消滅した。

この頃、吉本の主唱で、創刊以来一〇年にわたり、編集と会計を担当してきた武本、徳尾に記念品贈呈が提議された。

同人誌友九八名の拠金による二、四四〇ミルを物品に替え贈呈された。

岩波菊治は、数年以前より胃病に罹り養生していたが、一九五二年一一月病状にわかにあらたまり、二三日、五五才を一期として逝去した。大衝撃を受けた、椰子樹会員は、二四日の葬儀終了後、平松薫居に集合して相談会を開いた。そして、椰子樹存立に一致協力を誓った。新生面打開を計って、選者として、瀬崎涛声留任の他、新に酒井繁一、武本由夫を選任した。

内　容

一九四七年、椰子樹復刊第一二号以後、全伯作歌者の注目を浴びたのは「ずやも論争」であろう。これは純然たる文法上の論議で、問題は「林泉」から持ち越され、徳尾、清谷、武本間で議論が弾んでいた。そこへ、日本の椎本文也、窪田空穂ら先進や大家の説が登場した。最初、清谷説を支持した窪田が、後一転して武本説を支持するに及び決着をみた。論争では、第一四号載、中江克巳の「父母の面輪は知らずこの兄の手に生ひ立ちし我ならなくに」の「ならなくに」の当不当に就き、第二二号、第二三号で、中江と中山、脇坂が自説を主張している。その他、第一七号、第一八号で、行方、則近間に芸術と科学と生活との関連に就いての応酬があったが、議論の発展は見られなかった。

この時代は、コロニア短歌が熱気をはらむ上昇期であった為か、これらの論争を皮切りとして、各邦字新聞文芸欄などでも、さかんに短歌論争がくりひろげられ、しばらくは、一種の論争時代といった観さえあった。

歌論では、第一三号から連載四回「短歌の概観（武本由夫）」がある。研究あるいは解説紹介で、第二〇号から六回「大戦前後の伯国短歌界（武本由夫）」、第二六号から二回「新万葉集と伯国歌人(酒井繁一)」、第二九号から二回「短歌と色彩感覚(吉本青夢)」、第三一号から二回「短歌と洋語（吉本青夢）」などがある。

人物論では、第一七号から七回「天津夢城（安良田済）」、「滝沢正（武本由夫）」

「瀬崎涛声（岩波菊治）」、「川原比露思（長友安徳）」、「伊藤次郎（則近正義）」、「行方正治郎（脇坂一）」、「葛西妙子（瀬崎涛声）」などがある。故人追悼では、第二〇号、第二一号「樋田美沙子（中江克巳、武本由夫）」、第二二号、第二三号「伊藤次郎（大原友重、安良田済、小島鴎人、則近正義、武本由夫、恩村実紀）」第二八号「武田公平（清谷益次、天津夢城、安良田済）」などがある。その他第

二四号から第二五号に、佐々木信網、坂根嵯峨、日本荘歌碑建立特集として「信綱（石井衣子、三好案子）」「嵯峨（徳尾渓舟、岩波菊治、瀬崎涛声、堀田野情）」がある。また第三〇号から二回「椰子樹三〇号まで（則近正義）」がある。これは、未完であるが、二回で中断されている。

これらが主なる文章で、その外、随筆、小品、批評などが多数に紙面を賑わしている。

第二期に、歌境の進歩を見せ、第一線に活躍するようになったのは、次の人々であった。（順不同）天津夢城、開沼貴代、中井小暢、不二山南歩、吉本青夢、西田季子、脇坂一、川原比露思、河村哉太郎、武田公平、伊藤次郎、上野紅陽、井本惇などであった。

作品の傾向は、一九四九年頃から、口語脈文語使用散文発想の現代写実主義傾向の作品が目立ちはじめている。

◆またたく間に三割を下まわる産卵よどうして飼料代支払うのか　由夫

◆苦しみて作る此の歌が何になるかくだらなくなりて立ち上りたり　渓舟

◆虫の好かぬ来客なれば茶と本をあてがいて失礼と仕事場に去る　青夢

◆ニテロイ通いの渡船がのろのろと走る見ゆ高度五百米のわが機上より　菊治

◆真っ暗な夜の部屋隅に一日の仕事疲れの重き靴脱ぐ　涛声

◆南回帰線ここらあたりとききて過ぐ旅人めきし心となりて　益次

◆捨てても捨ててもおろおろと戻りくる犬の悲しき迄に尾を垂りて寄る　稠子

第一九号から第三一号までの「詠草（一）欄」作品中、散文発想のものをあげてみた。当時の日本歌壇の風潮は、コロニア短歌

にも大きく影響している。傍観的な対象描写を主として近代写実主義の病弊を排し、感動の接直表現と自我意識の解放による詩境の開拓がみられる。知性の網目をくぐらせた自由で平衡のとれた感情を打ち出そうとしている。現代写実主義の骨格は、このような過去への抵抗によって形造られていりた。

六、第三期　低迷の時代、
（一九五三年～一九五八年）

椰子樹創刊四年目の一九四一年に、まず嵯峨、青杜去り、太平洋戦争と同時に文也帰国し、遂に休刊に追いこまれた。この時を椰子樹が遭遇した第一の危機と観れば、一九五二年、菊治の死に逢ったことは、第二の危機と言うことができよう。第一の危機は、戦時も細々ながら短歌の命脈を保って来た「林泉」により脱出するこしとができた。第二の危機は何によって脱出し得たであろうか。筆者は、作歌者世代の交替、即ち、準二世の世代から、秀れた短歌人が続出したことを、再復興の原動力と者える。

次にしばらく、第二復興期を迎えるまでの低迷時代について記述を進めてみよう。

第三期とは、一九五三年一月発行第三二号から、一九五八年一一月発行第五七号まで（二六巻）を言う。この期間には、編集者の交替も頻繁であったし、経済的にも苦しく、椰子樹は苦悶しながら、歩み続けた時代であった。

経　過

一九五三年一月発行第三二号から、岩波亡きあと、新に酒井、武本が選者に推され、瀬崎と並んで選歌を担当した。武本の場合は余り抵抗はなかったが、酒井は、それまで殆ど椰子樹と接触がなくいわば路傍の人であった。

その酒井を突然選者に推したのは、彼の人柄と力量に信頼して、新生面打開に協力を仰ぐ為であった。

第三三号を菊治追悼号として、故人を偲び、会員一同決意をあらたにして、椰子樹発展を志した。第三五号から「題詠欄」を新設して、投稿意欲をかきたでている。担当は、最初中山稠子で出発し、第五二号からは、中山帰国のため、幾人かの同人共選の形で継続した。第八六号からは、毎号上層会員が交替で担当し、現在に至っている。

一九四八年の第一七号から、武本に代わって編集を担当して来た則近も、菊治の死後、頓に意欲を失いがちとなった。第三四号から第三六号までは、当時則近居に寄寓していた吉本との共同編集とし第三七号は、吉本の単独編集となっている。

一九五三年中頃から、地方会員間に、椰子樹運営に対する不満がささやかれ始めた。それが、遂には中央の長老層にも伝播し、一九五四年になって、爆発の危さが見られるようになった。そこで、同年の中頃までに、二回にわたり中央同人会議を開き、陣容の樹て直しを計った。

一九五四年八月発行第三八号は、取り敢えず武本、徳尾が編集発行し、第三九号から武本単独編集として、乱れた足並みを整えた。

同年、岩波菊治歌碑の建立が計画され瀬崎を委員長とする委員会の結成を見た。

建立実務責任者武本、会計責任者徳尾、委員は椰子樹同人、長野県人会長、力行会支部長などとした。そして広く関係者から寄附金を募った。

この歌碑は、一九五五年、イビラプエーラ公園日本館敷地内に建立され、除幕式には、時の総領事千葉皓はじめ関係者多数が列席した。

一九五四年一二且発行第三九号から、創刊以来三度編集を担当

した武本は、熱心に取り組み、一九五五年、一九五六年には年間五回発行を実現した。運営陣の刷新により、地方会員間に揚がった火の手もおさまり、椰子樹は一息ついたのであった。ところが、今度は中央膝元に反椰子樹とも見られる動きが起こらた。

それは、一九五五年末に結成された「ブラジル新歌人集団」の出現である。同人九名が名を連ねて「蜂鳥」を創刊し、意気高らかに発足した。後年（一九六二年）椰子樹第七二号に、当時の蜂鳥同人の一人新納潤魚が「一時私なぞも、椰子樹がアララギ的作歌論で覆われているのがアキ足らなく、……椰子樹に楯付いたような恰好になっていたのだが……。」と述懐している。この楯付いた恰好は、椰子樹の分裂を臭わせるもので、一種の危機感を内蔵していた。

当時の椰子樹を調べてみても、新納の言うような作歌論は見当たらない。また岩波亡きあとアララギ会員も皆無であった。やはり、蜂鳥同人の楯付いた恰好は、椰子樹の無気力と低迷に伴なう、作歌者相互の人間的紐帯感の衰弱がもたらしたものと考えるのが妥当であろう。

発足当初、椰子樹の存立をおびやかすかに見えた「蜂鳥」も、殆どの同人が、椰子樹と双股かけていた為、脱退者なども現われた。そして、一九五八年に解散して、楯付く姿勢から協力の姿勢に立ち直った。

一九五六年三月発行第四六号に、年頭同人会議の記事がある。当時の全同人五一名の姓名が載せてあるが、同会議への出席者はわずかに一二名と記されている。

それでも、昨年の同会議よりは、多数の出席を得たせある。それに見ても、当時の椰子樹が如何に弱体であったかが知られるのである。会費は、年額同人四〇〇クルゼイロ、誌友二〇〇クルゼイロに値上げを決議していて、経済的にもピンチに立っていた様子である。

だが、この低迷も、一九五五年から一九五六年にかけて、内部分裂をはらんだ弛緩状態に在った頃が最底で、一九五七年に入る頃は、持ち直して、低調ながらも、歩調を整え、第五〇号にたどりついている。そこで、五〇号記念号を吉本編集、別冊で発行、その為、別に一〇〇クルゼメロを徴集した。しかし、この記念号発行もなかなかはかどらず、一九五八年六月に、やっと完成している。

一九五七年を迎え、内部統制整備の見通しのついたところで、それを潮に、武本は、編集を川原、梅崎と交替し、徳尾は、会計を中江と交替した。こうして、運営陣を更新すると同時に、新に「椰子樹賞」を設定して、作歌意欲の盛りあげを図った。同賞は、一九五四年以来打ち切りとなっていた「坂根賞」に代わるものである。

一九五八年三月発行第五四号に、第一回椰子樹賞入賞発表が載せられた。第一回（五八年）小笠原富枝、第二回（五九年）梅崎嘉明、第三回（六〇年）小竹清子、第四回（六一年）弘中千賀子、第五回（六二年）陣内しのぶ、第六回（六三年、佳作入選）森重扶美、第七回（六四年）水本すみ子、第八回（六五年）高橋よしみ、第九回（六六年）佐藤博三、第一〇回（六七年）南条由喜夫となっている。

この年の中頃、選者酒井が訪日の旅に出発した。その為八月発行第五二号では瀬崎、武本二人が選歌を担当、一二月発行第五三号から、酒井に代わって、行方が、選者の列に連なっている。

一九五九年一月、同人会議を催し、これまでの達者、瀬崎、行方、武本の勇退が認められ、以後は、吉本の単一選とした。また特別投稿欄が設けられ、川原、弘中が選歌を担当することになった。編集も、川原、梅崎の辞退により、米沢が受けもつことになった。

会費は年額同人費五〇〇クルゼイロ、誌友費二〇〇クルゼイロに値上げした。

同人数も、五六年には五一名であったが五九年には六七名に増加している。

このように陣容をあらため、第二の興隆期ともいうべき、第四期に入ったのであった。

内　容

一九五三年一月発行の第三三号は、菊治追悼号で「追悼記（穂屋野潔、細川つたえ、橋本垂南、石戸半我、岩波とめ、瀬崎涛声、葛西妙子、開沼貴代、真木研一、行方正治郎、吉本青夢、井本惇、酒井繁一、耕村生）、一九五四年五月発行第三七号は、菊治特集号で「菊治の思い出（池田喜城、行方正治郎、吉本青夢、穂屋野潔、〃詩〃米沢幹夫）などが載せてある。

一九五三年八月発行第三四号から、第三七号までは、どういうわけか、各号ごとに、作品提出欄の区分けが変更されている。地方会員間に椰子樹不信の声があがったのが、丁度この期間にあたる。それと思いあわせて、不信の原因は、こうした所にあったのではないかとも思う。

一九五四年八月発行第三八号からは、最上層を「作品（1）」次ぐものを「推薦欄（岫雲集）」中堅を「作品（2）」、初心を「作品（3）」として、以後第五八号まで変更していない。

この第三期に現われた文章としては、次のようなものがある。歌論では、第三二号「短歌と短詩型（永田泰三）」「短歌の本質と形式（酒井繁一）」、第三四号「短歌に於ける人間性（酒井繁一）」、第三九号「文学概念と短歌（中山稠子）」、歌語では第五二号から八回「私の観た短歌（武本由夫）」文法論、第四〇号から一六回「語法の研究、万葉文法解、文構成の本質、その他（茂村徳太郎）」、論争、第三五号～第三七号「〃紅ゐ〃　の問題（酒井繁一、吉本青夢、茂村徳太郎）」、これは、酒井が第三二号に「照り降りの蒸暑き日が打続き紅いのダリヤ庭に真盛る」という作品を発表した。

結局、この〃紅い〃　の送りがなを不当とした吉本、茂村説が正しいと結着した。第五三号～第五四号「樋口氏の歌（光田ひさを、梅崎嘉明）」、互いの感受を主観的に述べた程度に終った。

故人追憶、第三二号「野崎舟人（池田垂二）」、第三六号「荒木八雲（大原友重、河村哉太郎、開沼貴代）」、第五三号「武田公平と私（光田ひさを）」、研究、第三三号「短歌と記号（吉本青夢）」、第三四号「短歌の構成と分析（吉本青夢）」、第三九号「〃とはに思はむ〃について（高林明雄）」、解説、第三九号「短歌史に於ける女性の地位（酒井繁一）」などが主な文章である。

この期間に境地を高め上位に進んだのは次の人々である。（順不同）吹本菊子、大場時夫、大島進、西田孝徳、東野暁風、梅崎嘉明、森重扶美、弘中千賀子、小笠原富枝、米沢幹夫、安部栄子、光田ひさを、本庄研一、玉木五男、片岡けい子、住吉光雄、坂光男、簀藤勝子、越村定雄、平松霞、唐沢恵津子、光南極、中井芙蓉、高林明雄、長鳥可山、米川久、新納潤魚、長友安徳、紅月伯舟、小竹清子、晶山充、別府二郎、正木思水、安良田済、桜井健三、坂寿一、竹林光、戸崎清作、阿部パウロ、三浦茅里などである。

この時代の椰子樹作品傾向は、第二期から顕著となった散文発想の系統を受け継ぐものであるが、平俗を超えて、緊迫感の篭った高踏的なものを求めている。

語句連絡の屈折は鋭角をみせ、音韻律動の振幅も広くなっている。第二期作品に見られた現実の肉体的生活と素材との接点に於ける詩の追求ということから、現実の精神生活と素材との接点に於ける詩の追求という方に移行しつつあるのが見られる。そうした作品を、最初の方から抜き出してみよう。

◆無頼にも落ちねば弱きありかたを汝は心の底に見てゐむ

育　夢

◆強くまたたけば既に涙かはき居て今日は我が娘の翳を深くす

季　子

◆転生を希はむ言葉想へればサビアの声さへ口説の如し
由　夫

◆あふのけに胸に掌をくみ寝て居りて思い描ける吾の死の像
涛　声

◆うるほひをもちてなべてに下るものガロアの雨は朝よりけぶる
惇

以上は第三六号から、第三九号までの作品中のもの、次に第五四号から第五七号までの作品中から挙げてみる。

◆当然の事の神秘に胸打たるリンゴの樹にリンゴ実るごと
妙　子

◆触れず来し過去をしずかに告ぐる君と油うける肉スープすする
富　枝

◆かなしみの濾過されてゆく過程かと母の遺影に双掌をあわす
比露思

◆かすかにも疼くものあり切味よく張りたるボラの腹割きゆきつ
千賀子

◆假借なき言葉ありあり甦る店の大扉に鍵かける時
扶　美

以上のような人間心理のゆらめきを深く追求しようとする傾向が見られる。この傾向が土台となって、第四期に入り、目ざましい飛躍を見せたのである。

七、第四期　飛躍の時代
（一九五九年～一九六八年）

（上）コロニア短歌の形成

椰子樹第一の興隆期を第二期とすれば、第四期は、第二の隆盛期ということができよう。だが、この第二の隆盛は、第一の繰り返しではない。

第二期に見られた興隆は、いわば戦前作歌人の復活であった。椰子樹の第一線に馳駆したのは、日本で基礎的素養を培った人々であった。従って、作品の素材こそ、此の国のものであるが、作歌精神の構造は日本的であって、日本的情趣の底流は否定できないものであった。だがら、日本短歌の延長的興隆と言えよう。

ところが、第四期に見る興隆の様相は、それとは全く異質である。幼少時移住したこの国土で、短歌的素質を培った人々の招来した興隆である。従って、作歌精神の構造は、ブラジル的であって、その作品は、コロニア的情趣を蔵している。だから、もはや、日本短歌の延長的復興とは言い難い。日本移民五〇年の歴史を積み重ねて培ったコロニア短歌が、はじめて花咲く時を迎えたと言うことができよう。

ここで、筆者が、第四期の（上）というのは、一九五九年三月発行第五八号から、一九六三年三月発行第七四号（一七巻）までである。この期間は、上述コロニア短歌の生成期で、上昇気運の横溢した時代であった。

経　過

一九五九年三月、第五八号を発行の後、運営陣は次のように改められた。選歌の瀬崎へ行方、武本、編集の川原、梅崎が退陣もた。そして、六月発行第五九号から、会計中江は留任とし、選歌は吉本担当とし、編集を新人米沢が担当した。

新に編集を担当した米沢は大いに意欲を見せ、従来椰子樹の根幹的存在をなした瀬崎、徳尾、武本、行方、吉本及び大妃的存在の葛西、開沼、西田三女流の特集を、第五九号から第六四号まで連続掲載した。

また、第五九号には、「岩波菊治歌集刊行委員会」の発足を告げ、購入予約を募っている。岩波歌集は、早くから刊行計画があったが、日本のアララギ社との出版交渉その他で手間どったあげく、

結局、当地で出版することになり、岩波歿後七年目に、やっと着手したのであった。
委員長瀬崎、副委員長行方、代表徳尾、編集武本、資料吉本、会計中江、以上のメンバーで発足し、同年六月出版分頒した。
第六〇号に「木杯受賞の弁（徳尾渓舟）」がある。これは、移民五十周年（一九六八年）記念に日本外務省が各界功労者に贈った木杯に関することばである。コロニア短歌界では、瀬崎、行方、徳尾、武本（後に辞退）が推薦された。
一九六〇年五月発行第六三号から、選歌欄の充実を計か為、吉本と並んで井本を選者に推している。
この年には、六月日本荘に、木村捨録歌碑が建立され除幕式が行なわれた。木村は、日本の短歌研究社々長、歌謡「林間」の主宰者で、日本からブラジルに初めて訪れた著名短歌人である。移民五十年祭に来伯して以来、一九六二年にも再来訪し、コロニア短歌人と親密な関係を結んだ。
同年には、武田公平歌集「微塵」が、カフェランジャ、リンスの秋永、安良田、小石らによって出版され、彼らの厚い友情と善意は、短歌界に大きな感銘を与えた。
一九六一年には「誌上短歌競詠」が企てられ、第一回（第六八号）、第二回（第七二号）、第三回（第七五号）に発表された。このように第五九号以来、続々と新企画が実行に移され、また、新人に発言の場を与えたことにより、いよいよ作歌活動も活発化してきた。それに伴い、経営陣の強化も必要となり、編集、会計の外に総務部が設けられ、初代総務として、開沼貴代が就任した。
この年中頃、編集米沢と会計中江とは、地方短歌界の情況を調べるという目的を以て、北パラナのロンドリーナ短歌会、奥ソロ、プ・プルデンテ短歌会、バストス短歌会を歴訪して、地方会員の声を聞き、それを椰子樹運営に反映させようと計った。
一九六二年五月発行第七一号から、選者、井本留任、吉本に代

わって川原が選者に推され選歌を担当している。また、この年に入ってから、益々活気を呈し新興気分が各地方にみなぎってきた。この気運に乗って、椰子樹機構の改革が問題となった。まず、北パ、ロンドリーナ歌会あたりから、同人誌友制廃止、一律会員制施行の声があがった。やがて、これに同調する者も多くなり、機構改革具体案の検討に迫られてきた。こうして、中央の意向は、同年一一月発行第七三号に「椰子樹会員制私案（武本由夫）」となって現われた。そして、一九六三年六月発行第七五号より、武本私案に基く、会員制が施行され、今日に至っている。

また、一九五七年五月発行第五一号以来会計を担当して、台所の切り盛りに秀れた手腕を発揮してきた中江は、一九六二年二月発行第七〇号より、開沼の後を受けて、第二代総務に就任し、会計を弘中と交替した。

尚、一九六〇年度は同人費八〇〇クルゼイロ、誌友資四〇〇クルゼイロであったが、六二年度には、前者を一、五〇〇クルゼイロとし、後者を一、〇〇〇クルゼイロとしている。

内　容

一九五九年三月発行第五八号は川原、梅崎の編集であるが、第五九号から、編集米沢、補佐井本となった。それまでの写真版表紙絵を廃し、新に、間部学、福島近ら、コロニア新進画家の絵を以て表紙を飾った。また内容にも新鮮味を打ち出すことに努めている。

既述の如く、古参作歌者論及びその作品を特集連載した外、「短歌実験室、」「指定作品合評」などを設けて、批評にも力を注いでいる。

また、意見発表では、第六〇号～第六二号「私の白書、」第六二号～第六五号「意見交換室」第六五号「発言の場、」「私の意見と主張、」第六八号「新しい系譜、」第七二号「僕の言い分」などに

多くの会員を登場させている。

短歌鑑賞では、第五九号から三回「私の短歌鑑賞（清谷益次）」、第六五号「コロニア問題作品鑑賞（住吉光雄）」、第六六号～第六八号「椰子樹秀歌鑑賞（新納潤魚、本庄研一、小笠原富枝）」、第六六号から六回「岩波菊治短歌鑑賞」などがある。

コロニア作歌者論で、第六七号から三回「戦後作歌者論（清谷益次）」、第六九号「私の注目する歌人（梅崎嘉明、光田寿男）」、日本歌人論、第七二号～第七五号「悲劇の歌人（酒井繁一）」、短歌論に第七三号「近代短歌とはどんなものか（武本由夫）」、コロニア歌集紹介特集、第七〇号「ブラジル歌壇の残した足跡、」研究、第六〇号から五回「紀記歌謡ノート（新納潤魚）」、などがあって、紙面、すこぶる変化に富んでいる。

また、短歌興隆期にはつきものの、論争も喧々たるものであった。第六二号「私はこう思う（梅崎嘉明）に対し第六三号「歪んだ鏡面（本庄研一）「それだま（井本惇）」が、反駁解答でなく、反撥している。この論争は尾を引いて、第六四号「井本兄え（梅崎嘉明）」、第六五号「梅崎君に答う（井本惇）」、第六六号「井本氏の文章（梅崎嘉明）」となったが、何ら問題は結着していない。第六六号「大場君と吉本君へ（武本由夫）」が、解答を求めたに対し、第六七号「武本先生に答えて（大場時夫）」「弁明と提言（吉本青夢）」がある。吉本の文は回答だが、大場の文は反撥だけに終わっている。第七〇号には、「光田寿男に一言（本庄研一）」「開沼貴代氏へ（坂本清人）」「坂本清人氏に答えて（開沼貴代）」第七一号「本圧氏に寄す（住吉光雄）」がある。これらは、見解の相違を開陳したものであるが、光田対本庄など言葉の応酬に終始している。

第四期（上）では、論争の形で、掘り下げれば、可成り究明するに足る問題が提出されたが、いずれも理論の展開を見せなかった。

次に、この期間、第一線に進んだ人々を掲げておく。（順不同）春名景水、清谷勝馬、藤田美砂子、清水節子、近昇、牛草茂、堀

田栄、植村かず、小笠原正好、田中麻三美、陣内しのぶ、殿岡照郎、井之盛一翠、渡部チエ、坂本清人、西村智恵子、住吉豊、椎名千代子、間島正典、佐藤一英、樋口辰男などである。

この時代の尖端を行く作品傾向は、第三期に見られた、精神生活と素材との接点における詩の追求を一層深めたものである。

◆翳り持てば翳りある貌にうつり居る鏡に不意に衝かるる思ひす
富　枝

◆陽だまりの冬の草はら隠湿に絆まつわる生きゐるめぐり
千賀子

◆夢の中の葬儀車ひときわ光りつつわが前に来て乗らぬかと言ふ
しのぶ

◆保持しえぬものを羨しむ想ひなり巻き風はくづれつつ遠く去りたり
嘉　明

◆さりげなき会話の後に萠しくる夜の感情を互みに秘めつ
比露思

◆諍はぬ故にこもれる苦しみと又錠剤を飲み下すなり
季　子

◆草に棲む獣のごとき眸となりて佇ちをり黄なる月にむかひて
潤　魚

◆落伍者のひとりの如く剪定は追はるるひと日地平は暗し
由喜夫

◆美しき老後などなし雲低き屋根に並びて黯きウルブー
研　一

◆物言へば聞き返へされる吾が裡を詐はり示す声低くして
勝　馬

◆ひとの心ためししメスもてむく蜜柑悔恨の果皮膝にたらして
由　夫

◆ほとほとに心疲れて憩う夜も球根は冬を凍てしまりいむ
時　夫

◆光りふくネオンの巷歩み来つ求むるものを持たねばむなし
幹　夫

◆夕空のにごれる下をになわれてこのひそかなる終焉ひとつ
惇

以上のような、精神の凝集と飛躍を含む作風は、従来の素材主義的写実から脱皮したもので、やがて、第四期の（下）に見られる前衛傾向につながっていくものである。

（下）尖鋭化した凝集と飛躍

第四期(上)に見られる凝集と飛躍を含んだ作風は、(下)に至って一層尖鋭北し、コロニアの精神風土にいよいよ密着したものに育っている。

惟うに、西欧に発した写実主義が、日本に渡って、自然順応の東洋精神に培われ、素材主義的な写実の姿を示したことは充分首肯することができる。四季の変化に富み、風土、習慣また複雑繊巧をきわめる日本で、素材の追究に、素材に托する人間精神の発掘に、短歌が、その特色を発揮したのは当然であろう。

しかし、その短歌も、ブラジルに渡来しては、必ずしも、日本の短歌と同様な育ち方を示すわけではない。四季の変化に乏しく、茫洋たる観景と未熟な社会環境は、全く日本と対蹠的である。従ってこの国に花開く短歌が、同じ写実に根ざしながらも、素材主義的を行き方を揚棄して、より人間主義的な行き方を示して来たのも故あることと言えるのではあるまいか。また、そこにこそ、コロニア短歌の特色を見るべきではないかと思う。

第四期の（下）というのは、一九六三年六月発行第七五号より、一九六八年六月発行第一〇〇号（二六巻）までである。この期間の経過と内容を記して、この稿を終りたい。

経　過

一九六三年三月発行第七四号までで、米沢は辞任し、編集のバトンを清谷に渡した。清谷益次は、第七五号より、一九六五年一二月発行第八五号までを担当している。総務中江、会計弘中は留任であるが、この第七五号から、機構は大きく変わっている。

それは、椰子樹会員制の施行である。

この号から、従来の同人誌友制を廃し、会員制とするも、詠草は選者委員の共選により掲載、掲載欄は、詠草（一）と（二）に分け、別に特選欄を設けた。入門欄を廃し、題詠と誌上競詠は継続することにした。

選者委員としては、前任の川原、井本は留任、新に、武本、行方が加わることになった。又作品の掲載順も、ＡＢＣ順とし、発行毎に順をずらせるという風にした。

同人誌友制廃止については、同人間に相当不満の声もあったが、新時代に沿うため、また椰子樹の心機一新を目指して、行なわれたものである。また、一律会員制、投稿作品の無差別掲載を主張する会員もあったが、それは、作品の質的向上にプラスしないという見解から、採用されなかった。

米沢の後を受けた清谷は、更に一歩を進め、他の短歌型ジャンルからの作品批評、作歌者論などを企画掲載して、誌面の刷新を計り、作歌意欲の上昇に努めた。

また、表紙の意匠を改め、コロニア画壇の長老富岡耕村の版画をもって飾った。

そして、以後第一〇〇号まで、意匠は変わったが、すべて耕村の版画を表紙絵とした。

この年の一一月、安良田、光田、小池らの主唱により、サンパウロ市内、ピニエイロス地区居住作歌人により、「ピニエイロス短歌研究会」が発足した。隔月に集合して、古人今人の作品を座談形式で研究し、何回かを一本にまとめ「ピニエイロス短歌研究会

誌」として発行、一九六八年、第八号を発行した。なお、この会々員中より、水本、高橋、佐藤の椰子樹賞受賞作者及び、第一回岩波賞受賞の木村など、有力作歌者が輩出している。

一九六四年には、弘中の辞任により、三月発行第七八号より、梅崎が会計を担当した外移動はなかった。この年、日本の知名作歌者細江仙子が、自選歌集「異質の季」を携えて来伯し、椰子樹に参加した。

この頃、作歌熱を盛りあげていた北パラナでは、地方大会の再開を企て、七月ロンドリーナで盛大に挙行した。中央からは、酒井、川原、梅崎、米沢、開沼、弘中らが参加した。

一九六五年、選者行方の辞任により、既に帰伯して、再び椰子樹に参加した酒井が、後を受けて、武本、井本、川原と共に選歌を担当した。また、椰子樹代表として徳尾が推されて就任した。創刊以来、岩波が代表者であったが、その死後、瀬崎が長く代表の任にあった。しかし、瀬崎はその居住が、中央より遠隔の地である為、不便多く、徳尾を代表としたのであった。

六三年以来設けられた特選欄は、第八二号より推薦欄に改められた。その他、題詠欄を廃止して、入門欄を復活させ、米沢が担当した。

この年も、パラナ大会が催され、中央から、酒井、井本、米沢、細江らが参加し、激励と親睦の実を挙げて帰聖した。

一九六六年、清谷が辞任し、編集を安良田が担当することになった。題詠欄も復活させ、入門欄と共に初心者の利用を奨励した。作品掲載を先着順に改めた。

清谷と交替した安良田は、綿密な計画のもとに、よく投稿を督促して、一九六六年二月発行第八六号より年間六回発行を励行した。これは創刊以来の念願をはじめて果たしたもので、全会員の拍手を受けた。

一九六七年、経営陣の移動では、梅崎の辞任により、会計を水本が担当することになった。入門欄を廃し、研究欄を設けて、清谷が担当した。

また、椰子樹賞は、一九六七年を以て第一〇回を数えるので、一応打ち切りとし、六八年から新に「コロニア短歌賞」及び「岩波賞」を設定することになった。

そして、一九六八年四月発行第九九号に第一回岩波賞木村正和受賞が発表された。

アサイ短歌会で、アサイ入植三五周年記念及び、合同歌集「パラナ松」出版祝賀短歌会を催した。招かれて、中央より武本、米沢、吉本、陣内、佐藤、水本、高橋が参加した。この一行は、その後、ロンドリーナ経由、プ・プルデンテ市に回り、文学関係者と懇談会を催して、地方と交流を深めた。

一九六八年の経営陣は、前年通りとし、推薦欄を廃して、特選欄を復活させた。

研究欄は利用者少なく中止とした。

なお、一九六七年九月二日の会員会議の席上、徳尾代表は、椰子樹第一〇〇号を以て一応解散を提議した。武本、中江はこれに同調したが、会員間に反対意見強く、再検討の後、存続と決定を見た。

第一〇〇号を以て、安良田の辞任を認め、以後は、佐藤、梅崎、水本、高橋によって、第一〇一号からは運営されることになった。

前年の全伯大会の時、グワイーラ短歌会はサンパウロ短歌会に、短歌交流を申し入れた。そこで、一月、武本、吉本、佐藤、酒井、水本、陣内、高橋、小竹は同地を訪れ、短歌交流と親睦につとめた。

椰子樹、三〇年、第一〇〇号に達したので、米沢を編集委員長とする記念特集別冊号発行を決議し、委員として、安良田、川原、中江、武本、徳尾、梅崎、米沢、吉本、清谷が就任、会計は中江

が担当し、一九六八年七月発行とした。

第四期は、椰子樹が多面的な変化を見せながら、作品の質において、向上と変貌を遂げた期間であったが、経営面は相変わらず余裕に恵まれず、会費は上昇一途を示している。

一九六三年度、会員制の施行によって会費は一律となり、年額二コントとした。

それが、一九六五年五コント、一九六六年一〇コント、一九六七年一五コント（旧クルゼイロ）とうなぎのぼりに値上げされている。これは物価騰貴の結果で、ようやく、物価のやや安定した一九六八年度、前年度と同額としている。

内　容

一九六三年六月発行第七五号より清谷編集となり、一九六六年三月発行第八六号より、実質的に安良田編集となって今日に至っている。第四期（上）では、会員の意見発表が盛んであった。（下）の清谷編集では、作歌者論が活発に行なわれている。また安良田編集では、短歌論が毎号巻頭に掲げられ特色をなしている。

まず、作歌者論として、第七五号「小笠原富枝論（住吉光雄）」「南条由喜夫論（小笠原富枝）、第七六号「小竹清子論（新納潤魚）」「東野暁風論（森重扶美）」、第七七号「陣内しのぶ論（大場時夫）「本庄研一論（弘中千賀子）」、第七八号「米沢幹夫論（陣内しのぶ）」「森重扶美論（梅崎嘉明）」などがある。

特異なものでは、第七六号から第七八号まで「他のジャンルからの短歌批評鑑賞（吉川耕花、井関譲治、鳥井稔夫）」が載せてある。また、会員の短歌観を集めて、第七九号～第八〇号に「新しいということ」がある。立体的な作品論として、第八二号～八五号「作品・批評・作者」というのがある。これも新しい試みである。

第七六号から第七八号まで「わが歌の始めの記（瀬崎涛声、水

本すみ子、晶山充、簀藤勝子、小竹清子）」がある。これの形を変え間口を広めたものに、第八四号～第八五号「私の短歌入門（米沢幹夫）」がある。また更に問答式にしたものに、第九三号から現在も継続されている「短歌問答（徳尾、中江、瀬崎、山室、西田弘中、小笠原）」がある。第七九号の「私の作歌姿勢（細江仙子）」も、こうした部類に入れてよいと思われる。

次に故人追悼では、第七六号「石戸羊我（富岡清治）」「近昇（清谷益次）、第七八号「回想の玉木梅さん（安部栄子、西田季子）」、第九五号「東野暁風、大島進（岩佐一歩、吉本青夢、小竹清子）」、第九八号「葛西妙子（徳尾渓舟、開沼貴代、西田季子）」第九九号「上村登志行（八巻耕士）」がある。

歌集の紹介では、第七五号「梅崎義明著〝四十の生〟（清谷益次、」第八一号「小竹清子著〝波の跡〟に寄す（小笠原富枝）」、第八三号「細江仙子著〝異質の季〟を読んで（武本由夫）」「細江作品について（高ひろゆき）」、第八四号「グアイラ年鑑を読む（米沢幹夫）、」第八五号、第八六号「瀬崎涛声著〝白き州道〟紹介（清谷益次）」「白き州道を読んで（志村良一）」、第八七号「中田武夫歌集（水本すみ子）」、第九一号「アサイ合同歌集〝パラナ松〟（清谷益次）」、第九三号「大場時夫著〝岩露草〟を読んで（陣内しのぶ）」、第八四号「小川博三著〝半球〟酒井繁一）」などがある。

また、新しい企てとして、多数会員を登場させ発言の場を提供しているものに第八六号～第九一号の「詠み得なかったテーマ、詠み損ったテーマ、」第八七号～第九一号「作歌の楽しさ、作歌の苦しさ、」第九二号～第九七号「作歌の動機、作品の動機、」第九二号～第九七号「形式の便利さ、形式の不便さ」次いて、第九八号から「短歌の面白さ、短歌の面白くなさ」「私の白星、私の黒星」などが始められている。「短歌ラボラトリオ（小笠原富枝担当）」も続けられる企画であろう。第九七号「コロニア歌壇回顧（陣内しのぶ）」など、また、特集として、第八七号「宮中歌会始入選者」

がある。これは編集者の苦心企画で、光彩を放っている。
第九四号から、毎号一首短歌のポ語訳が載せてあるのも、注目される試みで、好評である。
研究ものでは、第七六号「椰子樹初期の抒景歌（吉本青夢）」、第七九号～第八三号「コロニア短歌が戦後に拓いたもの（安良田済）」がある。安良田の研究は労作の名に価するものであろう。
短歌論、第七七号「現代短歌に就いて（新納潤魚）」、第七八号「短歌の伝統を巡る問題（酒井繁一）」、第七九号「言葉は両刃の武器です（武本由夫）」、第八〇号～第八一号「うらなり短歌論（新納潤魚）」、第八一号「写実への一つの考察（武本由夫）」、第八一号「私の見たコロニア短歌（細江仙子）」、第八五号「盗作について（武本由夫）」、第八五号「新しい短歌と短歌の場（酒井繁一）」、第八六号「幻想についての考察（佐藤博三）、第八七号「詩性についての考察（浜田良一郎）」、第八八号「フィクションに就いて（細江仙子）」、第八九号「短歌の限界に就いて（酒井繁一）、」第九〇号「椰子樹賞作品のたどった傾向について（武本由夫）、」第九一号「短歌と詩の接点及び分岐点（佐藤博三）」、第九二号「前衛短歌について（酒井繁一）」、第九三号「危機への意識（井本惇）」、第九四号～第九六号「作歌を支えているもの（米沢幹夫、清谷益次、大場時夫）、第九七号「比喩について（酒井繁一）、第九八号「客観性（森谷風男）」、第九九号「批評と鑑賞の基準（清谷益次）」、第一〇〇号「用語論（武本由夫）」などがある。
論争は（上）期よりほ下火であったが、コロニア短歌界の大勢が、ようやく前衛傾向に眼をむけるに至って、懐疑、反撥、または認容、さまざまな姿勢を示すに至ったので、誌上に取りあげられている。
第九一号「大会での発言に補足して（大場時夫）」、第九三号「同じことを（大場時夫）」、これは、第九〇号「椰子樹賞作品のたどった傾向（武本由夫）」の文章に反撥したものである。それに対して、

第九二号〜第九四号「前衛傾向短歌理解への足がかりとして（武本由夫）」で、三回にわたって私見を寄せている。これは、大場発言に対する回答を兼ねた前衛短歌論とも言うべきものである。

この期間に、椰子樹の上層に進んだ人々は次の如くである。（順不同）富岡清治、北谷まがた、石塚やす、有田市治、森田吉久、小野寺郁子、高橋よしみ、三浦久和子、尾崎都貴子、内田笑子、坪田義雄、梶田きよ、木村正和、北原しのぶ、知花清、佐藤博三、水本すみ子、清水そとえ、高橋圭輔、笹波北陽、田上みずほ、加藤操、高須きみ子、久米光春、加藤まりえ、望月喜恵子、森久子、椎野トノエ、杉田月船、高ひろゆき、細江仙子、寺田雪恵、志伊良二世、八幡与三、田中朝子、井上ふじ、安達太良、江尻潤、森谷風男、小林秀子、工藤勘一、岩佐一歩、中川荒記、山岡清子、安達太良などである。このように多数の有力な新人が抬頭し、作品欄に妍を競っている。

次に、第一線に在る人々の作品をぬき出し、この期の作歌傾向のおおよそを見ることにしたい。

◆とりとめなく過ぐるひと日を絞る如塔の尖端に聚（あつ）まる夕陽　富　枝

◆脱出のとめどなきわれを覆いきて夢寝（むひ）に切れざりバナナの並木　しのぶ

◆墓場なき死者の手が白く伸びているカフェザールの樹列が暗し　博　三

◆マンジューバかの透明の胎内にリベイラの水冽き追憶　正　和

◆ナタールの電飾華やぐウインドを連ね童話の育つなき街　千賀子

◆ひっそりと胎みてきたる虚構なれ我が運命線は汗ばみている。　季　子

◆わが裡に轍の音は鳴りながらそこに絶えまなし綿のはなびら
比露思

◆アレルイア咲き盛る季わが裡に復活はなし寺鐘は鳴れど
扶　美

◆腐葉土（ふようど）の柔きを占めて肉太きミニョカは唄う真昼の歌を
新太郎

◆唐突に幹より出でて巨き実のジャッカ無謀に見えつつ熟るる
よしみ

◆陽が炎えて仮死せるヴイーラの遠景に幻聴となりてきらめく無風
勝　馬

◆自らを埋めてゆかむ晩年を想いて眠る夜よ膝まげて
美砂子

◆すげ換えて鍬の柄重し堪え難き不運の如くひとりありたり
風　男

◆それぞれに澱みの如きを淀ませて移民の裔は暗き眼を持つ
三　郎

◆住む人の絶えしが如く窓閉ざし雨季には雨季の孤独が育つ
幹　夫

◆州境の河面の照りのおもおもと失意のごとき水脈（みお）曳く舟は
すみ子

◆朝空に幾つか雲のたむろして庭木円錐の形くずさず
繁　一

◆よみがえり来るものありと思わねど土の上なる昼の安らぎ
惇

◆ばらの香の中に展がる幻想を絶ちてはり戸に震う春雷
貴　代

◆夜の海に一途なるもの閉ざしめて余燼の如きかなしみ消えず
嘉　明

◆内省に傷つき逃るるすべもなし灯ともして書にいたき目さらす
清　子
◆確定をなし得ぬままにある数字円転しはじめ来たる眼裏
時　夫
◆草原に這い来てなずむ朝のもや寂しく乳の闇と思いし
由喜夫
◆しぼみゆく老の命の具体とも動くともなく浮雲ただよう
涛　声
◆祝婚歌漂う如く堂に満ちわが思惟遠く運ばれてゆく
栄　子
◆ほろ苦き蜜柑の皮を煮つめいる反響もなき日々を生きいて
勝　子
◆曇天を断ちて射しくる光あり南無妙法罪障一切消滅
潤　魚
◆言い竭くしたるあとの虚しさ夜の卓にかげ落としつつ散る紅薔薇
益　代
◆眼ひとつ捧げし父の視野にして海と原始林との境はけわし
仙　子
◆花芙蓉一つ開きて凋む夜寂寞ばかり身を寄せてくる
菊　子

掲げれば切りがないので、この辺で止めておく。が、このような、コロニアの精神的風土に培われた作品、人間精神生活の機微に触れて詠んだ生活の歌、前衛傾向であれ、写実傾向であれ、凝集と飛躍をはらむ表現手法に出て、人間探究の努力を、一首々々に結晶させている。

いま、これらの作品を、創刊当時の作品と比較してみる時、また、第二期代表作品と比べてみる時、三〇年という時の経過が、しみじみと胸に来る。

今後、椰子樹が、どのように歌境を展開していくか、それは知

るべくもない。
またどう発展を遂げるか、予測することもできない。言い得るのは、とにも角にも、上述の如く、三〇年を歩み続け、歌境を押し拡げ、押し進めて来たという事実だけである。これみな、コロニア短歌人の協力と作歌実践の結果であって、コロニア短歌界に対する椰子樹が立てた功績と言うことができるであろう。

（終）

追、書き終わってから、戦前戦後の「アララギ」をはじめとし、目本歌壇へのコロニア短歌人の進出について記述することの脱落に気づいた。しかし、これは別項掲載の筈、それを参照して頂きたい。

作品集

（ＡＢＣ順）

安部栄子

亡き母の面影顕ちて寝返れば部屋を隔てて老父が咳ぶく
一途なる愛情の果て結ばれし父母等と聞くも杳きすぎ去り
結ばれて初めて得し子吾を抱きし日は杳くして皺む老父の手
ひと時の暇に老父の背をさするまことにまろくなりし老父の背
風光る野に運ばれてゆく声あげて老父が誕辰を祝ううた声

晶山充

炎の跡を幹に印して立つ樹々に風はあしたの光を運ぶ
雑木々の風に乱るる夜の明に裡より逃れ去り行くは誰
束の間を月かくれれば星ひとつ鋭き眼射しにわが裡照らす
忘るべき記憶もありて冬の陽のかげ淡々と首が掌にたまる
幽かなる韻つたえて眼の前のカイシャデオウロに注ぐ雨あり

荒崎百合香

幾とせを棚に晒しありし竹行李底に小さく古き日記帳あり
手にとれば表紙はがれり古き日のわが記に還りくる忘却の日日
若き日の思い稚かり上陸の敵に対すと竹槍訓練
空襲のつづける前後空白の頁に浮きくる悲惨なる日日
戦場の君恋うるさえ不忠かと悩めるままの熱き日記帳

知　花　　清

人影なき真昼黄色き陽がむせぶやるせなし己が体臭かげき
いくつかの過去の記憶を拾うため夜霧にぬるる汽車のたびゆく
何かしら郷愁めきし匂いあり赤きランプとむらさきの髪
狂乱のサンバ踊りて乳房やさし吾が放埒の酒の香むせぶ
胸うすき小女の言葉明るくて寓話の如し夕凪の原始林（もり）

有　田　市　治

倖に満てるとのみ思いし山深き此処にも移民の哀話が残る
来年はと声をおとして言う友が力こめいる語いんも虚し
手を上げしのみに通り過ぎゆきぬ不作の稲穂をすごきおり友は
不作ゆえ顔をそむけて歩くのかみのらぬ畑を風渡りゆく
ゆき逢いて声かけくれし友ひとり眼を伏せて農の不況を言えり

土　井　はやし

建ち並ぶ鶏舎の群燈にはさまれて吾が守り継ぐ蚕屋の灯小さし
雲行きの速き朝を夫子らの気負い桑刈る鎌音はげし
日本の母に送らむ録音の涙声なるわが声を聞く
死顔は如何にありしや幾十年逢わざりし父の幻影よ顕て
「睦まじく生きよ」と父の声なるか遺品となりし時計の鳴れり

江尻　潤

青春の感傷とのみ云われざる交わりは経ぬ三十余年を
それぞれに家庭を持ちて異なれる生き方はしつつ保ちいる接点
妻も子も踏み込み得ざる交わりとなりつつ互に五十路を越えぬ
残光のうするる空に一つ二つ星見え初むる野を帰りつつ
虫の声満ち溢れつつ高原の草を染めけり青き月光

江藤　政太

新しきボルサをさげて家をでる教師吾が娘の足どりかるく
校庭のすみにたたずみ腹をおさえうめきたえいる生徒は幼なし
還暦の祝のシュラスコに焼きくれし肉やわらかく血はしたたりて
披露宴のシュラスコ漸く盛り上り竹の串もて剣舞を舞うも
遠くにて生れし孫を気づかいつつ妻は夜更けの旅に発ちたり

遠藤　浩

ビルの窓開かれておりて向うにも秋の夕陽は強く射しいる
里の家小鳥の声にめざむればうす霧の中炊煙上る
通り雨すぎれば草体緑濃く葉先の水玉光りてうごかず
ゆき来する二羽の雀は交尾期かテレビアンテナかすかにゆらぐ
はなれ屋に婆らが析りて打つ太鼓夜は更けにつつ生気あふるる

藤　田　朝日子

旱魃に牛馬の牧草も絶えたれば椰子を倒してその葉を喰わす
霧晴れしパラナパネマに舟浮かべ友は生活の今日も砂採る
新来の青年移民ら意欲あり荒蕪地を拓き陸稲を植う
角笛は青空遠く聞え来て麻州平原牛群を追い行く
原形の無きまで地表を蝕める人類今日も市に蠢めく

藤　田　美砂子

夏の陽の厨に射さずなりたりと思う俄に季はあらたまる
南風の冷えが厨に吹きよする季節となりつゆるるガスの火
レイテ配給車戦いの如過ぎゆくを見送りて今朝の心凪ぎゆく
馴染み長きを思いつつ来し伯光団に青年層の観客少なし
世事に疎きわが傍を駆け抜けて行く子等の衣は多く原色

吹　本　菊　子

何恃む心となけれ捨ててある焦点合わぬネガ集めいき
飛んで来し孫らの声に縛らるる過去となりたる語意すべらせて
誰に乞わむ許しなるべきわが裡に科せし掟をつまずかせたる
保身拙なきわれかも長き年月をかく埋もれて涙脆きを
妄想を暮色に埋めて帰り来しわが家明るく落ちつけざるも

春名景水

父の訃報抱きて夜の舗装路をゆけば尾燈のながなが続く
父の足洗いやりつつ昔日の物語りせしも昨日のごとく
九十年おとろえ見せぬ父の足西方の旅の靴をはかする
今生の父母の縁しを己が手に断つ思いなり柩をとざす
九十年父の生涯に幕とざすごとく我が手に棺をとざせる

樋口辰男

はらからと四十年目の再会もとっさに見定めつかぬ空港
再会が離別に通うと弟妹がしきりに奨む烏賊の刺身を
最果ての嶽舎の庭の囚人を供えつけなる望遠鏡で見る
手稲嶺に中継塔の立つ見つつ四十年前を愛しむあわれ
脳軟化症を我が病みてよりとっさには物も云えず短歌もならず

弘中千賀子

肘つきて心軽げに飲む夫よ煙草の煙のたゆとう卓に
心鎧わずたのしく酔いし夫なれば腕とりて夜更の街帰らむよ
弾みたる声送話器に響かすにいたく間遠し夫のいらえは
いたわり合い共に老いむと語り合う愛情の激しき心うすれて
己れ一人の哀歓にのみかかずらい慎ましく吾の老いてゆくべし

穂島　千代

春の日を浴びて遊べる生徒等に始業の笛を吹かねばならぬ
唐黍の畑が背くゆれており掌を振りてゆく児等を沈めて
裡深く保てど育つことのなく風化されゆく吾が現身が
劫初より定まる賽をいねがてき夜は占う壷ふかく伏せて
吾が乳房寒さに耐えで疼くとき胸に抱きしむ子が欲しかりき

本庄　研一

新しき親子の倫理を肯いついつか受身の位置にいるわれ
冬の空映して鈍き水の上孤りにて足るや黒き白鳥
汗ばみて躯寄せ合う夜のバスに澱む国籍知れぬ体臭
造形のいとなみつづけいる蘭の固き蕾の晦渋とわれと
しめりもつ落葉にうもれ松の実の寡黙のほかなき吾が冬ながし

星野　忘れな草

時計の刻うつ余韻まどやかに待合う広場に鳩の群飛ぶ
民俗の嗜好かなしと行く街の夕暗に漂う味噌汁の香りが
湿潤に降る雨かと軒に佇ち電光ニュースの流れ眼で追う
迷夢より覚めたるごと豁然とそこに冷たき海の輝き
遠離感の寂しさにたえ聞く蝉の声は野末に吸いこまれゆく

井川　季子

白椿今日咲き初めて近づきし亡夫の忌日に心悲しむ
六つ年を通いなれたる墓原の秋の朝の寂と明るし
見るまでの生命ありやと亡夫植えしジャボチカバの実小鳥啄む
逢うこともなきこの世かも黙々と夜具を繕ろえば亡夫の恋しも
十三夜の月ひとりみてネヤに入るねむらんとして悲しみのわく

井原　繁

迎え舟待たず帰りは山越えと決めて不漁の釣糸を巻く
密林に幽幻の気は漂いて霊媒の巫女にゆらぐ捧灯
祭壇に贄の供物は祀られて土器の中なる蠢けるもの
跪き魔神に祈るニグラ女の憑きし妖気に足も戦く
ウバンダは白昼の夢幻か邪宗の杜に燦と陽は輝る

飯田　静子

あるかなき風に迷わず逆らわず水草右に左に動く
細やかな都会の人の呟きを微塵に砕き雷鳴り響く
天と地の極まる一線断ち割きて目くらむ閃光春雷ひびく
颯々と青葉に満つる風ありてテラスに夫とコーヒーを喫む
風吹けば風にそよぎつ雨降れば雨に濡れつつ咲く百日紅

井　本　惇

鳩の群犬は地上に腹ばいて痩せたる馬を草につなぎぬ
朝の陽の照らしはじむる土の上ころがりおりき箱のたぐいは
みちびかれ下る畑に朝の陽の差し満つる頃かなべてさやけく
それぞれに出で来て耘う朝の土なよなよとせる苗を下して
土ありて地力の足らぬ嘆かいに冬のマモンの黄なるおとろえ

井　上　ふ　じ

掌にうけし重みをしかと確かめる葡萄の房は淡きむらさき
葡萄棚の黝き葉蔭にかくれつつさみどりの色は充ちていく
こだわれる思いに仰ぐ昏れ空に大鳳凰樹の花さやかなり
こもりいて孤りの心に耐えている裡なる傷の癒ゆる日は何時
亡き母の憶いに浸りて皮剥きし柿に刃型も似たると思う

石　塚　や　す

希みいしことの叶えて晴々と仰ぐ夏空に朝月しろし
今朝も悴に搾りしジュースが掌に匂う悴よ健やかに日を送るべし
反抗期の背を黒髪にて覆いたる娘が使かうミキサーの音逞ましき
はかり得ぬ未来にわれは夢もちて立秋の窓辺にミシン踏みつぐ
紅の雲線なして昏るる刻しらみに聞きぬ蜩の声

岩佐一歩

わが母の訃をば知らせる一片の電信紙もどかし地球の裏にて
四国阿波潮暖けき地に生まれ北海に保ちし九十一才の天寿は
移民妻にで北海道開拓に捧げたるたらちねの母尊くもあるかな
十才にて袂に手毯ひそませて北海に渡りし母を憶うよ
渡伯のわれに母が賜びし贐の百円は大方銀貨にてありし

陣内しのぶ

泥よりも低き眠りに抗うと野の駅々のコーヒー苦し
歪なる貌を重ねて行く旅の夢に手足も顔も偏平
関りの無きごと甦る限られしわれと亡人との遠き追憶
草原を吹き流れゆく風媒花一期の劇の終幕に似て
帰路のバス追い来る右の窓寄りに半月赤き色に脹らみ

開沼貴代

荒らき樹膚なでつつ甦える追憶よにれの落葉のしきりな苑に
ビルの間にはさまれて低く旧き家われを佇たしむ記憶ゆすりて
レーダー基地と変りし山はわが思慕を撥ね返し光るゼラルミン塔
寒の日も暖房の部屋に青々と絹糸草そだてて汝は新妻
氷海の神秘も識るか穀赤き蟹の身むしれば甘き匂いす

加　藤　ふ　じ

口笛を吹きて授業中に叱られしとずばりと告げる孫は朗らか
アルフアッセさわれば破れん柔らかさ心して洗う水道の下に
さらさらと流るる小川のほとりにて友仙貼りし板掲げある京都
染めぬ髪鏡に映りて哀れなり枯野の原の薄にも似て
知人より熟柿貰いてよく洗えと云えば消毒薬をいぶかりて聞く

加　藤　まりえ

教室のカーテン白く洗われいて思い新たに授業はじむる
ほらをふく友の入れ歯はゆるみいて金環の光目だつ夜の卓
全身を火傷せし子を見舞えれば酸素吸入悲鳴の如く
先生ありがとうと言う子の唇は火傷に爛れしまることもなく
み仏の喜ぶ声の如くにて供えし造花は風に音たつ

加　藤　操

白妙の如き雲ある夕にして結ばんとする商談一つあり
釣る魚の居らねば河に次々と消えては顕てり悔恨の渦
人類の敵としナチスの裁かるる映画見ていて憎しみ湧かず
炎天に馬車を馳せ来し女にて一家を支える眉根のフワイト
機上より見下す夜の都会にて一つの色に灯り広がる

川　原　比露思

違和もなく歌に寄りきし過ぎゆきも偶然に似て夏潮の照り
海鳴りの音ききおれば裡ふかくあかるみきつつかなしみが鳴る
圧倒しくるものひそかにうべなえば海藻はかわきて秋の音たつ
代償のなき過ぎゆきとおもわねど詰りいるあさの雲茜して
脈絡なきおもいめぐらしゆく道の雑草に昼の風韻くなり

北　原　しのぶ

買物の籠さげてゆく足許に吹き寄せられて小さき花びら
豊かなる語彙などあらねば逢わん日を菫摘みつつ呟きとなる
浄化されゆくにもあらねどたまゆらの翳り流して赤き水車は
饒舌も清しさ保つ範囲にて皇子ご訪伯の話はずめる
木洩れ陽に羊歯の葉群れは孤の影を重ねて濃ゆし想深めば

北　谷　まがた

火焔樹の赫き焔のゆらぐ中燕しきりと白ひるがえす
便りなき子にこだわりて仰ぐ空火焔樹焔となりて競える
火焔樹の赫にじむがによぎりゆく真昼の雲の白との調和
火焔樹の燃えて舗道に散りたるをふめばほのかに赫にじむなり
つづまりのなき願いとも火焔樹の咲き盛る朝雲の荒れ立つ

清　谷　勝　馬

残り居しウルブもついに飛び行きてその後の腐熟に近き落暉
双の手の痺れに醒めてヒリヒリと残れる昼の夢味気なし
切り取りて一つの思慕に関われば揚げし額の如く鮮明
夕焼の中かく吾に温き血を継がせし祖先の遠き屈折
烏さえ飛ばすことなく腹割きし伝説として家譜にある人

清　谷　益　次

夜もすがら荒き風吹き外に掛けし馬の首輪の鈴鳴りつづく
寂しき日今日も明けぬと思えども朝はややに心いきおう
術あらぬ想いを多くうつつなく布とんの蚤をわが探しおり
智は脳の皺となるというおとめ思う感情は心臓の襞となるべし
妻となり朝の明るき窓近く髪くしけずるあわれおみなご

光　南　極

みずみずと花芽吹きたるゴヤバ樹に黄なる黴病はや着き初めり
消毒薬筆に湿して丹念に庭のゴヤバを護らんとする
除草剤散布し居りて流れ来る朝の空気強く臭える
ベクライトの臭い路面に染みつきて石のあわいの草は死にたり
ベトナムに果つる命と事故死せる若者の命いずれや惜しき

小竹清子

穏かな河の流れの極みにて滝となる水ここに轟く
岩壁は俄かに狭まり犇きて落ち入る河の飛沫はたかし
激りゆく河の響きに交りて佇つ身は恐るその量感を
浸蝕の岩の窪みに温む水いくばくの砂石底に沈めて
直線の道路のはたて雨雲の乱れて低く立つ虻淡し

上妻博彦

幽なる叫びをもちで野にたでる白骨なりの枝の整い
吹きあらぶ声静まりてしばらくを疲れてたてる椰子の群落
人いきれ吐きつつ走るバスの下河の流るるひと時涼し
警鐘を打ちつつ過ぎるうす雲の上なる赤きおちつきの雲
底いより噴上ぐるものことごとに抑えて満つる湖の静寂

久米光春

鉢の花かばいつつゆく妻の頬和みて白き午后の木洩れ陽
飾るほどの過去なき我が培いし山蘭ひそかに花をつけたり
アバカテの果肉つぶしている夜のテレビ狂いし如き銃音
無意識のうちの世すぎに垢よごれしたる周囲と妻を見わたす
悔一つしこりとなりで転々の夜半に氷庫の解氷音きく

松　隈　咲　代

サビア鳴く木蔭に涼を求め来て水車の音も聞えほぐるる
ポケットのある服欲しと言う子等の望みかなえてつける二つも
思うまま髪を束ねし朝にしてマモンの花の匂い来る窓
青空に羽ばたきてゆく日もあらむ籠に飼われて遊ぶ小鳥も
餌を欲る小鳥は羽をふるわして手を出す吾れにさえずり止まず

持　永　勧　治

今宵また吾を悩ます鐘ひびく尼僧には惜しき佳人の突く鐘
鈴蛇の微動もせざる構えには近寄り難き放射能あり
貴婦人の細き足型失せたるも革命支那の歴史の一駒
高級の布を撰びし旅行着は一度も着ざるに襟巾広し
黒人の打楽器の混乱続きおりジャズの起源を目つむりて聞く

森　重　扶　美

教室の窓より見えて夏草の茂る一劃にわが眼は憩う
夏草の径を駆け来し少年ら教室に野の匂い充たして
水溜りいくつか跳びて少年に従えばふつふつ還る若さか
白墨に汚れし指を洗いつつ不意にこみ上ぐ思慕寂しきに
つば広き夏の帽子を購いて野外写生の日を子らと待つ

森　重　羊　鈴

静かなる田舎の駅の構内にかしましく鳴く紙箱の雛
男の子あまた育てし厳しさも孫抱く妻に今は見られず
霧雨に濡れて小葱を植え急ぐ気づかい呼べる声を聞きつつ
弁護士となりし自覚の落付きを見せて客らと話する吾子
人間の汚辱集めし濁水に油紋光りて街川速し

三　浦　久和子

雨繁く伸びし徒長枝切り払う清々と夕の風吹きとおる
抵くたれし雨雲徐々に移ろえば肌に重たき風渡り来る
泥漬きし後もあらわに干あがりて茜色のながきたそがれ
季節感とまどうばかり夏寒くびわの返り花あまた咲きたり
自が家にまさる所なし旅衣ぬぎてくつろげばラン匂い来る

森　久　子

誘われし亡夫の声の返り来て冴ゆる窓辺の月に悔ゆるる
駐車場さがし廻りて過剰なるものへの不満をぶちまけている
灯を慕いガラス戸を打つ蛾に似たる満たさぬ想いに焦だつ我か
語り合いし老後の計画も今はむなしく胸におさめて温めて居ん
淡き灯のもと夢に笑える子の顔を覗きそこより踏み入れぬもの

森　田　吉　久

水量の減りたる滝の落口に吸わるる如く心移れり
断ちがたき思いに運ぶ吾が歩みうとまれいつつなじみゆきたり
燃え上る火の手に染まる雲一つかえらぬものの象に動けり
遠く来し疲れほのぼの滲じみでて水銀灯の下に歩を止む
夜の闇に吸われてゆかむ思いにて舟底伝う波の音きく

森　谷　風　男

熟したる柿の薄皮はがしゆくこの細心をうとまんとしつ
音たてて燃えつつなおも佗びしくて夜の焚火のまどい抜け来し
芥焼く煙は谷にしないつつ夕づく霧になずみゆきたり
燃えのこる榾よりたちて焔ともけむともうすく闇にゆらめく
夜の更けの榾をわが焚く白煙追憶の糸闇につなぎて

中　江　克　巳

夜の霧路木しづめて冷めたかり慕情に遠き灯りと思う
雲々の裂け目鮮烈逝く者を逝せしめて立つ墓原白し
冬の刺光り鈍かり朝より風整わぬいらだちに居る
喪いしものかえるなし雲間洩る陽に当るとて座を移したり
枇杷の実をむきむき語り暁に至れば逃がれる如く寝に就く

中井益代

一筋の光の箭ともビル群のあわいより射す陽光こおしむ
午後の陽が瞬時射せば生けるがに微塵浮遊すその光の中
破璃戸透く一条の陽を躯にとむる生きとし生けるものの哀れか
ひもすがら陽を浴むこともなく過ぎて心寒々と凍てつくに似る
マイクより突如流れ出ずるイノナショナールわが子の声もまじりて居らむ

中川原正子

幾度か増築したる工房のただ広くなりてうちほの暗き
つっかい捧を一段高く立ていても冬陽は干物に一向照らず
蘭小屋と夫の工房にせばめられ陽あたりとぼし家の周辺
どのような顔して吾子は荷を解くやこの大きなる包みが着けば
賭けることもなく一生を経て来れば利潤少なきことなど云わず

中川荒記

中空に割れし花火が落ちてゆく闇の高きに星はきらめき
遁れ来て見られたくなき娘のみだれ双手を胸に背を向けて佇つ
言ふ事は暫し控へて容れ難き娘の願ひ云わせ聞き居り
さり気なく杳き記憶を手繰りつつ裡には触れぬ二人の会話
朝霧の中を発ちゆく牛追ひの角笛渡る州境の町

南　桑　由喜夫

対岸のかすみかかれる山塊に日ざして襞の黒あざやけし
永住と決めて拓きし峡谷はあはれ湖底となりて波立つ
潅木の一部が湖に群れ浸り寂しく樹皮が反り返りをり
心足り冬の光を負ひてゆく稀の夜の雨に砂みち緊る
みち足れるものの音らし菩提樹の葉の露雫土に落ちゐる

西　村　智恵子

今宵宿ると通知せし故老母は床延べ待ち居り夜更けて来れば
折々に訪うを待ち居る老母の納い居し茶は黴の匂いす
富みし過去持たぬ老母の唯一のおごりと言わん寺院通いは
ねんごろに言葉交せし記憶なく母はひ孫を吾は孫を持つ
後背を見せて寺院に入りて行く母は孤独に馴れし姿に

西　田　季　子

生きてゆく証し求めて一本の椰子樹に寂しき心寄りゆく
生存の寂しさ云わず椰子樹誌に寄りゆく時に心展らくる
疲れつつ見放くる果てに椰子樹ありてその一時に心休まる
乙女等の髪の如くに山頂の椰子の直葉は吹きなびき居り
百号を数うる椰子樹よ若き日の還らぬ記憶ここに埋もる

大　場　時　夫

入学を歓び重ぬる盃を危ぶまれいて老いたり吾も
汝らの卒業には又祝杯をあげんと今から云いて笑わる
子の入学歓び盃重ねおり成人祝の如く思えて
子供らの友人二人居ることも心楽しく祝杯をあぐ
入営の日の丸刈と入学の子の丸刈と重なりて酔う

小笠原　富　枝

生活の傾斜不意なりまどろめる心を鈍く塵芥車過ぎ
貝殻の積まれしところ過ぎむとし目まいに似つつ杳き墳墓の
闇にして蒼く深く鏡あり離らむ今の思いに綵めば
くらがりに古陶磨きいるは誰円光となりて吾の眠りを
風吹けば廃線のレールの錆こぼれ鈍重となれる吾の内側

小　川　貴美枝

母の気も知らずに愚痴と開き流しきたりき沁々聞くべかりしを
鳥の声もまれに谷間よりあがり岩伝いゆくせせらぎの音
秋ダリヤ太き副木に伸び伸びて野分あとも咲きつづくなり
テレイロに干されてありし莢大豆つぶやく如く次ぎ次ぎ弾く
冷えびえと靴をぬらしつつ行く径に野飼鶏はヒヨコ呼びいつ

大　西　阿　哲

季ながくスイナンは朱を保ちいて吾が哀歓の杳き営み
昂りし心しずもる朝窓に嵐耐えきし薔薇に見いりつ
伐り残す枝に真夏の陽をうけて孫ら戯むる位置をなさしむ
逞ましきスイナンの葉に病葉を僅かに見せて秋深みゆく
わが汽車が離れては添うチエテ川車窓に眺め妻と旅ゆく

小野寺　郁　子

敏捷に薄開きの窓より噴き入りて秋の証をなぞり行く風
バルサ今河の真中の風切ればマフラーは蝶の如くあふらる
露出されし河底の奇岩観てくれば優し埋まる予定の小滝
一直線子が駈け行きし足跡より炎が立てり浜の白砂
電孕む雲の乱れの迅き下ゆるくくねりて汽車現われり

大　野　みつ江

バルサにて渡りしパネマの草深き岸辺も今は夜の灯連なる
雑草の素枯るるを見つ照る秋の陽にさらされて急坂のぼる
雨降りを裏の庇にはいり来てつれを呼ぶがに鳴きいる鳥は
教材にせんとて孫が掬い来しメダカは藻草の蔭にゆれいし
墓地中の鶏頭花に翅とめて祈れる如く蝶とまりおり

尾　崎　都貴子

言葉など持たぬ蟻たち黙々と米粒ほどの食餌を運ぶ
暮れ時のあわただしさの中生きる為にかくは働く蟻も私も
哀しみなど知らぬ蟻なり吹き降りの中列なしてミカン皮運ぶ
雨の夜は蟻は巣ごもり眠りたり吾も夜具敷き明日を恃まむ
忘れたき一事ありて幾千の鶏卵みがく対話なしつつ

酒　井　繁　一

浴槽に身が温たまり贅沢にあらぬ生活を言うこともなし
「犯罪の都」に事務を執りながら心もとなくなる時があり
ベトナムの戦禍は想え沖縄の復帰至難が吾には重し
ところどころに布石の如く際立てる吾が過ぎ去りの中の転換期
生きの身の限りのことかおぞましき想いは吾に幾度もわく

笹　波　北　陽

帰途急ぐ街角へ出て唐突に凍る夜風に頬をうたるる
季節感なく明暮すわれの眼に柔に映る路樹の芽吹きも
努力なき日を過しいて諸もろの想いは妄想となりて蠢めく
巡け来る幸の日あらむ霜枯の庭にも青く葱は芽吹けり
みずみずと草花蔭に育てつつ岩は草原の風に乾けり

佐　藤　い　ち

冥く我心とらえてはなさざり流星短く消えし中天
流星の消えし処を起点としさびしさ冥くひろごりて行く
振りむけば思い直線にかえり行く門に小さく佇つ母のそば
灰色の空の一カクより崩れ襲い来るもの打ち払いたし
夢に空間徨う危うさとびこえし岩に重心うしなえるとき

佐　藤　博　三

王冠樹花季すぎなむと石椅子にこの夜冷えつつ花ふらしいん
花びらをとおしていたる光りかと王冠樹花の下をよぎりぬ
ゆうべ喚ぶ樹々にまぎれて散る声がわが影に落つ西陽を透きて
悔一つもちて帰ればドア越しに熟れしジャッカが匂いていたり
バラの棘はりめぐらせる垣根より透かしいる眼が近づきて来ず

佐　藤　一　英

拙き吾が歌をも時に載せ乍ら第百号を迎えしか椰子樹
第百号迎えし椰子樹健やかに猶伸びゆけよすべてに耐えて
黒き雲重々と夕べ押し来つつ椰子吹く風の不気味なる音
椰子の蔭親子三人に小くて吾はもとより日当りにざす
椰子の蔭追いては移る父母と動かぬ吾に増しゆく隔り

瀬崎涛声

通ひ路の我家の上ゆく夜の飛機は今夜はゆかず夜は傾くに
年を趁ひて歪みゆく世か車盗出てゆきずり女の手提をうばふ
通学バスの椅子は落書さはなれど流石に学生性器図はなし
おのれ欲り籠る孤独の我にして人恋ふ時のありて出でゆく
明日あるは判らぬ老の命なり机上のものはととのへて寝む

志伊良　二　世

貧農の宿命を負いてゆく吾が稲は旱に白く焼けたり
カステロに相つぐゴラール政権に何を信じむ百姓吾れは
政治にうときながらも農民のきびし訴え地よりひびく
明星もいまだ残れる牛舎に乳しぼるなり人影もなく
自動車事故に切れし電線光りいて夕暮れの空碧くしずもれり

清水節子

未完なるビルより槌の音のしてそこだけのどかな都心の真昼
いたわりの優しき言葉のこり居て冷たき受話器しばしはなさず
ひとすじなる汝をかなしむ夕べにて暮れ行く庭に白き花浮く
ゆたかなる心になりて帰り来るアニャンゲーラ国道車も絶えて
ななめ降る雨をよけつつ軒に立つ理解苦しむ君を思いつ

清　水　そとえ

梢高く下枝繁りてあすなろの幹ふてぶてと花粉をちらす
山に木を植うる習いも忘れられ赫土崩して人等群れ棲む
幾世代耐え来し老樹仰ぎつつ過ぎゆく吾に還る日のなき
珈琲の黒実乾きて地を打てばよび還しいる杳き鍬音
街燈のとどかぬ辻の石に臥し老いし移民の呟やきいたり

園　田　敏　子

ぬいても又はえくる白髪をおしみつつ鬢に一本白く光れば
街路より吹き込むほこりにあらずして朝毎はき寄す馬糞の粉を
道の辺に小さく咲きて人の目にあわれをさそうはぐれひまわり
母吾れを励ます娘の前おろかにも耐えいし涙のもろくも流るる
寝すごしてあわてて開ける店の扉か音はげしくて人のふり向く

田　上　みづほ

迫まられし一つの仕事なし終えて眼つむれば夜半の鶏なく
眼洗うごときイッペの黄花に吾ためらわず染まらんとする
衰えのとみにきざせし肉体に試練の如く夏陽は強し
人間の悩みはつくることなくて合わす掌らの中の空間
妻子皆転宗せしが吾れ孤り旧教守りて弥陀を念ずる

高　橋　よしみ

陽炎える野にまぎれ去る風の音か微けし乾く白穂の揺れの
底に在る何とも分かず篭目より零れんとして果実の匂い
行き過ぎてより振りかえる樹梢より瞬時蒼空見えしと思え
錯覚は瞬間のこと流星の光芒曳きしそのプロセスも
距たりし尾燈となりて野の闇にながるるは吾が風速ばかり

篁　郁　子

マニキュアの色濃き指がしなやかに吾がブローチの位置定め居り
憔悴は蔽うべくなし杯重ねからくも酔に紛らす涙
止めどなき思念かけ抜けかけ戻る酔とはらちもなきものと知る
子の無きを嘆き居し友貰い子の心決めしより明るく若し
それぞれの業にはげみて顔揃うことなき卓を異とも思わず

武　本　由　夫

おぼろ夜の記憶の如く庭に咲くアガパンサスの紫くらし
血縁のあわれを言いてクワレズマ花散る道に別れ来にけり
孔雀椰子の垂れ葉そよぐとあらぬ夜祈りの鐘の余韻は長し
癒ゆるとは思わぬ宵々妻の背に灸すえて独りの情やりとす
未熟なる思惟もてあまし佇つ畑にエスピナフレの青きひろがり

田中朝子

過去の陽を追う鳥の影地に淡く空漠に鳴く裏あたらしき日々
孤心冷ゆる過程極まる夕映えを返えして光る小波まぶし
放心の瞳に眩し農沃に地平につづく青触れ難し
指端より生れゆく編目重りていくらか淡き痕跡の色
肉色のバラためらわず薙ぎし日に決意されたる連繋一つ

坪田義雄

つづまりは自然死に至る過程とも思うに湧ける反撥ひとつ
湍々と息吹く吾あり暁の闇に灯してもの思いつつ
うからからの寝息満ちいる明け方をもろもろの響街の方より
世の常の言葉に詠める秋人の歌ひしひしと吾を曝ける
枯落葉掌に揉む音の妙なればゆっくりと揉む祈り聴くかに

土屋風春

くまどりて雲かげ走る傾斜地にひかりの中を牛群れてあゆむ
瀬だちつつ光つらなる河の面を白蛇の躍る象に魅入れり
重々と花揺れやまぬアレルイア明るく夕の彩をたもちぬ
クワレズマの花に染りし山肌を乳色の霧流れ夕づく
陰湿を好める性か孔雀羊歯茂れる谷間の青き光を

徳尾渓舟

会計士を我が一生の職と決めそれより歌とも疎くなりけり
顧みて思えばわびし歌も止め己れにきびしく職はげみ来ぬ
才も無く歌止め久しき我に尚いたわり呉るる歌友ありて和む
自信無く日毎おどおど在り経つつ亡父に似たる顔となり老う
下手糞な歌しか詠めず止みにしと椰子樹百号撫でつつ思う

富岡清治

移民史は六十年をかざるなり椰子樹百号に到るこの歳
歌碑建ちて菊治の死より幾年ぞ椰子樹は今年百号に到る
椰子樹百号先ずこそ想え今は亡き時の総領事坂根嶬峨の名
その頃の美青年徳尾渓舟が髪薄くなりて椰子樹は百号
花と競う女流歌人の出現よ椰子樹百号は花々しくも

内田笑子

その朱の染まるが如く露ふくむつまぐれ冷たく足に散りくる
秋冷えの風にこもりぬオリーブ葉の金属性の音と光と
忍びよる秋の触れあう音かともビニールカーテン擦れて鳴る音
背を押すが如くに虫の音ひろがり来白き道のつづける牧原
山向うは平和ある如なだらなる山脈線ひく灯の海の果

植　村　か　ず

丘に並ぶ小さき家々の白壁を染める夕映えが描く平安
葉がくれに育ちゆくマンガの稚実の青わが心をも透明にする
遠き日の記憶昏々と甦りきて風塵に晒す枯木と吾が貌
朝光に葉脈透きてほぐれゆくバナナの巻葉の青目にしみる
鎮まらぬ己が心に似る音とスイナンの落葉踏みてゆく道

上　田　エイ子

会葬のためにいでし舅の車に雨は一層はげしくふりぬ
会葬のためにいでし舅等の途上五〇〇キロに無事祈るなり
わが写りし翁気丈にほほえみて彼の瞬間は永久に消えざり
皇太子迎えて死すは覚悟とぞ云いたる翁今日逝きませり
両腕をささえられても三日間かん迎の場に翁出でたり

梅　崎　嘉　明

模範なる一生過ぎしと言わるるより奔放に生き憎まれてみたし
四十を過ぎて寂しむ心理にて死を迷う日安きと思う日
忽然と逝くかも知れぬ予感ありて整理すべき何彼を思えり暫し
吾死して吾を訪いくれむ誰彼を想えど無二の友とてもなく
訪いくれむ友絶えし後も日輪は日毎照るらむ吾が墓土に

牛　草　茂

珈琲苗植えんと穴掘る真夏陽に黒き肌より汗光り落つ
幾千と握られし穴の列遠く鍬ふりかぶる姿小さし
ホースロ握り引きずり珈琲苗の一本一本に水かけ進む
流れ来し土にうずもる珈琲苗掘り起しては空気すわしむ
乾魃にも豪雨にもめげず守り来し珈琲若木に朝風わたる

八　幡　与　三

小さきは小さきなりに実を結びモロコシ畑に秋の風たつ
半群は背に冬陽を返しつつ何れせわしく牧に草喰む
にぶりたる色に沈みて建ち並ぶビルディング街に細き雨降る
リモン茶の湯気ほのぼのと顔にたつ降りつぐ雨に夜は冷えいて
何時の日か展ける命はぐくみて胡麻の花散る萎むともなく

八　巻　耕　土

過ぎ去りというには冥き翳にして停まりし園の時計仰ぎぬ
杳き日に喪いしもの探すごと引きゆく潮に鳴らす草笛
原色にはなやぐ浜は吾が閉ざす裡なる窓と遠き隔り
過ぎし日の疾く惨禍は忘られて避暑地の浜に日傘はをやぐ
悔恨の想い顕ちくるたまゆらも墓穴に歌友の柩降りゆく

八　巻　たけ子

パイネーラ今年は花の少なしと仰げば白き昼の三日月
道の辺につる広ごりし昼顔の一と日の花に残る陽光
アレルイヤ雨に吹雪ける舗道にて吾子待つ傘のめぐり明るし
季はずれの藤の花房みぢかくて充る物なきままの営み
突然の秋の暑さに口あけし毬栗青き実を陽に躍る

山　根　久　子

此の土地は邦人が住むカリビーザに青々として胡麻の実のりて
厨辺にジャイメと落書し文字一つ吾子行きし夕視野に入り来る
明日は行く吾子を想いて裏庭に立てばほのかに匂うカトレヤ
道の辺の土手に咲きいし紫の花車窓より見つつ過ぎ行く
明日は行く子に食まさんと豚肉を炊きつつ吾の心充ちくる

山　岡　清　子

忍従に徹しし母を憶うとき吾が衷しみは薄らぎてゆく
身にそわぬこと希いては虚しさのきわまる思い日々は過ぎゆく
常きざす孤独のなげき傷つきし犬ひっそりと傷をなめいる
吾が歴史きざみて深く皺よする双掌みつめる陽射しの下で
輝ける樹立の中に鳴く蝉のとぎれとぎれに夏は過ぎゆく

山　崎　益　一

青草のしとねに憩い枕菊の絮に触るれば淡く匂えり
待ちわびしカトレアの花咲きたれば病み伏す妻の部屋に飾れり
枕菊の絮が野面より飛ぶ季なり妻が摘みきて庭にひろぐる
赤き実の終りし柿のもみじ葉をゆりつつ南風吹きあらたまる
神の名を偽り呼べる世と嘆く無辜が犯さるるベトナム戦線

米　沢　幹　夫

天を指す一本の椰子のたたずみに埃り吹きたてて風の陰翳
風紋が図案の如くのこる道を歩めばミサの鐘遠く打つ
歯にしみる冷凍アバカテ掬う匙ひとりと思えぬ明るき部屋に
隧道を出てきし疲れ表情をもたざる裸婦像の佇つに遇いたり
はずみ鳴く紅鳥の声透りくる今のうつつを風よ侵すな

吉　本　青　夢

桃の木の桃の小花に月てりし時に愛しき思いをさそう
紫のやもめかずらはいつか散りとめどなかりし思慕も消えつつ
相会わん時の恃みも薄れつつわれに立ちゆく閑かなる日々
桃の実のふくらみ早くさす青み吾が嘆かいも去りて遥けし
会いて酔い嘆きしことを蔑みておりし夜半すぎ蚊遺り火におう

吉　田　孝太郎

此の丘に住みしインヂオ偲いつつ暗き油灯に石斧を見つ
石斧の肌なめらかに冷えびえと窓打つ雨に点し灯ゆらぐ
幾度か衄られたらん石斧の深き刃こぼれを見つつ思えり
火に寄りて石斧研げるインヂオを太古の闇に置きて偲いぬ
高原の風荒々しユーカリの防風林に夜を吹き止まず

吉　武　かのえ

昂ぶりで子を叱りたる虚しさの募るあしたを散る小米花
風に舞う木の葉の行方を追う園に人ら忙しく黄昏れてゆく
病院を出づればそぼ降る雨にして吾を無視せる街の営み
免税の報にいく度拘りて出荷の品のノッタ切りおり
トランプに興じる声も賑やかにのせて夜汽車はひた走りゆく

随想集

椰子樹記念号に寄せて

安部　栄子

椰子樹五十号記念特集号に小さな感想文を書いたのは、遂この間のことの様にも、亦ずっとずっと昔の様にも思えるのは何うした事であろうか？

五十号まで辿りつくには戦時中の空白時代もあった為めに、二十年もの永い歳月を要した「椰子樹」も、五十号より今度の百号までには僅々十年の歩みでしかなかった事は、編集を預る方を中心とした中央歌人諸氏の一通りでない御苦労と、それを支える地方歌友群との協力の賜である事を思いお互に喜びに堪えないものである。

五十号より僅々十年間の歩みとは言い椰子樹誌上に現われた歌友諸氏の名は大分変って居て、その中には病のために幽明境を異にした歌友も大分あるにしろ、実力のある惜しい歌友たちが中絶のまま今日に至って居る事はほんとうに残念この上ない。

創刊当時より卅年の歩みを曲りなりにもつづけて此の度健在に百号を迎えたわが「椰子樹」に再び返り咲いて、名を並べて欲しいと希うものは私一人丈けではない筈だ。

この十年間に椰子樹の上に現われた新しい顔ぶれは、そのまま「椰子樹」の清新な脱皮であって、之は大きな進歩と云っても良いであろう。大体楽天家の私は、短歌滅亡論を読まされても、悲観論を聞かされても、一向に応えず、十年一昔と云うのに卅年ものタメ息の出る程の永い年月を、憶面もなく清新な歌の中にはさまって旧態を曝しつづけて居る事は、つまりは短歌を愛している事に外ならなく、一つの大きな流れの中の小さな細胞の一つと思って居るわけなのだが、それにしても、何時になったら、ゆっ

くりと買い溜めておいた短歌書などを読む時間が来るであろうか。或は来ぬまま終るのかも知れないと心許なくも思うのだが、一方こうしたぎりぎりの中で小さな歌に執して居るためにこんな風につづいて居るのかとも思ったりして居るが今は何はともあれ意義ある百号を迎えて私は声を大きくして昔の歌友たちに呼びかけ度い。

帰りなむいざ、再びをわが「椰子樹」へと。そして之は亦わが「椰子樹」の一つの大きな発展に連がるものと思って居るものである。

一九六八年三月

椰子樹誌百号記念を迎えて

晶山　充

私が椰子樹誌へ投歌はじめたのは、一九三九年一月一日発行の二号からである。その二号を見ると、椰子樹詠草其の一には椎木文也、花瀬群涛、岩波菊治、阿部青杜四先生の作品、其の二は岩波、阿部両先生推薦で、瀬崎涛声、小田切剣、荒木玲果、行方正次郎、多美津生、武本由夫、徳尾渓舟氏等の作品が光っており、その次の岫雲集には鴨川（吉本）青夢、安部栄子、葛西妙子、池田重二、中山稠子、淳、阿部芳治、石竹花、渋川不二夫、不二山南歩、坪内広代、茅里、樋田美津氏等が星のように並んでいて、吾々一月集その一、その二、の連中のあこがれの欄で、皆、真剣に勉強したものである。私の作品が晶山充の筆名で出したものが阿部青杜先生の選で一月集のその一にのせてもらったが、この作品は当時、盛大だった時報歌壇に徳尾先生にとってもらったものだけ出したのだから自力とは言えない、別に丘瞭一の筆名で出したのは添削されて、たった一首、岩波先生選で、その二に出ているのが本当の力であった。

口絵には坂根嵯峨、椎木文也両氏の上半身の写真がならびその

下に日本荘における椰子樹歌会と記されて、樋田、岩波、徳尾、阿部、坪内、武本、香山、秋野、三好、木村、富吉、三好（息？）氏ちがにこにこ顔で写っている。亡くなられた岩波先生の髪毛も黒く、武本、徳尾両先生もみずみずしい青年ぶりである。

指をおってみるともう二十九年前のことであり、まったく感慨無量である。

この長い年月を様々な辛苦をなめられながら椰子樹誌を守り通して、今日、百号を迎えさせた、先輩諸氏へ心からの敬意と感謝を贈るのである。

椰子樹と私

弘　中　千賀子

椰子樹誌が生まれて、今年で三十年になるという。そうして今年はその百号記念号が発刊されることになったという。一口に三十年というけれど、生まれたばかりの赤ん坊が壮年に達する年月だと思えば、三十年という歳月が重い手応えとなって、更めて百号を迎える椰子樹の、その中に込められた人々の心の歴史がずしりと心に落ちてくる。私が椰子樹の存在を知り、本気で短歌を作ってみようかと思って椰子樹に入会したのは、一九四九年十一月発行の第二十二号からだった。同人費百五〇クルゼイロ、誌友費八〇クルゼイロ。その八〇クルゼイロを払って始めて手にした短歌同人誌。

讃嘆と惧れと、幾分かの気負いを持って同人の歌、誌友の歌、短歌会報から歌壇風聞記、厨房記、または広告のはしばしまで、実に熱意を込めて読んだことを思い出す。私が椰子樹に関わりを持った最初の号であるこの第二十一号の印象は深く、中でもこの号の発行直前に亡くなられたらしい伊藤次郎氏の歌が好きで、そ

の幾首かは、今でも記憶に鮮やかである。
○遠き記憶の日の如くにも靄はれし冬の峡に鳴く山鳩よ
○仄かなる虹はしばらく立ちしかど朝霧はまた渦巻き流る
○冷えきりし茶を一口に飲み干して立ち上る願いは叶えられなく

繊細な感情に裏打ちされた甘い抒情性が初心者の私にはとても魅力的だった。私の歌が始めて載ったのは次号の第二十四号、瀬崎先生の選による三段組の中だった。

○声荒げ吾が叱りたる子がすぐにこだわりもなく声かけてくるそれから十九年。その頃五才だった長男は二十四才の大人となり、私の知らない世界も持っている。椰子樹に関わりをもったこの十九年の歳月の中で一際印象深く、脳裡に刻まれている歌のいくつかを挙げてみよう。最初に浮んでくるのは西田季子氏の〃追従の一日も暮れぬと仰ぎ見る天使立像は没り陽に映えて〃である。西田氏と言えばすぐこの歌が浮んでくる程、強烈な印象と感銘を受けた歌である。〃愛恋の表情つねに幼なけれ相たづさえて経きし月日よ〃井本惇　〃連れ立てる心和みに手を触りて夫に添いゆく昏れ深き道〃開沼貴代　〃しづかなる青葉の光り少年はボルソに蝉を鳴かせつつゆく〃川原比露思　〃唇かみ余憤に堪えて帰りくれば背戸の椰子の葉南になびく〃武本由夫　〃思出とまたなる夜の陸橋よ気勢をあげて吾ら酔いゆく〃吉本青夢　〃病む吾に食わすと友が釣りて来し魚鱗は光る夕光の中〃武田公平　脈絡もなく次々に心に浮んでくるこれらの歌を書きしるしてゆきながら、こうした歌を受け止めたその時その時の自分の心の経緯が思い出される。その頃からこうした主情的な歌、心理の色濃い歌に惹かれていたことも思われる。

世の中の美くしいものが一つずつ、一つずつ無くなってゆく様な老年期を目前にして、歌に関わりを持った十九年の歳月の、感情の起伏や振幅激しかった自分の心が省みられる。百号を迎えて椰子樹語が一つのピリオドを打とうとしている時、私の心の中に

もまた一つの終止符が打たれた思いである。

椰子樹百号に寄せて

陣　内　しのぶ

昔の椰子樹誌をわざわざ引出す迄もなく、ここ十数年来の、全体に於ける椰子樹の歌の発展には著るしいものがある。指導者の優秀さと、会員全体の熱気とが相俟って、今日に至ったと言う可きであろう。二世の後継者が希み薄という淋しさを別として、コロニア短歌は確かに今日迄日進月歩して来た。

今日、百号を迎えて、峠を上りつめたような緊張のほぐれを、安堵の思いと、覆い隠せない疲労を、先輩諸兄姉が感ぜられるのは当然のような気がする。百という数は大変な数である。寄合世帯といわれる椰子樹が、延々として百号迄つづいたこと自体特筆さるる価値があると云える。

百号の半ば、五十号へ近づいた頃、私は仲間入りをさせて貰った。当時を振返ると、色々なことが想出されて、なつかしい。

当時、原稿用紙を長い間持たず、頭に浮んだものを、三十一文字にまとめては、便箋紙に書きつけて投稿した。キッチリと、原稿用紙に書かねば、編集者がどんなに酷い目に逢われるか、などとは、てんで知らなかった。間もなく設定された第一回椰子樹賞にも、盲、蛇に怖じずで、便箋紙にさらさらと書いて出したものである。ひどいものだった。

始めて二・三年は何も判らず、短歌が面白いだの、楽しいだのと他の人達が言うのが一向理解出来なかった。まして苦しいなどというのは心外で、苦しんでまで短歌は作り度くない、と云って、叱られたことがある。誌上で叱られて、読んで真赤になったものの、根が単細胞なのでペチャンコにもならず、三年経って三つの

譬どおり育って来た。

振り返って、短歌と短歌仲間から受けた、有形無形の影響は大きなものがある。作歌することが、自身の成長にプラスする以上に、歌仲間からプラスされることは大きい。錚々錚錚たる歌友の間に押揉まれ、時に揉み潰されそうになる危険さが無いでもないが……。歌を愛する一面の類似性の故か、一種特別の親近感を育てる仲間、この仲間に鞭韃され、刺戟されたりしながら十幾年、椰子樹の誌上を汚して来た。そして百号を迎えた。歌も止めず、生きて百号に名を連らねることは、連なった人々と供に、一つの得をしたと言う可きであろうか。因縁である。

百号を機として、編集者の更送があり、内外表裏、色々と変化が見られることであろう。それ等有形の変化以上に、私を魅して止まないのは、コロニア短歌の是からの変貌である。自分自身を第一として、限度の見える今白の椰子樹の歌に、吹き込まれるどのような新風があるのであろうか、私には見当がつかない。見当がつかないことは、直ちに絶望に繋るということではない。とは言え、極く少数の人以外に、新しい試みは常になされ乍ら、新しい発見は殆んど見る可きもののないコロニア短歌の前途は暗い。

或る選者の言葉に、ゆきついた果の淀み、というのがあった。今更に愕然としたわけではないが、ひしひしと躯にこたえた。

コロニア短歌の明日を照らす燭光を、淀みを吹き払う新風を(たとえ、暴風であってもいい)百号に棒ぐる祝辞に代えて祈るものである。

一九六八年四月三十日

椰子樹百号記念特集号に寄せて

森　重　扶　美

短歌を愛する人達の拠処である「椰子樹」が、米沢幹夫氏を編

集長として、百号特集号を発行するという。それに何か書くようにとの編集委員会からの通知に接して、椰子樹の歴史というものを顧みる機会を得た。

創刊当時のことは、私自身未だ関係がなかったので、五十号記念特集号などによって知識を得ている程度であるが、当時の先輩諸氏が、岩波先生、葛西妙子氏の他は皆御健在で、百号特集号に執筆されているということは何より喜ばしい。

私が初めて椰子樹を手にしたのは第二十三号であった。第二十四号に初投稿し「冬景選歌」に六首採録されて以来、短歌は深く私の身に根を下して了った。今日まで二十年近く椰子樹と倶に生きて来た、という感慨は浅いものではない。

一九五五年度の第三回同人会議に於て新同人として米沢幹夫、小竹清子、阿部パウロ諸氏と共に推薦されたことを知った時、歓びよりも責任の重さに心を圧えられたことを今もはっきり記憶している。

「椰子樹の建前は、流派巧拙を問わずガッチリと手を組んで、互に勉強し合って行きたいという処にある。」という椰子樹のスローガンのもとに安心して今日まで椰子樹に拠ってきた。

椰子樹の選者の諸先生の流派は違うとお聞きしていたが、最初に手ほどきを受けた長島可山氏、南米時事新聞の歌壇選者であられた瀬崎先生、後に日伯歌壇に投稿を始め御指導を頂いた武本先生、いずれも写実に重きを置いて、客観描写ということを深く教えられた。現在歌会ぐるみ御指導を載いている酒井繁一先生にしても、写実に重きを置くという点は、他の先生方と変る処がない。

凡ての芸術に進歩があるように、短歌の世界に於ても、旧態依然ということは有り得ない。写実とは云っても、外界的現実の表現よりも内界的現実の表現に重点を置く、というふうに椰子樹の作品も変って来つつあるのではないかと思う。

短歌は抒情に依って支えられている。しかし、その抒情性は時

代と共に変革されて来ている。これはコロニア短歌に於ても変る処がない。いわゆる古い抒情詩といわれるものは、悲しい時に悲しそうに歌い、うれしい時にうれしそうに歌うだけの生理的なものであったのが、今日では、もっと覚めた主知的な自我意識が必要とされるようになり、言いかえればかっての忘我の情緒を客観する冷静な知性が必要とされ、その意識世界を抒情するようになった。これが近代抒情詩に於ける情緒の質的変化なのだ。と或る詩人は言っているが、これはそのまま短歌の世界にも当てはまることで、事実、今日の椰子樹の主流をなすものは、このように変ってきていると思う。

百号を迎えた郁子樹が、これからどのように変貌するか私には解らない。しかし、「椰子樹の建前は、流派巧拙を問わずガッチリと手を組んで、互に勉強し合って行きたいという処にある。個人的な感情に捉あれることなく、主張は主張として誌上に堂々論陣を張って頂きたい。」という椰子樹のスローガンが守られねば早晩、崩潰の一途を辿ることになりはしないかという思いも湧く。

創刊当初の諸先輩の熱情を受け継いで旧い歌人も新しい歌人も、百号を機に新しい決意をもって、コロニア短歌の興隆を目指して進まれることを祈りつつ、拙い感想の筆を擱く。

椰子樹百号に寄せて

行　方　正治郎

我等の椰子樹誌が今年でどうやら百号に達したという。百号と一と口に言っても数えて見れば昭和十三年の十月に創刊号を出してから三十年の歳月が流れており、丁度同じ年の十月に生れた私の長男が結婚して子供があるのである。之は相当永い年月である。言う迄もなくその間には祖国の日支事変から太平洋戦争に突入、

更に戦後の混乱時代と大きな空白時代があった訳であるが、百号という数字は兎も角たとえ牛の如き歩みであっても三十年の間続けて来たという事は大変な事である。特にその間編集というやっかいな仕事を担当して来られた人々の努力は　並大抵のものではなかったと思う。徳尾氏、武本氏、吉本氏、則近氏、米沢氏、清谷氏、安良田氏等をはじめ之等の人々に協力し隠れた努力を致された多くの人々に改めて感謝の意を表さねばならない。その間同人制から会員制に変り、選者も次々交替はしたが、コロニアの殆どの歌人達がよく協力してコロニア短歌の育成に努力した功績は大きい。斯うした永い年月の間であって見れば当然の事ながら、椰子樹の産みの親ともいうべき坂根嵯峨氏をはじめ、コロニア歌壇の父とも云うべき岩波菊治先生、伊藤二郎、武田公平、正木思水、中田武男、最近では東野暁風、大島進、葛西妙子等多数の優れた歌人達が物故しており、更にかっては優秀な歌人として世人の注目を集めた多数の作歌者がいつのまにか作歌活動の第一線から消え去って行った事を寂しく思う。一面から見れば斯うした人々が土台となり、捨石となって今日のコロニア歌壇が育って来たと見る事も出来るであろう。時代感覚の推移に伴い、写実的作風から心理的抽象的作風えと移行してゆく事も自然の勢いといえるかも知れぬが、稀には岩波先生や東野暁風氏などのように、短歌に対し特別の執念を持って生涯作歌活動を続けた人々には全く無条件に敬服する外ない。

私如きは全く慢然と歌壇に追随して来たにすぎない。扨て翻って椰子樹が歩んだ三十年という歳月は我が日本民族にとって実に開国以来最大の激動期であった訳だが、民族の伝統を最も忠実に表現して来た代表的文芸とも云うべき短歌の世界に於て、果してどれ丈け民族の特質や欠陥等を深く掘り下げたものがあるであろうか、私は斯うした問題について大きな興味を持つものである。民族の草創時代を形造る古事記日本書紀の持つ要素に、儒教仏教

等東洋の二大思想が加わり更に近代に到って基督教的世界観の上に発達した欧米思潮を一応受け入れ、それ等の主義思想を実生活の中に実践しつつある事は疑いない、此の様な複雑を思想形態を持つ私共が、今世界の中の日本民族として、諸他の民族には見られない特質個性というものがあるべきものと考えるのであるが、それが現代の短歌作品の上に果してどのように表明されているであろうかという事を追求する事も充分意義のあることと考えているものである。

椰子樹百号に寄せて

西田　季子

世に三号雑誌という言葉がある。経済的な行きづまりにあっていつ廃刊になるだろうかなどという世間の冷い批判に会いながら、戦前から戦後と三十年を生き抜いてとうとう百号を迎えた椰子樹。戦前から歩みを倶にして来た私には去来する想い出に真に感慨無量である。

日本でも今年は明治から数えて百年になり、それにちなんで種々の催し事が行なわれるそうであるが、それに相い応ずる様に椰子樹が百号を迎えるという事は何かつながりがある様に思えてならない。百という数字は真に貴重な数字で或一区ぎりの完成を示し更に新しい発足を意味する。百までこぎつけるという事は並々ならぬ努力である。

聖市で徳尾氏、武本氏が中心となり、故坂根総領事、椎木正金銀行リオ支長の援助で産声をあげたのは昭和十三年であったとか。産声はあげたものの貧弱な母体から生れた未熟児椰子樹は聖市の同人の情熱をもってしてもいつも息絶え絶えの虚弱児であった。その都度坂根氏、椎木氏のもとにかけつけてポケットマネーの輸

血やら」ソーロやらをお願いしたという事でその栄養不良児椰子樹の成長の消息は「椰子樹五十号」に詳しい。

その頃の聖市同人自信満々の作品と一瓶のピンガを卓上に夜の白むまで短歌への情熱をもやしたのであろう。そして短歌を手がかりとして文芸論、芸術論、果ては人生観に議論し口論し心の交流を深めつつ椰子樹を育てた、その椰子樹創生期の話は懐しい限りである。若々しく心一筋短歌に精進した歌友の姿を彷彿させる。金を儲けて故郷に錦を飾る事が移民の最上目的であった時代に、岩波先生始め徳尾氏、武本氏、吉本氏、葛西妙子方々の情勢は誠に異人種的或は変質者的存在であったにちがいない。（昔の歌人よ。御免なさい。）

私も奥地の百姓生活からサンロッキに転居し、正式に誌友として参加し誌上に作品発表しようとしたとたんに戦争の暗雲の中に巻きこまれあの長い休刊時代に入った。私はあの希望のない暗い寂しい時代は忘れない。幸いモジで岩波先生、武本氏を中心に地下にもぐった椰子樹が細々と息をつづけていたのであった。戦後再刊の報を徳尾氏から頂き私はどんなに嬉しかった事か。

いつか武本さんは「私達に師弟という関係はない。常に短歌を愛する同志である」と仰った。まことにその通りで椰子樹を軸とした幸福な人間関係を保ち得た事は私にとって誠に幸福な人生の一面であったかそれ故に作歌する以上の喜びを歌友のつながりを更に椰子樹から離れがたいものにする。

さて椰子樹の推移はどうであろうか。創刊当時アララギ同人であった岩波先生の歌風のもとに流技を問わず集った同志であって現在にいたっては、時代の流れと共に一人一流の手法を試みている。

「椰子樹よ。汝は何処に行くや」である。椰子樹は三十年の間に百号を数え今や曲り角に来た。「新しい酒は新しい革袋に」の句を引用するまでもなく、時代の流れに添うために新しい経営方針、

編集方針が取られ様としている。更に飛躍するための姿勢として心からその脱皮の成切を祈らずには居られない。私達が二世・三世に残す無型の文化財産とするために今後に続く人々に期待する事大である。又私達戦前からの老歌人も決して「消えてはならないのである。」

以　上

アルバム

大場　時夫

それは一九五一年四月頃の事であったと思う。サンパウロから岩波、瀬崎、清谷、則近の諸氏を迎えて、三十人ばかりがアプカラニンニャの滝へ吟行したことがあった。

下草の深いパラナ松林の中を降りつづけて道路が右手に急カーブするとダムの水が見えはじめた。「ようやく着いた」と誰かが声をあげた。里程はロンドリーナから八十キロだろう、いや百キロだ。と言いながら来たが、実際には百二、三十キロ位あったようである。神田氏のトラックで三時間半ばかりかかった。道は曲りくねっていたが思ったよりは凹凸のない広い路であった。

皆も水を見るとようやく活気づいて俄かに空腹を訴えだしたので、滝下の発電所までは下りず、この湖岸で弁当をひらくことにした。車を降りて見るとダムの堤防は二米余りで意外に低かったが湖水は山間にのび拡がっていて、かいつぶりが浮き沈みしながら水尾を曳いているのも滑々しい。対岸の赤甍の家には人影も見えず昨夜からの眠りをつづけているようなひそけさである。ダムの下の十米ばかり隔てたところに滝の落口があった、轟々たる音と共に滝煙りはこの狭い谷間をこめていて滝壷は見えない。断崖のところどころに見える岩霧草も末枯れはじめていて、しらけ切った広い葉を山風のなかにひるがえしている。

岩波先生は滝口の岩鼻に起って「信濃の山のようだ。」と言い山襞の深い渓谷に見入って居られたが、やがて離れ岩の上を二、三度行き戻りしてその揺れ具合を確めて深く息を吸うと俄かに両手をつき逆立をするとゆらゆらと歩きはじめた、一同は度肝を抜かれ呆然とその突飛な行動を見守った、落差百二十余米の滝の落口であってみれば高所恐怖症の者ならずとも下を見ただけで目眩がしそうである。いくら山国育ちの先生だとしても余りにも冒険が過ぎると思わないでは居られなかった。だが声をかけるのは更に危険がともなうようで声をひそめて見守った、先生はこのはなれ岩の上を二廻りするとようやく気分が治まったのであろう弁当の握り飯をほほばりはじめた。その時の握飯の味は信濃の味がしたかどうかは糾すべくもないが、先生の今一つの面を見せられたようで時折懐しく思い出されるのであるいそう考えで見ると作品のなかにも多分そうした傾向があった。

わさび味噌の辛きをそえてとる朝飼子供もわれも驚くほど食う

菊　治

作者に気取や街いがあったらこうしたものは作歌の対象とはならなかったであろう。

三十年歩み来たりしこの道のなおはるかなる歎きをぞもつ

菊　治

椰子樹も創刊以来三十年を過ぎた、創刊当時から恕参加して来ている人も尠くないと思う。最近のコロニアの作品が繊細になり美しくなったことは歓ばしいことではあるが、小手先の遊びに傾いているのではないだろうか。作品が、作者そのもののすがたと結すびつきがない。

古いアルバムを繰りながらこんなことを考えるのは単に私の懐古趣味を出でぬものをのであろうか。

椰子樹との出会い

小笠原富枝

短歌の専門誌「椰子樹」が発刊されている事は、以前から聴き識っていたが、「椰子樹」せ始めて観たのは私達がサンパウロ市に移転（一九五三年）して間もなくであった。

その頃、周囲に慣れない心細さもあって、よく買物の帰りには、太陽堂へよって、店内の書籍を、目に追いながら、そこばくの臍繰りで買える程度の本を選んだり、立ち読みしたりする事が、唯一の愉しみであったし、慰安にもなっていたので、その日もひと通り見廻して、棚隅へ視線を移したときに〝アッ〟と思わず声を出してしまった。

日頃、観たい観たいと思っていた「椰子樹」を見い出したからである。懐しい人にでも行き逢ったように。

入会する機会、亦申込みにゆく程の勇気もなかったのだから、その頃の私は余程うぶだったらしい　―　。

現在でもその時の「椰子樹」が一番印象に残っている。

たしか第三五号だったと思う、手応えのない程ページの薄かった事は、意外であったし、物足りなさをも感じたが、未知の世界へ、入ってゆくような感動、瑞々しい感情のゆらぎ――。

あれからすでに十三年の歩みを経ている。あの当時、指導者としては勿論だが、作品群のひと際目立っていた、徳尾、武本、中江、吉本、河村、清谷、安良田、大原、真木氏等の、最近の作品の沈滞を思いあわせると、著しい、その推移を寥しく思う。

特に、記念すべき百号を迎えようとするこの際、創刊以来の中心人物である諸氏の作品のない事は、一層その感は深い。

この頃、折りにふれて聴く「老兵は―」（作歌年令の意味）の言葉のようになりつつある。否なっている現在、この狭い短歌の世界の今後――を思うとき心寒きものがある。

先輩諸氏の「椰子樹・歌壇」への熱情、愛情を傾むけて来られた事は、充分理解出来るし、有難いとも思うのだが　―。

それにしても、同じ第一線に活躍しておられた葛西、開沼、西田氏等の三女流は、亡くなられた、葛西さんは別として、今もって作歌力、新鮮味を保っていられる（なーに女は他に考えることがないから）の声も聴こえるようですが、ともあれ同性のひとりとして、嬉しくもあり、頼もしくも感じる。

今回の百号記念を機会に、年代順に、丹念に椰子樹を読み返ぇして観ると、様々を事が、盛り上るように心を占め、再認識を深くしたのである。

殊に、戦前戦後を通じて、編集、選者、会計、総務、亦雑用と、あらゆる面へ、たずさわって来られた先輩諸氏の足跡が、それぞれの体臭のように、におって来て、この初冬の寒い夜をしみじみとさせられた。

記念号に寄せて

瀬崎　涛声

椰子樹が、百号に達すると言うので、久しぶりに創刊号を取出してみた。昭和十三年十月一日発行、第一巻第一号である。実に三十年の歳月を経ている。

表紙は、一本のひょろ高い椰子を囲んで、やや低い痩せた三本の椰子が立っている構図で、少し右寄りに寄せである。

たて書きの椰子樹という題字は、椰子樹の生みの親坂根総領事の手になる、なつかしい毛筆書きのものである。

椰子樹は当初から選歌制であるが、詠草は、椰子樹詠草、抽雲集、十月集の三部に別れている。椰子樹詠草は選者級の人々、即ち岩波菊治、椎木文也氏、花瀬群涛（坂根総領事）、阿部青杜氏等

の作品である。抽雲集は、瀬崎涛声、行方正治郎、但野拾参、池田重二、石井繁美、武本由夫、阿部素童、三室映之輔、徳尾渓舟、葛西妙子、開沼貴代、石竹花、秋野愁、樋田美沙子、荒木八雲、坪内広代、多羅間絹子、木村茅里、さだめ、不二山南歩の諸氏である。

次は十月集（一）で、坂根雪枝、樋田陽荘、長内チエ、加江の源氏、鴨川青夢（吉本）、悠紀子、荒木浅子の諸氏。

十月集に（二）は、園子、美保子、青木春子、山川和子、峰伊奈子、青葉涼子、山峰雪子、小枝子、大山富士子、青野露子、山下澄江、都魅緒生、古川暁子、波沫正夫、乾夏子、水上けさい、浮草、西林義明、汀月、横地李子、河村哉太郎、菅野麦兵人、浅野みゆき、白鳥民子、五島春子、倉島真砂子、原鉞子、天津夢城、中須夏山（時報歌壇転載歌の中に富岡耕村氏がある）諸氏の顔ぶれで総数六十氏である。

今、久しぶりにこの陣容を見渡すと、いちじるしく変っている。無論この中には物故者もあり、内地帰還の人もある。しかし、大部分は当国に現存している人々である。それにしては、何と、出詠継続者の少いことであろうか、開沼貴代氏を除いては殆んどないと言ってよい。欠詠しながらも続けて来たもの、及び近年まで作歌活動をした人を拾ってみると、瀬崎涛声、行方正治郎、武本由夫、徳尾渓舟、吉本青夢の諸氏位である。

続けることは月々の出詠でさえ容易でない。それが何年となると、よほど歌が好きで、歌の出来る環境にめぐまた努力者でないと至難である。殊に、椰子樹のように三十年の継続となると大事業だ。出詠継続者の僅少も無理からぬことではある。

出詠ばかりではない。雑誌の継続が難事だ。短歌誌のような特殊なものは、多く三号雑誌で了っている。椰子樹の百号とはよく続いたものである。

顧みて、椰子樹が三十年の間に果した役割は大きい。ブラジル

に於ける短歌文芸の普及は、一に、椰子樹によると言っても過言ではあるまい。しかし、これは皆関係者の誠意の賜だ。

百号を紀念するに当り、椰子樹の生み親坂根総領事を始め、全会員、歴代の選者、編集者、会計、校正、装釘、連絡、発送其他の諸事に当って項いた関係者諸彦に心からなる敬意と、感謝をささげたい。

（一九六八・三・一四）

記念号に寄せて

高　橋　よしみ

パラナ松生うる谷間を残して丘陵が褐色に変貌する寒冷の七月十二日（一九五八年）カンポス高原に向う高山電車が轍を軋ませながらカンポス特有の景勝を眼下に登って行った。

その中に今を時めくサンパウロ短歌会の錚々たるメンバーが、持参のウイスキーに微醺の顔を綻ばせ、しきりに窓外の絶景に感嘆詞を連発して居られた。カンポス歌会へ出席の途上である。

其の時、粋な短歌会の皆さんとは一面識もない野暮な門外漢が一人乗り合せて居たのである。亡兄の墓参の途上であったが、それが機縁か奇縁なのか、私が短歌会に関りを持つ様になる最初の出会いなのだから縁とは妙なものである。別行動をとる心算で居たのだが行きがかり上帰聖するまで歌会の皆さんと行を共にして了った。それというのも短歌を愛する人達の人柄に惹かれたからであったと思う。

誰方も底に真珠の様なものを沈めて居て光が柔らかく滲んで来る様な感じの方ばかりであった。それも其の筈、聞けば誰方も人格者揃いの先生方ばかりであったのだ。古い写真を見るとサンパウロ歌会では、武本、陣内、西田、開沼、光田、小竹、中江、越村、吉本、米沢、樋田と大物諸氏がずらりと並んで居られる。

カンポス歌会の春名、佐藤、安部、村手他に二人皆さん流石にお若い、頭髪黒々として居られるのである。先日の事の様に思えても十年と云う月日は短かからぬ過程であったのだ。その帰路椰子樹誌五十号記念号を頂いたが、其の時同誌は既に二十年の齢を重ねていたのである。記念号の中の吉本青夢氏の一首で「流れゐし雲も静まる夕べにて去りしも今もなべてかなしき」を読んで泪ぐんだのも未だ記憶に鮮らしい。その野外の芋であった私が現、百号記念号に手記を書いている。

二年後の一九六〇年から椰子樹誌を頂く様に成ったが、其の頃から歌語の将来性や、継続問題が云々されて居た様である。誌友からアンケートを採ったりして居る。

希望的な観測を下した方々の多くが現在も尚作歌活動を続けて居り、悲観的な意見を持って居られた方々に脱落者の多い事も注目される現象である。清谷益次氏が「あと十年か二十年のイノチと思う」と言われてから十年経つ。創刊以来合算三十年、ちょっと気の遠くなる様な年月である。

よく此処まで育って来られたと思う、先輩諸氏の同誌や短歌に対する愛情と後進者への献身的な育成がなかったならば到底成し遂げられをかった事であろう。身を以って推進力となられた諸先輩方に今更の様に頭が下る。ここで考えさせられる事は、会を維持して来られた要素の一つに誌友会員の熱心を支援の有った事である。

誌友あってこその椰子樹誌である。誌友会員達の熱意と要望があってこそ会の推進者達は挺身して応える気になれるのだと思う。当時編集に携わって居られた米沢氏が長期の実績を残された後、清谷氏が冴えた手腕を見せられ、また後任の安良田氏が独特の編集ぶりを好評の中に務め終ろうとして居られる。そして芽出度く百号記念号が出る事に成った。此の喜びは創刊号以来の誌友会員の諸氏は元より、現誌友会員一同の大きな喜びである。

折角三十年の足跡を残して来た椰子樹の命脈をブラジルに日本人の居る限り何んとかして永続させ度いものである。余りにも消極的な存在であるが故に努力して育てられなければ消滅しかねない。消滅は過去も未来も否定する事を意味する。東洋の伝統を持つ詩型が細々乍らでも息づき続ける事自体が価値だと思えば、僅か三百人足らずの誌友会員達は此の百号記念号を期として更に将来の椰子樹誌成長を計る事を考えねばならぬと思う。

詩

四十の日のうた

大浦　文雄

電話をかける
耳のおく
とおくで
ベルがなっている
ベルがなっている

たずねる人の
こころからは
なにも響ってこない
むなしい電話を
今日もかけている

電話をかける
耳のおく
とおくでベルがなっている
ベルがなっている

物故歌人作品集

大月澄亮

（ロンドリーナ）

一九五七年十月二十日没

丹精の棚の上なるアジサイの花は秋風に吹き荒されぬ
庭隅のすみれの株は太くして葉かげに花の少し咲きおり
チバジーの川霧深き橋をゆき我が自動車は霧に濡れつつ
窓開けて向かうさ庭に朝顔の花の四五十が目をうばうなり
降る雨に前の石段ぬかるみて客足とおくなりゆく日々に

西岡うの

（ロンドリーナ）

一九五八年十二月二日没

店先の賑いに昼はまぎらえど語る夫亡きその夜は長し
移民という吾が越し方の四十年を病めばしみじみ思う日のあり
行って見れば生れたばかりの牛の仔が前膝折って乳房吸い居り
歌思う心となりてようやくに取り越し苦労もなごまんとする
ひと日とて忘れもやらぬ亡き夫の初盆迎えて寂しさあらた

奥村富貴子

（サンパウロ）

一九五九年一月二十七日没

歌つくる性にはあらねど荒みゆくこころ寂しみ歌つくりおり
深夜ふとめざめし折の佗しさよ孤独のおもい身に迫り来る
いつよりか夜半めざめるくせのつき真黒き壁を只みつめおり
日本着を着たる吾が娘の立ち姿おどろくほどにしとやかに見ゆ

娘の贈るカクテルドレスを身につけて鏡の中にわれは笑まいぬ

阿部芳治

（サ・ミゲール・パウリスタ）

一九六〇年五月二十六日没

埴土道に我が影みつつひた歩むこの広野には雲も動かず
列なして蟻は歩めり真日中の埴土道よぎり草に消えつつ
果てしなき広野に影を落しつつあらわにぞ居る白鳥一羽
荒原の焼木の聳えおおけなし風は鳴れども音のこもらず
ふかふかと空にせまれるこの草野すべなき時に我がおらびたり

本田笑山

（カンポス・ド・ジョルドン）

一九六一年十二月二十六日没

市民権もたないわれとわが友と選挙場前の雑踏にあり
恃めなき未来を想う夕べにてスパーク放ちて終電車行く
三年振り逢いたる友との語らいも不遇なる吾の黙しがちにて
しらじらと渚に遠く処女二人肩をふれつつ語らいて行く
寂しくも美しきものを今宵見ぬ真夜の墓場にのぼりゆく月

石戸羊我

（アリアンサ）

一九六三年四月十四日没

師も友もおのが妻さえ世を去りて遺るうからと君たち上る
道の辺の青草原もユーカリの林となりぬ三とせ見ぬ間に
しばしだに忘れ給わぬ歌の友君がみ声のさやに響くも
一輪の白百合の花給わりぬなき妹の名は君知りまさで
老境の悲哀まざまざ歌となる可山の嘆きに心引かるる

近　昇

（イタケーラ）

一九六三年五月二十七日没

土埃しずもりて道のすがしさも靴に重たく夕立の泥
職場より帰る女工のスカートの襞の翳りに夜がはじまる
季はずれに花を咲かせて売る計画生きむがためのわれの背反
久々の奢りにビフを焼く妻の頬は生きいきと汗にひかりて
白髪に子のポマードを撫でつけて年始まわりの仕度ととのう

玉木　梅

（マイリンキ）

一九六三年八月七日没

み仏に供えたまえと紫陽花の花折りくる隣の媼は
老夫の肩もみながらふるさとの想い出倦かず語るひととき
うまき味噌つくらんと黄に色づきし大豆畑を見て廻り居り
ひさびさに娘を訪える吾を見てはにかみながらより来る孫ら
おのずからほほ笑み湧きぬ賜いたる万年筆にてものを書きつつ

三浦四郎

（サンパウロ）

一九六四年六月十四日没

理髪師は石鹸の泡を白々と顔の半ばを塗りつぶしたり
魚釣りゆ帰りし子等のバケツには数匹の小魚あえぎつつおり
喜んで金預かれど我等にはなかなか貸さぬ東山銀行
老い父のいまわのきわに幾度か我を呼びつつ逝き給いしとぞ
久々に湲舟君に相逢えば何時に変らず快活に語らう

伊藤　りわ子

（イタケーラ）

一九六四年一二月二日没

岩に住む貝採り居りて揚げ潮のからきを強たか飲まされにける
沖遠くうねりを見する潮脈の渚に向かいて走り来たるよ
岩島に入り陽さしつつしらじらと上げ来る潮は迫りて止まず
陽の温み残れる石に孫と座し五十年祭の花火仰ぎつ
逞しき意欲示せる蘇鉄樹の巻き葉深々朱の実蓄おう

柳田　威

（ピンドラーマ）

一九六五年　不詳

若き頃写生する時寄りそいし乙女のありき今静かなり
病める孫はただおとなしく枕辺の赤き木の実も欲しとは云わず
熱計表赤き波線に一脈の安けさおぼゆ病室の前
かすかにも読経の声の洩れてきぬ隔離病舎に燈はとぼりおり
ひたむきに農に生きたき願望もおのれ病む身の詮すべもあらず

吉田　きみ

（カンピーナス）

一九六六年四月三十日没

狭き庭にためらいつ植えしマモンの木何時しか伸びて青き実持てり
足ひきて渡る十字路迫り来る車に抱く怖れと屈辱感
罪の意識ようやく消えたり猫すてしくりやに来たる平安の日々

簗田　月耕

（サンパウロ）

一九六七年三月十二日没

南風の吹けば寂しくこもる夜のこの頃早き寝ぐせつきたり
わが妻が髪染めし跡くっきりと目立ちて見ゆる食堂の中

横ざまの風雨の中を直線にすぐるタクシー水けぶりあぐ
撒水車片側を通り行き夕べの街の涼しかりけり
アドバルン上れる広場の上を飛ぶジェット機一つ音長く引く

東野　暁風

（プ・プルデンテ）

一九六七年五月二十一日没

前かがみに背をまるめて歩く吾にあかあかとして野を焼く夕日
幸福の限界も時に替りつつ今朝は乞食に小銭を恵む
コロニョンの穂に満月のかかる道受難日の盗人が鶏なかせゆく
蓑虫がみの引きずって歩くさま意外にはやし木洩れ日の中
わが耳に小鳥一羽を住ましめて少年の日のかなしみをきく

大島　進

（モジ・ダス・クルース）

一九六七年七月二十一日没

茨生うる原を区切れるタイパ塀崩れしるけし奴隷市跡
一本のピタンガ熟実小さけれどその実香に立つ奴隷市跡
奴隷市跡草なえ匂いつ石英の破片鋭どく直射を反す
真夏陽の並建つ十字架耀よえり奴隷市跡の彼方なる岡
奴隷商人が手にせし鞭の音かとも茨に鳴りて風は鋭どし

葛西　妙子

（サンパウロ）

一九六七年十二月三十一日没

検尿の試験管を熱しつつ蛋白無ければ心明るし
羞恥せる嫁の腹部に掌を触りて親しき物よ此の固形物
逆光のカーテンを背に佇つ嫁は腹帯しなおすはにかみながら
父母よりも祖父母よりも優れたる因子よ宿れ幻想ならずに

産み出すせつなのうめきしるければ呼吸を合せつつ力めり吾も

上　村　登志行

（スザノ）

一九六八年二月二十五日没

井戸ばたに水くみ居れば朝空を一群の鳥渡り行く見ゆ
朝霧はまだはれやらず青鳥の声しきりなり向つ山辺に
曇り空はげしき風にさからいて鳥舞い行けり丘すれずれに
裏山にこめし朝霧深くしてサビヤの声がおりおり聞こゆ
詮なしと諦め切りて寝し床に聞く山鳩の声のわびしさ

椰子樹が発行される迄

徳　尾　渓　舟

本「椰子樹」誌が伯国に於ける短歌同人誌として発足、その第一巻第一号を出したのは一九三八年(昭和十三年)十月一日で、印刷所は日伯社印刷部になっているが、新聞文芸欄の短歌欄だけでは物足らず、何とか短歌の専門誌を出したいと云う希望はずっと短歌同好者の間にあったが、当時のコロニア事情ではとても運営出来る事情でなく、せめてそれでは綜合文芸誌でもと、種々企画され、実行され、所謂三号誌として消えて行った文芸誌も種々あった筈で、椰子樹発行以前に一番短歌誌らしい体裁をもって発行されていたのは、私の記憶ではアリアンサから発行されていた「おかぼ」で、これには短歌を岩波菊治氏、俳句を木村圭石氏（共に故人）が担当し、詩や小説、随筆等の欄は無かったように思う。これは最初謄写版刷りだったが、後に活字発行になったように記憶する。何時頃創刊され、何号まで続いたか記憶にないが、短歌

の部では今も椰子樹で活躍している行方氏や武本君、中江君なぞがいたようである。

それから一九三七年に古野菊生氏や武本君、石竹花、住吉光雄君やブラジル時報の文芸欄を担当していた僕や、其の他六・七人の発起で綜合文芸誌「地平線」が出ている。これは文字通り綜合文芸誌で、私の日記を繰って見ると、一九三七年二月十四日、日曜の午後日本倶楽部へ会合し発行にふみ切ったのであるが「集まる者七人、最初からあまり大きな事をして長続きしないではいけないからと、一部三百レース位（実際には五百レース）な小さな新聞みたいなものにする事にして別れる」と書いている。編集は吉野氏で活字印刷にして初号は翌三月に出しているが、新聞四折型にして体裁も良く、奥地の文芸同好者に呼びかけ可成り評判も良く、翌三八年二月迄の約一年間に九号を出しているが、これが最終号となっている。どんな事情で廃刊になったか不明だが、責任者各自が自分の仕事が忙しかったり、資金不足がたたったりした為ではないかと思うが、同志で地方へ都落ちする者もあったりして自然消滅の形になったのかも知れない。

尚地平線発行に就いての余談について二・三記すと、その前に文芸同好者（主として聖市内の）間に文芸同好者懇談会と云うのが持たれており、私の日記を調べてみると一九三六年十二月十二日に次のように記している。

「夜日本倶楽部で、文芸同好者の懇談だ、大てい顔見知りの人達ばかりだが、女性側から久保（妙子）須貝（さだめ）氏等の出席あったは感謝すべきだ。文芸雑誌発刊への第一歩をふみ出すことになった。十一時半頃散会」

次いで翌一九三七年一月十日の一節に

「午後から文芸懇談会、相変らず不振だ、一時が二時過ぎになって開会、飛入的な人達もあって十四名集ったが女性からは須貝氏だけだ。成可く自力で文芸雑誌発行に決し、誌名「アウローラ」と

し具体案を練り午後六時散会」

翌十一日の日記には「夜古野君の所へ集って雑誌発行について再検討し、古野君を編集主任、武本君を会計主任にする」と書いている。これが引続いて前記二月十四日の地平線発行決議へと続いて行くのだが、どうした理由で「アウローラ」の誌名が「地平線」へ変更されたか思い出せない。尚この地平線が発行されると道で、香山聖州新報社長が「聖市の文学青年と自称する連中が地平線と云う雑誌を発行したが、甚だキザな雑誌だ」と云うような批評を発表した(実際氏などから見たらキザに見えたかも知れないと思われる)のに対し、早速私が「聖報社長に一言す」と反ばくの記事をブラジル時報に発表している事なぞも、今にして思えばほほえましい思い出である。

椰子樹発行前後に地方では、マリリアで阿部青杜氏が「僚原」を、今は何とか宗教の幹部として納っている渡部南仙子君がパラグワスーで「白日」、バウルーでは小田切剣氏が「山茶」等矢張り俳句や短歌を主にした謄写版の同人誌を発行していた筈で、その他の地方でもそれぞれの文芸愛好者達で小規模な文芸誌が出ていたことと思う。

尚一九三八年の地平線最終の第九号が出来上った二月十六日に、聖市の遠藤書店の印刷部(?)に働いていた「むろぶし・さちよ」氏が死亡している。氏は短歌はやらなかったが、当時の主として日伯紙に種々文芸作品を発表し、文芸同好者としてみなから期待されていた人であった。

尚遠藤書店ではこの一九三八年十一月三日に「文化」と云う雑誌の第一号発行祝賀会を日本倶楽部で開いている。これは今日本へ行っている安藤全八氏が編集し、主として遠藤書店で販売する日本書籍の紹介宣伝を目的としたものだが、活字印刷の大冊で、詩や歌、俳句、小説、随筆なども賞金を出して募集し、我々もその発展を期待したのだが、何号か出した後廃刊になっている。

以上長々述べ立てたいきさつは、云わば椰子樹発刊迄の胎動時期で謂うなればコロニアで短歌をやっていた同好者たちの間に、短歌専門誌が出来ないならば、せめて綜合誌の一部にでも短歌の一部門を持ちたいと云う希望が常にくすぶっていたと云う事を言いたい為である。

所で、では短歌愛好者待望の椰子樹が生まれる頃のコロニア歌壇はどうであったかと云うと、それは次の様な非常に恵まれた雑誌発行のコンジソンにあった。

第一に短歌の非常なる愛好者であった坂根嵯峨氏が総領事として来任され、次々自作を発表注目されていた所へ、矢張り同好者で山下陸奥の「一路」の同人椎木文也氏が正金銀行リオ支店長として来任され、嵯峨総領事と親交が出来たこと、日本で一流の歌人達と交流のあった阿部青杜氏がマリリアから文教普及会社会部長として聖市へ移転されたこと、コロニア歌壇の二長老（と云う年でもなかったが）として活躍しておられた岩波菊治氏や瀬峰涛声氏等と連絡がとれ、熱心に支持されるようになった所へ、当時の花形歌人（？）の武本由夫、石竹花、池田重二、鴨川青夢、須貝さだめ、住吉砂丘等が聖市に居住し、須貝さだめが聖州新報の文芸欄を担当し、殊に短歌には編集局選とせず、当面の選者となり、そんな関係で、坂根嵯峨総領事から過分の知遇を項だき、当時飛ぶ鳥落とす権力のある総領事室へ自由に出入出来る待遇で、そうした歌の話なども自由に出来る環境にいたことなどが上げられる。未だ椰子樹誌発行の話が出る前、文教普及会社会部長として聖市に赴任していた阿部青杜氏やら私などが斡旋し、短歌振興策でも相談しようと、総領事をかつぎ上げ、総領事官邸で会合出来る所迄こぎつけた。

一九三八年（昭和十三年）六月五日である。午後四時からで、集合者は意外に少なく、阿部青杜、石竹花、住吉砂丘、木村茅里、武

田そで、同綾子と筆者渓舟と遅れて画家の半田知堆氏が来ている。当事の総領事と云えば、本当にえらい人であり、その官邸に招待されると云うのは無上の光栄であった筈だし、その総嶺事をかこむ同好者懇談会であり、私がその斡旋をしているのだからあちこちに招待をかけているのに参集者が少なかったのは前記花形同好者なぞみな都落ちでもしていたのかも知れない。がとにも角にも当時の記録を見ると、集会は極く親近的で種々歌談に時を過ごし、みな夕食の馳走になって午後七時半散会になっている。この日総領事は一連の感想歌を示しているが、その二・三に

歌をよむ優しき人等集いけり簇りひらく花の如くに

歌人の集まりうれし水干も直衣の色彩も眼にうかぶまで、外に岩波菊治詞兄へとして

山川の筧の水のよどみなく流るる如く歌を読む人

と、私宛に

体操と和歌と講義と翻訳に若き一日の忙しきよし

の歌など項だき今読み返してみて感慨深いものがある。

この時の感想を「歌謡謹聴」として石竹花君が

金色の椅子に腰かけつつましく坂根総領事のお話を聞く

そのかみの明星派歌人坂根嵯峨サンパウロの街に歌詠みおわす

その他の歌を発表しているが、こうした種々の機会の接触に短歌の専門誌を発行したいと云う我々の希望が嵯峨総領事に間接直接に伝えられていたのである。それで、ある日リオに出府された総領事は椎木正金支店長に会見の機会のあった時コロニア短歌雑誌発行の話が出たにちがいない。勿論その時、椎木氏も双手をあげて賛意を表されたにちがい無い。

ある日、その日も時報社の編集室で翻訳に頭を痛めていた私の所へ嵯峨総領事から電話がかかってきた。

「この間リオへ行ってねえー、椎木君に会って短歌雑誌発行の話をしたら大賛成だと云って呉れてね、ひとつ君達で具体案をねっ

て呉れないかねー」
　と云うような意味の、その時の受話器を通じて流れてくる坂根総領事の明るい声を、三十年経た今でも私は昨日のように思い出すことが出来る。
　同じような話が阿部青杜氏へも通じられ、第一回の相談会が開かれたのが八月
六日である。その日の日記に私は次のように記している。
「阿部青杜氏から総領事と正金の椎木さんが乗気になって後援しているから短歌雑誌発行にかからないか、との話、よい事ではあるが、俺はもうこんな仕事に疲れた、ごめんこうむりたいがそうも行くまい。午後父兄会へ茅里（木村）住吉（砂丘）氏等と集合協議する事にする。
（―茅里、住吉君等は当時聖州新報に勤務し、たしか須貝さだめ氏の後をうけて―短歌同好者として交流していたように思う）短歌と云えば此の頃俺の選はきびし過ぎると総領事から苦情が出ているから少し考えよう……午後父兄会へ行って短歌雑誌発行の件をまとめる」
　どんな具合に話をまとめたか私の日記では分らないが、兎に角、短歌雑誌発行にふみ切る相談がまとまった事にはちがいないことは次の八月十五日の日記に、
「岩波氏社へ来訪、久しぶりだったので最初は一寸誰だか分らなかった程だった（岩波氏とは、前一九三七年十二月五日に初対面し、―岩波菊治氏ひよっこり尋ねて来た。俺には初対面、念腹氏の気難しさも青杜氏のゴーマンさもなく、真に野人らしい気持ちの良い人で、暫らく話し、月曜日に歌合することにして別れる―と、その日の日記に書いている）雑誌発行の事について話し、午後会う事にして別れる……午後四時頃岩波氏と会って雑誌発行について諒解を得ておく、何分の援助して下さる由」
　次いで九月十四日の日記には「午前中に二面を終り帰りかけた

所へひよっこり人が尋ねて来る。聞けば鴨川青夢君の由初対面ではあるがお互い文通もしていたし、同じ趣味に生きる人なら、そんな初対面とも思われぬ程なつかしい。卅分ばかり話す。背の高い、何処かクネクネしたと云う感じの人だが極く真面目な性質の人のようだ。歌人は誰もかも真面目でみんな人が善だ……夜は短歌会、サンパウロ女学院から五人連れて行く。来会者廿数名、聖市短歌会未曽有の盛況、総領事、相沢氏達も来る。短歌雑誌発行に決定し、短歌会になり、十一時半終る」

この日の短歌会が何処で行われたか分らないが、文協ではなかったかと思う。

次いで九月廿二日の日記に「――夕方総領事を領事館に尋ね、しばらく新短歌雑誌発行の件について話す、椎木氏と二人で月百かん宛位は出しても良いと云う意気込みだから、相当なものが出来るし、またそうして欲しい口ぶりだ。雑誌の名は「椰子樹」亭々として繁る椰子の様にすくすく伸びろと云う意味もこめてあるんだそうだが、本当に伸びて欲しいものだ。椎木氏や総領事の原稿を貰い、相沢氏とも一寸話して、帰りに石井文教普及会長を尋ね原稿を頼んどく、こんな事には矢張り俺なんかが走り廻らなければならないので骨だ。武本君に会い、日曜日石竹花の所へ寄って下相談する事にして別れる。社へ帰ると「学友」後半五十頁の校正が来ている。学校から早引けして帰り夜明けの三時頃迄かかって終る」とあり、公私共に多忙であり乍ら椰子樹発行の準備に努力していたことが分るのである。

次いで九月廿五日の日記には「―午後二時から石竹花の所で新短歌雑誌の編集準備をやる。仲々愉快だった―」と書いている。

石竹花の家は当時我々が「梁山伯」と呼んでいたブリガデイロ・ルイス・アントニオ街の水道局の側の道路下にあるポロンで、一部屋とコジンニャしかないずい分鼻をぶっつけるような狭い家だったが、何しをみんな極度に貧乏していて、池田重二なぞは石

竹花とその相愛の女性との新婚家庭に蟠踞し、その一部屋の上のカーマに新婚夫婦が寝て下に重二が住みこんで何時もピンガのガラホンがころがっているような状態だったが、石竹花も新婚の妻君も少しも嫌な顔をせず、我々を歓迎してくれたので、当時から酒の方ではゴーケツであった武本や青夢やまだ一杯のピンガをなめるようにして、もてあましていた私なども、斗酒なおものともしなかった石竹花、重二などと気があって良くここに集って歌を論じ、ヒフン、コーガイして夜を徹し、歌人の集会所見たいな所だったが、今日の椰子樹発展に一役買っているので特に記して置くが、そこでどんな具合に椰子樹発行について、どんな話がまとまったか、また誰々集ったか記憶もないが、武本君、石竹花、重二あたりではなかっただろうか。

次に九月廿七日の日記には「　―　殊に文芸方面では忙しくて仕方ない。もうすっかり縁を切って了いたいと思うが、矢張り好きな道で仕方ない。それに小使いがわりに私なぞが走り廻らなければ仲々話はまとまりにくいし、仕方がない。今朝青杜氏リンスへの出張から帰って来た由で、夕方五時頃から例の椰子樹編集に同人が寄る事にする。ジャンタを出すからと云う青杜氏もこんな事が好きなのだ

―　青杜居へ集ったのが由夫、砂丘、石竹花に俺の四人、ジャンタの仕度が充分してなくて迷惑されたらしいのには気の毒、編集して見ると可成り賑やかだ。とうとう十一時過ぎ迄かかってどうやら整理を終る」と書いているから第一回の編集会議は阿部青杜氏宅で行われているが、自分の宅で編集しようと云い、ジャンタも出すと云い乍ら、後で氏がオリンニョス赴任と決まって日倶で送別歌会を催おした時、「命よりも好きな」と自称する碁を打って居て忘れ、遂々自分の送別歌会にも出席しなかった程のノン父さんの青杜氏だから、夕食に我々が行く事も奥様に話して無かったのかも知れない。

次いで翌九月廿八日の日記に「―朝食の休みに武本君来て椰子樹の編集を始める。仲々思うように行かないので結局夜武本君にやらせることにする。夜学校から帰り、十二時頃までかかって椰子樹の原稿を書く」と記しているから、この日椰子樹が生れるまでの第一号の原稿を書いたのかも知れない。

十月廿日の日記には「―　すっかり心から疲れた。雑誌椰子樹が出来た」

十月廿一日に「夕方総領事の所へ「椰子樹」を持って行く」

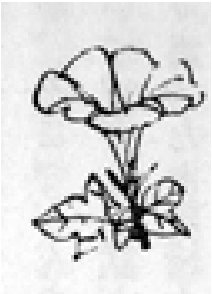
十月廿三日に「――夜石竹花居で由夫氏と三人で十二時近くまで椰子樹誌の歌の合評をする」

十月廿八日には「椎木氏から来信、短歌誌とても良く出来たとほめられる。大いに面目をほどこす」云々と記している。

以上で大体椰子樹発行前後の模様は良く分って頂けたと思うが、第二次世界大戦時の日本書籍や印刷物への取り締まりで、当時の模様を調べる文献は殆ど焼き払われていてなく、保存している私の日記をもとにして椰子樹発行のいきさつをまとめたので、多少私事に関することも出てくるが諸氏のご諒解を得たい。

伯国歌壇に於ける女流歌人の足跡
戦前の女流歌人たち

水本　すみ子



母国日本とのもろもろの絆をふりほどき、希望と不安のないまざった複雑な表情ではるばると海を渡って来たわれわれ移住者達の間に、何日の頃よりか、野火のようにちろちろと燃え広がり、や

き続けられて来たこの短詩型であろうか。
日ならずして消え去った離郷の際の夢と、それに代る荒涼とした原野と、過重な労働と、当然のように課せられた原始的日常生活、これらのあまりにも大きな精神的、肉体的変動に、ともすると絶望的な虚無感におそわれようとする移住者達の乾ききった胸に、ひとすぢの岩清水のように、さわやかに、或は温かく吸い取られ、育くまれて来た短歌ではなかろうか。
母国でのそれなりの安らかな生活と環境に袂別して、遠く他民族の中へ移住してきた私達は、その不自由、不如意に対する反動のように母国の書籍、活字に飢えた。必然的に生れたいくつかの邦字新聞に、憩いの場のように小さな文芸欄が、どの新聞にも見られた。
自由詩、俳句と並んで短歌欄も見逃すことの出来ない存在であった。
昭和四年七月四日、艶やかな永遠の青年的歌風をもつ、鈴木南樹民選に依り、『全伯歌人競泳』が催された際、その応募者は百四十四名の多数にのぼったという。これを見ても如何にこの短歌型が、われわれ日本人の心に深く浸透し、普遍化されて、或る時は望郷の心切なる拠り処となり、ある時は傷心の身の慰めともなって、索漠とした植民地生活に、又とない心の支柱となっていた事がうかがわれる。この時の第一位が後年バストス移住地の名支配人と名をうたわれた松本高信氏であった。

一位　松本　高信

秋そばの丈低くして花つけぬ貧しき
我に似たればいとし

二位　塩月修一郎

もろこしの枯葉のもとに育ちたる莢
ささ豆のふくらみの良さ

三位　河南　節子

つつましく土に親しむ一人をめぐり
て鳴ける昼の蟋蟀

とわが女流が第三位ではあるがユニークな一面を見せている点が仲々頼もしい。

大正末期から昭和初頭期にかけての女流歌人としては、当時イグアペ在住の、大花きみの氏が明星的な輝やける存在であったと云われる。彼女は長野県出身で短歌系統は太田水穂の『潮音』の流れを汲み、その生活詠は『雄渾壮重躍如たる気韻を持ち、逞しい迫力が読者を魅了せずには措かなかった』(池田重二著ブラジル植民短歌史概論による)と云われるが初期の椰子樹誌を繰ると、その第八号に、

若き日の夢は消えうせ今は只暮しのやすき事のみを望む
馬使う術にも馴れて農婦われ早十余年
此処に住みぬる

とあり現在の我々の詠法から見ると、むしろ大変穏やかな詠みぶりである。

新聞歌壇がおいおい活況を呈して来ると中央歌人達の間に漸次短歌誌発刊の気運が起りつつあった折しも、新しく赴任して来られた坂根準三サンパウロ総領事が、着任以来、坂根嵯峨、花瀬群涛、桜井薫、水島十三子の四つのペンネームを持ち、各邦字新聞紙上に縦横に、筆名別にそれぞれの歌風をもたせて作品を発表する等、その超人的な作歌力は当時の溌剌とした青年歌人群を大いに意欲づげ、ついに昭和十三年(一九三八年)十月、純短歌誌『椰子樹』の創刊というところまで到達したのであった。

椰子樹創刊第一巻第一号には、すでに新聞歌壇の選者として高名であった岩波菊治先生を筆蕗に『椰子樹』の名付親坂根嵯峨氏、アララギ直流の歌人で椰子樹発刊の蔭の推進力ともなった当時の横浜正金銀行リオ支店長の椎木文也氏、同じく同時の、文教普及

会社会部長阿部青杜氏など、母国歌壇に於てすでに錚々たる地位をもつ人々の、洗練度の高い重厚を作品群が巻頭を飾っている。

続く『岫雲集』には、瀬崎涛声、武本由夫、行方正治郎、只野拾参（渡辺南仙子）池田垂二、徳尾渓舟の諸氏に続き、葛西妙子、開沼貴代、樋田美沙子、坪内広代、多羅間絹子、木村茅里、須貝さだめら七名の女流歌人たちが華やかに名を列ねている。

短歌にかけるひたむきな情熱が、ときに直情的な言動ともなって種々な逸話の持主ときく葛西妙子さんは当時すでに新聞歌壇に依って名声の高まりつつあるところであった。

葛西　妙子

朝の光うつらふ早し天つ日は椰子の梢を高照らしつつ
朝靄の地平を離れ昇りゆく大き初日をおろがみにけり
夕焼空焦げ極まれる下にして帰る日知らぬふるさとを恋ふ
真撃なる恋にしあらば二つなき身をも魂をもかけましものを
燃ゆる火の炎とまがふ我が性に堅く結べる氷夫はや

これらの詠草にもうかがわれるように揺れやすい豊な情操を以って、時に大自然の様相を大らかな声調で謳いあげ、または感情のおもむくままひたむきな心情をあからさまに表明している。このような短歌に接すると読者側は事の論理をおもうより先に、作者のひたすらな童女的な熱情に圧倒されて了う。

葛西さんの真の本領を発揮された歌はむしろ戦後発表されたものに多く見られるのであるが、しかし戦時中、外国字の新聞雑誌の発刊禁止に逢う椰子樹第十一号までの作品群の中にもすでに十分にそのひらめきは見られる。毎号出詠を欠かさず力作を投稿する作家力も抜群であり、コロニアの与謝野晶子と称せられるようにその赴むくままの大らかな大胆な感情の発露はむしろ羨しいほどの清々しさを呼んで、個性的なその詠草はながくコロニアの人々から忘れられないことであろう。今年初頭一月元旦に永の闘病生活を終えて今は安らかに郊外タボンの、明るい墓地に眠って

おられる彼女である。

開沼　貴代

雲とびて椰子の葉ずれの高鳴ると見しまに早も雨は落ちきぬ
自がまきて培い育みしこの稲の重き垂り穂にふれつたぬしも
助産婦の去りて頼らむ人もなく心細くも日を迎へつつ
身自ら処置する覚悟さだめつつお産の書籍読みあさるなり
老いまさるみ姿遠くしのぶのみ故郷の母に会ふべくもなく

コロニア歌壇に永い足跡を残す開沼貴代さんのこの頃は、堅実な農家の主婦として夫を扶け、子らを養育しつつ、農業と家事の間を縫うようにしては作歌しておられ、そのような充実し切った日常生活の彷彿として来る気息のこもった秀作が多い。椰子樹第六号には観察の確かな作品批評も載せられており当時の中堅女流としての面目がよくうかがわれる。

その後聖市に居を移され、サンパウロ歌会の重要なメンバーであり、三十年後の今日なお若々しく新味のある作品を発表される練達の女流歌人である。

樋田美沙子

頑は我に似つるか吾子の性心わびしくいさめても見し
隣合いて住めば黒女に愛想云へり交る心我もたなくに
まなこ見張りて幼き吾子がささげおり線香花火はすでに火のつけられて
食すことと濯ぎに一日追はれつつ心足らわず暮るるこの頃
一日一日を夫と子にかかずらい、家族とともによろこびかなしみ

ながら、ささやかな日常生活の中より一家の主婦としての、ひとりの女としての哀歓をこまやかに詠いつづけて来られた作者、樋田美沙子さんは、夫君陽荘氏と並ぶおしどり歌人であり光田ひさお氏の実姉である。椰子樹創刊当初より女流中の中堅として確固とした地位をもちつづけられ、その詠法はアララギ風のしみじみとした詠嘆の中にも時折りきらりと個性的な作風を見せるこの作

者は愛する夫と子らを残し、一九四一年に早逝された事は誠に惜しい事であった。

坪内　広代

生きのなやみ共に語りて良し愛やし遠別れゆく君を惜しむも
別れ惜しみ歌えば更くる夜の早し君が眉根の秀づるを見つ
つつましく思いみるかな人の世の一すぢつづく道をさびしみ
吾が歩み人の歩みも大方も見ゆがに思ふ四十路に入りて

歌壇の支柱的存在でおられた坂根総領事との別れが、如何に当時の歌人方を悲しませた事か、その折の『嵯峨大人惜別の譜』に記された歌友諸氏のかずかずの歌に依ってもよく知られる。人一倍人情家の坪内広代氏が心より別れを惜しみこのような歌を送ってなげいた事も今では遠い想い出草となって了ったが、人生の半ばに達してしみじみと自己及びその周辺をふりかえり、思いをめぐらす作者の沈潜された姿勢の見られる後の三首など今もわれわれの共感を呼ぶ秀歌である。

木村茅里

歌なさぬを責められにつつ秘めがたき胸のいたみはまみ伏せて耐ふ
黙し耐ふ雄心切に願ふかも鏡ようつせ静かなる眉
降るとしもあらぬ小雨に池の面の目高の群は動くともせず
睡連の花も閉ざさで雨けむる水面にのびし夕光りかも

幽婉を歌風に依ってその豊富な情操の偲ばれる作品群である。往時の聖州新報社文芸欄の担当者であったと云われる氏の作品には、おのずから滲じむ知性に加えて嫋々とした余韻のある抒情歌である。

師の君岩波菊治氏の評するところに依ると『あの感傷の殻を打ち破り、それを突破しそのよってくる本源を掴み表現するまでに至るならば現在女流歌人の白眉妙子、貴代、美沙子等を断然抜くことであろう』との事であるが、きめこまやかな情感を持つこの作

者がもっと自己に徹し内面的自己を緻密な詠法で表現されたらなおすばらしいものが生れた事であったろうと想像する。無論当時の作品の方向から云えば難は無いのであろうけれど…。

須貝さだめ

日暮れて夫とトマテを移植する子を負ふ我に月の明るさ
我が背の子は眠りたり高台の月明き畑にトマテ移植す
わがのぞみ児にかかりゆき故里を想ふ心も絶えゆくらむか

椰子樹第五号にある渡辺南仙子の随筆『歌人印象譜』によると、前記木村茅里氏は『清さ、つつましさ、静けさ、淋しさ、深さ、しかも侵されない芳香を床しく持っている春蘭である。』というのに対して須貝さだめ氏は『アカシアの花の雌蕊である。太陽を割ったメランシーヤの紅である』という事であるが、まさに適切なピリリと利いた芸術的描出である。聖州新報文芸欄を木村茅里氏め前に担当されていたさだめ氏には『農婦の歌』と題される一連の秀作がある。悠然とした声調の一、二首目の歌がその中のもので、当時の移住者の誰もが体験した農業生活の中で、決して乏しさに屈せず、萎縮せず身をつくして農に生きつつ悠揚として格調のある秀歌を生んでいる。戦前の椰子樹第十一号までの中ではあまり作品の数が多くないので抽出する事が出来ず残念であるが、素材の選択眼、適切な語句の処理法などは氏の冴えた理智と、とぎ澄まされた感性によるものと思う。

多間羅絹子

十年ぶり訪う故郷のことよりも心ひかるるブラジルのこと
波高くわが乗る船のゆれゆれて波のしぶきの花と散りつつ

バウルー領事を勤められ文字通りブラジルに骨を埋められた故多間羅鉄輔氏夫人絹子氏も当時の歌壇をかざる一人であり、素直な作風を椰子樹第一号に寄せておられたが、それきり作品が見当らないのは残念である。

横地　季子

母我は賓客らしも野苺を桑の葉に盛り饗応せらる
帰り来ぬ人と知りつつ耳すます小夜の嵐は雨を交へつ
雨音に似て燃ゆるなり七月の夜空明るく野火移りゆく
けもの鳴くするどき声の一しきり聞えずなりてほのほ音たつ

数多の女流歌人の群の中に、或は一沫の水泡のように幾何もなく水面より消え去るものの多いなかを、三十年後の現コロニア歌壇の重鎮として、今なお伝統を踏まえた落着きの中に近代的詠法を高くもり上げ、さらに知的な抒情を加えた作風をもつ、横地季子さんこと西田季子さんのつつましやかな初期作品が見られるが、この頃より行届いた語法と緊密な配置はすでに後年の透徹した精緻を作品群を偲ばせるに充分である。

志津野華絵

当然の事のごとくに再婚の話すすむる人と居対う
わだかまる悲哀もちて悩みなき人と語れば心苦しも
追憶の想ひに泣きつ慰みつかく生きゆかむわが命かや
あからさまに日記には心書き綴り慰めを得て寝ぬる夜毎を

現在ペレーラ・バレット市に住んでおられる志津野華絵氏が、その頃最愛の夫君を亡くされ、悲嘆の底より短歌に拠り処を求めつつ、残された子らと姑を双手に抱え乍ら雄々しく人生に立ち向おうとする姿が椰子樹の誌上に見られる。素直な心情と堅実な作風をもつ華絵氏の存在は、当時の歌壇にはなくてはならぬものであった。

玉木　梅

夕立の雨足早く通学の子らの帰り路いく度かみる
秋深み背戸の小川のせせらぎも夜はさむざむと身に泌み聞ゆ
緑葉のうつる小川に衣濯ぐ手許かすめて魚のさばしる

これらの詠草は椰子樹第八号の競詠欄第一位に載せられた、今は亡き玉木梅さんの秀作で、梅さんはおそらくコロニア女流歌人中

の最年長者ではなかったかと思う。手がたく心の行きとどいた作風で永くコロニア歌壇に親しまれた老練の歌人であった。

安部　栄子

ものかしぎ物を濯ぎて繕いて我には楽し日々の仕事も
夕ざれば風おさまりし背戸川に声とよもして蛙鳴くなり
密柑の花ここに散りしく木の蔭に子を遊ばせてもの濯ぎおり

同じく競詠欄第三位の安部栄子さんの詠草である。安部さんは玉木梅さんの息女であり、その詠風はさながら人情味豊かな栄子さんその人を想わせてほのぼのと温和な味いである。栄子さんも三十年後の今日なお、いよいよ歌境を深めつつ精進しておられる貴重な歌人の一人である。

原　恵津子

心合ふ若き外科医のあるという恋打明けし友の文来ぬ
去年植えし草花咲けりその色の桜に似しを愛しと思ふ

唐沢（旧姓原）恵津子さんの青春時代のナイーブな作品も初期の椰子樹誌に見られる。

この他昭和十三年十月発行の椰子樹創刊号『十月集』欄に次の女流歌人の卵たちがいっせいに名を列ねている。

坂根　雪江

二、三人白き衣きて黒ん坊の楽しげに行く街路樹の蔭

長内　チエ

冷えびえと短かき冬の足どりのわがつま先に歩み来るかな

悠紀子

たたずめる我をめぐりてひそやかにもの云ふごとしさぎりふる朝

荒木　浅子

枯れ果てし荒野の中にうぶらなるトマトは赤くうれそろいけり

美保　洋子

雨やみし真昼の空の曇りつつ桃の小枝につゆ光りつつ

青木　春子

色づきしカフェーの枝を手折り来て我は供へつ父の仏前に

小川　和子

あしびきの山かと見れば雪なりし夏の夕べの遠空の下

山下　澄江

鍬おきて筧の水を口づけに飲みてぞ暫し木蔭に憩う

古山　暁子

また逢はむその日も遂に果敢なしや虚空に描く光にも似て

水上　けさい

木かげにて涼みつつ見ればバラの花昼たけし日に光りつつ咲けり

仙田満寿子

墓の土やや低くなりぬ土くれを盛りつつ思ふ逝きし日の事

これらの中で戦前歌人として比較的短歌生命の長かったのは、古山暁子、山下澄江、それに仙田満寿子氏ら三人位であろう。この他当時の文教普及会の阿部青杜氏の女生徒達の作品も見られるが、やや稚ないもので創刊号以後は全然発表されていない。

満州事変より日支事変へ、そして日米開戦へと次第に拡大されてゆく戦況に心をいためつつ、きびしい戦時下の母国を遠く偲び、ブラジルに在ってさえ、母国民と歩調を合せ、ひたすら自粛しようとした当時のわれら邦人であったのである。

三十年以前の、いまだ邦人コロニア間の生活基盤も確定しておらず、大方の歌人達が、広野に吹き散らされた雑草の実のように大地にしがみつき乍ら、或は都会の片隅にこつこつとひとりの生を刻みながら詠い続けられてきた短歌である。時には綿々とした望郷のうたともなったが、女流の歌には主として万事不如意がちな異国の生活に黙々と耐えながら、与えられた宿命に素直に順応しつつ、律気に生きて行こうとする当時の張りつめた移民妻の姿

がまざまざと見受けられる。上掲の女流歌八方の作品はいずれも椰子樹初期のものであり、ほとんどが地方より投稿されていたもので、身近に指導を受ける先輩方もおられず大部分が独学で歌の道に励んでいたものと思われる。したがってこれら女流歌人達の真実の意味での代表的な作品は、むしろ戦後にこそ多く見られるのである。

母国歌壇の影響と近代感覚の目ざめに依り、次第に変容しつつ個性的な色彩にとむ、現伯国歌壇と比較して、初期のそれは総じてアララギ系統の島木赤彦の直弟子と云われる岩波菊治氏の薫陶により、「自然をありのままに写す」観照的客観描写が多く見られる。現代のわれわれからみると、語法の制約などかなりきびしい時代であり、おおむね詠嘆調ではあるが決して生活より逃避してはおらず、素直に肯定しながら明日への基礎を底深く築きつつあった時代である。

自らの日々を充たしつつ励むその姿勢は、確かに前向きの、風雨に耐え得るものであり、明日の歌壇の自由な個性の見事な開花を包含しての未来ある積極的な姿勢であったのである。

戦後の伯国歌壇における女流歌人の足跡

開沼　貴代

椰子樹百号記念号を発行するについて私は、「戦後の女流歌人の足跡」というテーマを指定された。椰子樹が再刊されてより昨年いっぱいで二〇年になる。戦前の発行期間が五年程であったのに比らべれば、戦後はその四倍にもわたる年月である。

再刊当時はごく少数であった女流歌人も、コロニアの経済力増進と共に、年毎に増加してきており、現在は男性歌人を陵駕せんばかりの趨勢にある。

二〇年の間には、颯爽と歌壇に登場してその将来性を注目されながら、いくばくもなくして消え去った流星的女流歌人も少しとしない。

それらの人々の足跡まで記すことは資料に乏しく、また、限られた枚数では、記録的にくわしくと云うことも不可能なことなので、数ある女流の中より私なりに考えて、何らかの意義をもつ短歌活動をしたと見られている人々に重点を置いて稿をまとめることにする。したがって心ならずも書きもらした人々や事柄も多いと思われるが、その点はご了解をお願いしたい。

資料は椰子樹を中心に、パウリスタ紙、日伯毎日紙の新聞歌壇はなやかなりし一時期を参考にした。他の刊行物の歌壇で活躍した歌人でも、ほとんどの歌人はみな椰子樹に加盟しているのであるから、椰子樹を中心にして稿をまとめるのが妥当であると思われる。

一九四七年五月、コロニア短歌人の待望に応えて再刊された椰子樹第一二号はガリ版刷り三八頁で、戦前号に比らべて貧弱を体裁のものであったが、編集武本由夫、会計徳尾渓舟のこの再刊にかけた烈々たる意気ごみは、その後記の文章の行間にあふれていた。

作品一には、岩波菊治、瀬崎涛声、行方正治郎、小田切剣、徳尾渓舟、武本由夫、中山稠子の指導者級、作品二には、清谷益次、葛西妙子、坪内広代、中江克巳、天津夢城、仲真美登里、八巻培夫、則近正義、開沼貴代、小鴨、不二山南歩（序列は以後も掲載順）などであり選歌欄には、上村登志行、古沢典穂、西田季子をはじめとして二八名であった。

全投稿者四八名で再刊椰子樹を形成しているが、その中で女性

は先にあげた他すみれ、則近左稚子などわずかに六名であった。九九号現在の男性二八名対女性二五名と云う女流の隆盛ぶりは、当時においては誰にも予想し得られぬことであったのである。

その後、コロニアの戦後の混乱がしずまり社会情勢が落付くにしたがい、戦前の同人誌友が復帰してくると共に、また新しい同好者の参加もあい次いで、椰子樹は次第ににぎわしくなっていったのであったが、女性歌人はまだ少なかった。

コロニア歌人が師表とする母国歌壇では、戦時中の空白、戦争協力自己反省などの問題に加えて、短歌第二芸術論などの展開で、テンヤワンヤの混乱ぶりを示した時期があった。その影響は当然のことながらコロニア歌壇にも及んだが、年月の経過につれ混乱も落ち付いてゆき、歌人各自が短歌の本来あるべき姿勢、方向を探求して研鑽にはげみ競うように精進を重ねつつあった第三〇号あたりまでが、戦後のコロニア歌壇が一つのピークを成している期間であったと云い得る程、この頃の歌壇は活気に満ちていた。

日本語刊行物が四邦字紙の他、雨後のタケノコのように出版されるにつれ、コロニアの文芸熱も急速にわきあがり、各紙が歌壇、句壇をもうけてこれに応えたので、各地に歌会が生れ、地域的な大会が開かれるようになった。その機運に乗るようにパウリスタ新聞社が、同歌壇選者岩波菊治の五十才の賀をかねて第一回全伯短歌大会を開催したのは一九四九年であった。出席者五九名の中女性は北島文子、坪内、丹坂琴、相場峰子、西田、三浦、玉木、開沼、樋田玲子、葛西の少数で、作品成績は現在と逆に断然男性優位で上席を占めてしまい、女流はやっと七位に田辺道子、八位に開沼、佐々木ゑみ、笠原邦子が喰い込んだに過ぎなかった。椰子樹女流の三羽烏などと云われていた葛西、開沼、西田もこの大会に出席して他の歌人同様初めて対面したのであった。この後大会は現在に続いて開催されているが、葛西妙子は地元に住む利点もあって、十週年の折りにパ社より無欠席を三浦朝江と共に表彰さ

れている。

なおこの大会は全伯と云っても出席者のほとんどが聖市内か近郊在住者であった中に、折りから農繁期中にもかかわらず只一人の地方参加者として、はるばるノロ線奥より開沼貴代が駆せ参じている。レジャーブームの今日とはちがい、当時の日系植民地の旧弊な慣習からみて、婦人が一人で男性が主な会合に出席するなどは、経済問題とは又別な対世間的に強い抵抗感なしには実行なし得ない時勢であり、とても勇気のいることであった。短歌に一途な情熱を持ったればこそ実行出来た行動と云えよう。

この頃の短歌復興熱に応じてアサイで開催された第三回北パラナ短歌大会に、岩波、瀬崎、吉本に同行して葛西妙子が聖市より空路を文字通り駆けつけ出席してパラナ歌人を喜ばしているし、翌年のロンドリーナ同大会四回目には、瀬崎、行方、酒井の先進と共に、西田季子がサンロッケより出席し、帰途はプ・プルデンテ特別歌会に出席している。

第一回全伯短歌大会が催された後の一九四九年八月発行の椰子樹第二〇号には詠草欄、選歌欄を通じて短歌作品発表者数は九二名、その中女性は二二名であった。一八年後の現在数五〇名内外に比べて大変盛んであった訳になる。現在の短歌作品が質的に高度の水準にあることは認められるが、作歌人口が大巾な減少を示していることは、手放しに楽観しておれぬ現象ではなかろうか。

この二〇号の女性作歌者の中より、批戦的永続した氏名をあげると、葛西、坪内、開沼、西田、安部、中井（芙蓉）、早川千代子、小林寂英、玉木梅、武田五百子、福田夕月、簀戸勝子、則近左稚子、三浦朝江、唐沢恵津子、田中八重、仙田ます子、樋田玲子などの名がある。左稚子は則近正義の令妹であり、玲子の亡母は戦前歌壇にはなばなしく活躍した第一線歌人であった樋田美沙子である。この二人と後に登場した父娘歌人の越村定雄の愛娘である由起子の三人は乙女歌人であり次代の歌壇を擔う女流と歌界の嘱

目を浴びつつ精進し、歌境もかなりのレベルに到達したのであったが、惜しいことにいづれも現在は沈黙して久しくなる。

五二年五月の椰子樹三〇号になると新顔女性として前記の他に森重扶美、越村由紀子、小竹清子、三浦久和子、弘中千賀子など。五五年二月の第四〇号には新らたに植村かず、岩波とめ、重道千代子、望月喜恵子、清水節子、三牧はら、片岡けい子、吹本菊子、平松かすみ、渡部チエ、陣内しのぶ、小笠原富枝と現在歌壇の第一線で活躍中の女流歌人のほとんどの顔が出揃った感がある。

五七年一月の第五〇号では先にあげた人々の他に、西村智恵子、大沢愛子、古沢千代子、渡辺昌子らが、第六〇号では新たに水本すみ子、石塚やすが現れていて女流の進出がめだってきたが、反面、男性歌人の減少がきざしはじめている。

戦後の邦字紙歌壇、椰子樹、各地歌会を通じて活躍した女流の数は歩くなくはないが、長期に渉ってもっとも活動した女流といえば、葛西、開沼、西田と人々は云うごとく、この三人は共に戦前のブラジル時報歌壇で育って来た仲間であり、後に武本由夫選者の日毎歌壇の初期、二期時代に他の歌人を抜くような意欲的な作品活動を示したものであった。

葛西妙子が作歌に志したのは渡伯後十年を経た一九三七年頃で、当時独身青年であった徳尾渓舟が選者として懇切に情熱を賭けて投稿者の指導をしていたが、その言葉に魂をゆさぶられて既に中年になってからはじめて短歌の世界に一歩を踏み出したという。彼女が短歌に賭けた情熱はすさまじく、恵まれた才智を思わす豊富な詞句を縦横に駆使して、自由奔放なまで想いを表現した作品は明星派風で、その頃の代表作と云ってもよい作品に次のようなのがある。

真摯なる恋にしあらば二つなき身をも魂をも賭けましものを
燃ゆる火の炎とまがう吾が性に堅く結べる氷夫はや

これらは晶子調であるがしかし、このような作風に一貫していた訳ではなく、

四方の色いまだ暗けど野のはたて地平はややに白らみそめたり

うら寂ぶる心やりどに庭に出づでんでん虫は蘭の葉にいる

この二首は静穏な境地を思わせるすぐれた写生歌である。また

〝葛西なら尚更駄目だ〟と野次るに向きて云う〟私葛西の母よ〟

この歌と最初の歌は直情径行であった葛西妙子の面目が躍如とした歌で、前のは偽りない女心の心奥を衝いているし、後者は野球投手の子息を持つ母の誇りをよくうち出している。戦後間もなく出聖した後は日毎歌壇、歌会などで活躍し未だ女性のすくなかったサンパウロ歌会の女王的存在であった。「私の生活は短歌が第一です」とは彼女がよく他に語った言葉であるが、広い抱擁力で妻の自由をみとめていた理解の深い夫君に恵まれて、思いのままに作歌活動をつづけ、その言の如く一九六〇年病床に倒れるまで短歌に賭けた情熱はその後半生を通じて燃えつづけ、いささかも衰えることがなかった。

彼女が倒れる直前の椰子樹第六四号は葛西、開沼、西田の三女流の特集を出しているが、それより七年あまりついに再起することなく六七年十二月三一日に惜しくも他界したのであった。

坪内広代は主に椰子樹、サンパウロ歌会で活動したが、長年幼稚園を経営幼児教育に献身し多忙な生活ながら作歌にはげみ、その校舎で歌会も何回か催しているが、いくつかの分校も開設していて多忙を極める生活からいつとはなし沈黙していたが今年二月故葛西妙子追悼歌会を自宅で催した。ピネイロスに葛西が住んでいた頃より親しい交際があり、どちらもビーラソニアに移っていたのであった。

マリリア近郊に在った開沼貴代がコロニア歌壇に仲間入りしたのは昭和一〇年頃のブラジル時報新年短歌に初応募し二位に入選した時からである。その時の一位も女性で名は失念したが「古郷の鈴鹿山脈今日越えて母の便りのこよと思えり」で流麗な調べの望郷の歌であった。彼女の作「童らと野風呂のほとり焼芋を賞でつつ語る満月の宵」は今みれば幼稚な作だが、しかし、ローカルカラーは出ているといえよう。戦時中の弾圧化の中で故渡辺春洋、井出弘、有田市治地十余名の青年等の提唱により短歌回覧誌「春秋」に協力指導した。終戦直後の四五年九月六日にマリリア市富吉好人居に歌会を催し河村、荒木、大原等と出席して短歌の復興をはかったが、はしなくも日本の勝敗問題がからんで中絶してしまった。

四七年二月渡伯後はじめて出聖しモジに岩波菊治を訪問感激の対面をした。すすめに従い一泊したが夜明の三時頃まで語り合ったのち床に就いたのであったが、感激し眠れぬまま側の書架の歌書を読み一睡もしなかった。また徳尾恒寿、清谷益次と会い、なおなお短歌信仰を深めたのであった。帰郷後菊治への書信にしたためた当夜の感激を詠んだ歌を、菊治がパウリスタ紙に発表している。間もなくビリグイ奥に転住した後、佐藤貞一が編集発行した歌語「青桐」に協力し、またサントポリス歌会を結成し椰子樹誌友獲得につとめた。その頃プロミッソンの多羅間絹子に招かれて同邸で開かれたリンス・カフェランジャ合同歌会に出席している。この会合が後にノロエステ短歌連盟を結成する基縁になったと云えよう。このノロエステ連盟は全伯短歌コンクールを主催し後に、日毎主催になりその後モジ短歌連盟が引きついだ。四九年初の全伯短歌大会に奥地より只一人参加したのは先に記した通りである。五一年三月のアララギに初投稿した歌が入選した時、本人がアララギを未だ入手しないうちに岩波菊治は折から肩を打って右手の不自由ななかを、いち早く喜びの手紙を呉れている。五

六年再度の霜害に逢いカフエ育成を断念し一家をあげて出聖するまでに、リンス、アリアンサ、バストス、ポンペイアその他の歌会に度々出席し婦人層に作歌をすすめてきた。

寂莫の真夜の高空にオリオンは劫初よりなる光芒放つ

風のなき真昼ざくろの緋の花に蜂雀一羽しばしまつわる

素直に夫に抱かれ聞きいつつ吾がこころ和ぐと云うにあらなく

躯を灼きし愛憎もいまは淡々と添う生もすでに二十幾とせ

などの作品があるが、これは代表作と云うのではなく、手許の三女流特集号より取り上げた。葛西、西田のも同様である。

西田季子の経歴は、〝三女流特集号〟の本人の書いた〝私の生い立ちと歌歴〟によると、その幼少期より青春期にかけての境涯は、葛西以上に波欄に満ちたいばらの道であったようであるが、西田と対っていてそうした過去の暗いかげりを感じないのは、彼女の人柄にもよろうしまた恋愛結婚をしてよりの充された生活が、過去の不幸を償い消し去ったともみられよう。渡伯は一九二五年の葛西より五年後輩であり、開沼より四年先輩に当るが、彼女もお定りの苦しい移民の経路を経て、現在のサンロッケに落ちついてより、歌人との交際が始まり本格的な作歌活動をはじめたのであった。

再刊十二号より同人に推され、十四号ではメッタに讃めたことのなかった岩波菊治の〝今回の作佳し。精進されたい〟の短評付きで一躍その二欄に進出した。椰子樹の他、新開歌壇にも活躍したが、おしむらくは葛西、開沼に比し寡作であった。日毎歌壇全盛の頃同歌壇選者武本由夫が、第百回を記念して作品歌論集〝木棉の花〟を発行したが、その写真紹介に女性では葛西、開沼だけで西田がもれたのは、彼女の作品発表がさきの二名よりずっと遅れた為めである。

在マイリンケの玉木梅、五男現在は日本に在る中山稠子と共に、度々歌会を催している。カンポス歌会にも、岩波、瀬崎と、また葛西、開沼とも同行して度々訪づれている。全伯短歌大会の欠席は只一回くらいで歌壇の主なる行事には参加してきている。次に西田の作品をあげる。

裏庭に花移し植えてよろこべる子に告げがたし移転のこと
幸福とはかかるを云うか凩の夜も頬赤き児かたえに眠る
思い出に泣く日もあらむ斯く睦み斯く争える三人の娘等よ
追従の一日も過ぎぬと仰ぎ見る天使立像没陽に映えつ

安部栄子は戦時中よりカンポスに住み、カンポス歌会の中心となり佐藤一英と共に多年にわたり同歌会を育成してきた。椰子樹には一時欠詠がちの時期もあったように見えながら、その実たゆまぬ精進をつづけていた。多分戦後の椰子樹発表歌数は女性では三位と下るまいと思われる。往年の中井小鴨に次ぐ短歌一族で母は玉木梅、弟に玉木五男がいる。玉木梅も再刊椰子樹より熱心に作歌を続けてきて歌境の進歩いちじるしく詠草一に進出して間もない六三年七月、娘である安部家でのカンポス歌会に出席し、聖市歌人多数と交歓した後旬日にして同家において眠るが如く安らかに永眠した。

佐藤一英が十年間にわたりカンポス歌会合同歌集を編んできたのも、もとより佐藤の並ならぬ努力と熱意があったればこそであるが、物心両面にわたると思われる安部の強力な支えと援助がどれほど佐藤を勇気づけたことかと思われる。

安部栄子の作品を次にあげる。

朝霧は流れて止まず飯を炊く厨の窓は昏くとざしぬ
子等と共に登る朝の山路より見さくる吾が家霧にかくるる
夜べの雨朝ははれて目路遠きミナスの山に雲海の見ゆ
術なきこと想うは止めむ霧晴るる汀に咲ける睡連の花

中井芙蓉は中井小鴨の次男の嫁に当る人で一時は舅姑である小鴨、

すみれなどと一族こぞって短歌にはげんだものであったが今は只一人となって精進を重ねている。現在は聖市在住、次の様な作品がある。

裸木と思う庭木の若萌えのさやかにも見ゆ澄む空の下

我家をめぐる数本の落葉樹芽ぶき明るく季うつりたり

窓近き山いちじくの芽ぶき枝に群るる小鳥の鳴き日もすがら

またアルゼンチンより〃心の花〃系統の石井衣子もある期間椰子樹に歌を発表していた。戦前の聖州新報歌壇を担当したことのある婦人記者であった須貝さだめと木村茅里も何回か歌を寄せたがいくばくもなく沈黙して現在に至っている。

椰子樹が戦前並みの活字印刷になった第一五号に戦後はじめて〃薫風選歌の感想〃を開沼が書いてより、第一九号に葛西が後に西田とつづいて現在では作歌の面ばかりか文章の分野においても女性の活動がめざましい。

旧くより作歌活動を続けて来た葛西、開沼、西田の三名には風当りも強く常に遠慮のない批評をうけてきた。忌憚のない批評こそは作品向上に役立つものであるが、文法上誤用でない作品も誤用であるとして叩かれたこともあった。西田季子はたまりかねて〃せせらぎに就いて〃なる反駁文を書いたこともあった。後にそれらの作品は決して誤法でないことを国学者の茂村徳太郎氏が書いている。現在のサロン的批評ムードには程遠いきびしさであった。女性であることがマイナスになる場合も多かったのであるが、この三名はよく苦渋に耐えぬき作歌活動をつづけて来たのは、短歌に深い愛情を持つ者の揺ぎのない姿勢を示していると云えよう。

五六年頃より五八年頃にかけ作歌力旺盛を新進歌人達が月刊誌〃はちどり〃を発行したが同人として弘中千賀子、小笠原富枝、大沢愛子が活躍した。

五八年の椰子樹賞第一回は新人小笠原富枝が獲得し、その後小竹清子、弘中千賀子、陣内しのぶ、水本すみ子、高橋よしみと女

流が受賞した。水本、高橋は歌壇へのデビューはおそかったが良き指導者を得て進歩はきわめてめざましく、たちまち第一線に進出したのであった。

不運にして椰子樹賞は得なかったが受賞者に劣らぬ実力を持つ人に、森重扶美と藤田美砂子がいる。森重はバストス歌会育ての親として多年会員指導に当り、歌会数二百回というコロニアでは最高の記録を出しているのは高く評価されている。

藤田は短歌勉強には不利な遠地で一人でひっそり精進を重ねつつ独特の歌境を深めていてその力量は高く評価されている。戦後間もなくの〝よみもの〟誌に発表した〝児を産んで久しくなるので乳房がしなえ夫に抱かれると寂しい〟と云う意味の歌が問題になり、新聞紙上で可否両論が沸騰したことがあった。筆者は藤田のショックを思い歌を止めるのではないかと心配したものであったが、さすがに彼女は短歌根性をもつ一人で今日の深い歌境に到達したのである。

六四年、彗星の如く現れた細江仙子はユニークな作品〝異質の季〟を発表した。繊鋭にしてフレッシュな抽象詠は、マンネリズム気味のコロニア歌壇を魅了したかに見えた。また、短歌に新しい生命をのサブタイトルで〝私の作歌姿勢〟〝私の見たコロニア歌壇〟などの評論を発表し、コップの中のコロニア歌壇をはげしくゆすぶり〝細江旋風〟の語が生れた程コロニア歌壇に大きな影響をあたえた。作品〝二世〟の力作を八回にわたり椰子樹に発表した後、惜しくもこの異色の歌人は日本に帰ってしまった。

椰子樹運営面への女性参加は六一年文協図書館勤務の地の利をもって開沼貴代が総務部を担当させられ、次年には弘中千賀子が会計を、現在は水本すみ子が会計をあずかっているが六八年後半期よりは、梅崎嘉明、佐藤博三と共に水本すみ子、高橋よしみの若手が編集運営することに決定している。旧るきを知るものにとっては、コロニア歌壇の女も強く成長したものと感慨は深い。

現在のコロニア歌壇はまさに百花繚乱のたとえのように女流全盛時代である。西田、小笠原、弘中、陣内、藤田、森重、小竹、水本、高橋など男性歌人の影を薄からしめる程の存在であるし、中でも小笠原のデリケートな素材把握のしかたは誰にも真似られると云うものではない練達の境地に達している。それらに続く新進の期待される人々に清水そとえ、北原しのぶ、梶田きよをはじめとして大勢いるが、これら新鋭女流の足跡はこれから刻されるのであるが、また、ベテラン女流達の足跡が今後もながく続くことを希ってこの稿を結びたい。

すでに指定枚数を超過して物故女流消え去った歌人については書くことが出来なかった。椰子樹は戦後がながいのである。文章をつづめるため敬称を略させて頂いた。

日本歌誌への入選作品

梅　崎　嘉　明

一九五九年度

短歌研究新人賞入選

新納　潤魚

草を焼く煙あがれり谷沿いに土民ら黒き豆蒔く季なり

たち騰る積乱雲に対いつつト占う如き眸をもてり

耳朶のうしろまで赭く陽に灼けどいまだ精神にやさしさ失せず

船員となりしゴーギャン船腹に珈琲をつめ去りにし想う

民話なき冬山昏らみ夕の飯ひかるを視たり再生の民

一九六〇年度

短歌研究新人賞入選

大場　時夫

奪われし夢訴ふることもなき褪せて陽炎のごとき土民史
採石の跡白々と乾きつつ山は血を吹くことさへ知らぬ
南回帰線ぞいにのびたる保護領の山層なしてパラナ傘松
谷の禽は谷より出でず野の禽は野より降り来ず呼び交しつつ
滝飛沫白々とこめて暮るるとき岩露草の露深かからむ

一九六三年度

短歌研究新人賞入選

米沢　幹夫

自らを欺くこころ晦くして鍬だこ固き手のひらの中
保護色をもたざる蜥蜴たわやすく撃たれて今日もはげしき夕焼
連れだちて言葉素直にかわしゆくこの混血児かげりを持たず
先駆者の墓標かたむく草のなか記憶をもたぬ風わたりゆく
椰子小屋に蜂鳥の雛かへりつついつまで待てばくる倖せか

一九六三年度

短歌研究新人賞入選

弘中千賀子

サラダ菜が水をはじきてたわやすく人容れぬ吾をそしる声聴く
いたわりの心もたざる言葉きく間接照明やわらかき部屋
何程のつながりならむ受話器を置きて出でつつ不意に虚しき
やや短かく切りたる髪を触れしめて青き耳輪の耳朶がつめたし
過ぎゆけばなべて愚かな思ひともならむ乾季の空濁りゐて

一九六二年四月、及び六四年十月「主婦の友」入賞作品

石塚　やす

修理していたる工夫が声ひくく梯子の上にて通話をはじむ
政変の不安をよそにサンジョンを祝ふ熾烈な焚火のうなり

以下日本歌誌への投稿歌、各結社より一名を上げる。　順不同

「歩道」　丘　佳三

湖の上かすみけぶらひ水白く照る昼下り洲の草くろし
昼さがりの陽に低地帯ひろびろと緑泡立つ如きかがやき
暖かく冬日のみつる広き原下萌みえて草騒ぎをり
死の色と思ふ淀みのダムひとつ見つつ佗しむ動きなき水
緩慢に動く湖水にとけきれず固き濁りの淀む橋した

「まひる野」　酒井　繁一

物音の絶えにし夜にわれ覚めて生活力を想いつつ居り
吾が生きる範囲にあらぬ境界に踏入りし如き二三日なり
蚤などを床に棲ませぬ清潔を妻も己れも心がけ来つ
文鎮に貰いし石を掌にとりて時には吾の温みを移す
没つ日の光ながくあり一日の疲れは家に帰り治さん

「アララギ」　小笠原正好

レコードを外し鋭き声たてて学生デモの立場言う吾子
カトレアの甘き香りよ思わざるときに遇ひもを告げるべく立つ
草木の硬はくなりたる風の中飄々と来て口笛を吹く

「水甕」　大沢　愛子

袋の口開きて尼僧が寄捨を乞うお盆の基地の人ごみの中

赤青黄すすきを染めて売りており墓地の辺故に何かなじめず
内臓も骨つき肉も器に盛られ売り手も買い手も無慙さ知らず
飛ぶ穂絮を追う孫見守りさんさんと真日さす原にいこうひと時
朝露が木の葉のへりに玉なすを孫あやう気に捧げて見する

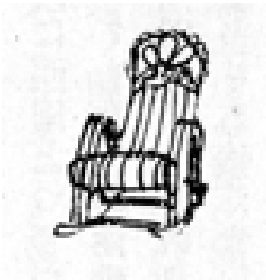
「林間」　　瀬古　義信

吾が隣に掛けし娘が大胆なポーズに白き脚を結みたり
車より下りし葬儀屋門柱に喪章の布をそわそわと縛る
結局は雨より外に作物を太らすものなき大陸農業
一と日にて斯くも緑の色増すか一雨うけし夏の豆畑
喉かわき居し時清水飲みしごと照りの豆畑息づける見ゆ

「佐紀」

働くを生き甲斐のごと励み来ていとまある日は背筋が痛む
放埒な心おさえつつ日々生きて温厚と言わるる時に苦笑す
湖ぞいに一すじ長き径ありて燃えたつばかりカンナが紅し
いづべにか声くり返す蛙居て昼あたたかく墓に降る雨
父上を労りし思い出一つなし訪い来ては墓地の雑草をぬく

其他宮中歌会、明治記念綜合歌会への入選歌もあるが、歌誌でないので省略したし、椰子樹誌と直接関係のない歌誌への入選歌は紙面の都合上割愛した。



短歌の論争

戦前の歌壇から

徳尾　渓舟

伯国に於いて、短歌は古くから新聞雑誌の一部に必ずと云って良い程発表せられていたが、歌に対する論争と云うような事はあまりなかった。

本格的な歌壇として、古くから日伯歌壇の選者をしておられた故岩波菊治氏当りも、ただ選だけで、批評なぞ殆んどされる事もなく、まして論争と云うようなことは氏の性格もあってか全然しておられない。それに歌壇も新聞雑誌の一部に文芸欄として開放された僅かなスペースにおさめられていたから、それ程みなの関心もなかったのかも知れないし、またそれだけ熱のある歌人もいなからたのであろう。

椰子樹が発行される頃には大体岩波氏を中心として、その弟子格の若手連中の武本、鴨川青夢、石竹花、住吉砂丘に僕渓舟、あたりが、歌会なぞ開いたおりには批評に可成り花が咲き、また論争にも厳しいものがあったけど、大体みなの傾向が同一でよくまとまっていたので、歌に就いて紙上に於いて論争すると云うような事もなかったのである。

従って本椰子樹誌上では作品の批判は活発にあっても、その論争と云うような事は無かったように思う。

単調と云えば云えたにしても、総べてにまとまりがよく、戦前はコロニア歌壇の良き時代でもあった。だから短歌の論争が新聞紙上に見られるのは、筆者がブラジル時報に入社、文芸欄を担当し、特に歌壇に力を入れるようになった、一九三五・六年頃から

だと思う。

だが、コロニア歌壇には何んな論争があったのだろうか。第二次大戦中の当局の日本語に対する取締まりで古い文献は殆どなくなり、知る事が非常に困難だが、幸いブラジル時報の営業部長だった黒石清作氏の厚意で、製本して保存してあった（途中大分逸散している時期もあるが）時報紙を調べる事が出来たので、それに従って簡単乍ら短歌論争のあとをたどって見たい。

前に述べたように、以前には論争と云うような事はなく、たまに歌人以外の文芸人の歌の批評と云うようなのが多い。例えば、昭和九年四月十八日（一九三四年）その第九七七号に古野菊生氏が、三月文芸欄としての一般コロニア文芸欄を批評している中に、

秋来れば独り居り居てひたむきにくらしを思う性を哀しむ

沢　某氏

の歌を賞しており、更に同年十一月、最近の文芸欄として同氏が各邦字新聞、農ブ等に発表された短歌にも批評を加えているが、それに対する応答は全然見られない。

大体邦字新聞雑誌は歌に対する関心も薄く、投稿者も少ない故もあってか、いくらも紙面を開放しなかった中で、ブラジル時報だけは特別厚意を持ち、時々懸賞短歌を募集したりしていて、筆者の短歌なども同紙歌壇で育って来たようなものであるが、その時報社の編集部に一九三六年一月縁あって筆者が入社し、仕事は翻訳の方だったが、文芸欄も任せられるようになり、自分も好きだったから特別に文芸欄のスペースを要求出来るようになり、殊に短歌を厚遇したから、この頃から伯国歌壇も可成り賑やかになり、今伯国歌壇の先輩として活動している人達は殆ど時報紙歌壇とつながりを持っていたと云っても過言ではなく、批評や歌論なぞも活発になってきた。

昭和十一年（一九三六年）九月三〇日、一二四六号の同紙に阿部青杜氏は前九月一六日の時報歌壇は質量共に空前の盛況であっ

たと述べ、葉山幸子氏の

しみじみと空の真洞（まほら）の澄透りしみみに冬の光りとどきぬ

かにかくに山に住むてうけうとさに慣れて気安くあり経んと思う

等の一連の歌を渡伯後始めて接した本格的短歌と思う、と可成り長文の批評を書いているが、これがまた当コロニア歌壇に於いて本格的批評の行われた最初ではないかと思うが、右に対しても別に反論は出ていない。

日伯歌壇は「ひな段式歌壇」と呼ばれていた程年中枠にかこまれた中に納められ、おとなしいものであったが、時報では組み方も変え、また題も何々集なぞとつけ、私がまた、かけ出しのくせに盲蛇ものに怖じず式で種々批評をつけたりしだしたから、時報歌壇はみるみる活気を呈して来たが、当然私に対する風あたりも強くなり、短歌以外の文芸グループの人の中には表面何気なく交際していながら、陰では中傷的な事を云っていると云うような事が私の耳にも入って来ていたが、全然意にも介せず、歌壇で活躍している中に、一九三六年十月六日の聖州新報に「短歌批評の鑑賞」――ブラジル時報紙渓舟氏に与う――チエテ・タンキスト、として私の短歌批評やら連歌態度に言及し「歌に精進せんとしている者に障害となる言辞を平気で云っている厚か間しさと、自分の作品をにんまり眺めて悦に入っている馬鹿な態度が許せない」と云う。意味が通らないから採らなかった幽情（中村）夢城（天津）氏等の歌と、佳作として採った

病室に入院して行く幼き姪送り来たれば夜の駅さびし等の歌を比較し、これらが短歌佳作として認められるなれば、そして読む者をして感動せしめられるならば、短歌滅亡論は過去に於いて既に肯定され、短歌は既に清算されているだろう―と云い、更に「渓舟が多作を慎み推敲に努力されたいと云っているが、専門歌人で

も線香一本三首だの一時間何百首だのと、材料を逃がさず早く掴んで纏める工夫練習している事を知らないらしい」と云う意味の論を発表したのに対し、直ぐ「タンキスト氏に応う」として、お互いほめたりほめられたりしているような批評をして上手ぶっている。意味が分らないので採れないとつっ放すとは不親切と云う事について反駁しているが、これは云わば作歌態度とか選歌に就いての論争で、短歌に就いての本格的な論争ではないが、然しコロニア歌壇上では初めての歌に関する論争ではなかったかと思う。タンキスト氏からは私の反駁に対する再反駁はなかった。

この頃から論争も大分賑やかになり、先ず一九三六年十一月四日の一二〇六号で阿部青杜氏が「時報歌壇評」を発表、続いて十一月十一日の一二六三号で「新興短歌論」を発表、不二山南歩君の自由律短歌を無茶苦茶にやっつけている。不二君はその頃時報歌壇唯一の自由律短歌作者で

朝ジレッチの触感が頬にひやりとして日曜日の窓辺に青葉ゆれる

凸凹の山道でグッと急カーブするバス！　黒人娘の体臭にむせる

朝の食卓に季節の使者、白いコスモスが匂うので、私はコーヒーを啜る

と云うような歌を発表していたが、同君からの反駁は見なかった。

此の頃阿部青杜氏は時報紙上で盛んに批評陣を張っていたが、短歌に対する造詣も知識も深く、本格的短歌論として注目するものがあったが、時報に発表した次の

イペの花黄ばめる森の遠近を華やかにそめ咲き盛るなり

の歌を生気乏しく、黄ばめるは森の形容だが、イペの花の形容のようにもとれる、自分等のような新来者のイペを知らない者には尚更そのようにも取れる。「華やかにそめ」も安易な表現、作者は自然観賞を今一歩つっこむべきで「浅緑り萌え立つ森の遠近に咲

きさかるイペーの花のあざやか」に改作したらと言ったのに対し、この歌の作者だった開沼貴代氏が、時報紙一二七号上でその批評は認識不足で、二句「黄ばめる」は一読した場合イペの花のようにも取れると云うのは花を知らないからだ。

花も知らずその咲く時期も知らず批評するのは早計だときめつけ、更に自分としてはもっとも忠実に対象を見つめており、イペの花を知っておれば「華やかに咲く」も決してオーバーな表現ではないと反駁しているのに対し、阿部氏は再び一九三七年一月十六日の一二八三号で「開沼氏に」として、イペの花についてその花を知らない者にまで充分わかるように表現するのが歌の上手な所で、それが出来ず、自分（青杜）が間違った鑑賞をしたのは矢張り歌の何処かに欠点があったからであり、「心の燃焼が足りない云々」の自分の批評に対しても「足りないどころか最も忠実に描写していると言っておられるが、これは相対的なことで、自分が絶体だと思っても第三者から見れば案外そうでないこともある云々」と再反駁し、更に今迄自分が時報紙上に発表した批評論に対し、少しも反応がなく物足らなく感じていたが、今度開沼氏に依ってその火ぶたが切られた事は嬉しいことであると附加している。

一九三七年一月二〇日時報一二八九号で、再び青杜氏は二び回にわたり「古野菊生君に質す」として．、古野君が聖報に発表した「われ等移民の歌」として、主として時報歌壇評にふれ「短歌は、五七五七七調三十一文字と云う短い形式の中にある一つの纏まった事柄を述べ、しかもその一首は音楽的な階調をもっていなければなりません」と述べたことに対し、これは君の短歌観かときめつけ、又「今後ひそかに期する所は、口語の新しい短歌型を創造する事にある」と、暗に青杜氏の不二山南歩君の新興短歌に対する批評を反駁しているのに対し、口語の新しい「短歌型」は「短詩型」でなければいけないとし、青杜氏はその広い短歌知誠を披露、反撃に出最後に「古野君よ、貴男に若し真面目に新傾向の

短歌を論じ、真に伯国歌壇の改革に努力する情熱があるなれば、今少しけいけんな態度で勉強し給え」と高姿勢で反論を結んでいる。

一九三六年の十月二二日の時報紙一二五五号に於ける私の選歌後記で、鈴木南樹氏発表の歌に対し、歌壇大先輩の南樹氏の歌に意見を加える僭越を許されるなればとして

砂浜の巨人の如き足跡に水たまれるも春めけるかな

真清水にひたして白き手拭を風かほる日の顔にあてたり

の歌に対し、最初のは大きな足跡に水がたまっているのを見て春めいた気持とか感じが出るだろうが、何かこじつけめいており、二首目の歌は「風かほる日の顔」と云う表現は無理だと云ったのに対して、翌一九三七年二月十日の時報一二九七号から六回に旦り「和歌無駄口帳」を書き、私の前記批評にも触れ、浜辺に行くと足跡が崩れて大きくなった水たまりには「満ちあふれる」と云う豊かな春の感じが出ている。又「風かほる日の顔」も暑い暑いと言って青葉を吹きまくって来る風に対しながら強然な夏の日光に対して居る時の情景がもっとも良く出ている云々と反論している。

同じく二月十日の一二九七号時報には寺門仙香氏が阿部青杜氏の「新興短歌評所感に対して」として、青杜氏が、短歌は五七五七七の三十一文字と特定の用語と格調よりなる定型を有する。これを破っては短歌として認められるものでない云々との意味を言っておられるが、如何に短歌が一千年の歴史を持つ民族芸術であるにしても、何時も無条件に伝統的にその形式を踏襲、愛玩し、趣味として製作を楽しむような事では短歌は文学として第一義的を価値を失なうと主張している。

期日が一寸前後するが、一九三六年十一月四日の時報一二六〇号に私が南樹氏の

そら豆にジャガ芋に皆それぞれの緑の露にうらら日の照る

の歌を、選者後記で「緑の露」と云う表現がおかしいし、一首中に「の」の字が三つもあるのも耳障りだと評したのに対し、芋の葉のみどり、そら豆の葉のみどりが良く出るから「緑の露」でよいとし又「の」が重なっているとの評に対しても同じ語が三つも四つも一首に重なっている歌はいくらでもあると例歌を沢山あげて歌の欠点になっていないと主張している。同じ語の一首の中での重複には勿論私にしても異存はなかったのであるが、只商樹氏のこの歌の場合にはそれに依って歌の効果が上っていない事を主張したかったのであるが、反駁文は私の方から出していない。

同年十一月二五日の時報一二六九号で阿部青杜氏が時報歌壇評を発表、鈴木南樹氏の歌を批評「南樹氏の作品はその三年と云う作歌の時間的推移に伴う変りかた、それは一言にして所謂ブラジル式になったとの一語で充分である。即ち冗漫な無黙の多い併せて荒漠として捉え所のない事を指すのである」と、氏の歌をあげて指摘しているのに対しても南樹氏は可成り長文の反駁文を書いている。

続いて一九三七年三月二四日の時報一三一五号に青杜氏が「寺門君に答う」と題して、寺門君は私が短歌は特定の用語と、三十一文字（五七五七七）の格調よりなる完型を有する。これを破っては歌として認められないと云ったと言って反論しているが、自分はそんな事は言うていない。私が主張するのは、短歌の芸術的独自性はその表現形式が五七五七七の音楽的階調を有する如く、内容もまたリズム的弾力性を有している事である言葉を変えて言えば、五七五七七の形式を原則としない所に短歌は成立しないと言ったのを誤解したのだろうと前提し、紙上四回に旦って反駁している。

一九三七年三月三日の時報紙上一三〇六号で私は山茶編者にの一文を草した。これはバウルーで歌壇に頭角を現わし活躍していた清水美貴雄君（ペンネーム小田切剣）氏が主宰し、百代夫人（既

に故人)の作歌など集めて編集した地方短歌誌の第二号だったが、一般に紹介の意味も含めて、内容は一号と同じく清水氏と百代夫人の作品を集めた歌数も歌人の数も少なく、特に云う事もないが、と書出し、山茶の巻末に新年号時報の懸賞短歌当選作品に就いて言及し、三等作品が二等作品より佳い作品と思うと云う批評と、時報歌壇に晶子の有名な「やわ肌の」の歌の焼直し作品がのっていたが、選者は注意するようにとの記事があった。これは某初心投書家の「やわ肌の熱き血汐にふれも見でこの一生を終るはかなきか」の歌に対するもので、勿論焼直しである事は充分わかっていたけど、初心者の投稿作品として敢えて発表したものだったので、そのことなどについて説明的な記事にしたのであったが、これが小田切君の気に入らなかったと見え、同四月三日の日伯新聞に「山茶編者」にを読みてと題し、私の記事に真向から反駁論を二回にわたって書いている。

論の内容は長くなるので省略するが、大体、懸賞短歌の二・三等のけじめについては、両方とも同程度の作品で等別に困ったが、三等にした歌は何かよわよわしく、類型歌がありそうで三等にしたのなら、何故渓舟はその類型歌をあげなかったか、山茶二号の「内容に特に云うべき事もない」とはどう云う意味か、又焼直し歌を初心者のとは云え、認めるのは怪しからない。

渓舟が「日本の如く短歌の普及している所なら厳選して粒を揃える事も出来る」と言っているが、それは渓舟氏に出来るのか、又は他の人にも出来ると云うのか、とか渓舟は「伯国の歌壇は未だ揺藍時代であり、かかる時には出来るだけ便宜を計ってその発達促進に努めねばならない」と云っているが、こうした事は揺藍に乗っていない人、例えば日伯の岩波氏当りが云うべき事であって、揺藍にのってブラブラしている人間の云うべき事でない。大きな事を云う前に先ず自分からえらい歌人になって云え　―　と云うような思い切った言である。

私もまだ若かったし、殊に短歌には全力をあげで熱情を燃やしている時だから、直ちに反撃に出、四月二一日から三回にわたり、可成り激越な言葉を使って主として小田切君の焼直し歌云々について、種々著名類型歌をあげ反論し、更に揺藍にのっている人間云々の同君の言葉に対しては、「僕が、現在社会は堕落している。我々はそのしゆく清に努力しましょう」と云ったのに対し「何でえ、そんな事は偉い人間の云う事だ。てめえみたいな青二才の云う事か」と努鳴るに似た君の所謂よたもの的態度と云う外ない、とか、この反駁文は少し礼を失した文になったが、君自身の文章がすでに相当礼を失していたものだったのだから、天に向ってした唾は再び己に返るで仕方あるまいと結んでいる。

もう一つこの論争の最中、牛凹星泗君が聖州新報紙上に矢張り私宛の歌論反駁文を発表しているが、その原文が手許になく分らないが、選歌後記での私の批評に不足でもあったのではないか、時報紙一三三〇号で「自由律でも定型でも何でもよい、真に歌を研究せんとするなれば自分の歌が不真面目だと云われで怒る前に一応自分の歌を反省して見るだけの謙譲さを持て」と忠告してやる云々と書いている。

前に書いたようにかけ出しの青年で、その頃のコロニア歌壇の主流をなしていた時報歌壇の選をし、選後記なぞ書いたり、批評を書いたりして名前も可成り知られ出していたし、周囲の人達の中には反感を持つ者も多かったろうし、事実この頃私なぞ、コロニア歌壇を背負って立つ位の気概を以って活躍していたから、苦々しく見られる点も多かったろうと、今では恥じ入って反省している。

戦前の論争にはまだあったかも知れないが、あったとすれば聖報紙上あたりで小さなものだったろう。記録が全然ないので分らないが、大体、小田切君と私の論争あたりをピークとして、論争らしい事は段々少なくなって行ったのではあるまいか。小田切君

も再反駁して来ず、間もなく私は時報を退社、カーザ東山に入社し、時報歌壇とも縁が切れて了っているし、これ以後の時報紙も保存されていないので知る事を得ない。

＊　＊　＊

全伯短歌大会の歩み

パウリスタ新聞主催椰子樹社後援になる全伯短歌大会は、一九四九年二月十日、椰子樹創刊十周年と岩波菊治の誕生五十回を記念してその第一回が開催された。爾来、これがコロニア歌壇における年中行事の一つとして今日に継承されている。

▽第一回

一九四九年二月十日新トキワ食堂にて開催。応募歌数二九七首、出席五九名。司会、徳尾渓舟。

高点歌（互選）　岩波　菊治

口汚く罵り合える妻も吾も互に老けて耐え性のなき

次点歌　同

新しき世の動きつつある時に吾が歌も思想も既に古きか

▽第二回

一九五〇年八月二七日サンパウロ女学院にて開催。応募歌数五七〇首、出席九〇名。司会、徳尾渓舟。

高点歌（互選）　本田　笑山
うつしみのうれいも忘れこの海の悠久に変らぬ潮鳴りをきく
次点歌　吉本　青夢
打ちあげし芥を夕べ焼く煙なびかう海に燈台ともる
（吉本青夢第一回坂根賞受く）

▽第三回
一九五一年九月二日ピラチニンガ文化体育協会サロンにて開催。応募歌数四二八首、出席六一名、司会、徳尾渓舟。（今回より選歌規準を椰子樹同人選と一般互選との二つに分ける）
高点歌（同人選）　西田　季子
謀られし口惜しさもやがて時経れば我が愚を責むる上にかえり来
高点歌（一般選）　吉本　悟
むずかりて泣く背の児に葱笛を吹いて夕餉の味噌汁を焚く
（井本惇第二回坂根賞受く）

▽第四回
一九五二年九月十四日ピラチニンガ文化体育協会サロンにて開催、応募歌数三七八首、出席六二名。司会、吉本青夢。
高点歌（同人選）　岩波　菊治
ただひとつ歌詠むことを拠り所としこの国に生きて貧しかりし二十幾年
高点歌（一般選）　岩波　菊治
同人選と同じ。
（川原比露思第三回坂根賞受く）

▽第五回

一九五三年八月二四日ピラチニンガ文化体育協会サロンにて開催、応募歌数三八四首、出席六〇名、司会、吉本青夢。

高点歌（同人選）　戸崎　清作

蝿一つ熟睡の友の頬にいて遠いかずちの鳴りている午後

高点歌（一般選）　戸崎　清作

同人選と同じ。

（河村哉太郎第四回坂根賞受く）

▽第六回

一九五四年九月十二日シネ・ニテロイサロンにて開催、応募歌数三七四首、出席六三名、司会、中江克巳。

高点歌（同人選）　中田　武男

空洞の位置などひとり思いおり痰の出やすき横むきに寝て

高点歌（一般選）　中田　武男

同人選と同じ。

（坂根賞該当者なし）

▽第七回

一九五五年九月十八日シネ・ニテロイサロンにて開催、応募歌数三〇五首、出席六七名、司会、吉本青夢。

高点歌（同人選）　清谷　益次

母の柩に土盛られゆく時すらも泣かざるほどに子らの幼さ

高点歌（一般選）　清谷　益次

同人選と同じ。

（坂根賞該当者なし）

▽第八回

一九五六年十一月四日パウリスタ新聞サロンにて開催、応募歌数三〇二首、出席六〇名、司会、池田重二。

高点歌（同人選）　八巻　梅夫

音たてて風すぎゆけり人夫らがビラ貼り急ぐ夜の板壁に

高点歌（一般選）　徳尾　渓舟

ある折のある亡き妻の表情をかたみの児等が時にみするも

高点歌（席題、新聞）　中江　克巳

日を一日都心に疲れ帰り来て心椅り行く今日の記事など

（坂根賞該当者なし）

▽第九回

一九五七年十月十三日パウリスタ新聞社サロンにて開催、応募歌数三五〇首、出席六〇名、司会、吉本青夢。

高点歌（同人選）　春名　景水

支えきし君が命のたえてなお補給酸素の気泡音たつ

高点歌（一般選）　春名　景水

同人選と同じ。

高点歌（席題、移住者）　弘中千賀子

移り住みし国に馴れゆく過程ともサンバのリズム夫と踊る

（坂根賞該当者なし）

▽第十回

一九五八年八月三一日パウリスタ新聞社サロンにて開催。応募歌数三〇二首、出席八〇名、司会、徳尾渓舟。

高点歌（同人選）　西田　季子

夫のねむり見とどけて立つ窓下の入江に夜の潮は満ち来る

高点歌（一般選）　上野　紅陽

陽のぬくみ残る砂丘に吾は座し靴に入りたる砂をこぼせり

高点歌（席題、移民五十年祭）米沢　幹夫
さかり住む父に送らむ祭典の記念に求めしフラムラ一つ
（小笠原富枝第一回椰子樹賞受く）

▽第十一回
一九五九年八月三一日パウリスタ新聞社
サロンにて開催。応募歌数四一二首、出席六二名、司会、徳尾渓舟。
高点歌（同人選）　川原比露思
冷凍魚水にもどしつつさりげなく過ぎし平安を呟ける妻
高点歌（一般選）　森重　扶美
一つ傘さしかけ呉るる子と帰る雨に昏れたる店閉め終えて
高点歌（席題、椰子）　越村　定雄
陽のあたる椰子壁に身をもたせつつ病みあとの妻の今日のやすらぎ
（梅崎嘉明第二回椰子樹賞受く）

▽第十二回
一九六〇年八月二八日パウリスタ新聞社サロシにて開催、応募歌数五〇五首、出席七四名、司会、徳尾渓舟。
高点歌（同人選）　森重　扶美
結び目の多き毛糸を編み続く雨の一日を病む夫の辺に
高点歌（一般選）　森重　扶美
同人選と同じ。
高点歌（席題、食）　吉本　青夢
所在なく居るガルソンのかたわらにおそき夜食を独りはみつつ
（小竹清子第三回椰子樹賞受く）

▽第十三回

一九六一年九月三日パウリスタ新聞社サロンにて開催。応募歌数一〇二〇首、出席七一名。司会、徳尾渓舟。

高点歌（代表選）　大島　進

限りなき君が援助に得し店と心素直にバルコンを拭く

高点歌（一般選）　北原　ユリ

報わるる事も無くして老いし母細りし指の爪切りてやる

高点歌（席題、早春）　小笠原富枝

早春の暖かき陽射しに背を向けて細りし母の肩たたきやる

アベック歌合せ　星野、本庄組

夕光のやさしく射せる河岸の柳の垂れ枝芽ぶきそめたる

（弘中千賀子第四回椰子賞受く）

▽第十四回

一九六二年九月二六日パウリスタ新聞社サロンにて開催。応募歌数五六一首、出席七〇名、司会、弘中千賀子。

高点歌（代表選）　川原比露思

昏迷を経たる記憶も遠くなり冬日の庭に文殻を焼く

高点歌（一般選）　陣内しのぶ

一つ持つ思念に凝りて磨きいし鍋意外なるまで光りていたり

高点歌（席題、故里）　吉本　青夢

ふるさとの山河のさまを語るとき老母かなし涙ぬぐいて

アベック歌合せ　小笠原、田中組

異和感の寂しさ持ちてよる窓を照らしてぬくき春のうらら日

（陣内しのぶ第五回椰子樹賞受く）

▽第十五回

一九六三年八月二五日サンパウロ文化センター・サロンにて開催。応募歌数六〇〇首、出席九二名、司会、弘中千賀子。

高点歌（代表選）　南条由喜夫
過ぎ去りの河に揺らぎて湧く悔かアバカテの樹の蔭ふかく居て
高点歌（一般選）　川原比露思
共通の悲しみ持てば濾過される想いに妻と海鳴りを聴く
高点歌（席題、文化）　行方正治郎
生計の不如意つづけば文化にもうとくなりゆく嘆かいをもつ
アベック歌合せ　水本、武本組
思い一つに凝りいてひたすらなる日々を部屋に籠りて書架を整う
（椰子樹賞該当者なし）

▽第十六回
一九六四年九月二〇日サンパウロ文化センター・サロンにて開催。
応募歌数五七九首、出席七五名、司会、光田寿男。
高点歌（一般選）　片岡けい子
怠惰なる逃避などあらず赫々と一日の果てを燃えて陽は落つ
高点歌（席題、空）　越村　定雄
南十字の星ありという空仰ぐ移り来て寡婦の位置は変らず
アベック歌合せ　安部、晶山組
春嵐どよもし止まず夕ざれば夫居ぬ部屋のスタンド灯す
（水本すみ子第七回椰子樹賞受く）

▽第十七回
一九六五年九月二六日サンパウロ文化センター・サロンにて開催。
応募歌数七一九首、出席九〇名、司会、光田寿男。
高点歌（一般選）　小川　春江
保ちいし自負崩れゆく思いにて人を待つ間の刻長くたつ
高点歌（席題、海上自衛隊）吉本　青夢

手車に乗りて艦内巡り行く人あり水兵らにねぎらい受けて

アベック歌合せ　陣内、梅崎組

心濡らす雨と思えり昼の灯の光らぬ園生別れ来りて

（高橋よしみ第八回椰子樹賞受く）

▽第十八回

一九六六年九月十八日サンパウロ文化センター・サロンにて開催。応募歌数七五〇首、出席八七名、司会、米沢幹夫。

高点歌（代表選）　小笠原富枝

吾が掌より零るる如き寂しさに切る大根の影生れてゆく

高点歌（一般選）　西原　義作

農捨つる子の意を変うるすべもなくわが焚く薪は樹液噴き出す

高点歌（席題、故里）　木谷　醇

故郷ともなき野を焼けばパラナ松がくれにあかき夕日沈みぬ

アベック歌合せ　弘中、大場組

人々に見すかされいるこの位置をつつみて優し午後の陽ざしは

（佐藤博三第九回椰子樹賞受く）

▽第十九回

一九六七年九月三日文化センター・サロンにて開催。応募歌数七五五首、出席九四名、司会、水本すみ子。

高点歌（代表選）　佐藤　博三

かぎりなくわが失いてきしものがこの草原に青くつらなる

高点歌（一般選）　高橋よしみ

落ちるべきもの落ちつくし裸木の裡ひそやかに充たす営み

高点歌（課題、皇太子）　佐藤　いち

皇子来ませる感激も裡にしずめつつ廚にひそと芋の皮むく

高点歌（席題、朝）　　水本すみ子

透しくる朝の彩に覚めながらなお甦りくる悔限ひとつ

アベック歌合せ　　開沼、川原組

夕映えの明るく匂う野路を来て裡にみち来るものを確かむ

（南条由喜夫第十回椰子樹賞受く）。

椰子樹概史

―統計に見る―

（51号より100号まで）

吉本青夢

椰子樹は、一九三八年の十月に創刊され、一期間、第二次世界大戦のため、約五カ年の中絶のやむなきに至ったが、一九四七年に引続いて復活、本年七月を以って百号に達した。その間、五〇号の記念として別冊が出ているが、以後の百号までを、数字の上から全短歌作品の集成と、執筆文章を分類的に一括して、これらを個人別に通覧することにする。

先ず短歌作品の総計は、二九六四四首という驚異的な結果を示している。この中には、もちろん転載、再録、引用、歌会、競詠、題詠、入門、質疑、追悼、賛歌、入賞などの作品は含まれないが、その作者数は二七八名、一名が平均百首を発表しており、延べ人員にすると三一四六名となる。更に五〇号までの統計数字を見ると、一七八一二首を五四六名が掲載しているが、これとの比較対照は、作歌数では六〇％強の増加、作者数は五〇％強の減少となり、奇妙な逆転結果を示している。

作者が半減したことは、各新聞歌壇の動静を見ても明白のように、前期の投稿者が殆ど後退または絶縁し、名実共に活躍してい

るのは、数えるほどしか存在しない事実は、椰子樹の長い三〇年の歴史の推移を物語っている。然しこれを以って、コロニア短歌界の衰微とは断言できない。初心者の登場と新人の台頭、量の増進は質の向上に加わえて、未だ椰子樹の牙城は磐石と言えよう。

椰子樹の運営面の会計は、五〇号と共に徳尾渓舟が退場し、代って中江克巳が六年間、弘中千賀子が一カ年、梅崎嘉明が三年間、昨年から現在までは水本すみ子が担当している。経済は物価上昇にかかわらず、未だ赤字を見ず安泰である。

編集者は、前期に引続き川原比露思と梅崎嘉明が五八号まで、米沢幹夫に井本惇が補佐して五九号から七四号、清谷益次は続いて八五号、以後現在までを安良田済が担当した。本年度に入って、佐藤博三、高橋よしみ、水本すみ子、梅崎嘉明の四名にて、新しい編集者の陣容が決定した。旧編集者は、それぞれの特色を盛って内容を高めて来たが、百一号以後にも一段の期待がかけられる。

選者部門は遂次様式を変えつつある。

五一号より五八号までは、前期より続いて瀬崎、行方、武本、五九号より七〇号までは吉本の単一選となった。六二号より井本が加わり、七一号より七四号までを川原と共選となった。この間、同人級は無審査で発表されているために、どうしても収録が多く、また誌友は両選者への投稿が許された関係、作者によっては回数と首数に開きを生じている。なお会議の結果、七五号より同人制を廃して、同等の会員組織が採られたが、選考委員が設置され、これに武本、井本、川原、行方（八二号より辞退）、新たに酒井が加わって担当、作品を一と二に分かち、優秀作品には特選欄がもうけられた。

次に実績を回数順に列記する。選外の特集作品を含み、三回にわたる失名投稿の一九首を除く、×印は物故者、〇印は五〇号以前よりの作者、上段の数字は回数、下段は合計歌数である。

〇大場　時夫　五〇　五六七

○吹本　菊子　四八　五一六
○小笠原富枝　四六　四六七
石塚　やす　四五　四六五
○開沼　貴代　四四　四九三
○陣内しのぶ　四四　四七七
○米沢　幹夫　四四　四五九
○弘中千賀子　四三　四九二
×東野　暁風　三九　三九八
○川原此露思　三八　三九九
清谷　勝馬　三八　三四五
○安部　栄子　三五　三六五
○清水　節子　三五　三〇六
水本すみ子　三四　三五九
○南条由善夫（丘　佳三）　三四　三四四
○梅崎　嘉明　三四　三一九
○小竹　清子　三三　三三八
○藤田美砂子　三三　三〇五
○行方正治郎　三二　三九五
高橋よしみ　三一　三五八
○西田　季子　三一　二九一
○山室新太郎（晶山　充）　三一　二五一
○瀬崎　涛声　三〇　三五七
○酒井　繁一　三〇　三五五
○上村　正吉　三〇　二〇四
久米　光春　二九　三八四
○森重　扶美　二九　三四二
西村智恵子（丘ひろ江）二九　二七一
○光　南極　二七　三三七
加藤　ふじ　二七　二一六

梶田　きよ　二六　三四一
○小笠原正好　二六　三一〇
坂本　清人　二六　二六八
○植村　かず　二六　二一〇
中村　たえ　二六　一二〇
笠原　くに　二五　一九六
森田　吉久　二四　二九〇
○江尻　潤　二四　二六八
森　久子　二四　二三九
小野寺郁子　二四　二二〇
○小林　秀子（寂英）　二四　一八七
○樋口　辰男　二四　一四三
加藤　操　二三　二五〇
○玉木　五男　二三　二三九
岩佐　一歩　二三　二〇二
×玉木　梅　二三　一六四
佐藤　博三　二二　三三二
坪田　義雄　二二　一八一
○渡部　チエ　二二　一七七
○富岡　清治　二一　二三三
田上みずほ　二一　二二六
○本庄　研一　二一　二二〇
○佐藤　一英　二一　一六六
○井本　惇　二〇　二七五
○住吉　光雄　二〇　二〇六
椎野トノエ　二〇　一九八

○春名　宏文（景水）二〇　一五四
村上　柾二　二〇　九六
土屋　風春　二〇　九一
×近　　昇　一九　二〇四
井上　ふじ　一九　一七七
古川　白穂　一九　一四八
有田　市治　一八　二三五
清水そとえ　一八　二三〇
北谷まがた　一七　二二一
八幡　与三　一七　二〇七
井川　季子　一七　二〇七
安達　太良　一七　一九一
井之盛一翠　一七　一八六
宮武　勝甫　一七　一七七
北原しのぶ　一七　一七五
○三牧　はら　一七　一四七
田中　朝子　一七　一二九
殿岡　照郎（東丘てるお）一七　一一五
○新納　潤魚　一六　二一八
×大島　　進　一六　一五九
持永　勧治　一六　一五四
×簗田　月耕　一六　一二一
石塚　重蔵　一六　六三
加藤まりえ　一五　一六九
×葛西　妙子　一四　一七五
中川原正子　一四　一四四
中川原　実　一四　一三〇
○西田　孝徳　一四　一二八
工藤　勘一　一四　一〇三

庵　外二郎　一四　七一
○中江　克己　一四　七一
○武本　由夫　一四　六八
木村　正和（水谷醇）　一三　一六九
○吉本　青夢　一三　一五九
○光田　寿男　一三　一四五
中川　荒記　一三　一三八
園田　敏子　一三　一二五
茅根　哲子　一三　一一五
志伊良二世　一二　一五五
○中山　稠子　一二　一三七
笹浪　北陽　一二　一二六
内田　笑子　一二　一一九
○望月喜恵子　一二　一一一
○徳尾　渓舟　一二　一〇八
尾崎都貴子　一二　一〇七
矢野　晶男　一二　一〇四
住吉　豊　一一　一二三
○簀戸　勝子　一一　一一一
○桜井　健三　一一　五七
○中井すみれ　一一　三五
大月ひろし　一〇　一一七
飯田　静子　一〇　一一七
○唐沢英津子　一〇　一〇九
○戸崎　清作　一〇　一〇三
小林　良子　一〇　九五
上田　英子　一〇　九四
知花　清　一〇　六〇

◆九回　森谷風男・一・一〇二、縄手敏夫・九八、荒崎百合香町田貴志・九七、未岡芳三・九七、〇米川久・九二、田中麻三美・八八、〇片岡けい子・八七、飯田義勝・七〇、〇古沢千代子・四四、

◆八回　細江仙子・一一九、杉田月船・九六、〇越村定雄・七〇、蒔田南岳・六五、×柳田威・四五、茂村よしの・四〇

◆七回　間島正典・八五、秋口流枕・七八、森元三山・六六、水田玉水・五九、深沢喜久雄・五四、小原睦子・三四、〇野口一郎・二八、〇岩波とめ・二一二、◆六回　高広之・六八、〇坂光男・六一、穂島千代・五六、高橋圭甫・五二、〇阿部玲子・四四、〇三浦久和子・四三、城田志古女・四三、佐藤いち・四二、〇重道千代子・四二、市川幸子・三五、〇室伏誠二・三一、土井はやし・二七、伊藤香椎・一八、大野延寿二八、◆五回　山根久子・六八、〇秋永三郎・六二、〇中井益代・五〇、西村佐太夫・四九、紺野幸水・四八、並木ゆかり・四七。椎名千代子・四二、奥田無岳・四二、西村トーマス・三三、山中小百合・三三、〇儀武息良・二八、〇細川末葉・二七、橘秀子・二七、〇中村秀夫・二一、大橋松寿・一七、立筋智充・一七、中村洛水・一二、◆四回　高須きみ子・五九、牛草茂・四五、武田桂城・四一、〇河村哉太郎・四〇、上妻博彦・三八、吉田孝太郎・三八、小池誠・三三、〇増田小葉・三三、藤田朝日子・二九、村上実義・二九、高橋元吉・二八、江藤政太・二四、浅野千鶴子・二三、〇杉田らうる・二二、松島末乃・一九、久高彰・一八、〇仙田ます子・一七、〇山口忘我・一六、〇田中八重・一四、矢野三丘・一一、林しぐれ・一〇、

◆三回　寺田雪恵・三六、斉藤武雄・三四、〇奥田葉吉、渡辺護・三二、土屋ゆかり・三〇、〇富吉好人、〇上野紅陽・二八、山中ひかる・二七、岸田美香・二五、橋浦静江・二四、山岡清子・二〇、柏原愛紫、吉原いわお・一八、柴田道子、八巻耕土・一三、樋野上よし江・一二、星野福次郎、石神貞子、〇国松英輔・一一、古

荘辰穂、×奥村富貴子・一〇、〇神田笹浪、高田蔦五郎・八、成田恵美子・六、

◆二回　〇平松霞・二二、〇則近正義・二一、南崎椎草・一六、岩本秋月、松隈咲代・一五、大津美津江・一四、×江島宗三・一三、中井鉄夫、高木政明、上田ひさし・一〇、浜崎実、〇坂寿一・九、河原梅子、桜田生長・八、知念良子、原田耕作・七、〇浅田孤舟・六、

◆一回　北原ユリ・一五、篁郁子・一〇、鹿毛至、中村花江、〇坪内広代・八、遠藤浩、奥野精一・七、南条千枝子、大沢愛子・六、平栗登茂子、×伊藤りわ子・黒田鶴子、〇長尾多計志、中津井紫路、奥村九、佐藤みつ子、高林優子・五、土井賢太、飯塚末太郎、生島かおる、香川歌子、〇児島勇、〇三好案山子、社本藤野、〇畠田晋、高島みどり、土屋雅晴・四、三波字郎、三浦義雄、中村白城、二宮喜三郎、小川春江、大下ヒロ子、×大月澄亮、鮫島富代、高田千草、多喜沢竜水、上原知水・三、東肇、市脇ちか、磯部勇、〇村手千恵、小浦清生、高田剣二・二、花木一義、三羽生、高田操・一、

題　詠

題詠は、他の応募作品と違って、興味的を点から一般の好評と要望に答え、殆ど欠かさず掲載されている。当初は誌上に全詠が発表されて、共選の形式をとっていたが、途中から単一選者の出題となった。その総覧を次に別記する。上段から号、題名、選者、作者数、歌数。

五一航海の歌、真夏の夜　（中山）　15・46
五二　旅、夜寒　7・23
五三　朧夜、イペ　4・15
（以上、開沼、安部、森重、東野、光田、本庄）

五四　新春、朝　10・38
五五　カルナバル、白雲　11・41
五六　移民、枯葉　9・31
五七　風邪、父　17・60
（以上、安良田、弘中、西田）
五九　選挙、友情
六〇　入学、収穫
六一　亜熱帯の冬
（以上、大場、大島、森重）
六二　春雷（清谷）10・10
六三　手紙（徳尾）11・13
六四　旅（川原）8・13
六五　山鳩（開沼）18・27
六六　微風（中江）24・37
六七　未来（安良田）20・28
六八　読書（徳尾）22・30
六九　夕映（川原）24・32
七〇　青葉（中江）30・46
七一　パイネイラ（開沼）39・48
七二　残光（西田）35・44
七三　愛情（吉本）32・52
七四　光（住吉）30・45
七五　幸（小笠原）34・43
七六　家族（酒井）21・28
七七　新芽（陣内）32・41
七八　夏（梅崎）25・44
七九　土（弘中）32・46
八〇　政変・革命（米沢）30・44
八一　旅（開沼）43・57

八二　流れ　（西田）３４・４２
八三、八四、八五号は無し
八六　青　（中江）２９・２９
八七　港　（陣内）１４・１４
八八　夏時間（徳尾）１９・２２
八九　秋風　（弘中）２８・４３
九〇　霧　（川原）３３・４４
九一　流れ　（小笠原）１８・３６
九二　生命　（梅崎）２１・３１
九三　光　（中江）１４・１８
九四　影、翳（吉本）１８・３７
九五　歴史　（西田）１８・３６
九六　種蒔き（米沢）１９・４３
九七　旅　（水本）１６・３７
九八　雨期　（佐藤）２２・４５
九九　浜辺　（開沼）２２・４３
一〇〇　足跡（高橋）２６・３７
計、作者数（延べ）九七一名
作品数　一六〇三首

誌上短歌競詠

第一回の応募作品は、六一名が各一首を出詠、六七号に掲載された。これは参加者のみの三首選出にて、次号で入賞者五名の各一首が発表された。その順位は１、小笠原富枝、２、川原比露思、３、藤田朝日子、住吉豊、坂本清人、なお各作品に吉本、開招、梅崎、弘中、井本の短評が付記されている。第二回は七一号に五二首を掲載、同じく次号での成績発表は、１、有田市治、２、安部栄子、３、東野暁風、４、八巻耕土、５、古川白穂、以下７位までの作者名が列記されている。

第三回は三六名に減少した。その結果は七六号に発表されたが、投稿原稿の紛失にて作者名は記載されず、二四首が選者名を付すに止まり、なおこの競泳も継続するに至らず後を絶った。

入門欄

これは初心者を手ほどきする場として設置され、選者は原作の二首より五首までに、添削を与え修正を試みている。前期より続いて、五一号に行方担当で二名の六首が出たが、投稿者少なく中止となった。六二号からは武本担当にて再開されて、七五号まで四回分の休載はあったが、八二名の三四一首を原作と併記して指導した。一時中絶の後、八三号から九一号まで米沢担当となり、収録されたのは四八名の九五首であった。続いて「研究欄」の名に改まり、清谷担当となり、質疑応答の部門に代ったが、活発に利用する者なく、僅か三回にわたって五名に過ぎず、五九号で立消えと在った。

短歌実験室

これは吉本単一選と同時に設けられ、特別歌稿として弘中、川原の共選となった。当然一般投稿作品の部に入れるべきだが、どうしたものか、五九、六〇号の二回のみで終りとなっている。従って別掲として扱った。投稿は一〇首以内の規定となっていて、二回分で二三名の六五首が選歌されている。廃止後は井本が吉本選に加わって補うことになった。

椰子樹賞

先に坂根賞があって、一九五〇年に企画された。過去一カ年を通じて作歌活動の実績に依って選考され、四回にわたって吉本、井本、川原、河村が授賞して来たが、その後は該当者なく、消滅のまま五カ年を経過した。これに代って、新たに設置されたのが

椰子樹賞である。

第一回は一九五八年より始まり、前号で全作品が掲載されて、これを選考された結果が、次号で採点発表された。第二回からはプリントにして各選者に配布されたが、更に第三回からは会合の上、全作品を検討して授賞者を決議した。

次に全回の入選者を見ることにする。

上段より号、応募作者数と作品数、入選者と発表作品数、達者名。

◆一回、五四、一五、三〇〇、1、小笠原富枝、2、小竹清子、3、東野暁風、各二〇首、（瀬崎、行方、武本、徳尾、中江、吉本、川原、井本、河村、開沼、葛西、西田）

◆二回　五九、二〇、四〇〇、1、梅崎嘉明、2、小竹清子、3、光田寿男、各二〇首、（前回の徳尾、中江が後退、新たに清谷、則近、上野、東野、本庄、小笠原）

◆三回　六三、一二、二四〇、1、小竹清子（一九）42、唐沢英津子（一六）3、住吉光雄（一二）、（武本、清谷、吉本、米沢、西田、井本、新納）

◆四回　六七、二〇、四〇〇、1、弘中千賀子（二〇）、2、陣内しのぶ（一六）、3、唐沢英津子（一二）、佳作・坂本清人、久米光春、各六首、（前回の選者に川原を増任）◆五回　七一、三〇、六〇〇、1、陣内しのぶ、2、大島進、3、簀戸勝子、各二〇首、佳作・久米光春、角藤忠雄、各一三首、（吉本、新約、川原が退き、瀬崎、徳尾、開沼が代る）

◆六回　七四、二四、四八〇、該当者なし、佳作、森重扶美（一八）、中川原実（一七）、簀戸勝子（一六）、大場時夫（一四）（弘中、井本、川原、清谷、行方、西田、酒井、武本、米沢）

◆七回　七八、一九、三八〇、1、水本すみ子（二〇）、2、安部栄子（一五）3、坂本清人（一〇）、4、小林秀子（一三）、5、清谷勝馬（一二）、6、南条由喜夫（一〇）、佳作・森谷風男、小池誠（各七）、宮武勝甫、知花清（各六）、大場時夫（五）、有田市治、

梶田きよ（各四）、土屋風春、小笠原正好、水田玉水（各三）杉田月船（一）（前回の選者の内、米沢に瀬崎が代わる）

◆八回　八三、二六、五二〇、1、高橋よしみ（一六）2、森重扶美（一八）3、藤田美砂子（一七）、高広之、秋永　三郎（各一六）佳作・清谷勝馬（一七）、佐藤博三（一二）、簀戸勝子（九）（安良田、細江、井本、川原、清谷、西田、酒井、武本、米沢）

◆九回　八八、一六、三二〇、1、佐藤博三（一五）、2、清谷勝馬（一六）、3、森重扶美（八）、（前回の選者の内、安良田、細江が辞退）

◆一〇回　九四、二〇、四〇〇、1、南条由喜夫（一四）、2、森重扶美（一〇）、3、木村正和（一五）、佳作・森田吉久、梶田きよ、小笠原正好、石塚やす、北谷まがた（各七）、八巻耕土、清谷勝馬（各六）、（前回に同じ）

全回を通じて延べ二〇二名が制覇を競い、四〇四〇首を出詠したことになる。

九名の授賞者は健在にて、実作に逞しい意欲を燃やしており、殊に栄冠を逸しながらも、努力を続けた清谷勝馬、森重扶美は高く評価されるべきである。

岩波賞

椰子樹賞は、一まず意義を果たして解消されたが、これに代わるものとして、新たに設定された。その第一回は開沼、小笠原、梅崎、陣内、水本、高橋、佐藤の七名にて選者された結果、一名は規約の二〇首に順ぜず失格となり、一三名の成績が一〇〇号に発表された。授賞者・木村正和（一八）、佳作・八巻耕土（一三）、岩渕静子（一四）、清水節子、穂島千代（各一二）が収録された。

コロニア短歌賞

応募作品の選出方式に依らず、水準を高める見地から、これは

以前の坂根賞の再現と言えよえう。やはり一力年間の実作活動に基づき、五〇首以上の作歌力と優秀作品に重点を置き、一七名の推選委員より呈出されたものを、更に選考委貞七名の弘中、井本、川原、清谷、西田、酒井、武本が、最後の審議を行なって決定する。(現在のところ結果は未発表)

作品批評

歴代の専任選者は、殆ど欠かさず選後感を書いているが、その以外に、編集部より指命された者が一文を寄せている。

他に特定の作品合評、または短歌会での座談的を批評を含めて、次に評者と回数を列挙する。〇印は専任選者の期間以外の執筆者である。

開沼貴代・9、小笠原富枝・6、梅崎嘉明、大場時夫・5、住吉光雄、安良田済、光田寿男、西田季子、米沢幹夫、森谷風男・4、〇弘中千賀子、森重扶美、清谷益次、山室新太郎、水本すみ子、東野暁風、陣内しのぶ、森田吉久・3、中江克己、大島進、葛西妙子、小竹清子、本庄研一、〇井本惇、有田市治、坂本清人、井之盛一翠、〇酒井繁一、小池誠、高橋よしみ・2、片岡けい子、唐沢英津子、玉木五男、大原友重、河村哉太郎、奥田葉吉、則近正義、坂光男、高広之、越村定雄、殿岡照郎、佐藤博三、安部栄子、木村正和、近昇、藤田美砂子、清谷勝馬、〇吉本青夢、〇川原比露思、〇瀬崎涛声、〇行方正治郎、〇武本由夫

いずれも次号で前号の批評を行なっているが、五三号ではアララギ同人、佐紀の主幹上村孫作が、五一号の作品一部の批評を特別寄稿している。

作品・批評・作者

これは鑑賞に属するもので、椰子樹に発表された問題作を採り

上げ、作者の意図と評者の探究に依り、高度を目指す論評として、八二号より八五号にわたって連載された。一名二首の作品を二名が担当し、それに作者自身が応答している。

上段は作者、下段二名は評者。

久米光春　本庄研一・梅崎嘉明
清谷勝馬　武本由夫・細江仙子
藤田美砂子　水本すみ子・光南極
陣内しのぶ　小笠原富枝・高橋よしみ
森重扶美　坂本清人・安部栄子
晶山　充　新納潤魚・中江克巳
水本すみ子　西田季子・大場時夫
佐藤博三　開沼貴代・高ひろゆき
小笠原富枝　森重扶美・秋永三郎
新納潤魚　陣内しのぶ・久米光春

アンケート

「私の白書」と題するアンケートは、米沢編集者に依って呈出された。

1、短歌を始めた動機について
2、現在の伯国歌壇について
3、伯国歌壇の将来について

以上の質問に対して、六〇号で一四名、六一号で九名、六二号で一〇名が応答している。その応答者は徳尾渓舟、武本由夫、池田重二、吉本青夢、行方正治郎、瀬崎涛声、清谷益次、近昇、本庄研一、大島進、光田ひさお、梅崎嘉明、安部栄子、葛西妙子、川原比露思、光南極、開沼貴代、安良田済、天津夢城、晶山充、平松霞、弘中千賀子、紅月伯舟、新納潤魚、大場時夫、志村良一、大原友重、清谷勝馬、小竹清子、片岡けい子、戸崎清作、春名宏文、

清水節子である。

なお、これに関連した意見を往復書簡の形式に依り、同じ六一号にて本庄研一と井本惇が、「現歌壇の底流を探る」の課題を論説的に述べている。

七二号では、当時の問題とされていた次の項目が出された。

1、現在の椰子樹をどう考えるか

運営、組織などについて

2、同人制度の踏襲について

長所、短所と思われる点

3、会員制度への切り替えについて

その具体案

4、今後の椰子樹の在り方について

発行回数、編集方針など

以上の解答は、スペースの関係上、三四名の好例として、中江克巳、新納潤魚、井本惇の三名が、それぞれ刻明に意見を述べている。なお1は従前通り、2は同人制支持、3は会員制反対、4は現状のまま、が多数の賛同を占めていた。

続いて七九号では、「新しい系譜」と題するアンケートがあり、七つの質問に一〇名が答えている。応答の中心的なものを題名にしてある。

▲抒情的な余韻のある歌を・石塚やす、▲一つの契期と反省の中から・陣内しのぶ、▲論争は正当な歌論に戻れ・藤田美砂子、▲俳句から短歌への転移・間島正典、▲主婦の場と短歌の場と・植村かず▲詩と宗教を同次元として・佐藤一英、▲ありふれた言葉で深い持味を・渡部チエ、▲中央と地方の疎通を補え・住吉豊▲短歌を心のオアシスとして・丘ひろ江▲若き世代の場から観る短歌・殿岡照郎

更に清谷編集者となり、「新しいということ」なるテーマで質問している。

1、短歌の新しさとは如何なる点か
2、新しさを持つ作品の引用と、その新しさの指摘及び理由
3、今後のコロニア短歌への希望、主として素材について
4、自己の作歌上に何を志向するか
5、新旧、日本とコロニアを問わず、最も好む歌一〇首まで推選
6、その他、任意の意見

これに七九号では清谷勝馬、植村かず、東野暁風、小野寺郁子、森谷風男、坂本清人、八〇号では住吉光雄、佐藤一英、大場時夫、久米光春、小池誠、小笠原富枝が答えている。

安良田編集者となり、新しい企画として、八六号より一〇〇号の期間に、各人が与えられた課題に短文を書いている。掲載号数を略して執筆者を列記する。

▲詠み得なかったテーマ、―酒井繁一、梅崎嘉明、森田吉久、佐藤博三、高須きみ子、富岡清治

▲詠み損ったテーマ、―開沼貴代、高橋よしみ、石塚やす、藤田美砂子、有田市治、清水節子

▲作歌の楽しさ―弘中千賀子、山室新太郎、川原此露思、小笠原富枝、大場時夫

▲作歌の苦しさ―清谷勝馬、北原しのぶ清水そとえ、小笠原正好、西村智恵子、

▲作歌の動機―望月喜恵子、志伊良二世、内田笑子、田上みずほ、上田エイ子、八幡与三

▲作品の動機―久米光春、荒崎百合香、佐藤一英、加藤ふじ、光南極、田中朝子

▲形式の便利さ―水本すみ子、坪田義雄、尾崎都貴子、江尻潤、小竹清子、中井益代

▲形式の不自由さ―安達太良、梶田きよ、加藤操、森久子、笹浪北陽、北谷まがた

▲伝統の良さ―森重扶美、有田市治、高須きみ子▲前衛の魅力―木村正和、佐藤博三、陣内しのぶ
▲短歌の面白さ―川原比露思、高橋よしみ、清谷勝馬
▲短歌の面白くなさ―米沢幹夫、井本惇、西田季子
▲私の白星―佐藤博三、清水そとえ、
▲私の黒星―安部栄子、梅崎嘉明、穂島千代

編集者の質問、課題に応ずるのは、かつては旧同人級に限られていたようだが、昨今は間口を広めて、全般に忌憚なく意見、感想を述べさせるに至った。これは作歌する上に、各自の研究心を高めるに役立っている。

別に「短歌問答」というのが、九三号から九五号にかけて、ベテラン七名を擁して行われたが、その質問項目はすべて相違している点に興味がある。(数字は質問数)、解答者は徳尾渓舟・4、中江克巳・4、瀬崎涛声・10、山室新太郎・10、西田季子・15、弘中千賀子・14、小笠原富枝・13、全部の七〇項目を挙げるにスペースが許さないため、各自の一問答を要約して次に抜く。

〔問〕誰の作風と作歌理論に、もっとも影響を受けたか。
〔答〕特定の師を持たず、岩波先生に依ってアララギに入会して、その指導者の理論と作風を正しいと思う。
〔問〕詩は美の探究であり、表現であるが、短歌について言えるか。且つ短歌の本質につながっているか。
〔答〕窮極のところ人間性と言える。美、真以外の何ものでもなく、美の探究作業は、即ち創作活動である。
〔問〕素材把握と表現技術の点、いずれに苦労を感ずるか。
〔答〕その時々の実感に依って作歌するため、素材把視に苦労は無いが、表現技術には苦心惨胆する。結句の定着に三カ年かかった例もある。
〔問〕第二芸術論のために、作歌観上の動揺を受けたか。

〔答〕動揺なし、短歌が第二芸術なら、今までの長い歴史の存在や、多くの人から愛されるはずはないと思う。
〔問〕作歌理論と実作との間に矛盾を感じたことがあるか。
〔答〕感じたこともあり、感じない時もあった。作品あっての理論であり、理論を越える作品は至難と思う。
〔問〕作歌する場合、形式美、抽象美、音感美のいずれに重点を置くか。
〔答〕殊更、意識して作歌したことはなし、その素材にも依るが、声調の美しいものを好みとする。
〔問〕短歌は生活の記録と言われるが、その中に架構性はないか。
〔答〕あると思う、それは作者の内部より体験化されなければ、単なる架構に終って、感銘作にはならない。

短歌会

歌会報告の成績発表や感想は、多く新聞紙上に掲載される関係から、椰子樹誌では他にスペースを提供して、後期に入って収録しなくなったが、全伯短歌大会だけは、その都度、開催後の号に載せている。作品以外の記事として、五七号に一〇回の大会の報告を吉本青夢、小感を清谷益次、六一号では雑感を再び吉本青夢が書いた。六九号になって一三回の大会を特集に扱い、席上での発表意見が再録されている。

△短歌大会の思い出　西田季子
△私と短歌のつながり　富吉好人
△新聞歌壇評　川原比露思
△現歌壇への期待　安部栄子
△私の作歌態度　本庄研一
△私の注目する歌人　梅崎嘉明
△私の注目する歌人と作品　光田寿男
△代表選への感想　清谷益次

△高点歌の批評　　開招貴代

この他に、大会に出席しての感想を、高橋よしみ、井之盛一翠が述べ、吉本青夢が「あれこれ雑記」を執筆している。近時になっての「短歌大会を語る座談会」を、九六号にてロンドリーナの七名が意見を吐いている。

大会以外の単一歌会のものとしては、次のような回顧談や感想が所載された。

▲私とカフェランジャ歌会（５９）、サンパウロ短歌会（６７）、光田寿男、▲カンポス歌会の思い出（６２）春名宏文、▲バストス歌会を顧みて（６３）吹本菊子、以上は歴史的なものであるが、その開催当時のことを語る文章には、▲グワイラ歌会参加の記（９１・９２）安部栄子、△パラナ旅行記（９３）高橋よしみ、併せて吉本青夢が漫筆、▲歌旅随行記（９３）グワイラ旅情（９９）を書き、第一回グワイラ交流歌会の座談会が、地元七名にて開催された。

なおロンドリーナ、プ・プルデシテ、バストスの「三地方の歌会印象記」を、六九号で中江克巳と米沢幹夫が対談風にまとめている。

歌集評

カンポスからは毎年合同歌集「やまなみ」が刊行されていかが、その第二集を六三号で小笠原富枝、第三集を六七号で武本由夫、続いて第四集は合評となり、ピニエイロス歌会の七名、また「サンパウロ断章」を住吉光雄、一九六五年に出された「グワイラ年刊歌集」の読後感を米沢幹夫、アサイの「パラナ桧」を清谷益次が評している。次に個人歌集を挙げる。上段より書名、作者、評者、

△波の跡・小竹清子　　小笠原富枝

△異質の季・細江仙子　武本由夫・高ひろゆき
△半球・小川博三（日本）　酒井　繁一
△白い州道・瀬崎涛声　清谷益次・志村良一
△岩霧草・大場時夫　陣内しのぶ
△正木思水歌集・（同上）　望月喜恵子
△四十の生・梅崎嘉明　清谷益次

この外に、七〇号の特集には、既に刊行された歌集を紹介、「ブラジル歌壇の残した足跡」として、各担当者が一文を寄せている。

△移り来て・聖州新報社編　梅崎嘉明
△涛の涯・物部さち子　川原比露思
△熱風吹く広野・小島正徳　住吉光雄
△微塵・武田公平　弘中千賀子
△山河・三好案山子・井本惇
△寒温、朝の香・酒井繁一　開沼貴代
△移民像・柳田威　吉本青夢
△ブラジルに於ける家庭短歌会
　田中麻三美編　本庄研一
△岩波菊治歌集・（同上）　安良川済
△潮の音集・市川幸子　小笠原富枝
△ポインセチア・大沢愛子　清谷益次
△南回帰線・パラナ短歌会　武本由夫

人物評

その人物の解剖、プロフィール、印象はもちろん、作品を含めての人間論である。執筆者の題名を抜いて、誰が誰を批判し、また誰の作品を採り上げたかに止めて、次に特集から初める。

△瀬崎涛声（５９）　安良田済・井本惇
△徳尾渓舟（６０）　吉本青夢・住吉光雄
　川原比露思・米沢幹夫（詩）

△武本由夫（６１）　吉本青夢・住吉光雄
　　梅崎嘉明・奥田葉吉・大原友重
△行方正治郎（６２）　脇坂一・安良田済
　　槇本三郎（米沢幹夫）
△吉本青夢（６３）　清谷益次・井本　惇・大場時夫・越村定雄・小竹清子以上の五名の自選歌が抄録されて、吉本（二二〇首）の他は各一〇〇首である。
且つ武本の部には短歌関係執筆目録、吉本の部には寄稿文目録の付記と、自叙略伝記を加えている。
△葛西妙子　　武本由夫・光田寿男
△開沼貴代　　新納潤魚・梅崎嘉明
△西田季子　　弘中千賀子・安部栄子
これは六四号での三女流歌人の特集である。以上三人の形成を安良田済が考察しており、前二者は七〇首、後者は六五首の自選歌を載せている。
　続いて六七号から六九号の三回、清谷益次が「戦後作歌論」を執筆して、「体臭」ということ、いわゆる××調についてメスを入れている。狙上に載せた作歌者に、それぞれ独自性を表示するレッテルを付しているのが面白い。▲寂蓼の善人・吉本青夢、▲古典に通ずる緻密・井本惇、▲ほっと白いたたずまい・川原比露思、▲底ごもる怒り、秋永三郎、▲幸せの底の孤独意識・弘中千賀子
　また七五号から七八号にかけて、各号で二名が二名を論説している。括孤内は論者、▲南条由喜夫（小笠原富枝）、▲小笠原富枝（住吉光雄）、▲小竹清子（新納潤魚）、▲東野暁風（森重扶美）、▲陣内しのぶ（大場時夫）、▲本庄研一（弘中千賀子）、▲米沢幹夫（陣内しのぶ）、▲森重扶美（梅崎嘉明）
　他に六五号の「明日を期待する新人」では、陣内しのぶを吉本青夢、殿岡照郎を井本惇が、当時の選者として述べ、六一号には

やはり井本惇が、短歌研究新人賞に入選した新納潤魚に触れ、また五四号に米沢幹夫が大場時夫、八七号に水本すみ子が中田武男を語っている。

合　評

前記の批評の部にも入っているが、他の座談会風のものを拾ってみる。

六二号の「明日の歌壇への声援」。は、いわゆる「旧き世代は語る」武本由夫、徳尾渓舟、吉本青夢の三名である。採り上げたテーマは、○椰子樹は果たして危機を脱したか。○アンケートは何をもたらすか。　○本圧、井本の往復書簡について。○作品の諸傾向の問題。○編集部に望むもの。以上の五つの問題に、それぞれ忌博のない意見を吐いている。

七〇号には「ブラジル短歌の将来」が発表されている。これは訪日した酒井繁一が、椰子樹と深いつながりを持つ四人と座談会を催した。四人とは阿部青杜、椎木文也、中山稠子、木村捨録（日本短歌社々長、二回訪伯）である。

「ラボラトリオ」というのが、九八号から始まって三回続いている。この欄は小笠原富枝が担当して、毎回顔ぶれを変えて、作品批評を行なっており、実験した者とされた者は、弘中千賀子、陣内しのぶが小笠原正好、石塚やすの各一首、武本由夫、佐藤博三、高橋よしみが、木村正和の三首、清谷益次、水本すみ子、弘中千賀子が、八幡与三、安達太良、北原しのぶの各一首を挙げ、毎回小笠原富枝が加わっている。

随　筆

これには随筆風の文体でないもの、例えば報告的な記録、追悼、賛辞、紹介などの文章を含めた。便宜上、号の順序に従い、上段から号、題名、筆者である。

５２　△桃花・梅崎嘉明、△母国便り・酒井繁一、中山稠子。
５３　△私のベット・ビル・小林寂英、
△武田公平と私・光田ひさお。
５４　△奇過・葛西好子、△母国便り・中山稠子。
５５　△小笠原富枝さんの受賞を歓びて・弘中千賀子、△生のあかしとして・小笠原富枝。
５８　△選者交代の弁・武本由夫、△選者受任の弁・吉本青夢。
５９　△遠い日々・八巻培夫、△表紙について・井本惇。
６０　△白樺の短冊・脇坂一、△母の像・武本由夫、△武田公平の失恋・池田重二。
６１　△蜂雀・開沼貴代、△人間の倖せ、・植村かず。
６２　△忘れ得ぬ人・石川芳園、△主婦と短歌・弘中千賀子、△炬燵偶語・中山稠子。　６３　△レンズと共に・梅崎嘉明。
６４　△歌人と植物・則近正義。
６５　△誤植・安良田済。
６６　△岩波菊治歌集が編まれるまで・吉本青夢、△既成の目を衝くもの・井本惇、△故武田公平歌集の清算を終えて・安良田済。　６７　△桃藤山房と菊治の遺品・吉本青夢
６８　△秋の短冊・大場時夫。
７１　△受賞の感・陣内しのぶ。
７２　△木村捨録氏歓迎会・春名宏文、久米光春、△大会講演・木村捨録。
７３　△椰子樹会員制私案・武本由夫。
７４　△国境の街・井之盛一翠。
７５　△岩波さんと僕・大島進。
７６　△日本便り・米沢幹夫、△石戸羊我の死・富岡耕村。
７９　△岩波さんのふるさと・林茂夫。
８１　△柳屋の飾窓・富岡耕村。
８８　△受賞の言葉・佐藤博三。

８９　△カロリーナのこと・Ｓ・Ａ生。
９１　△翻訳の地位・佐野功。
９２　△蚯蚓のたわごと・秋口流枕。
９５　△歌集出版のあとに・大場時夫。
９７　△岩霧草について・同前。

その他、連載されたものに、５４号から随時八回、「菊治の青春日記」を注釈入りで発表した。また「わが歌の初めの記」が７６、７７、７８に、瀬崎涛声、水本すみ子、晶山充、簀戸勝子、小竹清子が各一篇を載せている。

８７号には、宮中歌会始入選者特集というのがある。小松修水、光田八千代、山本博、信太千恵子、堀田栄の五名の入選歌と新作一〇首が収録され、それぞれ感想を寄せており、特に開沼貴代が「山本さんについて」を書いている。

９５号は東野暁風と大島進の追悼特集となり、岩佐一歩の「暁風を悼む」に、吉本青夢の「大島君のことども」と小竹清子の「大島さんの病床を訪うの記」が組まれ、両故人の遺作から、前者八首、後者二一首を抄録した。更に９９号では八巻耕土が本年物故した「畏友上村登志行兄を悼む」を語り、遺詠二〇首を収めた。

鑑　賞

ここには研究、考証と思われるものを拾った。連載された研究的文献、グループに依る鑑賞を列記する。

△文構成の本質・茂村徳太郎、これは５０号から５５号まで続き、文法上の言語遂行の表現過、認定とその方法、成文などを言辞学的に説いている。他に同筆者の「忌めと夢」が５６号にある。

△私の観た短歌・武本由夫、一九五七年初期にラジオで放送された講話を、５２号から５９号まで発表された。

△私の短歌鑑賞・清谷益次、北原白秋（５９）、中村憲吉（６０）、木下利玄（６２）の作品を捉えている。

△記紀歌謡ノート・新納潤魚、尊と比売たち（６０）、熊白梼の歌（６２）、鳰鳥挽歌（６３）、歌帝応神天皇（６４・６５）、古代短歌史は中巻で休載されたが、当時の生々しい人間を描いている。

△コロニア短歌問題作品鑑賞・住吉光雄、椰子樹認一カ年（一九六〇）の歩みとして、新納潤魚、本庄研一、徳尾渓舟、武本由夫、唐沢恵津子の作品を各一首挙げている。

△岩波菊治短歌鑑賞、これは合評式に６６号より７１号まで連載された。編集者から選定された作品五首ずつを、毎回四名が交代して評している。武本由夫は全回を通じているが、他は西田季子、清谷益次、開沼貴代、弘中千賀子、住吉光雄、小笠原富枝、唐沢恵津子、川原比露思、小竹清子、安部栄子、梅崎嘉明、植村かず、片岡けい子、光田ひさお、藤田美砂子、中井益代、大場時夫、陣内しのぶ、以上の三名ずつが担当している。

△椰子樹の秀歌を求めて・新納潤魚、本庄研一、前者は６６号に「戦慄すら伴なう」、後者は６７号に「移民文学の一分野として」、いずれも前６５号の同人作品集より数名を採り上げている。

△悲劇の歌人・酒井繁一、古代より現代に至る著名歌人の悲劇物語を、７２号より７５号の四回に掲載している。そのヒロインとヒーローは、天平時代は万葉の狭野茅上娘子、鎌倉幕府将軍の源実朝、アララギ初期の長塚節、「白描」の明石海人と「乳房喪失」の中条ふみ子である。

△椰子樹初期の抒景歌・吉本青夢、これは創刊号より、岩波菊治、椎本文也、花瀬群涛（坂根嵯峨）、阿部青杜の作品に触れ、逐次号を追う予定が、７６号の発表一回で中絶された。

△他のジャンルからのコロニア短歌鑑賞・吉川耕花（７６）

△垣根越しに見たコロニア歌壇・井関譲治（７７）

△詩型・鳥井稔夫（７８）それぞれ俳句、散文、詩の他分野に存る代表的筆者が、短歌をどう見てるか、その考えが述べられている。

論　説

論説は前記の批評、鑑賞の部、後記の意見交換の中にも見られるが、ここには自説的な考察と思われるものを、その回数の順に一括した。

武本由夫、▲「近代短歌」とはどんなものか（７３）、第十四回全伯短歌大会での演題、「短歌に於ける抽象と超現実」を再びまとめ、その前提としての明確な試み、▲言語は両刃の武器です（７９）、前号に収録された細江仙子の自選四〇首「異質の季」に対して、その鑑賞に先立

ち、前衛的作品を理解する手がかり、▲写実への一つの考察（８１）、これも第十六回全伯短歌大会にて述べたもの、写実とはどんなものか。写実でなければならぬ理由、然して作者側のものであることを説く、▲盗作について（８５）、短歌が数学的計算に依って、どれだけの総数を有するかを挙げ、その無限界の中に同一作品は現われないにかかわらず、盗作が存在している。理由として人間の潜在意識、半意識的な模倣、完全なる意識に分かち、読者側の認定、結局は作者自身の良心が決定する。これは当時の盗作事件に触れず、盗作の問題はどこに存在するかの私見。▲作品批評の態度（８８）、作者の人物論と混同しないこと、発表された作品は既に社会的な一つの存在である以上、苛酷であっても、それを誹謗と感受する間違い、批評者は常に作者に対する善意の協力者でなければならぬ、▲短歌用語論、言葉と文字の関係、言葉と社会の関係、用語上の問題、用語の誤りと乱れ、死語と活語、新語の運命、短歌用語の変遷について、以上の各章を刻明に述べ、終りに椰子樹に現われた用語の変遷に触れている。

酒井繁一、▲短歌の伝統を巡る問題（７８）、第十五回全伯短歌大会に於ける講演原稿、日本の各結社の相達する短歌理念に言及

し、伝統を守ることは、そのまま次に渡すことではなく、その特種の性格をより以上に発展させること、更に短歌の価値標準は抒情の性質にあり、詩的感覚の磨きに依って、他の作品を正しく鑑賞する必要を説く。▲新しい短歌と短歌の場（８５）、同じく第十七回全伯短歌大会での演題であるが、その後半を補足して述べられている。古代より現代の中に見る新しい短歌、その時代に於ける人間の生活感情と作者の時代意識。▲短歌の限界について（８９）、短歌の本質、素材と表現、短詩型の中の短歌、文学としての短歌の限界、結論として、短歌における描写は、一首の中の感動を表現する範囲に限るべきである。▲前衛短歌について（９２）、これも第十八回全伯短歌大会に発表された論文、前衛精神は人間の未来に対する可能への挑戦であり、それは人間の思考の発展である。▲比喩について（９７）、比喩の性質から始まり、著名作品を引用、殊に椰子樹歌人の四首を挙げ、他の作品と併記して、その優劣を評している。

安良田済、▲コロニア短歌が戦後に拓いたもの（７９号より８３号に連載）、内容は戦前の短歌との比較（素材の捉え方に於いて、表現上の相違点に於いて戦前と戦後）作歌理念の動向（思想性と社会性について、ローカル・カラーについて、戦前と戦後）、明日の短歌の推移と期待。

以上の項目を持つ長篇である。

細江仙子、▲私の作歌姿勢（７９）、日本よりコロニア歌壇に登場した筆者は、短歌の生命を新しくするために探求する一人であり、自己の人間思考を分析し、創作行為である以上、真実を描くための虚構は許されると断定。▲私の見たコロニア短載（８１）、ブラジルのカラー、風土の臭みを持つべきを望み、不満足である原因は私性にあって、私なるものを克服すべき必要を結論としている。▲グループ発言（８２）、杉田月船、小池誠、高ひろゆきを含めて、批評をテーマとした研究発表である。▲フィクションに

ついて（８８）、フィクションと文学（根本的な問題として、我々の生きる上にどんな影響があるか）、短歌とフィクション　（現実が受けた感動を形象化する時、その創造過程に於いて、虚構的操作は基本的な形である）、フィクションの限界とは（短歌の中に滲透している日本的な考察を断たねば、現代の思想を短歌に生み出すことはできない）。

井本惇　▲批評の周辺について（８２、８３、８４）、一つの用例が理論的な操作を経ずして、事実に結着されて処理される場合に生ずる混乱、短歌の表現形式を、文字の遊戯、自己満足の具とせず、文学性を見出すことに意味を持つが、もっと清潔な苦しみと、直截な表現が満ちなければならない。短歌の骨肉化をさまたげるものはサロン的風潮であり、その狎れあいの通俗を文学は拒否する。▲危機への意識（９３）、危機感の無いところに、近代短歌はあり得ない。生命への郷愁であり、言わばその文学性である。最近の同字句の乱用は、その作者の生活、思想から離れて、単なる作品のアクセサリーにすぎない。

新納潤魚　▲現代短歌について（７７）第十五回全伯短歌大会の発表意見、時代は大衆を対象にしているが、個々の人間を愛さない。現今は自己を強く愛し護らねばならぬ時代であり、自己を吟味し愛して行くに、短歌は最適の詩型である。

▲うらなり短歌論、歌評、その他（８０、８１）、短歌の生命は、作者自体の生活態度にかかわり、真の精神の高揚なくして文学は成立しない。こうした疑義を感ぜさせる一線級の作者六名を批評の対象として、筆者独得のメスを与えている。

清谷益次　▲作品批評への態度（８２）批評する者は作品に対する親切と、作者の基底として持つ世界への理解が必要であり、作品とは作者と批評者の絶えざる合作と言える。▲作歌を支えているもの（９５）、或る探求型の鼎談としての三人の諧謔的な歌談義。▲批評と鑑賞の基準（９９）、苦い批評には多くの場合、真理

が含まれている。それを咀嚼する者こそ常に前進がある。発見は作者のたゆまぬ人間凝視の中から生まれ、常に厳しい自己批判と脱皮が要求される。批評側も対決が求められると同様に、作者もこの態度は欠くことができない。

米沢幹夫　私の短歌入門（８４・８５）、「この素朴なるものへの繋り」では、詩より短歌に転向した筆者が、その十年間に対する感じ方を断片的に語り、「風土性について」では、この国に生活する以上、短歌も密接なる風俗、文化、色彩、体臭と言った風土的基盤の中から生まれるべきを強張、その強臭を持つ新納、本庄、大場の作品を挙げている。▲作歌を支えているもの（９４）、知的遊戯性として、生活逃避として、自己存在として、生活意識として、人間性探求として、の五つの課題を一括して、書簡文体で述べている。

佐藤博三　▲短歌と詩の接点及び分岐点（９１）、表現する時、なぜ短歌の形式に寄るのか。なぜ詩の形式を選ばないのか。短歌と詩との関係を引用に依って説いている。▲幻想についての考察（８６）

短歌に於ける幻想の発想法的機能、真実性、伝達性、詩的効果を捉えた筆者の専門的な異色論文である。

森谷風男　▲客観性と傍観性（９８）、すべての芸術は、主観と客観の二つの原則に分属され、凡ゆる表現は、そのいずれかのものに範疇している。短歌には傍観的泳法の要素を含み、芸術性と非芸術性の照応は、避け難い民族文学の必然性を帯びている。

浜田良一郎　▲詩性についての考察（８７）、短歌がさまざまの様相を備えて来ているが、本質である詩性を採り離すことはできない。筆者の感ずる詩のイメージから、詩のある短歌と詩のない短歌を論じている。

意見変換

言わば論争であるが、その反駁の中には採るに足らぬもの、例えば作品や意見を離れて、感情的に相手をこきおろし、プライベートの問題にまで立ち入っているのもある。これも第三者へ、私見を訴えるための手段として、各自の批判に価するものと片付ければ、さほど嫌厭することもないと思う。大は論説から、小は「意見交換室」のような挨拶程度のものを集めたが、複雑をやりとりの連続を持つ関係上、内容の註釈は最小限の要点のみに止どめておく。

光田寿男（５３）×梅崎嘉明（５４）、後者の５１号に於ける樋口辰男作品の批評に対し、前者は原作の方が実感性ありと述べ、更に後者は詩的要素の観点から、これを覆えすと共に釈明している。

茂樹徳太郎（５７・５８）、西田季子（５８）×吉本青夢（５６）、吉本の「女流三人の歌を見る」に、茂村が二回にわたって文法学的に皮相を衝き、当の西田も「せせらぎ」について反論を試みた。

葛西妙子（６１）×吉本青夢（６２）、６０号で本庄研一が、前者を評し「速写カメラの機能の限界で歌を楽しんでいる」と言ったのに、前者は正反対の見方でありと詰問し、その「私は速写カメラ師か」に追い打っても。後者が一矢を報いた。

梅崎嘉明（６２）×本庄研一、井本惇（６３）、６０号の本庄、６１号の井本の論議に疑問解答を求めたに対し、再び両者が「歪んだ鏡面」と「それだま」にて、前者を軽くあしらい、合せて「明日の歌壇への声援」の武本、徳尾、吉本に矛先を向けている。

光田寿男（６３）×モジ短欲会（６２）、６１号の指定作品を合評した五名のモジ短歌会に、座談会としては興味はあるが、ふざけた批評態度は良しからずと、苦言を呈している。

近昇（６４）×吉本青夢（６３）、小林寂英（６５）、６１号の選歌批評を担当した近が、小笠原正好作品をこきおろしたに対し、

選者の立場から吉本がいささか冠を曲げてつっかかった。近は後へ引くどころか、多面のネタを楯に応戦、やや人身攻撃の嫌いがあった故か、見かねた小林が助勢を買って出た。

梅崎嘉明（６４）×井本惇（６５）、これは先に続く延長戦、前者が後者を脱線論と決めつければ、後者はまた「頭脳の交通整理について」と、くだけた文章ながら捻りを入れている。

大場時夫（６４）×住吉光雄（６５）、６２号の前者作品を評し、借り着みたいと言った後者に、前者は「素朴と妥協について」と銘打ち挑戦“後者はこれに応じて巧みに身を交している。

光田寿男（６５）×坪田義雄（６４）、後者が６２号にて合評を行なった三人が、新納潤魚作品を悪評したのを、逆の見解から浅薄と言ったことに、前者は合評者の一人の説に加担、更に後者より原作者へ意見を転嫁した。

梅崎嘉明（６６）×井本惇（６５）、復仇として後者の文章のわからなさを、とうとうと述べたにかかわらず、持久戦とはならず、後者は完全に黙殺した。

武本由夫（６６）×大場時夫（６７）、後者が６５号の特集「発言の広場」で、「現代伯国歌壇の方向」と題し、八当りの記と称して発表した中に、前者と吉本が短歌コンクールを合評したくだりを当り散らした。これを腹にすえかねた前者は、その経緯を説明して誤解の撤回の一文を草し、併せて吉本の非ならざるに言及したが、それでも納得できぬ後者は、居直り文句で食ってかかり、吉本へもいびりをかけて来た。これと時を同じく、吉本は前者には弁明の詫びを入れ、後者へは下手に出で無暴への提言をしている。

本庄研一（７０）×住吉光雄（７１）、６９号で光田寿男が、前者の一首を「炭坑節まがいの歌」と言ったのに対し、相当辛辣に槍玉にあげた。それを恐るべき罵倒の一文と見なし、義憤を感じた後者は、光田擁護の筆戦に出た。

坂本清人（７０）×開沼貴代（７０）、これは第十三回全伯短歌

大会席上にて、後者が前者の作品批評したのに、前者が質問し、後者が応答するおだやかを意見交換である。同時に発表されているのは、編集部のはからいであろう。

この辺りから、反駁的な論争、いわゆる口喧嘩の意見交換が、すっかり影をひそめた。何が起因しているのか。その沈滞期は五カ年に及んでいる。倦怠を覚えたのか。嫌気がさしたのか、先ず各自の生活状態の変化に伴ない、こうした頭脳を酷使する愚を悟ったのかも知れない。

とにかく向こう意気の強さが無くなったのは、わびしいような気がする。

前記に触れなかったが、個人的な意見に止った筆者と号を挙げると、開沼貴代（６３）、坪田義雄（６３）、葛西妙子（６３・６５）、佐藤一英（７１）、坂本清人（７１）、井之盛一翠（７２）。

なお、最近になって、第十八回全伯如歌大会の席上での大場時夫発言が、武本由夫の作品を採り上げたことに端を発して、武本は９２号より９４号にかけて、「前衛傾向の短歌」と長論説を発表した。これには、「理解への足がかりとしで、大場氏との協同追究」なる注文が付いているが、大場は９３号で「同じことを」と寸言しただけで口を緘して語らずに終った。

詩

時折、表紙裏や巻頭に、転載の詩や小品が発表されていたが、内部のそれも、多くはスペースの場所ふさぎに類するものである。椰子樹関係者に依る詩は、五十巻を通じて僅か十一鷺、その題名と作者を記すと、○傷痕・玉木五男、○十字架・米沢幹夫、○光と影・殿岡照郎、○卓球。郁泉史、○銀婚を迎えた友に・浜津正夫、○夏の湖・西田季子、○流れ・川原比露思、○小石・玉木レオ、○いやらしい風景、失われた時・佐藤博三。

以上の外に、８６号から新たに編集者となった安良田済が、そ

の期間中を欠かさず、佐野功にたのみブラジル作家の訳詩を発表している。その題目と原作者を挙げると、○祝福あれ（○・ビラッキ）、○そねみ合い（M・アシス）、○断章（C・アルベス）、○昔も今も（V・カルバーリオ）、○昏迷（P・レオニ）、○降誕祭の夜に（M・アシス）、○小鳥（○・フォンテラ）、○幼年時代（R・アポカリプセ）、○永劫（同上）、○釈明（L・オルタ）、○憩い（0・フォンテラ）、○敗惨（A・キンタール）、○四十路（M・アンドラッテ）、○誂元（C・メイレレス）、○遠い夢の物語（M・フウスチーノ）、後の八篇は原作を併記し、中の二篇には注釈が付いている。

更に、短歌作品を逆にブラジル語に訳されたのが９４号以後にある。いずれも椰子樹に発表された作品で、その原作者は水法すみ子（二首）、陣内しのぶ、八幡与三、小笠原富枝、森重扶美である。

表　紙

表紙は体裁の面はもちもん、椰子樹の歴史の上た大きな役割を果たしている。

内容の作品に重点が置かれ、互にしのぎを削っている中に、画家たちは黙々として、芸術作品を提供してくれている。こうした協力者のあることが、椰子樹の生命の保ちと言えよう。

５１号より５８号までは、その以前より続いて写真が載っていた。誰の撮影に依るものか判明しないが、「椰子樹」の遠景と近景があしらわれている。

次いで米沢編集者となり、５９号から６８号までは、間部学の抽象絵画が三点変って続いた。最初の三号分は有名な「ビットリオーゾ」であるが、複写のため不鮮明だったのは惜しい。６９号より福島近の「小島」の絵に移り、７２号より再び聞部学の作に

なったが、これは先の椰子樹五十号記念号に使われたものである。
清谷編集者となった７５号からは、富岡清治の版画に切り替えられ、これは８６号以後の安良田編集者の期間中も続いた。
その二十六冊の表紙に刷られた版画は十一種類であるが、その内の三点には、それぞれ「ブルガリアの人形」「南洋土人作木彫面」「たこの木」と画題が付いている。他の無題であるのは惜しい。
題字は随時整調字体が現われたが、殆どは故坂根嵯峨の直筆を使った。百一号を転機に、新しい陣容となった編集部では、体裁意匠を一変してもよいと思う。

（後記）

僕の担当の諸統計は、やはり百号が出てしまわなければ、どうも手に付きかねる仕事である。それまでの大体の集成は終えていたが、ただ一号分の追加に依って、一括するに二重手間という結果になってしまった。従って他が出揃っているだけに、気が急がれての整理は、どうしても杜撰なものになってしまう。中には大切な項目を脱落し、分類の上で入れ違っているのもあるが、その点は大目に見てもらいたい。他の執筆のものに比べれば興味は薄く、また重複の個所もあり、その上に題名、作者、数字の羅列と来ては、素通りするのが落ちである。然し、こうした数字に見る諸統計も、椰子樹の歴史の中に、重要な位置を示すものと思う。時間と根気の労を幾分でも知ってもらえば、編者のこの上なき喜びである。

坂根賞と椰子樹賞

川原　比露思

我等の椰子樹が、五十号記念号を出したのは、まだ最近の様に思うけれど、それから既に又五十と号を重ね、今年椰子樹百号記念特集号を発行することになったことは、短歌を愛する同好者の一人として、よろこびに絶えないものがある。

百号に達するまでの、椰子樹の足跡をいろいろな角度から振り返えって見ることも、あながち無意味なことではないと思う。椰子樹のある時期に、私もその編集を担当した関係上、今回の特集号の編集委員の一人に選ばれ、物を書く機会を与えていただき、今更の如く、椰子樹の歴史をふり返えってみることは、創刊号からの会員でもある私にとって、まことに感慨深いものがある。

なお、この記念特集号には、コロニア短歌界のベテランが、そ

数字に見たる椰子樹の動き

号	発行年月	ページ	作者数	作品数	摘　　要
51	1957. 5	24	56	346	
52	〃 . 8	28	44	323	
53	〃 .12	48	47	321	
54	1958. 3	50	59	391	第1回椰子樹賞発表
55	〃 . 5	40	60	374	
56	〃 . 8	32	50	337	
57	〃 .11	48	59	378	
58	1959. 3	34	55	367	
59	〃 . 6	64	54	388	瀬崎清声特集第2回椰子樹賞発表
60	〃 . 8	64	57	436	徳尾渓舟特集
61	〃 .11	66	65	460	武本由夫特集
62	1960. 2	64	62	434	行方正治郎特集
63	〃 . 5	76	62	439	吉本青夢特集第3回椰子樹賞発表
64	〃 . 8	72	61	494	葛西妙子、関沼貴代、西田季子特集
65	〃 .11	70	63	542	
66	1961. 2	60	62	551	
67	〃 . 5	78	63	658	第4回椰子樹賞発表
68	〃 . 8	64	72	642	
69	〃 .11	80	76	674	
70	1962. 2	74	76	746	ブラジル歌人歌集特集
71	〃 . 5	72	83	677	第5回椰子樹賞発表
72	〃 . 8	70	72	654	日本短歌社々長・木村捨録氏来伯
73	〃 .11	56	59	606	
74	1963. 3	48	60	546	第6回椰子樹賞発表
75	〃 . 6	44	68	644	
76	〃 . 8	50	69	691	
77	〃 .12	64	78	758	
78	1964. 3	70	70	740	第7回椰子樹賞発表
79	〃 . 6	54	82	760	
80	〃 . 9	54	70	683	
81	〃 .12	56	85	873	
82	1965. 3	56	70	764	
83	〃 . 6	74	82	909	第8回椰子樹賞発表
84	〃 . 9	50	81	945	
85	〃 .12	58	80	1027	
86	1966. 2	46	60	642	
87	〃 . 4	46	43	497	宮中歌会始入選者特集
88	〃 . 6	52	50	579	第9回椰子樹賞発表
89	〃 . 8	52	61	774	
90	〃 .10	54	61	677	
91	〃 .12	48	51	624	
92	1967. 3	54	65	686	
93	〃 . 5	54	52	542	
94	〃 . 7	68	57	584	第10回椰子樹賞発表
95	〃 . 8	64	61	702	東野暁風・大島進追悼号
96	〃 .10	58	57	595	
97	〃 .12	48	48	480	
98	1968. 2	52	55	575	葛西妙子追悼号
99	〃 . 4	52	53	563	第1回岩波賞発表
100	〃 . 7	64	53	546	

れぞれの分野で健筆をふるわれるので、先の五十号記念特集号よりも、更に、内容的にも充実した、正に、コロニア短歌界の歴史的展望と言っても過言ではない、立派な、重量感のあるものが出来上ることを信じている。今回私に与えられた課題、坂根賞と椰子樹賞について書いてみたい。

先ず、坂根賞といっても、最近の会員には、よく理解出来ない人もあると思うので、椰子樹第二十二号に発表された、坂根賞に関する趣旨を再録してみる。

坂根賞設立に就いて

一、設立の趣旨

伯国短歌興隆の素因を為す椰子樹誌創刊の原動力的存在坂根嵯峨に対し、感謝の意を表し、之を永遠に記念する意味に於て、坂根賞を設立し、合わせて、伯国短歌の普及と向上を計ることにした。

二、授賞規定

一、授賞は、授賞作品撰定委員会之を行う。

一、作品の受賞資格は、伯国に於て創作されたる短歌作品にして、過去一年間中請新聞、雑誌に既発表のもののみ之を有す。

一、賞は、入選を記念する意味の物品及び副賞、金五百クルゼイロスとす。

一、行賞は年一回、金伯短歌大会の席上に於て行う。

一、委員間に意見対立して該当者の撰定を見ざる場合は次年度に俟つこととす。

三、受賞者の撰定

一、選定委員は各自、過去一年間中に於て、秀れたる作歌活動を行いたりと確認し得たる歌人三名を、それぞれ推薦の理由を記して、委員会の規定したる時日までに委員長の手許まで推薦状を送附すること。

一、委員長は各委員より送附されたる推薦状をまとめて印刷し、各委員に送附し、各委員の意見を聴取して後授賞者を決定すること。委員は他の委員を推薦し得。

四、授賞委員会々員

委員会々長＝岩波菊治、同副会長＝瀬崎涛声、同委員＝行方正治郎、小田切剣、徳尾渓舟、武本由夫、中山稠子、清谷益次、吉本青夢、葛西妙子、脇坂一、開沼貴代、不二山南歩、天津夢城、中江克巳、坪内広代以上の発表で、大体坂根賞の趣旨や規定なども判っていただけると思う。

一九五〇年度の第一回坂根賞は、当時イタニャエンに於で、海に多く取材した秀歌を次々と発表し、当時のブラジル歌壇に異彩を放っていた吉本青夢が受賞した。次いで第二回は、井本惇、第三回、川原比露思、第四回、河村哉太郎、とつづいたが、以後は残念ながら該当者なしで、遂に、第六回中央同人会議に於て、新たに、作品募集（二十首）に依る椰子樹賞が、坂根賞に代るものとして設定された。これは知っている人が多いと思うので椰子樹賞設定については省略する。

これから順を追って、坂根賞の第一回受賞者から第四回までの受賞者、椰子樹賞の第一回受賞者から第十回までの受賞者と作品各五首を記してみる。坂根賞の方は当時の受賞者の作品中から、又椰子樹賞の方は応募作品から抄出したことを断わっておく。

坂根賞受賞者の四名が四名とも、当時全盛時代とも言うべき、日伯歌壇に於て活躍し、武本選者の指導を受けていたことはまことに興味深いものがある。

◎坂根賞

第一回受賞者　　吉本　青夢

海凪げばけさ潮騒の低くして沖の小島のさやに見えつつ

工房の窓に時をり寄りゆきて息づくは魚のあぎとふごとし

磯島の高処にひそむ海鴨の声聞きをれば高み来る潮
燈台の道のぼり行く人ありて持つ太刀魚が光る夕日に
海べりの朱実のジュアは低けれど夕潮風に揺れゐたりけり

第二回受賞者　　井本　　惇

くやしみも寝いらむ際に消ゆらむか一日すべなく思ひつつゐて
イペの花咲きつぐ春の日をながく病みこやりしが遂にはかなし
汝想ふ心しきりにさびしきに日ぐれて人といさかひをしつ
い群れつつ飛べるアララのもろ声は原生林の空にひびきし
街なかに飼はれてアララ一羽なり声啼くときし壁にこだます

第三回受賞者　　川原　比露思

日のあり処うまく見えつつ移りゆく雲りの下の藤波の花
明けがたの短き夢もいくらかはわが現実につながりもてり
夜学にて疲れ居眠る少年にいたわる如く吾はこゑをかく
み冬づく閃けきひかり玻璃窓に動作にぶりしはへの群れゐつ
マカウバの青葉をながす夕ひかり南の果てに雲たまりつつ

第四回受賞者　　河村哉太郎

乱れつつ山辺に上る炊煙が今朝は東に向きを変へたり
啼きて居し鳥も去にたる裸木に今残照は色錆びにけり
夕暗き竹の下道過ぎ行きていくつか白き皮を踏みにき
暖かき夕の雨の晴れしより蟇啼き出でぬ太き声にて
声とほり春蝉一つ啼く山にたまたま風の吹きすぐる音

以上で、坂根賞の受賞者と、当時の作品五首を抜いて記してみたが、これらの受賞者達の作品群の中には、当時のレベールから言っても、秀れた作品がすくなくない。この坂根賞を一つの支点として、コロニアの短歌が脱皮をはかり、更に、椰子樹賞に切替

えられてからは、多くの新人の場を展くことが出来た。

◎椰子樹賞

第一回受賞者　　小笠原富枝

舗道一面盛上り流るる雨水は排水溝に渦巻きて落つ
おもむろに動きつつあり中空を占めたる雲の黄に濁りつつ
雲間もるる薄陽の中にかわきゆくナイロンの靴下の線柔かく
標本の白蝶ひとつ壁にはりて何思ひいむ少年期の子は
逢ふ刻を約しゐるらし通話しつつ振向きし汝を美しと思ふ

第二回受賞者　　梅崎　嘉明

汚れたる作業衣たくましき若者の君は旋盤切粉を落す
曇より射す陽うごきて丘の上の箱庭の如き墓地を照らせり
呼応する如く斧の音こだまして時に大樹の倒れゆくさま
茶の如く枯葉の匂う開墾地に風吹けば木の葉空に舞ひ立つ
残されし生木に炎は燃えうつり青き繁りは忽ち黒し

第三回受賞者　　小竹　清子

陸よりの風吹きくれば入海のここの岬へななめに寄る波
寄る波に砂を洗ひて見る烏賊の体透きて内臓の伸縮のさま
海に沿ふビル街の影伸びきりて長きは朝の波にもまれつ
昼の光まぶしきまでに砂白しあくまで青き海に対ひて
潮風に吹かれ舞ひゆく黄の蝶波の反照のなかに見まよふ

第四回受賞者　　弘中千賀子

営みはひそやかにして球根にまた純白の花期めぐり来ぬ
ジャカランダの繊き胞子が開きゆく帰結のあらぬ思ひの日々に
吾が裡の一途なるもの撓しめて夜の雨よまた明日につながる
こころ脆くまたダイヤルを廻しゆくに肘に冷たし石のカウン

ター

優位なるときに女はやさしかり同性の狭き交りの中

第五回受賞者　　陣内しのぶ

記憶すでに傷みを持たぬ婚約の指輪空しく夜の灯に光る
淡き過去秘めて小さきわが乳首少女のごとく時に痛めり
節を曲げず生きたるなどと云いがたし常に冷たきわれの体温
わが眼より貫ぬくものの出でゆけよ室も戸外も深き闇の夜
断層のごとき思い出あざやかに甦ると云えど触れがたき距離

第六回該当者なし

佳作　　森重　扶美

独り旅たのしむ如く君父は小さき鞄をさげて来ましぬ
静かなる炎とおもふ音もなく解けゆく蝋を両手にかばひ
かなしみに慣れねばならぬと思ひつつ踊りてコップの破片を拾ふ
よみがえる傷み包める如くにもやもめかづらの静かなる揺れ
妬まれてゐることも幸の一つとし或る夜飲みほす苦き錠剤

第七回受賞者　　水本すみ子

たどきなき想いに佇てばウインドの宝石驕慢な光を放つ
円柱を淡く浮き出す照明にいまだ融け入らぬ拘りを持つ
かかずらうもの何もなしすがすがと季節風粗らき坂降りゆく
沖遠くわが繰り言を運びゆけわが立つ岩に寄り来る波よ
過ぎ去りの歴史を遠く想いおれば潮風巻きて列車過ぎゆく

第八回受賞者　　高橋よしみ

自らをはげしく燃やしとぶ星に憧れるなり消極の日々
夕茜燃え盛る窓のプラインド深く閉して未来なき思慕

唇に出さば空虚とならむ声のみたる愛撫髪にやさしき
救いなき想いひそかに沈めつつ小雨の野路をよりそいて行く
過去の章塗りつぶしいく行間の真実の声に刺し貫さるる

第九回受賞者　　佐藤　博三

地平より風媒花はやき風にのり森こえて白く空にひろがる
朽ちのこる龍骨抱きし海蝕の岩ありありと曝す傷痕
白き穀さらして売らるる炎天の牡蠣のむき身に海がにおえる
真紅のけし炎天に対いいてきらめける驕慢に盲い行くなり
ひろき野に焼けのこる巨木いつまでも獣温のごときかなしみ消えず

第十回受賞者　　南条由喜夫

夏の雨しるく芝生にふり沈みながき錯誤のついの安けさ
暑き日の始まらんとして割石を路面に敷きいる音たちはじむ
橋したの闇にとどろく谷川の夜の激ちは昼より高し
パイネーラの花鮮やけき日も僅か花は降るごと花の上に散る
ジャカランダの路樹騒ぎいる夜の野分吹き戻されしわが声をきく

以上でもって、坂根賞から椰子樹賞十回までの、受賞者と作品の一部を見て来たのであるが、その間にあらわれた作品傾向の推移といったものがうかがわれて面白い。写実から出発したコロニア歌壇が、表現内容とも詩としての作品世界が拡げられ、前衛的作品、あるいは幻想的作品と巾の広い作品傾向を見られることもコロニア歌壇の向上を示している。

坂根賞や椰子樹賞がコロニア歌人の登龍門として、秀れた新人発掘に大きな役目を果して来たことは注目されてよい。

椰子樹賞のあとをうけて、新たに「岩波賞」が設けられ、更に「コロニア短歌賞」が設定される。こうした新しい企画が、新人や

実力のある作家を顕彰することは、コロニア短歌界にとって、まことに意義深いことと思っている。コロニア短歌が今後益々隆盛に向わんことを切に願うものである。

ブラジルの女歌に就いて

酒　井　繁　一

表題は編集者からの指定である。ここで「女歌」というのは「女の作った歌」という意味ではなく、その作品が「女を打出している歌」という意味であろう。然しこのような課題を果すことは、その資料集めだけでも容易なことでなく、更に集めた資料によって「女歌」を識別することも短日では出来ない。そういう理由で私は手元にある「椰子樹」に発表された範囲において述べることにする。然しこれとても粗雑なものにならざるを得ない。

一、前期の作品

「椰子樹」の創刊は一九三八年十月で、本欄の作者は六十名。この中に三十二名の女流がある。男よりも四名多い。作品の格付を見ると、詠草一に岩波菊治、椎木文也、花瀬群涛（坂根嵯峨）阿部青杜の四名がならび「岫雲集」に葛西妙子、開沼貴代、樋田美沙子、坪内広代、多羅間きぬ子、木村茅里、須貝さだめの七女性が瀬崎涛声、行方正治郎、武本由夫、徳尾渓舟ほか九名の男性と肩をならべている。更に「十月集」一には坂根雪江、長内チエ、悠紀子、荒木浅手の四名がならび「十月集」二には二〇名の女性の名があるが横地季子（西田季子）のほか、現在に活動している人の名はあまり見当らない。

父もなく母も在さぬふるさとに誰が待つらむかかくも恋しき

葛西　妙子

雲とびて椰子の葉ずれの高鳴かと見し間に早も雨は落ち来ぬ
開沼　貴代

我が生計貧しき故かこの日頃子等のさかしくなるがに思う
樋田美沙子

朽葉ふめば心しくしく嘆くかなふるさとを吾の遠く遠くあり
坪内　広代

さぎりふる朝の庭の紅の椿の花はつゆのおもたき
悠紀子

忙しさに便りもやらず病床も見舞はず伯母を逝かしめにけり
古山　暁子

これらは椰子樹創刊号の作品であるが、いずれの歌にも女ならではの風格もなく、作風に異色もない。開沼、悠紀子の作品に写生歌の型があり、葛西、坪内作品には主観が見られるが、いずれにしても作者の「風格」を取上げる段階には至っていない。

国肇めましけむ昔思ほえて遠つ皇祖の神々を崇む
葛西　妙子

世界の歴史転換さるべき秋に逢ひ吾等日本に生れしを悦ぶ
同

椰子樹第一〇号詠草二に「元旦に祖国日本を憶ふ」と題して発表された作品である。作品そのものは綴方の域を余り出ていないし、女歌としての色彩もない。然しこの作者の風格は出ている。誠実な日本国民、君主国のみ民、そうした作者が率直に出ている。丁度皇紀二千六百一年の作であるが、この時期にはこうした精神に支えられた歌人は、男女を問わずあったであろうし、従ってこのような作品は他にも見られたであろう。

この夜頃蒸暑ければ子等二人寝冷えしならむ腹を下痢しぬ
安部　栄子

児の笑まひ夫とし見つつしばらくは生活の重荷忘れたりけり

同

同じ誌上の岫雲集に発表された作品である。名を伏せて読んでも女歌とは理解出来る歌であるが、特に作者の風格を出すには至っていない。女子共通の範囲の所産である。

目に見えぬ費かかれど詮もなし子等三人を学校にやれば

樋田美沙子

十人の子等の住まへるこの国に骨埋むとも吾は悔なし

玉木　梅

同じ誌上の作品で樋田作品は岫雲集、玉木作品は冬影選歌に載っている。二首ともその繊細な把握の中に女歌と感得することが出来るが、水準から言えば現在の女流作品との間には可なりの隔りがある。

特に作者の風格というものは相変らず出ていない。

創刊号から第一〇号に至る期間に見る女流作品は大旨この程度のものであって、特色のある女歌は殆ど見当らないし、作者の風格の鮮明な作品も少ない。

二票ある我が家をめざす投票紙はメモ紙となして夫は重宝す

西田　季子

静かなる傍観者とはなりがたき夫は今日の演説口訳し居り

同

椰子樹第三〇号の詠草二に発表された作品である。言葉の上に女の作であることは出ているが、特に女歌としての染色はない。然し作者の風格を打出した作品で、そこに万人詠でない境地がある。

このほか同号には詠草二に葛西、開沼、坪内が発表し、昊天集に森重扶美、紅葉選歌に小竹清子、簀戸勝子、佐伯千賀子、藤田

美砂子等が発表しているが、特に女歌として取上ぐるほどのものはなく、作者の風格が出ている作も甚だ少ない。

椰子樹第四〇号あたりの作品になると、ブラジル短歌の水準が可なり高くなり、それに伴って女流の作品も進み、作者の風格を備えた作品も見られる。開沼、安部の作品は写生を基盤とした手堅い作品に作者の風格を示し、葛西、坪内の作品は濃度の差はあるが主情的な作風に人柄を打出し、西田作品は知性の勝った作品の中に作者の風格を示している。然し作品に進歩が見られる割合いに特に「女歌」として瞠目するほどの作品はいずれの作者にも見当らない。

同号の岫雲集には小竹清子、小笠原富枝、森重扶美が発表している。小竹と小笠原の作品は写生一途、森重作品には主情が見られ、共に作風の一端は伺われるが、やはり女歌として取上ぐるほどの作品は見られない。

作品2には弘中千賀子、吹本菊子、陣内しのぶの作品があり、作品3には植村かず、望月喜恵子、清水せつの作品が並んでいる。これらの中には女流の歌と判然するものはあるが、一首の中の文字によって知る程度で、女ならではの作は殆どなく、作者の投影もまだ濃厚ではない。

椰子樹第五〇号になると、女を踏まえて作った歌が相当に目につく。

さらさらと茶せん通しを吾はしぬ今平安の音をたてつつ
　葛西　妙子

久々に逢ひたる娘とも一と刻にて話題つき我は厨へとたつ
　開沼　貴代

軍服の吾が子に肩を抱かれて歩む夜の街あかあかとして
　森重　扶美

珍らしき花贈られてきどるとき新しき布を裁つ感じあり
　大沢　愛子

中絶をして帰りし嫁を労りてまつわる孫を外につれだす
　　吹本　菊子
贅沢な寂しさだと一蹴されしままひとり昼餉の卓片づくる
　　弘中千賀子

これらの作はいずれも男には出来ない女の歌である。一部を直せば男の歌になる性質のものでなく、女人の体臭がある。然し作者の風格という点になると、至れりとは言えない。

二、後期の作品

かりに椰子樹第五〇号までを先期として、以後を後期とすると、後期の初めは女流の発育期で、現在は満開期と言えよう。然し「女歌」と言える作品は至って少ない。

酔ふといふ手だてがありて男等が仮面脱ぎゆく様を見て居り
　　西田　季子
かたわらに友の冴えたる眼がありきおみなのずるさ曝しいるとき
　　弘中千賀子

椰子樹第七〇号に発表された作品であるが、これらは出来不出来は別として、作者の風格を示した数少ない歌である。

フエーラより買ひ来て吾の加へ置く花鉢誰も気付くことなく
　　簀戸　勝子
南天の細葉さゆるる朝の窓手ふれし髪の乾きて固し
　　藤田美砂子
婚約の解消をせし娘が掃きてゆく朝庭の帰日乱れなけれど
　　植村　かず

同じ第七〇号の作品であるが、女性としての手触りを感ずる歌で

ある。

憎しみは裡ひそみつつ色濃ゆき折紙に幾つ鶴生れしめつ
弘中千賀子

ナイロンの下着に緊まる肌探し循環する血溢るる知らず
陣内しのぶ

ゆすり込むように体を揺がせつつ暗記しいる子の背幅広からず
水本すみ子

椰子樹第八〇号の作品であるが、文字だけが示す女性詠ではない。己れを踏まえた「女歌」である。

若きらが笑さざめき炊事するを厨の隅に安らぎており
井上　ふじ

目の前のもの探すにも吾を呼ぶ夫の習癖のうるさき日なり
梶田　きよ

むしかえる人ごみの中よ身重なる我は店守る惰性となりて
加藤まりゑ

黒き色を好める吾と寂しみつ今日も毛糸を黒く染めおり
北原しのぶ

同じ第八〇号の作品である。このような一見して女流の作と知れる歌は他にもあるが、いわゆる室内詠の範囲を出ないものか、単なる外出詠で、異色という作品は見当らない。

恍惚と甦えるものひとつ匂うかの新俎板にて冬菜きりつつ
石塚　やす

ひそやかに布団繕う部屋ぬちに入り来し燕の震う翔音
安部　栄子

病み勝の夫に留守させ出で来しが心重たくバスにゆらるる
清水　節子

離れえず亡夫とすごせしこの住み家不便をかこつ吾子にわびつつ
井川　季子

雨だれの音は止まずに産院に過ごせし三日降りつづきたり

上田エイ子

蛇を搏つ女の邪心火と燃えて羞らい褪せし年をわびしむ

清水そとえ

ひねもすを留守居に孫の相手して糸とり遊びの手振り可愛ゆし

加藤　ふじ

これらは椰子樹第九〇号に見る作品である。清水そとえ作品のような特種の把捉が目につくが、ほかはすべて係累の域を出ていない。

椰子樹第九九号に目を通すと、次のような作品がある。

桜花を庭に咲かせて待ちくれし異邦人なる君に嫁げず

望月喜恵子

音もなくこもるひと日厨辺に蒼きゆらぎのガスの火は充つ

清水そとえ

絨毯に落ちて光れる針にさえつながる過去のあれば悼めり

西田　季子

わが亡母もかかる思いをされしかと娘を嫁がせて今思うなり

安部　栄子

活けて和む灯下の花に吸わせたる言葉自在となれりそれより

陣内しのぶ

納屋隅に溜れるタマゴの虚さをくずしゆくなり朝の光は

小笠原富枝

これらの作品はいずれも女を踏まえての歌で、各々に作者の投影がある。

三、椰子樹賞作品に現われた女歌

幾度も寝返りをする夫のかたへにひそと読みつぐケイン号の叛乱

小笠原富枝

葉すすきを活なずみいる夜の更けを吹きおろす風のときに鋭く

同

脆き吾が性故と思ふときに娘が「母ちゃんの顔寂し」と言ふよ

同

優位なるときに女はやさしかり同性の狭き交りの中

弘中千賀子

淡き過去秘めて小さきわが乳首少女のごとく時に痛めり

陣内しのぶ

冬陽射す部屋に纏えば疼くごと甦るあり亡母の衣香

同

帰り来て足の火照りを冷やしおりゆうべ現の女体愛しく

この父に甘えし記憶なきことも吾が少女期の暗き思ひ出

森重　扶美

失意ながく抱けばうすきわが胸に触るるクルスの冷きひかり

同

いくばくかわれに似て来し子と思ふ指しなやかに髪巻きくるる

同

唇に出さば空虚とならむ声のみたる愛撫髪にやさしき

高橋よしみ

白靴が似合う足並そろえゆく明るき吾は二十才に満たず

同

これらの作品は一目女流の作と分るのであるが、それは文字の上で分るだけでなく、女性としての感情が打出されている。

雲間もるる薄陽の中にかわきゆくナイロンの靴下の線柔かく

小笠原富枝

あまりにも白浄かればかなしともふくよかに百合の蕾が開く

弘中千賀子

ジャカランダの繊き胞子が開きゆく帰結のあらぬ思ひの日々に

同

過去の破婚喪のごと常にまつわりてわが笑むときも裡にひそめ

り　　陣内しのぶ

敗北を味わうこともなくて来し爪光るなり短かき指に

同

節を曲げず生きたるなどと言いがたし常に冷たきわれの体温

同

静かなる炎とおもう音もなく解けゆく蝋を両手にかばい

森重　扶美

よみがへる傷み包める如くにもやもめかずらの静かなる揺れ

同

たどきなき想いに佇てばウインドの宝石驕慢な光を放つ

水本すみ子

干されいる素焼のきめのこまやかに柔しき朝の光あつむる

同

十字切り吾に誓いし誠心のそのひとときの君を信ぜむ

高橋よしみ

これらの作品は文字の上に女を現わしてはいないが、全体から受けるきめのこまかさ、目の向けどころ、そういうところに「女歌」を打出している。説かずに体臭を出すことは難しいが、短歌の深さはむしろそこにひそむ。そういう点でこれらの作品には良さがある。

朝靄に淡き対岸のビル街に時に光れるものの鋭く

小竹　清子

潮ひきし岬をゆけば浸蝕しるき岩のおもてに腹さらす河豚

同

砂浜に伏しゐる狭き視界にて赤きゴム毯波に漂ふ

同

これらは写生を基底にした秀れた作品であるが、女歌という線には添っていない。

はじめから性別など考えない人間の眼で捉えている。

以上、私は与えられた表題「女歌」について述べて来たので、作者名なしでは女歌と見なし得ない女流の作品には触れなかったが、性意識を超えた女流の作品に佳作は多い。私はこれで好いと思う。性意識を超えた人間として現実を歌い上げることが大事だと思っている。

然し男には男の体質があり、女には女の体質がある以上、そこに焦点をしぼって歌いあげることにも意義はある、女流歌人が「女の体質、女の環境で歌い上げてみせる」という信条を掴み、それに取組むことは決して無意味ではないであろう。ブラジルの短歌の世界には女のみが開拓し得る世界が男のそれよりも多いと思われる。

新聞歌壇の辿った跡

清谷　益次

―　戦前の部　―

ブラジルの邦字新聞にいつ頃から短歌作品が発表され始めたか、乏しい資料では明らかにすることは出来ない。

今度、椰子樹百号記念号の「新聞歌壇の沿革と展望」を担当することになってやっとの思いで集めた古い新聞の製本や切抜きによる限りでは、日伯新聞の一九二〇年六月十八日号(一七〇号)に「日伯歌壇」と銘うって、バグアスの静雨という人が「冬」という題で五首を発表しているのが最初である。その中の一首をあげてみると

冬の山月は照り行く常盤木の西に消えけり我恋のごと

この後、日伯新聞は一九二六年一月一一日号までが入手出来ないのでこの間どのような作品が発表されているか、今私には探る手だてもない。

ブラジル時報では、一九二一年の一月一日号に初めて「時報歌壇」と銘うって「淋しき男＝まさみき」「雑詠＝馬場乙雄」両名の作品が現われている(これ以前の時報は残念ながら入手できない)一首ずつを示すと

決断の鈍き男がつくねんと思い煩い立てる山畑

まさみき

ひっそりと時は音なく流れ徂く折々犬の遠吠悲し

馬　場

ここにあげた二新聞の作品でみると、発表の時に半年の差はあるが、時報のそれの方が格段に「近代的な姿を持っているようである。

手もとの資料では、日伯新聞には六年間の空白があるので、この間の新聞歌壇はもっぱら時報によらなければならないが、ここで次いで現われる作者には山田紫月、琉球男(仲間美登里)、黒坂了山、すみれなどがある。ただ発表の回数も作品数も至って少い。

一九二二年一月二十七日号には白鴎子というのが一連の歌を発表している。これは往年、歌や詩に盛んに活躍し、一方の先達として名を留めている今井白鴎だと思う。

土の香の高きをめでぬ生活の尊さを知る雨後の朝よ

ただし作品そのものは秀れた感覚をもったものと言うことは出来ないようである。

一九二二年といえば笠戸丸以来十四年は経っているが何といってもコロニア創草の時代、何にあれ秀れた作品が現われ得ないのもまた無理からぬところといえるであろう。同じ年の六月頃、数回

に亘り里見はるが「短歌とロマンス」という歌論とも感想文ともつかない文章を発表している。〝生い立ちの記〟に自己の作品をからませた甘いものであるが作品は至極幼い。ただ恋愛感情をかなりあからさまに扱った文章と作品は、当時の移民の間では珍しいもので或いは注目されたのかも分らない。

面白いのは翌一九二三年十二月十四日号にピンタ小笠原直衛の作品が載っていることである。

けぶら山雲の衣をまといつつ足洗うなりぱらいばの川

けぶら山がどの山か私には不明だが、小笠原直衛（現アルジア在住九十八才）はいうまでもなくその一族を引き連れて北海道から移住して来た人で〝大型移住〟として今に語り草になっている。

その前の九月二十一日号では、現在カンピーナスに住み時折作品をみせている笹岡愛海が

しみじみと嵐の夜半に浮び来る我恋人の面影も淋し

と発表している。

一九二四年二月二十九日号には、椰子樹の表紙の香気豊かな版画でおなじみの富岡耕村が短歌ではないが詩「耕地を去る」一篇を発表し次いで三月十四号には「折にふれて」という題で一連の歌がある。

我手もて洗いし服の白うして着たる心持のさわやけきかな

さらに六月三十日号に「旧き歌―船にて詠める」があり

かぎりなき浪よする方そらあおみ紫の雲座して動かずなど盛んに発表している。恐らくこの頃は耕村の歌に詩におおいに心を寄せていた時代であろう。椰子樹会員として現在も意欲の衰えをみせていないのだがその息の長さに於て稀有の存在と言うことが出来る。なおこの前後、プロミッソンの仲真南溟（後の仲真美登里）松本高信ら後年有名になった人らの作品が僅かながら見える。

ブラジル時報は一九二五及び二六両年及び二七年前半、二八年度分などが散逸していて、その間どのような作者と作品が現われ

たか知るよしもないが二七年の九月十六日号で大内田健三が「伯国文芸批判―上」を書き、鈴木南樹のユーカリの森にこめたる霧深み灯る家のかそけきはよしなど四首の歌を「力強さがあり歌いこなし方が老熟だ」との評を下だしているのをみると、南樹がしきりに発表するようになったのはおよそこの直前あたりとみてよいのであろう。なお大内田は同じ文の中で、……一晴、南樹、舟人以外は多く問題にならぬ……としている。してみると森月一時、野崎舟人などの作品発表もこの頃に始ったものと思われる。

森月一晴は当時の多作家の優なるもので、日伯新聞一九二六年三月十二日号から「徒然詠草」と題して殆ど間断なく発表している。作品をみると

一日の短かき中に夜のあるがすでに悲しきことと思いぬ

君も又叛逆の子か人の妻子の母にして尚もの思う

など、当時としてはあかぬけのした声調の整ったものを一回に二十首前後発表している。同新聞の同じ年一月一日号では孤山が

初日景二つありけり大空と河面は澄みて隔てなければ

同じく一月八日号にはふくじゅ植民地丁生の

夕されば灯を入れしコジンニャにケージョのにおい漂いに鳧

などがある。前者はめでたい新年に因んだものであろうが、後者は作品の中に既にブラジル語を用いているという意味で珍らしい。なおこのあたりの日伯新聞にはフグジュの暮山人、プルデンテの白浪などの作品がしきりに出て来る。

トントンと籾つく音の聞ゆなり時雨降る夜のはらからの村

暮山人

妻と子と貧しく眠るカンテラの薄明るみの我悶え青し

白　浪

などが、植民地初期の生活を思い描かせる。続いて五月二十八日号住谷孝之助の六首には

何事か大きなる愉快来る様に思われてならぬ金持てる日
と啄木をもじったようなのもある。六月四日号には山里の女の「二人居は」

君痩せし夜に眺めたるさむ月は今宵も出でて君待ちわびぬ
月みればいよいよ淋しくかなしきに話をもせであが二人ねし

など、どこかで万葉を真似たフシのある作品なども出て来る。山里の女が誰か男のペンネームでなかったとすれば現存する資料の限りでは、ブラジルの邦字新聞に現われた女性作品のハシリの一人ではないか、と思うのだがもちろんはっきりとは言えない。

同六月十八日号に鈴木南樹の「森のかげより」一連八首が出現する。前記のように一九二六、二七年分の時報は手に入らないので何とも言えないが、日伯に発表したこの頃から南樹の作品が頻りに現われ始め、六月二十五日からの「白雲集」は実に十二回にわたる大群作である。

「森のかげより」に

凡人のしこうたよみのあにしあれど森のうたよむ幸のうれしさ
森かげの昼にしあれどイペ咲けば浮名を流すあの娘よこの娘よ

また「白雲集」には

いくそ度まちに出でんと思いつつ此の秋もはやあだに過ぎ行く

がある。この頃の日伯新聞は殆ど毎号短歌作品を載せており、森月一晴の「徒然詠草」、「一晴はうたう」などの群作やフグジュの玉置生、暮山人、伯羊、孤山、木像、春女などが主な作者である。

さらに一九二七年になって二月十一日号にボンフィン舟人の「徳右ヱ門の歌」一連が発表される。

徳右ヱ門は片足なれど馬に乗り三人前も立ち働けり

これ以後、舟人も常連として日伯に現われ「馬」「舟人歌集より」などが続いて歌壇を飾っているのだが、前に述べた太内田健三の批評はこの頃の南樹、一時、舟人などの活躍によったものであろう。たしかにこのあたりから、ブラジルの新聞歌壇も、自分の言

葉を持った作家が現われ始めた、と言ってよいように思う。引例が示すように、この頃までに発表されている作品は、時報にしても日伯にしても概ね、渡伯前に読み覚えて来たものに僅かに作者の思いをはめ込ませたといった態のものが多いのだが、南樹などの出現するあたりから、ここの生活に恨づいたものからの発想がみられるようになったと思われるのである。移民始って既に二十年に近い頃であり、日本から持って来たものそのままでは作者にも読者にも満足できない気持の生まれるのもまた当然の成り行きであったろう。

南樹はまたブラジル時報一九二七年十月二十八日号で「北米旅行の歌帖より（三）」を発表しているが〝エリサ湖畔〟の中には

雪晴れの湖畔の家の風車風あるとしもみえずめぐれり

など風趣の備わった作品がみられる。またその前に「新居雑詠」の五首にわたる作品群があり

五十年の夢さめやらずあなあわれ四人の父となりにけるかな

一代の放浪児を以て任じ無位無官ながら六十年の移民史の中から除く事の出来ない鈴木南樹の一面を語るものとして興味を惹く歌である。

南樹、舟人などの頃から、ブラジルに自分の言葉を持った作歌者が現われ始めたのではないか、と書いたが、ブラジルに於ける短歌の新しい芽もこの前後から動き始めたのではなかろうか。と言うのは、現存の幾人かの有力作歌者の作品が、まだ稚いものながらおよそこの頃からぼつぼつ姿を見せるのに逢うからである。

明治の中期に起った日本の新しい短歌の動きがけんらんたる花を開くのは明治の後期から大正にかけてであるが、このような日本の文芸の影響を多少なり受けたものの移住が、ブラジルの短歌の新しい稚い芽と関係なかった、とはいえないのではなけか。日本移民の年による渡伯の数を見てみると、一九一三年の七〇四九名、一九一八年の五七〇八名を初期の一ピークとすれば、一九二

五年からまた急激に多くなり始め、この年の五七〇〇名、二六年の七八三二名、二七年が八〇七八名、二八年一万〇二五二名、二九年一万五〇九八名、三〇年一万二九八五名、三一年七〇六一名、三二年一万一五八〇名、三三年二万四四九三名、三四年二万一七五二名、三五年九六八〇名と大きなピークを形作りそれ以後次第に減って第二次大戦を迎えている。このような盛んな移住の時代に、新しい日本の文芸の姿や動きをどこかに摂取したものがかなり湿っていたであろうことは当然想像が出来るのである。

そう言えば、後に日伯新聞の歌壇選者になり、ブラジルの短歌の上に大きな影響と足跡を残した岩波菊治も一九二五年九月の渡伯である。岩波菊治はアララギの島木赤彦に師事しているが、このように一つの短歌結社に属して「本格的」に作歌の修練を経た者の渡伯もこのあたりからではないかと考えられる。

ところで岩波菊治がいつ日伯新聞歌壇の選者になったか、という点であるが、一九二九年五月十日号にＲＳ生の「恋愛礼賛」の一連があり

みな美しくはたみなわろしかえりみか

わが若き日のくりかえしごと

といった作品がみられるが、まだ決った「選者」はなかったようだ。越えて一九三〇年十月九日号には既に岩波菊治選で歌壇投稿の募集をしているので、選者になったのは二九年の後半から三〇年前半にかけての間ではないかと推測される。

とにかく、日伯新聞も一九二九年の後半から三〇年の前半あたりまでのものが失なわれているので、残念ながら正確なことは分らない。然し、二五年の移住でありながら、二九年頃まで岩波菊治が新聞紙上に作品を発表した形跡は見当らない。

もっぱらアリアンサ移住地の俳句短歌雑誌おかぼによりていたものであろうか。

ブラジル時報一九二九年九月五日号には現椰子樹の中堅でユニークな作風を持つ清谷勝馬が初めて姿を見せる。作品は

日は遠く夕さりにけり赤土の道の西より風吹きそめて

さらに同年十月三日号にはセッテバラスの大花きみの

窓越しに見ゆるピウバの真黄色なる花に雨降る朝のよろしも

徳尾渓舟―カンブイ―の

春雨のややに晴れゆく向う岡のリツシャの花の真白なるかも

同十月十日号古沢典穂（リンス）の

失意せる身をいたわりしわが友は今はあらずして淋しさのますなどが出て来るが、このあたりになると現在の我々にも身近な、或は記憶に新しい名が現われて来る。先に新しい芽といったのはこれらのことであり、この芽は現在までブラジルの短歌の中に続いて来ていると言えるのである。ところでこの年の時報九月十九日号で南樹が、北米サンフランシスコにある歌誌白線社の同人歌集「白線」に就いて書き「我々在伯同胞の遠く及ばざるところ……」と批判している。どうやら当時のブラジルの作品は、南樹の目にはそれほどの水準のものとは思われなかったらしい。その南樹は同年十月十七日号で「歳暮の桑港支那街と水仙」の一連を発表

青き芽を吹く店先の水仙の玉に雨降る　支那街の朝

とさすが洗練されたところを示している。

ブラジル時報紙上でこの頃南樹の発表が多く、清谷勝馬、徳尾渓舟、匠、きみの、などの歌が頻繁に載り始める。また三〇年になると、今井白鴎、中須夏山、遠山端水などの顔が並び、時報の文芸欄に割くスペースが飛躍的に大きくなって来るのをみるのである。時報のコロニア文芸（当時は植民文芸と称した）に大きなスペースを提供する伝統はこの頃から始まるもののようである。

話が前後してしまったが、この年一九二九年七月四日号で時報は南樹選の懸賞和歌の結果発表を行っている。恐らくこれはブラ

ジルの懸賞短歌事始めであろう。

天　松本高信　セルケーラ・セザール

　秋そばの丈低くして花つけぬ貧しき我に似たればいとし

地　塩月修一郎　モンソン

　もろこしの枯葉のもとに育ちたる莢ささ豆の脹みのよさ

人　河南節子　リベロン・プレト

　つつましく土に親しむ一人をめぐりて　鳴ける昼のこおろぎ

全応募者は一四四人と言う賑やかさだったが、徳尾渓舟が「おちこちに白きパンノの見えつつも稲打つ音をきく日和かな」の作品が等外ながら発表の栄を与えられている。これはブラジルの短歌にとって記念すべき事件だったかも分らない。

それは椰子樹発行の中心の一人であり、今以てコロニア歌壇と切っても切れない関係にある渓舟が、このような懸賞短歌への応募や作品を発表されたことによって、一層の刺戟を受け、情熱を燃やすようになったのかも知れないからである。

なお前記応募者一四四人を地方別にみるとノロエステ＝四四、ソロカバナ＝二五、パウリスタ＝一三、ジュキア＝一五、パラナ＝七、ドラデンセ＝六、セントラール＝六、モヂアナ＝五、アララクアラ＝四、イングレーザ＝二、サンパウロ＝二、コチア＝一、リオ＝一、ゴヤス＝一、不明＝一一となっており、当時の移民の分布状態と相関連するところがうかがわれて面白い。この懸賞短歌に岩波菊治が「選者の力倆を試さんとして諏訪辺山彦の匿名を以て左の歌を投稿し落選の憂目にあっている。…『珈琲の植並青く見ゆるなり刈り乾きたる陸稲畑に』（一九四〇年二月発行椰子樹第六号―植民短歌史概論―池田重二）。

　ブラジル時報はこの後も盛んに短歌の発表を行い、一九三三年（三二年分は散逸）一月一日号には勅題「朝の海」に因んで中井甫（はじめ）、徳尾渓舟、三好綱一、江見清鷹などが作品を見せてお

り、同年四月十三日号では現椰子樹選者川原比露思(モンソン)が初めて登場する。

照りつづき人はうるおいを待ちあぐみ
真昼の憩い永くなるかも

同年十一月二十九日号には中井小鴨（カタンヅーバ）が

いとたらし真澄の川に漁する我が老い振りを浮腰と宣る

で時報歌壇に初めて姿を見せるが、三四年になると後年まで自由律短歌を独り守り抜いた不二山南歩が小曲「青春」で、またアリアンサのたけもと・よし（由夫であろう）が童謡「お使い」で初めて名前をみせ、五月二十三日号に堀田野情の「民謡詩壇展望」の中で……清谷益次の作品が特に秀れている……と書いているのを見ると、この頃、後年椰子樹や新聞歌壇に拠る作歌者達が、盛んに短歌への身づくろいをしていたことがうかがえるのである。とにかく一九三四年あたりの時報歌壇は川原比露思、中井はじめ、徳尾渓舟らの作品発表がきわだって多くなり、鴨川青夢の名前が出て来るのもこの年の終り頃になってからである。

ここでまた日伯歌壇に帰らねばならない。然し先に書いた一九三〇年十月九日号で選者岩波菊治で短歌募壌(何回目の募集広告なのだろうか）をしているのを限りに、その後三一、三二年の新聞が殆ど保存されていないので、この募集がどれだけ反響があり、応募者があったものか知る術もない。三二年十二月二十二日号で初めて菊治選「新緑集」として中井小鴨と中井芙蓉二名の作品が掲載されている。いづれにしても歯が抜けたように新聞が失われているのは残念である。その二名の作品は

龍のサビア窓を開けばかそけくも日光流らう朝をしば鳴く
小　鴨

やわらかにマンガの新芽のび立ちで日日にぬくとき春は来向う

芙　蓉

三三年一月一日号ではすみれ、なでしこらと共に渓舟の歌も日伯歌壇に見えまた選者菊治も選者吟を発表している。その中に

大蒜の辛きも慣れてこの日頃我が健けく暑さに向う

がある。同一月十九日から野崎舟人の遺作（一九三一年の作）が載り始めるが、このあたりから「日伯歌壇」の発表回数もやや増加する。然し、投稿者数は極めて少く、小鴨、鉄雄、芙蓉など〃中井一族〃　の作品が圧倒的に多い。

同五月四日号「白露集」で東野暁風が初めて姿をみせ

生計にかまけて物は思わざり思えばさびしき我がいのちかな

などと詠っている。なお、なでしこ、梅、遠山端水、徳尾渓舟らの発表が断続しているが同十一月二十九日号で武本由夫（由夫）が初登場して

人々の善き青年という彼になどて我のみ親しめざるか

と言うのがあり、今昔の感を深くさせる。

一九三四年三月七日号で小田切剣が

うつし世にかよわく生れてみどり子の

虫鳴く昼を息絶えんとす

などの悲痛な一連を発表している。小田切は窪田空穂の系統を引く松村英一の「国民文学」によっていた人で、当時としてはそのたんれいな作品の姿は群を抜いたものであったと言う事が出来る。また同三月十四日号では行方正治郎が

夕さらば即ちひらく仙人掌の夜すがら

咲きて朝しぼみつ

と格調の高い作品で登場して来る。後に渓舟が「かくの如くすらすら詠むは嬉しからむと行方正治郎君の歌を羨しむ」と詠っている（三五年十一月十三日号）のをみてもその頃の行方の水準は察しがつく。

このあたりで「日伯歌壇」に最もコンスタントに発表しているのは引続き中井一族であるが、同歌壇の発表回数は依然として少い。そして、行方、小田切、清水百代（小田切夫人）などの作品が姿や言葉の使駆において他に抽ん出ており、正直をところ渓舟、由夫など、まだその本領発揮に至っていないと言う感がするのは否めない。

一九三五年の日伯歌壇（一月一日号）は道子、なでしこ、中村登美子、樋田美沙子、すみれら女性群の一せい発表で幕をあける。この中にまじって、夫由、克巳、剣、愛雪があり、同三月二十七日号で住吉光雄、同七月十七日号で脇坂一が出て来るが、折角の華々しい幕あけも何が原因なのか一向歌壇が賑やかにならず一九三六年にいたっては八月二十五日まで一度も発表をみない。その八月二十五日号も作品は達者のもののみという淋しさでそれも病いの歌ばかりなのをみると選者の身辺の事が日伯歌壇の不振と関係があったのかとも想像される。既に時報の三四年十一月二十一日号で古野菊生が「新聞の一隅に端座し……没落及至沈滞の因果と経路の好適の見本である云々」と痛烈に評しているが、秀れた選者を据えながらのこの不振は、今となってはその真因を明らかにする手だてがない。

日伯歌壇の沈滞に反して一方の時報はひん繁に発表が行われる。一九三五年二月十三日号では牛窪星泗が

ラルゴ・ダ・セ浮かれて通る人並を重い気持でそれた夕暮

と気のきいた口語使用の多い一連を発表、三月二十七日号では清谷益次が「寂々集」七首を初めて発表する。

東やや白み来たれり朝霧にぬれて光茫の大いなる星

三五年代は渓舟の作品が殆ど欠かすことなく時報文芸欄に発表されるようになる。

この年新登場の作者には上野紅陽、開沼貴代などがあり、開沼は

八月二十八日号の「母を想えば」が初出である。
いたわりて無理はすまじと涙声のらせし母よ志られなくに
この少し前の七月三十一日考の懸賞短歌入選作としてバルパライゾの加藤清子の
ふるさとの尾鈴山なみきようこえて母の便りのこよとおもえり
がある。

この時報歌壇の盛況に拍車をかけたのは徳尾渓舟の時報入社である。彼の入社は一九三六年一月二十二日であるが、これまでの熱心な投稿者はところをかえ選者として登壇、時には客気とも思われる程の熱意を傾けて作品批評を行いまた論を立てた。時報歌壇が一層の活況を呈したのはもちろんだが〝歌論と論争の時代〟を現出する役割りの一つをも果したとも言えるようである。

三六年の時報歌壇は波沫正夫、天津夢城(秋永三郎)、別府次郎、中村幽情、田中かほる、佐々木茂李於、住吉砂丘、顕洲、石竹花などが主な発表者であり、六月十日号では青夢が「作歌を始めて二年末満の私が……」と初めて時報歌壇の作品批評を書いているが、何といっても大きい収穫は九月十六日号から現われる葉山幸子であろう。

冷えびえと空の真洞の澄み透りしみみに冬の光とどきぬ

などの一連は素材、声調かね備わって当時としては誠に出色の作品で、その直後阿部青杜は「渡伯後初めてかような本格的な作品をしかも新聞歌壇に発見することを得て心から嬉しく思っている」と書いている。

同九月二十一日号には南樹の「サントス沿岸」不二山南歩の新興短歌「青春の一部」などと共に青夢が

月夜鳥森にするどく鳴きてよりほどなく窓に見えしいざよい

と後年の流麗調の片鱗を示し、同十月七日号では社会学で博士になった斉藤広志の「旅は黄色」が南樹の「アルト・ダ・セーラ」な

どと一緒に発表されている。

中の一首

何物に追わるる身ぞや犬の如寒き夕の小路行く吾

このような時報歌壇の盛況は多くの同好者の関心を集めると同時に批判の対象にもなった模様で、これらに応える選者渓舟の論駁が次第に数を増す（これは「論争史」として他に担当者があるので省く）。また阿部青杜の「新興短歌論」同「和歌雑話」「時報歌壇評」、開沼貴代の「阿部青杜氏の歌評を駁す」など、歌論や議論の文章が惜し気もなくスペースを割いて掲載されるようになり、これが一層刺戟剤になったであろうことが想像されるのである。

このあたりで、もう一つの新聞歌壇、聖州新報のそれにふれて置く必要がある。

第二次大戦前のコロニアの新聞歌壇を考える時、聖州新報のそれを除外することは許されない。聖報歌壇といっても、日伯、時報に姿を現わす作者達と全く別の人達がこれに拠うていた訳では無論ない。日伯、時報に現われる名前も数多く登場するのだが、この歌壇特有の〝雰囲気〟というものがまた確かにあった事も否めないようだ。はっきり言ってこの雰囲気とはよりナマな〝生活的〟なものだったとみてよいのではないか。どちらかと言うと、日伯や時報の歌壇が、作品の声調とか伝統的な姿とかいうものに重きを置いた風にみえるのに対して、聖報歌壇に登場して来る作品には、もっとドロ臭い、洗練度の低い（こういったからといって日伯や時報に発表されるものがすべてこの反対だったという訳ではない。どこまでも程度の問題だが、傾向としてこのようなことがみられると思うのである）、ナマな生活上の感情が、もっと高い純化の過程を経ないで短歌の型をかりて発表された、という様なのが傾向としてあった、と思われるのである。聖州新報社が一九三七年七月に発行した歌集「移り来て」は、その前年（三六年）の

二日から翌三七年二月までの一年間に発表された作品の選集で、移民が始まって以来初めての歌集だが、その序文の中で公孫樹（聖報社主香山六郎）は次のように言っている。

……在伯邦人が、移り来て、原始的生活裡に感じた詩興の虚飾ない魂の叫ぶ歌である。こんな純朴な短歌は、吾が万葉歌人の血を、二千年伝統している大和民族の移植民にのみ、うたえる歌である。

中略――……所謂芸術家の蒸溜歌ではない。

或るものは森の湧き水みたいに、落葉くささも交っており、山水の如く土臭いのや、また岩間の溜り水の様なものもあるのである……。

この当時の選の担当者（ただし選者何々という名はどこにも現われない）は須貝さだめ（須貝富美子）だが、社主公孫樹の短歌への考え方は選の担当者にも反映していたに違いない。

さて聖州新聞の短歌の発表がいつ頃から始まったか、という点になるとこれまた残念ながら今では調べようがない。然し、一九三六年に発表されたもので選集を編む程だから、その前から、かなり活気を呈し関係者たちの気持も相当高揚されていたと見なければならないであろう。

他の二つの歌壇にみられない自由な〝発表の場〟と雰囲気がここにはあった、という想いが、その作品群を見ているとするのだが、それが、幾人かの、他歌壇には拠らない作者を集める事にもなり、一種の〝聖報調〟といったものを培うことになったのではないか。

「移り来て」の中から幾つか例を引いてみよう。

金子秀雄

珈琲の三度目の花咲けるかげ黒坊夫婦のアルモッサせる

母上の形見の着物よこのカルサ隙間なき程カラピショつけり

よくもまあこうも不運が続くかと金盗まれて足の砂蚤ほる

神志那絹江

カンテラに節くれし手をば見比べつ啄
木ならねどと夫と笑いぬ
忘られぬものはミナスの恋人とカンナの汁と語るカマラダ

沖田宵星

あちこちに豚を呼ぶ声かまびすし一きわ賑わうコロニアの夕
馬蹄鉄投げて勝負（ジョガ）すカマラダに交りて過す日曜の午後
一木蘇花　焼山の灰の匂いの来る小屋で雨を聞きつつマキナ繕う

町の屋根赤きが見える丘に来し友の柩に続く人群

集の初めから四人の作品をあげてみた。

このほか、聖報歌壇の主な作者には、増田金星、渋川不二夫、富岡耕村、隠岐田春陽、河村哉太郎、土屋迷羊子、荒毛葉刀、土屋紫晶、木安卓児、荒木八雲、波沫正夫、志津野華絵、木下緑蔭、渡辺南仙子、遠山端水、高林明雄、中須夏山その他があるが、現樹子樹とサンパウロ歌壇選者の井本惇が「移り来て」作品四首を採録されている。

貨物自動車（カミニョン）のまねして遊ぶ道端の一群の児等に日暮れかかりぬ

また選者須貝の歌は

やわちかき枕つくらん吾子の為パイナの割るるを待てる春哉

など八首が採録されている。

このほかにも、末藤千種、浅田今日志、別府森水、郡山あや子、谷垣光枝、佐藤花情、牛窪星泗、清谷勝馬、同水声など、もかなり頻繁に作品を発表するようになり、選担当も須貝さだめから木村茅里に移って行っているが、発表されている作歌者の数からいえば時報歌壇と肩を並べる態のものがある。先にも書いたように

格式張らないより自由な発表の場がここにはあり、作歌者は思いのタケを書いて投稿できる気易さがあったのではなかろうか。今の目でみれば、作品の質は問題にならない低さのものが多いと思うのだが、移民の社会での文芸興隆という面からみれば、小さくない役割を聖報歌壇は果たしている、といってもよいのではあるまいか。

一九三七年は短歌の上の論争が目立って盛んになった年である。コロニアの歌壇の作者達がそれほど成長をした証しであるだろうし、また新しいエレメントを加えたことにもよるであろう。詳しい事は「論争史」に譲るが、当時の模様を知るために論者と論題を大雑把に挙げてみると、時報には阿部青杜の「古野菊生君に質す」と「寺内氏に答う」、寺内仙香の「阿部氏の新興短歌評所感」、徳尾渓舟の「小田切剣氏に与う」などがある。

渓舟のものは、小田切氏が日伯に書いた「〃山茶編者に〃を読みて」に対する反駁であるが、これは当時小田切が編集して出していた短歌誌山茶を渓舟が批判したことに端を発したものである。このほか論争ではないが南樹の「和歌無駄口帖」や池田重二の幾つかの〃文学論〃があり、また渓舟の「聖報社長に一言す」秋野愁（住吉光雄）の「感傷主義の批判」など、なかなか文芸をめぐる文章が活発に発表されている。作品では時報一月一日号の懸賞短歌に清谷勝馬と佐々木茂季於が二等に当選している（一等該当作なし）。

作品は

秋たけし共同墓地の些やかな墓標を読むにすべて幼し

清谷　勝馬

初かまどあかあかとして燃え熾り音の高きを目出度く聞きぬ

佐々木茂季於

同三月十日号には中江克巳の

改制の業務規定に延べられし執務時間も加えられてあり
五月五日号には小石茂行の
　槻那の根をピンガに入れて呑むうちにようやく我も酒を覚えぬ
同六月九日号では葛西妙子が作品
　目のとどく限りは白き棉畑にひねもす　我は棉を摘むなり
で、さらに同月二十三日号では横地季子（現西田）が次の作品で初めて姿を見せる。
　昼休みのしばしのいとままどろめばいたく老いませし姉を夢みぬ
このようにして、後年コロニア短歌女流三〝元老〟といわれた開沼、西田、葛西が殆ど相前後して登場し、女流短歌の位置を確立する魁けをなしているのは興味が深い。六月十六日号では山内生男という全くの新人が「妻を娶る」の濃厚極まる作品で現われ次いで七月七月号でも「閨中の歌」五首を枠つきで発表されているが、それは
　情炎に燃ゆる瞳や燈を消して触るるは柔き君の玉肌
式のもので、当時独身だった選者渓舟を頗るコウフンせしめたという逸話がある。
ところがこれには後日譚があり、或るところでふとした機会に渓発が言葉を交したのが作者山内であり、而も彼はむさくるしい(?)ソルティロンであったと言う。選者を瞠目せしめた濃艶短歌はすべてソルティロンの恋しいままなるフィクションだったという次第である。もう一つ同じ年の九月十一日号では葛西妙子が「北支の空を偲びて」を発表、時局もの或いは愛国ものへの関心の片鱗を示し始めている。それは「時局の風雲嶮し大君の御宸禁悩まし給うは畏れいと多し」というものでこれはさらに後の「宗美齢夫人に与う」
　閨房の手くだ弄しつ夫をして今日あらしめし罪浅からず
などのイサマしいものにつながっている。

このほか時報歌壇にしきりに名前の見える者には、阿部青杜、田代寅五郎、橋田伯声、三好覚、上村俊幸、石竹花、波沫正夫などがある。

この年の日伯歌壇の圧巻は、小田切剣の「妻の死その前後」の連作であろう。

一月七日号から掲載され始めて同五月八日号までに四回発表、さらに「墓参」へと続いている。夫人の清水百代氏を失った当時の悲傷を詠ったものだが、事柄が事柄だけにさすがに胸うつ佳品が多い。

歌に関する文章では四月三日号に小田切剣の「山茶編者にを読みて」があり、五月十一日号には岩波菊治の「短歌随見録」がある。前者は時報に載った渓舟の一文への反駁であり後者は師島木赤彦の作品とその周辺というようなものを語ったものであった。その他では、なでしこ、武本夫由、永野青蛾など比較的作品が多い。

一九三八年と言う歳は、戦前のコロニア歌壇にとって記念すべき年である。と言うのはその十月に短歌の専門誌「椰子樹」が創刊されたからであるが、この雑誌創刊への踏み切り台となったのは、総領事として赴任した坂根準三が、嵯峨、花瀬群涛、或いは水島十三子、桜井薫などの名をひっさげてコロニア歌壇に登場して来たこと、リオの正金銀行支店長椎木文也が加わって来たことなどである。

これに岩波菊治、阿部青杜を加えた四名が当時の〝大家〟として一頭地を抜いたものと見られていた訳だが、事実これらの人は日本で何れかの結社に属し、〝本格的〟な作歌の勉強をしているという経歴があり、年令からいっても、また移民の子達が手さぐりで始めたと言うようなものではなかったという点からも、当時の若い作歌者達を統合するのに条件が叶っていたといえるであろう。

椰子樹の創刊は機が熟してのものではあるが、この機を熟さし

めたのはやはり新聞歌壇であり、新聞歌壇に名前の現われる人達の〝同じ道を志す者〟としての連帯意識が強い動因になったという点を認めない訳にいかない。

さて三八年の新聞歌壇だが、時報一月十五日号に坂根嵯峨の「神苑朝」一首がある。

朝まだき祈祷捧げて神苑に翁おうなの額づける見ゆ

題はおそらくこの年の御題なのであろう。

この後、前記四つのペンネームを用いて歌人総領事の作品が新開歌壇に盛んに発表される。またバレーで来伯した与世山彦氏の作品も登場する。

ばなな熟れあばかし実る井戸端に水浴みすれば山の鳥は鳴く

同六月四日号で瀬崎涛声が

切れ切れに狼の鳴く声きこゆ吹く朝風の裏の山辺に

などの八首で初めて姿をみせることもこの年の出来事として特に記して置いてよいであろう。晶山充もまた

ながら雨もようやくにして晴るならむ遠山なみに霧這い上る

を六月二十五日号で初めて発表されている。

日伯歌壇では一九三八年二月十九日号で「入門欄」の設置を発表した。その設置の弁で岩波菊治は……日伯歌壇は厳選のため初心の人達が近づき難いという声を折々聞いている。……日伯歌壇は質はかなり良いと確信するがそれにしても淋しいことは事実である。……と言っている。それらの初心者指導がこの欄を設けた目的であろうが、一面では、振わない歌壇を何とかして賑やかなものにしようとした試みであったにちがいをい。厳選のために不振を続けた、とばかりは思われないのであるが、歌壇の扱い方のあの親しめなさはいったいどこから来たものだったろうか。新聞そのものの、形が整うと共に、歌壇だけではなく、日伯の文芸欄全体が温かみの乏しいものになって行ったように感じられるのはヒガ目であろうか。然し、折角の入門欄も余り多くの初心者を

集めるには至らなかったようである。三八年中に二、三回の発表を見たようであるが、懇切な指導の言葉も多くはみられない。やはり選者が遠いところに住んでいた、という点が何かと支障になったであろうことが想像されるのである。このあたり以後の日伯歌壇に新しく出て来る者には池宮城積坊、かすみ、葛西妙子、村岡まさ子、上岡悠春、霧島奈代、滝譲二などがある。日伯新聞は一九三九年の四月以後は失われて歌壇の動きをみる術がない。

時報歌壇では瀬峰涛声の作品が急速に多くなり、また荒木八雲、長友安徳、今本義美、同金鐘児、上岡悠春、佐原信男、山田耕人、多美津生なども登場する。胸を病み若くして逝った山本孤愁（滝雄）は三八年九月二十四日号で「病み臥してすでに五歳今宵郷里の父と語りし夢を見にけり」で初めて姿をみせる。中山稠子も同年十一月十五日号

たまきわる命うち棄て国の為侮ゆることなし日本の民は

で出て来、さらに武田公平も「療養所にて」　山の背に並び立ちたるパラナ松の動ける如く霧流れ来る

を十一月二十五日号で初めて発表する。

一九三九年五月七日号で徳尾渓舟は「短歌私見」（一）を書いたが、同六月十四日号に「短歌私見に替えて」を残して時報を去った。時報歌壇のあの賑やかな熱っぽさは担当者渓舟の真剣さの反映であった。或る面では厳しい批判を浴びないでもなかった訳だが、あれだけの短歌作者と作品、または短歌関係の文章を集め得て〝コロニア短歌〟の場を広くした功績は認められなければならない。当時の時報歌壇を修練の場所としてコロニア短歌界に登場して来た作者は非常に多いのである。

徳尾渓舟が退いてのち、田中正実が八月六日号から選者になった。

田中正実の選後批評や添削の弁は前任渓舟とはガラッと変った

もので、投稿者の顔ぶれにそれほどの変化はないが、外部からの批判はかなり手厳しいものがあったようである。それに対して、田中正実は「殺生有益」なる反駁を無量七回にわたり連載している。

それはともあれ、田中正実の選は丸一年も続かず、一九四〇年六月二十三日号で時報は武本由夫を選者に迎えた事を発表した。編集部の紹介の言葉に……徳尾渓舟氏去りて以来、久しく沈滞を嘲っていた我が時報歌壇に一道の光明の訪れたことを疑いません……とある。衆望をになって、といった形であったようだ。武本由夫の選歌態度は、渓舟とは変った意味で懇切なものであり、細かく気を配ったものである、と言う事が出来る。武本になってから新しく登場して来るものには大原友重、奥田葉吉、農文士（則近正義）、原えつ子（唐沢恵津子）があり、米沢幹夫が四〇年十二月八日号で初めて

窓越しにみれば青々と棉畑は雨に濡れつつ草伸びており

を発表、また酒井繁一も同十一月十七日号で「皇紀二千六百年を讃う」

興亡のうつろいしげき国々を見れば長しも二千六百年などでコロニア短歌界に現われて来る。

越えて四一年一月一日号で作品を発表している魔朱王は嘱望されながら作歌をなげうった八巻培夫であり、また一月五日号にはクラビニョス大場一時（現時夫であろう）。

朝の日を胸一杯に吸いこみて囀る鳥はパッサプレット

一首が発表されている。

この頃になると、鴨川青夢、滝譲二、葛西妙子、中井はじめ、横地季子、などが時報歌壇のトップを占める常連になりオンダ・ベルデの尾山悳昭も優遇され始める。これらに加えて山本孤愁、中江克巳、晶山充らがいわゆる中堅歌人としての位置を占めているが、斉藤広志の作品発表も多い。さらに小田切剣が同四月六日号

で初めて時報歌壇に発表しているのも面白い。この年の五月十一日号で選者武本由夫は

本年一月一日から四月二十九日までに投稿歌人百十四名、投稿歌数二千八百四十六首、このうちより出て歌壇を構成して来た短歌数は五百二十二首で総数の約五分の一であった。

と記している。

時報歌壇の私が手に入れたものの最後は四一年の五月十八日号である。ここに名前を並べているのは山本孤愁、葛西妙子、志津野華絵、滝譲二、尾山悳昭、横地李子、才市千鶴、水原夕美、米沢幹夫、大原友重、仙田満寿子、古山暁子、山下芳春、同弥恵子、もと子、上岡春子、奥田葉吉、農文士、仲田安行、長尾猛、武田一淋、山本操らである。

この年の十二月八日太平洋戦が起るのだが、その前から日本語新聞の受難時代は始っており、いづれの新聞も数々のあがきの後次々と姿を消して行くのである。

（日伯、時報、聖報のほかに、戦前は南米新聞、日本新聞などあり、短歌の発表はあったのであろうが、これらは今では入手困難で、残念ながら触れる事が出来なかった。）

―　戦後の部　―

戦前の部に思いのほか枚数を費し過ぎたので、戦後の新聞歌壇沿革は極度に要約せざるを得なくなった。一つには、戦後のものは資料もだいたい揃っていて機会さえあれば纏める事も容易だが、戦前のものとなると、或いは再びはその折もないのではないか、と言う気持が頻りに動いたからでもある。資料の保存という事は極めて難しいものらしい、とつくづく感じさせられた。

さて戦後の新聞歌壇だが、いち早く歌壇を設けたのは、日伯新聞の後身（人的構成に於て）ともいうべきパウリスタ新聞で、創

刊早々の一九四七年一月十四日号で岩波菊治の選者決定を発表、同時に選者の「おりおりの歌」一連を掲載した。

寝そびれて夜半目覚め居れば若竹の袴が落ちて音たつるはや

殆ど六年間邦字新聞に接することのなかったコロニアにとって新聞が出始めたことは新鮮な甦る想いをもたらすものであり言いふるされた言葉ながら〃早天の慈雨〃そのものであった。同じように、やり場のない焦りの中で重い沈黙を余儀なくされていた作歌者達も堰を切ったように旺んな製作と発表に意慾を燃やすようになって行った。六年の間に誰もがそれなりの成長も遂げていた。発表の場は失われていても、内なる心は育っていたし、また沈黙の時に裡なるものをみつめる態度も眼もやしなわれていた、とみることも出来るのである。新しいものもまたこの間に育っていた。戦前には未だ頭角を現わすに至っていなかった年若い新進達が妍を競うように轡を並べて抬頭して来た。

戦後の邦字新聞が再刊されてからの数年間の時期は、戦前、戦中を通じて芽生え蓄えられていたものが一時に花ひらいた感があると言っても過言ではないであろう。

パウリスタ

パウリスタ歌壇の第一回発表は一九四七年三月五日号で、発表者は小田切剣、武本由夫、天津夢城、開沼貴代、浅田今日志、小野寺養太郎、小野聖穂である。

中に夢城の

「戦争放棄」の新憲法条項もたやすく

吾等が胸になじまず

がある。戦後のコロニアの新聞歌壇に現われた〃戦争短歌〃第一号と見做してよいであろうが（これ以前に「林泉」にはかなりあるが）戦争の結末は、それを素材に歌う歌わないにかかわらず、すべての作歌者達の想いを深く捉えた問題であった。そしてまた

ここには、一人の作歌者天津夢城の大きい脱皮も示されているが終戦を契機とする脱皮はただに夢城一個人だけのものではなかったのである。

なおこの年のパウリスタ歌壇に現われた作者の主なものには次の人らがある。

玉木梅、撫子、富岡清治、寿賀、山田耕人、上出チエノ、荒川豊水、溝口栄子、緒方新男、土屋房江、小笠原夕虹、長島可山、横山敏男、楼井健三、夕月、皐山、直木新、三浦妙子、本田笑山、則近正義、安部栄子、伊藤次郎、光南極、円坂琴、清谷益次、西田季子（横地）篠原了策、永野青蛾、八巻培夫、井本惇、上野紅陽、小島正徳、狭間黎人（安良田済）大原友重、武田公平、田辺道子、大態秋風子、滝沢正、芳朗、半田利雄、中井すみれ、小林季子、小松修水、恩村実紀、郡山あや子、華絵、玉木一棲、米川久、田中八重、中井小鴨。現日伯歌壇の選者弘中千賀子も十月二十二日号で初めて次の歌を発表している。

工学士小壮教授弁護士と日系の子らたのみて安し

四八年頃になると、一時我も我もと投稿したものがだいぶ姿を消してほぼ顔ぶれが決って来る。〃常連〃となったのには現在もコロニア歌壇で何らかの形で存在を認められているものが多いが、新たに晶山充、長友安徳、抜天子、寺田真光、脇坂一、東野暁風、仙田ます子、平川天飄、水野浩、川下伯舟、三牧はらなどが加わっている。

一九五二年十一月二十三日、パウリスタ歌壇の選者で、コロニア短歌界の〃大御所〃と呼ばれた岩波菊治は胃潰瘍で急逝した。その人柄から、殊更に多くの事を短歌の上で言うのでもなかったが、失われてみて岩波菊治がコロニアの短歌或いは作歌者の上に占めていた比重の大きさには思い知らされるものがあった。一つの拠り処的存在であったことが改めてわかったとも言える。

然し、仕事の多忙からか多くはもの言わぬ性格から来るものか、

岩波菊治は積極的な後進指導はしなかった選者と言える(もちろんこれは活字に現われた限りで言っているのであり、原因は恐らく前者にあると思うのだが　―　)。それは戦前戦後を通じてのものである。モジに移ってからのひと頃、多忙と病いがちで投稿歌の整理もおぼつかないことが永く続きこの間、武本由夫が「岩波菊治選」を代行した時期もあったようである。

岩波の歿後、パウリスタ新聞では聖市の椰子樹同人の意向に徹して行方正治郎を新たに迎えた。行方正治郎も、アララギの流れを汲み、最も岩波的なものを継承した実力ある作者と見られた訳である。

以後行方選でパウリスタ歌壇は今日に至っているが、その初期には、井本惇、弘中千賀子、森重扶美、脇坂一、東野暁風、安部栄子、平松霞、西田季子、唐沢恵津子、光田ひさお、坂光男、高林明雄、開沼貴代、小竹清子、米川久、島田普、河村哉太郎らが主要作者として比較的コンスタントに発表する時期が続く。

しかし、これはパウリスタに限らず現在のどの新聞歌壇にもいえることだが、有力な作歌者達の大部分は、殆ど新聞歌壇から姿を消し、もっぱら椰子樹に拠るようになっている。パウリスタ歌壇では、南条由喜夫(長島可山)と昨年故人になった東野暁風とが終始かわらず作品を発表して今日に至ったが、後は概ね比較的作歌歴の新しい人によって占められている(最近梅崎嘉明が時々発表するようになった)。

有力作者の多くが新聞歌壇から去ったという事にはどんな意味があるのだろうか。作歌力の衰退なのか、それとも新聞そのものの紙面の都合次第で発表が円滑に行われない、と言うようなことに理由があるのか、探ってみれば色々な原因がみつかりそうである。然し岩波菊治の死の頃からこちら、コロニアの短歌作品にもその作者にも微妙な変化がもたらされていると言う事もあるように思う。日本の作品の影響なども次第に強くなって、これまで主

潮となっていたアララギ的客観写生という事への考え方も次第に脱皮を迫られた。事実コロニア短歌の性格も、―すべてのものがと言うのではないが―戦前とはもちろん、終戦後のある期間のものに比べると大きを変化がみられるのである。全く作歌から遠ざかった者も少い数ではないが、作歌力もあり、また相当高い新しい境地に達している作者達が新聞歌壇を余りかえりみなくなったのは、もっときびしい「勝負の仕どころ」を椰子樹を含めた他のものに求めている、とみるのはヒガ目であろうか。

南米時報

一九四六年の暮に発刊された南米時事は琉球男、南溟等の名で一九二〇年代から作品を発表している仲間美登里が主宰したもので歌壇にはかなりスペースを割いた。残念なことに、まとまった新聞の保存がなく歌壇の沿革をつまびらかにする術もをいが、設置は一九四七年の半ば頃からではあるまいか。

最初の選者は小田切剣で、武本由夫、清谷益次、北島文子、葛西妙子、則近正義、小野聖穂、上村登志行、古沢典穂、小島正徳、小野蕗子、天津夢城、不二山南歩、奥田葉吉、正木雅葉（思水）、春名龍泉（景水）、別府二郎その他かなりな投稿者を集めている。

小田切剣が去った後は瀬崎涛声が継いだが有力な作歌者としては次の人々が挙げられる。高林明雄、風間慧一郎、志村良一、黒木千房、（新納潤魚）、久高彰、清水節子。瀬崎涛声担当の期間は比較的長かったが、一九五八年七月に南米時事は廃刊となった。

サンパウロ

一九五一年初め頃から、編集部選で発表されているが、その内実は徳尾渓舟が担当していたものである。宮下山水、渡辺紅葉、華絵、平野万寿子、植村和子、森谷風男、晶山充、川口久蔵などの名が散見される。

一九五二年六月から「徳尾渓舟選」として発表されるようになり、坂光男、浜崎実、越村由起子、志伊良二世などが主なところだった。五三、四年頃は歌壇としての発表はなく時々吉本青夢や小田切剣が数首ずつ発表する状態が続き一九五五年度からは酒井繁一が選者になった。

主な作者としては高林明雄、正木思水、中田武夫、陣内しのぶ、川原比露思、簗田月耕、西田季子、大沢愛子、大場時夫などが挙げられよう。酒井繁一選は五六年三月末まで続き四十四回の発表をみている。

同年四月からは中山稠子が選を担当、比較的順調に発表され、多喜沢龍水、清水節子、柳田威、室伏誠二、また五七年後半には小竹清子、丘ひろ江なども参じている。

現選者井本惇は五八年の七月からである。本庄研一、新納潤魚、米沢幹夫、近昇、南条由喜夫、弘中千賀子、小竹清子、藤田朝日子、玉木五男、北上川太郎、大場時夫、坂寿一、志伊良二世、住吉光雄、清谷勝馬、坂本清人、石塚やす、小笠原正好、細川末葉、藤田美砂子、開沼貴代、玉木梅など、有力な作者の発表をみたが、初期から最近迄、引続いて発表しているものの主なところは、新納潤魚、南条由喜夫、北上川太郎などである。

日　伯

戦後の新聞歌壇で一時期を画したのは日伯のそれである。一九四九年の一月、新聞の創刊と同時に歌壇が設置され、武本由夫を選者に迎えた。当時編集部員だった気鋭の八巻培夫のお膳立である。八巻は作歌の上で武本子飼いと目されていた。

武本由夫は、戦前の時報に於ける徳尾渓舟とはまた変った型の熱心な選者であり、毎回、ひとりひとりの作者と作品に対するキメの細かい批評と助言は、日伯歌壇の人気を集め、コロニアの新旧作者を網羅し得たと言ってもよいであろう。

編集人としての感覚も秀れているところから、短歌に関する文章をも適度に掲載し、また自らも倦むことなく短歌上のいろんな問題をとりあげて筆をとり、作者だけでなく広く一般の関心を集めることに成功した。

四九年一月二十一日号に第一回を発表して以来一九五二年七月二十五日号迄つまり三年半の間に百回の発表を行い、その百号を記念して作品歌論集「木棉の花」を刊行したが、このあたりにも武本の非常な積極性をみることが出来る。第一回から百号迄の投稿者数は二七一人あり延べでは一九五九人となっている。最も熱心な投稿者は田中八重、長島可山、吉本青夢、別府二郎、杉田まり夫、尾山悳昭、河村哉太郎、大原友重、井本惇などであるが、開沼貴代、葛西妙子、則近正義、脇坂一、中山稠子、中井小鴨、光南極、東野暁風、島田普、吹本菊子、平川天飄、横山耕人、晶山充、真木研一、藤田美砂子、川原比露思、米沢幹夫、武田公平、大倉正友、長友安徳、小笠原正好、天津夢城、久米川照明、中井すみれ、上野紅陽などそうそうどころの作品が盛んに発表されている。

武本の選は八年余続き一九五七年二月九日号迄で回数百七十三を数えたが、選者の身辺の事情でそれ以後一九六三年三月二十七日号まで九六年間中断する。百号以後、中断までの間にこの歌壇で擡頭して来た作者には、小笠原富枝、弘中千賀子、水本すみ子、森重扶美、唐沢恵津子、小竹清子、米川久、梅崎嘉明、高林明雄、大島進、八巻梅夫、片岡けい子などを挙げることが出来る。

一九六三年三月から再び武本の選で歌壇が再開されるが翌六四年五月八日号の再回十九回を最後に日伯歌壇はまたまた姿を消してしまう。この一年余の歌壇の中心作者を形成するのは、陣内しのぶ、弘中千賀子、小笠原富枝、黒川友二(晶山充)、南条由喜夫、東野暁風、開沼貴代、土屋風春などである。

現選者弘中千賀子は武本前選者の推選によるものであるが女流

の新聞歌壇選者はコロニアでは初めてであり、やはり時代の推移を感じさせるものがある。その第一回発表は一九六七年二月一五日号で、珍しく徳尾渓舟が、

宇宙飛行士三人事故死のニュース読む
わが平安も恃みがたなし

など三首を発表、他に小笠原富枝、晶山充、南条由喜夫、木谷醇（木村正和）、知花清、田上みづほ、北谷まがた、坂光男、岩佐一歩、清水そとえ、加藤操、土屋風春、割鞘武など二十七名が名を連ね、第二回では開沼貴代、佐藤博三、唐沢英津子も発表しているが、最近では投稿者の数もかなり減つて来ている。

以上、戦前戦後の新聞歌壇の沿革とその時々に現われた作者名や幾つかの作品を見て来た。さてコロニアの新聞歌壇の将来は、という問題になると、新聞歌壇の辿って来た跡が示すように、余り大きな期待は持てそうにない。極端な言い方をすれば、コロニアに於ける短歌作者は既に出つくしたと言った感じがする。現在投稿している人々の作品の質的向上はまだ期待できるであろうが、我も我もと新聞歌壇に参じた昔日のような華やかなものはもはや求める方が無理なのではあるまいか。移住の歴史六十年、戦後二十三年を経て、日系コロニアそのものの性格と言うか、内部の事情というかがそれほど変貌して来ていることを思わないではおれないのである。

（戦後の一時期、ブラジル時報、中外新聞、昭和新聞などがあり、幾らか短歌作品の発表もあったがここで取上げるほどのものではなかった）

コロニア歌人歌集抄

移り来て　合同歌集　須貝さだめ編
作品　五六三首
一九三七年六月
聖州新報社発行

狂いたるコロノが吐き出すその言葉皆事実なり金歯の悲し
金子　秀雄

今行くよ今行くよとて若き母泣く児を見つつ草を取り居る
渋川不二夫

この陸稲よくぞ稔らばコロノやめ街で住まんと妻と云いたり
隠岐田春陽

涛の涯　物部さよ子
作品　四八九首
一九五〇年四月発行
序歌　近江　満子

思うこと見るものすべて亡き君につながれぬなし南アメリカ
アラブ人ラクダを下りて祈るなり沙漠朱に染む落日のころ
もえながらほのおのままに大海に身を沈めゆく落日もあり

熱風吹く広野　小島　正徳
作品　一四三首
一九五二年六月
ブラステック社発行

大西洋の潮流今しマルチンの島をめぐりて波高ぶれり
播種機の音かしましく聞えくる開墾村は雨季に入りたり
永遠に君を愛すと云う言葉美しき偽りと思いつつ聴く

山　河　三好　綱一
作品　一〇〇首
一九五二年
風土社発行

世に生くる力老いしと嘆かめや読書する窓に雨の音しずか
原始林の朽ち葉くぐりて湧く清水この世の音と思えば清し
はろばろし祖国浮び来風呂あびて今宵さやけき月にまむかう

寒　温　酒井　繁一
作品　七六〇首
序歌　窪田　空穂
一九五五年一月
長谷川書房発行

つくつくし軟らかに土を盛りあげて今年も堤に風暖し

千尺の地下の坑道のかひ臭き一カ所にカンテラ据えて飯食う
死のさまを聞きつつ哀れは極まれど静に向い居るほかはなし

戦後歌集

阿部　芳治
作品　一二二首
一九五六年四月

人により或は黙し論じさりわが心いまだ定まりあへず
世も人も罵りはてむさびしさに耐えつつ病床に汗ふきており
むらぎものたぎれどたよる何もなく虚しきままに明けつ暮しつ

微　塵

武田　公平
作品　一九五首
序　岩波　菊治
一九五七年
連歌集刊行会発行

縫いあげし産衣並べて足らえるか今宵やさしき妻のもの言い
午後の熱又昇り来る兆あり独り臥しきく山鳩の声
草の絮一つ入りきて流れつつ微塵の中に白く輝く

移民像　　柳田　威
作品　二八二首
序　初井しづ枝
一九五七年一月

群盲の中の一人と活きて来し還暦にして悟ることなし
老い妻と茶を飲み語る静けさよ三人娘嫁がせてより
孤独なる色持つ貝の表情が人面に似て吾をあざける

朝の香　　酒井　繁一
作品　五九九首
序　窪田　空穂
一九五七年五月
近藤書店発行

帰国などやさしく出来る距離ならず涙にじみて思う時あり
革命の気配ある日を無慚なる死の累積が頭を去らぬ
永住はすでに移民の心にて祖国の敗れし悔もうすらぐ

家庭短歌会　　田中麻三美
作品　八二〇首
序　佐々木信綱
一九五七年十二月
新星書房発行

やっと買いし古着を吾に合わすとて解き縫いにいたむ妻の限なりき　　麻三美

日曜をうち揃いつつレコードに合わすわが家のラジオ体操
あい

フランスの美術展なり父と行きむずかしい絵は説明で見る
章之亮

岩波菊治歌集　岩波　菊治
作品　二〇〇七首
一九五九年八月
遺歌集刊行会発行

ふるさとの信濃のくにの山河は心にしみてとはに思はむ
あら草と牧の草とが斑なし枯れゆく岡に射す夕あかり
これの世に貧しく生きてかそかなる歌作り来し三十年あまり

潮の音集　市川　幸子
作品　一七三首
一九五九年九月

精薄の児等は眠りぬ夜の十時たてし茶の泡青くこまかく
小鳥らの啼きて静かに今日明けぬ病める児どももより眠りいて
軒下を啼きて過ぎゆくは何の鳥赤きセーター編みていたれば

ポンセチア　大沢　愛子
作品　四四三首
一九六〇年十二月
四季書房発行

旅立ちを悲壮にすまじと勇む吾と嘆かぬ老母と響くものを持つ
大洋の夕焼雲は燃えさかる岩の如くに大空に立つ
バイブルも仏典も読みき平安は自が中にありと思うよりなくて

南回帰線　パラナ歌人十五人集
作品　七〇〇首
一九六一年八月
四季書房発行

課せらるるだけ働きて山蔭の草喰む馬の深き目の色
大場時夫
商法の小さき嘘にこだわるに雨の夕の鐘長く鳴る
久米光春
暗渠の裂けめより吹きあげる細民の体臭の如き下水のにおいよ
本庄研一

細川末男歌集　細川　末男
作品　三七一首
一九六二年三月

真向いに豌豆の花咲き盛る位置に張られたるわが外気小舎
故郷訛りも今はなくなりて結婚の経緯なども語り出でたり
待ちて居し最終列車に君を見ず霧雨の中をわが帰り来る

四十の生　　梅崎　嘉明
作品　三三二首
一九六三年三月

汚れたる作業衣たくましき若者の君は旋盤切粉を落とす
己が手に配電をなしてつきし灯に得がたき宝得し想いあり
或折の心はずみも追憶によみがえりつつ山路を登る

波の跡　　小竹　清子
作品　七八九首
一九六四年五月
帝国書院発行

海に添うビル街の影のびきりて長きは朝の波にもまれつ
沖遠くうねれる波のひくみより時のま見ゆる島の家並みは
許し得て悔なき心の証とも吾子のえにしの人の名しるす

白き州道　　瀬崎　涛声
作品　五九一首
序　窪田章一郎
一九六五年四月
新星書房発行

脱柵の鶏ことごとく追ひ込みて見る夕空の雲はうごける
みんなみはいくらか眺望展けいて観ればさびしき丘の重なり
つれだちて泳ぐ仔鯉の体触れてすいれんの花たまゆら傾ぐ

中由武勇歌集　中田　武男
作品　五五八首
一九六五年十月

空洞の位置などひとり思い居りたんの出やすき横向きに寝て
癒ゆる日はすでに思わずユーカリの花散る下にギターを弾く
血をはきし我が手を握り歌友らは言葉を呑みて立ち去りてゆく

岩露草　大場　時夫
作品　八六六首
序　木村　捨録
一九六六年十一月
文京社発行

人よりもむしろたやすく溶けている野の鳥の声水面を伝う
フイゲーラの木の下に来て見ていたり故里はつねに東の位置
流れよる流砂に庭を高めつついよいよ低し一人住む小屋

パラナ松　アサイ歌人合同歌集
作品　七四五首
序　武本　由夫
一九六七年二月
アサイ短歌会発行

パラナ松の樹の間に見ゆる黎明の雲ことごとく南に凍るる
畠山　充

余剰なる枝剪ることの易からず果樹もさびしき冬の貌もつ
本庄研一

商法の慣わしとはいえ今日もまた小さな嘘が心にのこる
米沢幹夫

正木思水歌集　正木　思水
作品　一一〇〇首
序　酒井　繁一
一九六七年七月

我が病癒えて必ず帰りゆかむ車外の桃の花眼にしみる
病み馴れて日は移るなりこもごもに湧き来る悲願に身は支えつつ
美しき臨終を残さむと思いつつひそやかに酸素吸入をする

二　世　細江　仙子
作品　一三八首
一九六七年九月
短歌新聞社発行

われも同じ顔もつより外はなし日本人街を通り過ぎたり
父と共に脱走せざりし君も理由なく寄りそい眠る森あり
海遠く拓きすすみし父の辺に育ちきて裡に展けたる郷

墾の灯　東野　暁風
作品　一〇八二首
序　蛭田　徳弥
一九六八年五月
連歌集刊行会発行

前かがみに背をまるめて歩く吾にあかあかとして野を焼く夕日
非常なることの多きをなげきいしがあした無頼の如く街に連れ立つ
吹きぬける寂しさありて落陽を背負いてかえるにつまずきやすし

地方歌会の動静

椰子樹五十からのアサイ歌会

椰子樹五十号が手許にないのではっきり言えないが、五十号の出たのは一九五七年頃だと思う、この時のアサイ歌会は一九四一年以来、盛大をきわめていたが一九五二年に中心人物の真木（本庄）研一、米沢幹夫がアサイを去り、晶山充は家業の都合から作歌を中止してから石のように転落してしまい、アサイに歌人は一人もいない状態であったの一九五九年に椰子樹編集長になった米沢幹夫がわざわざアサイを訪問して晶山の再出発をうながし、椰子樹六十号八月発行に投歌をした。荒れに荒れたアサイ歌界に独り自信のない顔をして立った晶山の心境はみじめなものだった。

一九六一年八月、晶山は突破口をアサイ新聞に求めここに初めてアサイ新聞歌壇を設けて同好者へよびかけた。これが編集長菊地氏の好意のある応援で、意外に反響があって、月々に投稿者が増え、一九六二年二月にアサイ歌会が復活し、翌六三年には機かん紙月刊ゆりかご誌を発行するようになった。

ゆりかごは十代の歌人養成を目的につけられた名だったが、大人も続々参加したので朝日短歌と改名して現在（一九六八年三月）に至っており、すでに五十一号を発行し、幼年歌人は廿名近く大人は十五、六名毎月雑詠に題詠に投歌して励んでいる。

一方アサイ新聞歌壇も盛んでこれには別人グルッポが十名前後、筆名だけで投歌して勉強している。椰子樹詠草一へは晶山の外に北原しのぶ、笹浪北陽、田上みづほ、井上ふじも進出してアサイ歌人の意気をしめしている。

一九六八年三月　山室新太郎記

バストス歌会
五十回以後の歩み

一九五五年十月一日、角藤忠雄氏宅に於て第一回歌会の産声を挙げることの出来たのは、故東野暁風氏の熱意と森重羊鈴氏夫妻の功積によることは、五十回作品記念号によって明かであるが、その頃はすでに東野氏はプ・プルデンテに、角藤忠雄氏初音氏夫妻はイヌビヤに去った。然し小松修水が御題に入選し、バストス歌会にとっては一番はなやかな時代であったといえよう。

間もなく真神鳴草、佐伯唄絵氏、つづいて、長らく会場を健供して下さった池田夜詩緒氏がサンパウロに去り、山本一男氏同和枝氏夫妻がポンペイア、阪東啓二氏はパラナへ、吹本菊子氏がサ

ンパウロへと、歌会は櫛の歯をひく如くさびれた。あまつさえ、小松修水、浅田孤舟氏らが歌会に出なくなり、百回から百五十回頃までは全く火の消えた様な有様であった。その中でも一九六四年に渡部パウロ氏並にチエ氏、吹本菊子氏の去った事はバストス歌会にとっては大きな打撃であったが、同年七月二十四日梅崎嘉明、開沼貴代氏並に酒井繁一先生がパラナよりの帰途立寄り下さってより、小数ながら先生に毎月の作品を見て頂き指導を受ける幸運にめぐまれた。

工藤勘一氏が歌会に出なくなり、現在では、石橋美津雄、宮武勝甫、土井はやし、森重羊鈴、牛尾洋子、森重扶美氏らの小人数とはいえ、森重御夫妻の熱意と良き師を得て再び活気をとり戻し、無事に一九六七年、九月二十二日に第二百回の歌会を催すことが出来た。

かえりみるに、小さなバストス歌会が二百回、只の一回も休むことなく継続出来たのは、歌会産みの親である森重御夫妻の力という外はなかろう。

この歌会が二百五十、三百回と回数を重ねる時、歌会育ての親である東野氏の天国よりお誉めの言葉を戴くことが出来るであろう。

一九六八年三月二十五日

宮武勝甫　記

椰子樹五十号以後の
カンポス短歌会の動静

椰子樹五十号が発行されたのは、一九五七年の一月であるが、この頃のカンポス短歌会は、正木思水を失ったあとで、他の歌友

達も、移転したり退院したりして安部栄子、春名景水、佐藤一英の三名しかなく、一年以上も空白が続いていたのであるが、五七年中頃に成ってパラナより上原知水が帰って来たり、村手子葉、細川末男等が出て来て、一年四カ月ぶりに短歌会を再会したのである。

尚、この年の全伯短歌大会にカンポスから第一位入賞者を出したことが皆の刺戟となり、古荘辰穂、奥野精一、秋野千草、原田耕作、高田蔦五郎の諸氏も入会して賑かになった。

五八年の七月には、カンポス短歌会も、五十回となり、中央より、武本由夫、吉本青夢、中江克巳、米沢幹夫、光田ひさを、越村定雄、樋田陽荘、開沼貴代、西田季子、陣内しのぶ、高橋よしみ等十二名を迎えて盛大な記念短歌会を催す。

尚、この年移民五十年祭には、カンポス短歌会が、短歌会賞を受けたりしたのを記念して、年刊歌集「やまなみ」を発行することを思いたち、第一号を世に送る。

この年のカンポス在住者は安部栄子、上原知水、春名景水、佐藤一英、奥野精一、細川末男、村手子葉、加藤操、古荘辰穂、原田耕作、袴田凡太郎、高田蔦五郎、高野勇二郎、秋野千草、本田笑山の十五名であった。

五九年のカンポス短歌会はあまり振わず、細川、高田、古荘、秋野の諸氏が下山したり亡くなったりして淋しく成ったが、六十年のはじめに渡辺昌子さんが上原君と再婚してカンポスに住むように成ったので少しは賑やかになった。

この年十一月に高橋よしみ、陣内しのぶの二人が、亡兄正木思水の墓参に来られたのを機会に、毎月陣内さんが私達の為に作品を発表して下さるようになり、私達のよい刺戟となる。

六一年の十月には中央同人の武本、中江、光田、殿岡の諸氏と最近、訪日の旅から帰られた酒井先生、陣内、高橋の両姉が来られ、充実した短歌会となる。

この年には奥野氏が退院してカンポスの町に雑貨商を営む。
六二年の四月には、日本から来られた木村捨録氏を案内して、酒井先生と開沼さんが訪れ、日本歌壇の傾向等聞くことが出来た。
この年は中田武男が逝って七年になるので、第五号「やまなみ」を中田武男追悼号として、彼の作品と彼につながる文章を載せることが出来た。
六三年七月は、カンポス短歌会も百回を数えるようになり、弘中千賀子、小笠原富枝、開沼貴代、水本夫妻、西田夫妻徳尾夫妻、植村かず、陣内しのぶ、高橋よしみ、光田ひさを、小池誠、玉木梅、酒井先生等の諸兄姉が出席され盛大な記念短歌会を催す。
この年は正木思水逝って七年になるので「やまなみ」は正木思水追悼号として彼の晩年の作品や、高橋、陣内、酒井先生等の追悼の歌を載せた。
この年からピンダの坪田義雄氏が、カンポス短歌会のメンバーとなり、倉内満子さんも作歌をはじめるようになる。
六四年は、佐藤一英と倉内満子さんの結婚の年で、遠くグワイラから加藤操氏がかけつけ、サンパウロから陣内さんと酒井先生が来られて、内輪の集りではあったが、心から彼等を祝福する者達の歌会であった。
六五年二月には「やまなみ」七号の出版慰労会をかねて、春名景水の結婚記念短歌会を催す。
遠くグワイラから加藤操、斉藤武雄、八幡与三、末岡芳三の四氏が出席されて深更まで賑う。
この年は全伯短歌大会の後で、酒井先生を囲む。同門会を開きたいという意向から、グワイラより加藤操、斉藤武雄、八幡与三、末岡芳三、中川荒記、紺野幸水、工藤勘一、バストスの森重夫妻に望月喜恵子等が出席して、和やかな会を持つことが出来た。
六六年の一月には佐藤夫妻に男子誕生という悦びがあって、三月短歌会に酒井先生を迎えて祝賀短歌会とする。

この年の全伯短歌会のあとは、桜見物をかねた、地方歌友交歓会を催すことになり、バストスの森重夫妻、米沢夫妻、本庄研一、戸崎清作、田上みづほ、八幡与三、中川荒記、紺野幸水、木谷醇の諸氏が出席される。

一泊して翌日は「太陽の町」という別荘分譲地に吟行する。

六七年十一月には、カンポス短歌会の百五十回と「やまなみ」十号の発刊を記念して、短歌会を催す。今回はグワイラから加藤氏と酒井先生が来られただけで少々淋しい歌会であった。

何度も書くようにカンポス短歌会は安部さん坪田さんを除いた他は療養者の集りといわれて、移り変りのはげしい短歌会であったが、上原知水も昌子さんと再婚して自分の店を持つようになり、佐藤一英も結婚して苗木店を営み、奥野精一も大きな雑貨商を経営しており、春名景水も結婚して、それぞれ自己の生活をきずきつつあるということは大きな喜びである。詩歌の道は遠く、進歩の少ない私達ではあるが、詩歌文学の師としてだけでなく私達カンポス歌友達を心から心配して下さっている酒井先生にも喜んで項けると思う。

春名景水　記

グアイラ
短歌会の動静

グアイラ短歌会の創立は、椰子樹七十九号頃、即ち千九百六十四年六月からであるから、本年六月を以って四年の歌歴を持つ事になる。四年前私は酒井繁一先生をお誘いしてグアイラに遊びに来て戴いた、その折り、私共仲間で再度やっていたスキ焼き会をして先生の歓迎の意味にしたのであった。その時集ったメンバーは勿論酒井先生とは初対面の者ばかりであったが、同じ鍋のスキ

焼きを共につつきながらの雑談の裡に心と心の融合があったのか、その席上で図らずもグアイラ短歌会なるものの創立を見たのである。

そうした雰囲気から発足した短歌会の故でもあるまいが、グアイラ短歌会のメンバーは作歌上の努力と、歌に繋がる交りとに同じ比重をおいておるのではないふと思う。先日も(二月二十五日)サンパウロ歌会と交流歌会を催した折り、先生方や、ベテラン歌人等合せて九名の御来車をあおいでの歌会は非常に参考になる処多く、深くその意義を感じたが、その後の余興と翌日のイッセンの滝へのピキニッキにも同じ程の意義を感じる程である。そうした歌人の多いグアイラ短歌会の故か、短歌は一向に上を向かない。熱心に御教導下さる酒井先生に申訳舞い気がする事もある。処がそれでいて結構毎月の歌会を皆(私を含めて)楽しみにして居る。毎月一回例会を持つのだが、この日は遠慮の無い歌評を真剣に交し合う、少し酷評過ぎはせぬかと思われる程歯に衣着せぬ意見をたたかわすが、後はサッパリしたものである。

碁敵や憎さも憎し壊しや

これに似た心境で毎月集って居るのが、グアイラ短歌会の現状といえるであろう。

歌会発足して何カ月かが過ぎた頃、第一倦怠期がそちこち(私も含めて)に見えた様な感じがした頃があったが、歌会を崩さず現在まで持って来たのは、酒井先生の指導の良きにあったのは無論の事ながら、こうした心と心の繋がり、歌会の酷評の裡にかもす暖かい雰囲気が大きな支えの力となって来たといえるだろう。発足当時は八名であったのが、現在では二十名の会員を有し、毎月の例会には大体十五・六名は集り、盛んに先程いう酷評の交換をしておる。此後第二第三の倦怠期、作歌上の壁が行手を塞ごうとも、もう此の辺から短歌と別れられない絆に縛られておる者ばかりではないかと思う。

歌境が開けぬ点に、少しの焦りと寂しさがないではない。然し短歌は交遊短歌でも結構であると思って居るのは私だけでは無い様である。

加藤操記

五拾号以降の
ロンドリーナ歌会

椰子樹六拾一号に、大場時夫が、ロンドリーナ歌会記を書いているが、五拾号当時のロンドリーナ歌会は最も衰微した時期だった。伯国歌壇に、ロンドリーナ歌会というものを再現したのは、やはり移民五拾周年記念祭典に出席して立寄ってくれた、木村捨録氏の指導にあった様だ。その後大場時夫の木村捨録氏に対する心酔は大したもので、その度合いに比例した熱量が原動力となって歌会は大きく左右された。そして一九六一年あたりが一応その頂点とすることさえ出来よう。

ＮＨＫの海外文芸の時間には、決った様にロ市歌人の名が発表されていたし、椰子樹誌の規定を無視して、一人五拾首宛を投じて選者の度胆を抜いたりしたのもこの年だったと思う、又九年振りで北芭大会を開いたが、それに出席した中央同人中江、米沢両氏に、帰聖後の対談会で、

Ｎ「……歌会グループも全伯歌壇中第一番という点から、新興勢力に依る将来性ということで、力強い感じがした。

Ｙ「正直言って図太く一貫した、根幹みたいなものがあった……

などと言わしてめいる。

その年の第十三回全伯大会には始めて四五人の歌人を送り注目

されたが、何と言っても特筆されるべき事柄として、合同歌集がある、母国の一流四季書房印刷の豪華な歌集はコロニアのこの種のものとしては恐らく空前絶後とも言えよう。

然し、その合同歌集〝南回帰線〟の序文で、木村捨録氏が「ただ率直に言えば自分のペースを保ちながち堅実に作歌をつづける歌人達と見ることが出来る…」と言っているが、実はその頃の作品が意欲的ではあったとしても、果して自分のペースとなるとどうだったか、昨年処女歌集として世に問うた御大大場時夫の〝岩露草〟を見ても解る様に、その前半の手法はかなり多くの傾向が吸収されて居り、現在彼が言う抽象と抒情の間というあの軽妙なモダニズムに到達する段階ではあったにしても尚多くの問題が残っている筈である。長谷川銀作調とでもいうべきあの飄々とした坂本清人の作風も、写実に徹しようとする井之盛一翠や住吉豊の発想法もそれぞれ、椰子樹七拾一号から新同人に推挙されて、自選歌を発表する様になって漸く自己の旗標を掲げることになったと見ることが出来るのである。尚それと前後して細江仙子の魅力に歌会の気風がよろめきかかったり、第二回目の木村捨録氏の再感化に浴したりしながら現在中堅ともいうべき久米光春、有田市治、森田吉久等が育ち、中川原実、瀬古義信も含めておのおの自分の持ち味を吟味する集団としての歌会をあらためて認識することが出来る様になったのは暫らくたってからのことである。

女流では同人に推挙されて間もなく出聖して歌会を一時失望させた椎名千代子の後に、長崎アララギによっていたという徳永京子や、文人歌人高須キミ子が来てその空白を埋め、最近は桜井静江、中川原正子、毎熊百合、荒崎百合香、南崎稚草等とがっちりメンバーを組んでロ市歌会の一辺を確実に担うようになった。

森谷風男は、歌会の創草期から間欠的に顔を出していたが、椰子樹七十号あたりの合評会でにくまれ口をきき始め、会員制になるやその第一号とも言うべき七十五号から同誌に作品を発表して

いる。

森谷風男　記

オズワルド・クルース
短歌会の動勢

各地に於ける華やかなる短歌会の中に伍しては、微塵にひとしい、オズワルド・クルースの短歌会の動勢など、おこがましい事なれども有の侭に書いて見ようと思う。

オズワルド・クルース短歌会が結放されたのは、一九六五年七月下旬である。

それは酒井繁一氏井本惇氏の御両所がパラナの旅行の帰りに、バストスの森重御夫妻と宮武勝甫氏と倶に訪問せられたのを、ホテル・エスプラナーダに迎えて、歌莚を敷いた時である。その時に酒井氏井本氏に依って短歌のことに就いてお話を伺ってからである。

それから毎月欠かさず歌会を催しその歌稿を酒井繁一氏の許に送り懇切なる指導をうけつつ今日に及ん居るのである。

もっともそれ以前にもこの道は拓かれつつあった。それは所謂神代時代とでも云うのであろうか混沌たるものであった。然しそれを語らねばオズワルド・クルースの短歌会を説明する事が出来ない。

それはそれ、神代に属することであるから月日は慥かではない、一九六〇年頃で有ったであろうか、オズワルド・クルース市の日系女性達が集まって、バストスの宮武勝甫氏を招聘して生花の講習を受けて居った、時遇そのお稽古の合間に歌の話しが折々交されることが有った。

それは筆者の老妻ふじに前々から俳句の稽古をする様にすすめて

も長たらしいものを、まるで散文の様なものばかり作るので、これでは一層短歌を作る事を習ったらよかろうと進めて居ったためであろう。その話を傍で聞いて居った園田敏子さんが私もそういう事が習いたいと言う事になりお花の稽古に来て居った誰彼も誘い合せて、短歌というものを考えるグループが出来上った。生花の稽古には来て居なかったが、梶田きよさんは幼少の頃より歌を読むのが好きであり、宮武氏とは旧知の間でも有ったのでそのメンバーに加入することになった。宮武氏も生花の方も忙しく歌稿を持って帰り吹本菊子さんに添削を依頼さるる事となりこの様な事をくり返すうちに勢い菊子さんともつながりが出来たので有った。当時のメンバーはふじ、きよ、まりゑ、敏子、千鶴子等で有った、がその作品たるや短歌か中歌か長歌にはなって居らず宮武氏や菊子さんは随分困ったであろうと思われる。私は何時も傍観者で有りケシ掛けをして居った。大分歌らしい物が出来る様になったので兎に角一度歌会をしなさいと再三言って無理矢理に第一回の歌会を開いたのが一九六一年十月二十二日である、そんなに日附のはっきりするのはこれも宮武氏の好意に依って記念写真を撮って項いて、それに日附が有るからである。この時には宮武氏吹本菊子さん渡辺チエさんその他合せて五人オ、クルースでは敏子、きよ、ふじ、春芳園、まりゑ、かほる、に俳人のきさ子の七人都合十二人で有った。それで大分歌というものが面白なって来たが、まだメンバーは女ばかりこれではならぬと手当り次第の男性達に秋波を送っても一向に手ごたえが見えない、オズワルド・クルースには二十年も以前からパイネーラ吟社という俳句の結社が有り凡そ文学を愛好する程の者は皆俳句の同好者で有り如何に女人の誘いなればとて動ずる者ではなかったらしい、然しその内にたった一人あった。

それは志伊良二世君で有る。同君は以前から俳句仲間が勧誘しても一向に振り向かなかったが、以前から短歌が好きで新聞歌壇等

に投稿をして居ったらしく、同君がメンバーに入った。その外に本木彦兵衛氏が有る。同氏は随分以前かちの「アララギ」歌人で有り北上川太郎のペンネームにてサンパウロ新聞の歌壇の投稿家でもあるので有る。然し同氏は十数キロ離れたシチオに居住して居られるので有るが、再三の誘いにも「自分はアララギ派を最も良しとし作歌をつづけて居るもので有って、他の歌風の人達と同居すと自分のアララギ風をそこねるおそれが有るからメンバーにはなり兼ねるが時たま歌会の時に来合せて居れば出席する」という様な事で二三回同席する事もあった。

兎に角そんな様な事情ではっきりした歌会ではなかったが、六十一年十一月号の椰子樹誌の六十九号から会員の仲間にして貰い、各人が三十冊の歌誌を机辺や鏡台のあたりに積み上げて居るのが現在ではたった五名で有る。その内只一人の男性志伊良二世は名の示す如く二世歌人で、四人の父で有り二カ所の珈琲園の耕主牧場主で有り、畜産にも従事して居る実に真面目な純粋の土の歌人であり、少しの衒いもない佳歌をものして進境を見せて居る。次は女性の方で有るが梶田きよさんこれは幼少の時から短歌を読む事が好きで有らたらしく、時たま新聞歌壇なんかにも投稿して居り、他の者達よりも進歩も早く、椰子樹誌やサンパウロ短歌大会等でも何時も上位入選であって、オズワルド・クルース短歌会の一枚看板で有ったが、昨年四月家業の都合でパラナ、クリチーバへ移転して、後に残る歌友達をがっかりさせて仕舞った、次には園田敏子さん、いわゆる神代時代にはホテルオズワルドクルースの経営者で有った。それから六十五年歌会結成当時はホテルエスプラナーダに転じて、広大なサロンを歌莚に提与して喜んで作歌し、又日本舞踊をたくみにして多くの乙女達に舞踊の手ほどきをして、それを短歌に詠ずる等実に得がたき存在で有る。それ。からが加藤まりゑさんは日本語学校の先生に頼んで居り希に見る熱心な先生で四子の母、暇が有れば雑貨御小売商の店の手伝と実に

目の廻る様な忙しさの中での作歌、多く歌作の出来ないのも無理もない事で有るが、毎月の歌会には殆ど欠席した事がない。三面六臂の働きものである。

何れ遠からず大ヒットを飛ばす事であろう。次に山根久さんの事で有る。三子の母の女盛りの久子さんは市内セントロの大きなロッサリヤの主婦で有って、二子を聖市に遊学に出し、一日中夫君を援けけて山と陣列せられたロッサ類の間に歌材を求めて歌が出来ん歌が出来んと言って居られるが、その詠まれる歌は母性愛のかたまりの歌ばかり、如何に心のやさしい人である事か、こんな婦人がメンバーにあるという事は仕合せである。加藤かほるさんは未だ女盛り、それほど年歯も行かぬのに稀に見る仏教信者、月々の歌会は何時も仏教婦人会とかち合うので殆ど欠席が多い。然れども希に見る頭脳明晰でその物せらるるのは何時も秀歌が多く、こんな婦人に身を入れて作歌して貰えれば吾々の歌会も頭角を表わす事が出来るのにと何時も思うことで有る。加藤ふじこれは筆者の老妻で有る事は先にも陳べた。美男でもないのに金と力のない夫に従っての移民妻のなれの果て、緑内障という業病に左眼を失い、視力薄きために転例左脚骨折、歩行又困難のための只楽しみとするのは読書なるも、視力弱きを以て呆け初め、脳味噌を絞りての歌作であるが、今は只これが何より無二の楽しみ、歌につながる友のある事が無上の喜悦であるらしい。最後は筆者春芳園である。俳句を覚えて六十年、その後の俳諧生活にこれという句は未だ出来て居らぬのに短歌など出来る筈なく、只吾が住む町のコロニヤに少しでも文芸の解る人が出来たなればコロニヤ文化が発達すると考え、短歌人を養成したのが何よりの望み、色々世話する間に皆がもたれかかり、遂仲間入りする事になったばかりで勉強はこれから、而し本木氏ではないが短歌の交りをすれば俳句の方が駄目になるで有ろうが致し方ない。眼の不自由な妻の後ろ楯に致方ない事で有る。

以上でオ・クルース短歌会のメンバーの有り方を報じたつもりで有る。この短歌会は現在よりも椰子樹誌二百になれば少しは名の知れた歌人も出て活躍出来る事となる様にしたいと思う。

加藤春芳園　記

サンパウロ
短歌会の現情

戦後、サンパウロ歌会が「サンパウロ椰子樹短歌会」の名称で再発足したのは一九五五年である。戦後地方歌会がいちはやく再会されたのに此して、サンパウロのそれは、大変おそい復活ぶりであった。歌会の世話役は二名ずつとし（これは毎年選挙によって決定）第一期の幹事を、中江、米沢が担当し、七月三十一日に第一回歌会を梅崎嘉明居にて催した。

出席者は葛西妙子を始めとする十七名で当日の高点歌は「憐れまれ居るに反発もなくもたれゆく蜜柑の香りすがしき卓に」弘中千賀子であった。第二個目頃からパウリスタ新聞社の好意で、日本の著名歌人の短冊が多く寄贈され、これらの短冊は歌会毎に高点作歌者に授与され、毎回の歌会を賑やかすこととなった。

当歌会の特徴をなすものとして、決ったメンバー以外に外来者の出席が多く、作歌面での向上以外に、意見の交換や親睦にも役立ち、いつも和やかさと新鮮度を失わない点にあると云えるだろう。会場は有志の家庭を廻りもち的に提供してもらっているが、時々、郊外への吟行も多く行われ、又地方歌会との交換歌会に出かけることも珍らしくない。

歌会は原則として隔月となっているが毎月連続に行なうこともあって不定期状態である。その都度、幹事の労すること甚だしい

と云わねばならない。幹事は第一期の中江、米沢のコンビを始めとし、第二期を川原、杉田とつづき、第三期を開沼、梅崎。第四期を小笠原、弘中。第五期を住吉、光田。第六期を光田、梅崎。第七期を光田、住吉。第八期を弘中、越村。第九期を水本、植村、高橋。第十期を弘中、小笠原。第十一期を陣内、小池。第十二期を植村、高橋、水本。第十三期を梅崎、佐藤を経て現在の第十四期の山岡、尾崎、清水に至っていか。

サンパウロ歌会で磨かれれば本物？　になると陰口を云われるほど、その特徴とするところは徹底的な批評の応酬にある。これは新人、旧人たるを問わず凡て作品を対照としたもので、こうした研鑽の中から小笠原、梅崎、弘中、陣内、水本、高橋、佐藤らの椰子樹賞作家を生み、又本年度の第一回岩波賞の木村正和を出している。

尚、サンパウロ歌会では、カンポス歌会の年刊歌集「やまなみ」などの刺戟をうけ、一九六一年六月に歌会の記録歌集として「サンパウロ断章」第一集を出している。この歌集は謄写刷りであるが、椰子樹型のしようしやな本で、間部学画伯の絵を表紙につかっている。内容は、一九五九年二月八日に行なわれた第二十五回歌会から、一九六〇年十二月の第三十六回歌会までの入点作品四六九首を収録し、各歌会毎の出席者氏名等を記入している。この「サンパウロ断章」は隔年発行となっており、第二集は一九六二年十二月に第三十七回から第四十七回までの五一七首を収録している。尚、第三集は一九六六年九月に第四十八回から五十八回に至る五三二首を発表している。今年はその第四集が計画されているようである。

サンパウロにはこの短歌会と併行してピネイロス短歌研究会なるものがある。

一九六三年十一月十日、安良田済居に於いて第一回の集会を催し、爾来、歌会とダブらないように隔月に会合し、主に難解短歌の研

究、新歌集や入賞短歌の合同批評、或いは日本の著名歌人の解剖等を目的としている。会員はピネイロス在住者を以って組織され、オブザーバーとして会員外の者の出席も歓迎している。

サンパウロ歌会も、再出発時からみると新陳代謝は激しい。中でも、奥村富貴子、篠田月耕、近昇、葛西妙子らが他界されたのは残念であり、又徳尾渓舟、越村定雄、志村良一、大原友重、杉田まりを、住吉光雄らの退陣は淋しい。

最近の重要メンバーは、植村かず、佐藤博三、武本由夫、安良田済、高橋よしみ、木村正和、開沼貴代、尾崎都貴子、石塚やす、山岡清子、水本すみ子、清水そとえ、光田寿男、梅崎嘉明、陣内しのぶ、中江克巳、中井益代、川原比露思、弘中千賀子、小笠原富枝、富岡清司、内田笑子らである（出席回数順）会員数は発足当時からみればかなり多くなっているが、歌会の出席率は毎回二十名内外となっている。

歌会の日時、場所などは新聞紙上で発表しているが、地方歌人の方々が出聖される折りがあったらお互いに連絡しあって、親睦を深めることも又意義あることと云えるだろう。

米沢幹夫　記

裏話あれこれ

（椰子樹百号までの楽屋裏）

中　江　克　巳

椰子樹百号。想えば発刊以来丁度三十年となる。「みんな若かった」と五十号記念特集号に、ささき　ふみ、さんが書いている如く何れも若く猪突精神に富んでいた。百号記念号の発刊に当って五十号特集号を読み返した。一九三八年十月に創刊されて一九五八年移民五十年祭の年に五十号を特集する事が出来た、この間大東亜戦争と云う忍苦の時代を経たとは云え、実に二十年間を要した、この椰子樹が戦後のコロニア文芸会の活発化に便乗したとはいえ、五十号から百号には十年という時間を以って達する事が出来た。それ丈我々には恵まれた時代に生き我が愛する短詩型を育てる事が出来たといえる。五十年が移民五十年祭、聖市四百年祭を期して世に現われ、又、今百号が移民六十年祝典の年に発行されたという事は重ね重ね御目出度い事である。

創刊前後の事は五十号特集号に於て多くの先達が洩れなく記しているので特集号発刊前後から今日百号に至る十年間の椰子樹が歩いて来た裏話の一端を綴って星霜の感を新らしくして見たいと思う。

「椰子樹」五十号記念特集号は一九五八年七月発行配布している。当時の代金百カン。然し事実上の五十号は一九五七年一月号（武本編集）を以って五十号に達している。

之れより先き一九五六年十月発行第四九号の編集余滴に五十号特集の計画が発表されている。一般誌友に公式発表されたのは之れが最初であり一回のみであった様に思う、企画編集、武本、吉本、会計中江、といった者が大体担当する事として現今の如く委

貞会等という組織等は無かった様に思う。計画発表より発刊まで実に二カ年近い時間を要して公約を果し得た訳けである。感慨転たである。総てが善意ある協力により掛っていた時代の産物である。計画発表以来徳尾、を中心として地方に檄を発して原稿依頼又資料集めに当ったが仲々意の如く行かず時間は移って行った、この間たまたま一九五七年一月天津の上府を機して在聖二、三会して最初の計画した五十号特集は間に合わず私の呈案で別冊刊行誌代百カンとして変更を決した。斯くして五十号誌上に始めて内容を発表した。斯くしている間に一カ年という時間が無為に過ぎた。

一方会計たる私の手元には僅か乍らも予約金が集って来たが編集面は一向に進展を見せない、遂に一九五八年四月にバルゼン・グランデ在の樋口氏に於て開かれた聖市短歌会の帰途街道までの途々トラトール牽引のカレトンにゆられ加えて酔余の感情昂りも手伝って武本を捕えて「五十号特集は一体出すのか出さないのか？　お前はいいか知らんが俺は百カンという金を一般誌友から欺取した事になるがどうして呉れる……」との一席が有り遂に街道端で脱落、酔つぶれ私共、武本、吉本、三人は西田夫妻に介抱されてサン・ロッケの西田家に運び込まれた、翌朝宿酔の頭を抱え乍ら西田夫妻の口添えで当時モジで居候生活の吉本が武本に積極的に手伝うということで５０号記念号を〝たすことができた。

菊治歌碑建立裏話

中　江　克　巳

椰子樹の歴史とは直接関りはないが「岩波菊治歌碑建立」に就いて余り世間に識られていない寸劇がある。それは、

菊治歌碑建立の議は一九五三年十一月の桃蔭山房に於ける第一回菊治忌の席上にて決定した。その決議事項は翌年の二月刊の第三六号及三七号誌上に計画が発表された。折柄の聖市四百年祭協力委員会が計画中であったイビラプエーラ公園内の日本館庭園の一隅に予定地を時の山本協力委員会々長より頂き、日下部工房主の全面的協力に依って一九五四年九月十一日に建立完成除幕式を関係者多数に依って行った。

歌碑の土台も出来上がり仮建立も大体終りに近づいた或る寒い日であった。日本館は御承知の如く池水に囲まれている為めか特に風の冷めたさを感じた、本館建立も八歩通り完了庭園の整備に取り掛った頃であったが、山本協力委員会々長より「歌碑建立の位置変更の要有り関係者至急御来館有り度し」と云った通知に接した。当日武本は何かの都合で結局徳尾と私がお呼び立てに対して参上に及んだ次第、現場に着いて見ると山本委員長は既に待期中であり「此の場所は都合悪いので別の場所に移して貰度い、協力会としては……」と現在の入口（改札口）の右裏手に当たる池を背にした位置を指定された(丁度現在建立された真正面に当たる)そこには建築材料が雑然として山と積まれてあり早速に土台石の移転など思いも及ばない状態であった。私共は一応恐縮「相談の上何れ後日変更の手配を……」と引き下って来た次第であったが此の始末を武本に伝えた所「お前等は一体何をしに行ったのだ、建立物は我々の物だ只土地を借る丈けだ、然かもあの位置は日本からわざわざ日本館建築のために派遣された主任技師大江教授が特別に我々伯国短歌の開拓者岩波菊治の人格と全伯作歌者の美しい師弟愛に感じて特にあの場所が絶好と自ら選んで我々に選定して下さった位置だ、今更委員長が内外部からの指図に依って何を言うか、移すなら移して見ろ、我々は絶対に手を出しては如何、その代り仮令一字、半句でも刻字が欠げたら承知しない、元の台石からやり代えて貰うから……」と大した剣幕を頂

載した事が有る。
　その後何んらの沙汰もなく現在の所に安置を得た。当時あれ程の熱意と気魄があったればこそ我々コロニア作歌者のシンボルとも云える菊治歌碑が出来日本館の続く限り彼の池畔に郷愁豊かな呼声を挙げるであろう。
　次いで計画された「菊治歌集」刊行の議は別段悶着もなく、当初それでも予約が集らず信濃協会、力行会関係者に呼び掛けて会計当事者として気をもんだおぼえが有る。当時十コントスで計画した事が刊行が遅れ遅れて印刷、諸雑費が上がり上がり結局十七コントス八百六十カンとなり収支三百六十カンの不足を生じた。之れを当時身近に在った梅崎君が聞き同情援助をして呉れて結局赤字補填をした。
時に一九五九年三月、当の梅崎君も既に遠い忘れ事と思っているかも知れないが斯うした善意と友情は受けた者としては忘れられない事である。あれもこれも私の半生に於ける一つの愚痴に終った事を謝して稿とす。　―一九六八・七・二〇　―

（原本１５４～１６２　まで　会員住所録　注・省略）

あとがき

◇椰子樹百号の記念として、別冊特集号が企画されたのは昨年の椰子樹会議の席上であるが、これが具体化し、最初に委員会の会合をもったのは今年に入ってからである。早速予定のプランに従い、それぞれ執筆を依頼したところ、予想外に原稿が多くなりとても規定の枠内には入りきれず、と云って切り捨てるには惜しく、ごらんのような大冊を作りあげてしまった。

◇ぼくに与えられた仕事は、編集事務の代行であり、大いに光栄とするところであるが、この編集を引きうけた直後頃から、月並な言葉で恐れ入るが、私事繁忙をきわめ、殆ど自分の時間もむずかしくなり、ベストをつくしたつもりでも、意外に満たない点が多々あり、大方のご叱声を乞う次第である。

◇「椰子樹三〇年の歩み」(武本由夫)は創刊号よりの縮冊的なものであり、過去を知る上においても貴重な文献です。

「短歌の論争」(徳尾渓舟)「新聞歌壇の辿った跡」(清谷益次)「統計に見る椰子樹概史」(吉本青夢)いずれも歴史的な面での労作であり、併せて読んでいただけば興味深いものがあると思う。

◇他にも読み物として「コロニア短歌の推移に触れて」(井本惇)「ブラジルの女歌に就て」(酒井繁一)女流歌人の足跡として「戦前の部」(水本すみ子)「戦後の部」(開沼貴代)ＥＴＣ……は声を大にしてお奨めできる。

◇椰子樹はどのようにして生まれたのであろうか、陣痛的な面での苦しみや、生育にたずさわった面での悩みをさらけ出したものとして、「椰子樹が出来るまで」(徳尾渓舟)「裏話あれこれ」(中江克巳)は読者の興味を引いてやまないものがあると思う。

◇「記念号に寄せて」の随筆集は、他にも依頼した方々があったが、いずれも原稿が間に合わず、非常に残念ではあったが集まっ

た分だけを以って締切らしていただいた。又、作品を寄せてくれた方々や、他の執筆の労をとってくれた方々、この記念号もこうしたかげの協力があったればこそ出来上ったのであり、皆様の協力を感謝する次第です。

◇今年日本では明治百年にあたり、各地でいろんな催しがあるときく、当コロニアでも移民六〇周年にあたり、これまたいろんな催しごとが賑やかである。われわれの椰子樹も百号を迎え、こじつけではなく、大きな意義あるものとして喜こぶべきであろう。ひと言に百号とは云ってもその辿ってきた足跡ははるかなりである。丁度、椰子樹創刊の年に生れたぼくの長男が今年三〇才になっている。うたた感慨にたえないのは編集子一人だけではあるまい。

米沢　幹夫

伯国唯一の総合短歌雑誌

椰　子　樹　　（隔月発行）

希望者は、聖市ガルボン・ブエノ街四五番

水本すみ子宛に申込まれたし。

一九六八年九月　印刷発行
椰子樹百號記念
別冊　特集号

発行所
聖市セナドール・フエイジョ街
二九番五階―五一六号室
電話三七・五三三九

印刷所
パウリスタ美術印刷株式会社
聖市オスカール・シントラ・
ゴルジンニョ街四六番
電話三六・七九六七